第百七年（通巻一六五号）

山岳

二〇一二年

山岳　二〇一二年　目次

［記録］

ダッドメイン東壁「雨ニモ負ケズ」初登攀……長門敬明……7
ナムナニ峰、未踏の南面から北面へ縦走……平出和也・谷口けい……14
インド・ヒマラヤ／カルチャ・ナラ源頭の2つのピーク……日本山岳会東海支部インド・ヒマラヤ中高年登山隊……33

［調査・研究］

増えた山の名、消えた山の名……宮下啓三……41
執念の東チベット・易貢蔵布2011――空白の12日……中村保……72
四川省西部高地の未踏峰2012……中村保……101
日本山岳会会員・棟方志功と立山……五十嶋一晃……135
小島烏水と四国……尾野益大……164

［報告］

新生・公益社団法人日本山岳会の誕生……尾上昇……183
公益社団法人化への経緯……吉永英明……187
日本山岳会「YOUTH CLUB」設立の経緯……森武昭・野澤誠司……190

図書紹介

セガンティーニ（ベアト・シュトラッツァーほか／末吉雄二）……宮下啓三…199
／外邦図―帝国日本のアジア地図（小林　茂）……児玉　茂…201／世界探検家列伝――海・河川・砂漠・そして宇宙へ（ロビン・ハンベリ＝テニソン／植松靖夫）／ビジュアル版　世界の探検大百科（英国王立地理学協会／荒俣　宏）……田村俊介…204／語りかける山（飯田年穂）……大森久雄…210／ひとり歩けば　辻まことアンソロジー（柴野邦彦）……松澤節夫…212／未踏の南極ドームを探る――内陸雪原の13ヶ月（上田　豊）……横山宏太郎…214／（新選）ヒマラヤ文献目録（薬師義美）……雁部貞夫…218／The Himalaya by the Numbers（R・Salisbury/E・Hawley）……南井英弘…221／Murder in the Hindu Kush（T・Hannigan）……児玉　茂…225

追悼

平野眞市さん（中尾正武）…230／加藤幸彦さん（田村宣紀）…232／池田昭二さん（粕谷俊矩）…235／牧　潤一さん（杉田　博）…239／片岡　博さん（石井由紀）…242／鴨下重彦さん（小林　晃）…245

会務報告……249
支部の活動報告……288
山岳図書目録（２０１１年）……A16

表紙デザイン＝小泉　弘
表紙版画「マチャプチャリ」＝塚本晴雄

ダッドメイン東壁「雨ニモ負ケズ」初登攀

長門敬明

日本を出発してから22日間ほどたち、高所順応も終わって、BCで雨がやむのを待ち望んでいた。ここは中国・四川省の成都という大都市から南西へ約240㎞行った横断山脈のミニヤ・コンカ山群、燕子沟という谷のBCである。ちなみに日本出発からBC設営まで4日間という最短期間でたどり着き、順応活動に7日間ほど費やした計算になるので、残りの10日間ほどは悪天などにより足止めを食ったことになる。だから、横断山脈周辺でこの時期に晴天を期待するのは、かなり確率の低い賭けらしいことが実感として言える。

読書や四川料理で贅沢に時間をつぶすのも悪くはないが、いい加減しびれを切らして、ちょっとの晴れ間を利用してエドガー（6618m）へ偵察に出かけた。昨年、エドガーを登ったカイル・デンプスターとブルース・ノーマンドの記録によると、相当に悪い所が待ち受けているとあったが、残念なことに、さらなる悪化が広がっていた。一度入ったら戻ることは考えられない、劣悪な谷と化していたのだ。淡い期待はいつも裏切られるのが定石だと、遠征では決まっている。

エドガー南東壁に至るアプローチ谷の中は、両側面に垂直の土壁と、そこに危うげに挟まる不安定な岩が無数にあるというありさま。逃げ道がない。そんな谷が少なくとも2、3㎞はありそうで、通過するということは、高い確率で落石に遭うことを意味していた。過去を振り返っても、こんな谷を歩いたことは記憶にない。そういえば、アラスカに「デス・バレー」という名の谷があったが、比較にならない。まず、この谷では落石を避けるスペースがないし、なにより予測がつかない。どこからでも、いつでも落ちてきそうなのだ。

恐怖とかのレベルじゃなく、死を直感していた。冒険、探求、そんなレベルとは次元が違うことだ。時期的な要因もあったかもしれない、だが、活路を見いだせず、霧雨に打たれてＢＣへ帰るしかなかった。

しかし、それほど落ち込むことはなかった。幸運なことに高所順応活動中、僕らは宝を見つけてしまったのだ。そのときは、まさに純粋な驚きだった。猟師が獲物を見つけたように、３人は一瞬で虜になった。その山の名前はダッドメイン（６３８０m）。未踏の東壁が輝きを放っていた。ある所には宝が眠っているものだ。これほど立派な壁が手付かずなのは理解できない、と思えるほどの壁だった。我々には「登ってくれ」とささやいているように見えた。実際に現場に赴かないと分からないことはたくさんあるが、山の中では、このようなことがたまにあるからやめられない。宝石を見つけるには、自分の足で稼がないといけないらしい。

エドガー南東壁への夢は極悪のアプローチに潰えたが、なんとしてもひとつくらいは登りたいと、３人の意見は一致した。山は代わってしまったが、我々の情熱は冷めることなく、ダッドメインに注がれることになった。

だが、これほどの期間をＢＣで待たされたことは、今までの数少ない遠征でもなかった。やっとＢＣを離れることができてホッとするほど、腐りかけていた体を脱皮するかのごとく、何かから抜け出せたのだ。止まることは人生において必要な時期もあるが、そこに時間を浪費するのは、人間の本来とるべき行動ではない。クライマーとしての人生の質は、行動のなかに現在進行形で流動的に含まれていると思う。

４月19日、待ちに待った晴天周期が到来。長いアプローチをこなし、燕子沟４１００m地点（ＡＢＣ）でアタックに備える。アタックのことを考えると、疲労はあるのに目が冴えてしまい、あまり寝られない夜になってしまった。

４月20日、朝食をとり、朝３時40分にＡＢＣを出発。昨日着けたトレースを使って東壁へ。この時間にしてはやけに暑い。夜空は雲もあまりなく、晴天になりそうだ。ヘッドランプの明かりも必要なくなり、壁の全容が目の前に広がった。朝日に染まる黄金色の東壁は、やはり美しく巨大だった。思考が止まるほどの自然と対峙すると人間のちっぽけさを実感するが、このチームでならなんとかなるのではないかと、ささやかな自信が力となって、さらなる一歩を踏み出せた。見上げる壁の中に発見した弱点と読んだ登路は、とても自然で無理のないきれいなラインだと改めて感心する。今までに登られていないのが不思議なくらい、「ここを登れ」と主張しているのだ。

８時20分ごろ、標高４４００m地点の、壁の中央を走るルンゼの中にある顕著なクレバスに達した。気がかりなのは気温と雪の状態だ。ここまでかなりの汗を流してしまった。脱水は平

地とは違い、高所の影響を何倍にもする。水分補給不足の過ちは、極度の疲労を残すことになった。油断ならない天気を考慮に入れ、さらなる登高を進める。

広い中央ルンゼでは、何度か小規模の雪崩が横をかすめるが、雪崩の通り道を避けて取付に着いた。12時30分ごろ、５１００m地点到着。ロープを結び、クライミングをいよいよスタートするが、スピードをあまり上げられない。ここまで一気に高度を稼いだことによる高所の影響か。さらに、雪質が変化に富んでいて、岩の摂理が乏しいのも加味されている。プロテクションはピトンかマイクロ・ナッツしか使えない。ランナウトするのが必至となり、精神的に神経をすり減らされるピッチが続く。壁の中間にある長いナイフリッジ（第1雪田）は、雪が不安定な状況で通過に時間を費やす。ブレないクライミングで、増本が2本のロープをつなげてノープロで行く。さすがだ。

そろそろ日が暮れそうになるころ、ナイフリッジからトラバースして、岩の陰に比較的快適な？　ビバーク・サイトを作ることに成功。21時ごろ、５４５０m地点でビバークすることになる。3分の1は宙に浮いたテントで、体育座りになってシュラフに包まった。薄い６００gのシュラフでも、3人とも動じない。やはり、このような所は経験がモノを言うらしい。ビッグ・マウンテンでは2、3回の腰掛けビバークは当たり前だと腹をくくる。だがしかし、横になれないと疲労は抜けない。蓄積されるのが辛いところだ。

4月21日、8時ごろテントを出ると、怪しい霧が辺りを包んでいた。

昨日のオーバーワークと不完全な寝床では、さすがに疲労を隠せない。相変わらずの踏み固まらない雪を崩しながらのクライミング。できるだけ硬い氷を求めて進んだ。

第1雪田が終わり、傾斜の増した垂直のアイス・クライミングのパートでは、一村が淀みなくロープを延ばし、不安定な雪壁をプアプロでランナウトする増本が続いてピッチを重ねた。後ろを振り返ると、２００９年にロシア隊が登った山にガスが広がり始めた。昨日までの青い空はどこへやら、いつの間にか降雪が本格的になり、視界が利かなくなり始めた。多少の不安はあるが、3人ともに下を見ることはなく、チリ雪崩の中を進むしかないと寒さに耐えた。22時10分ごろ、壁の上部ナイフリッジを抜け、雪を切り崩して、またもや不安定な腰掛けビバーク・サイト（５９５０m地点）をこしらえた。計画ではもう少しまともなリッジだと思っていたが、裏切られてしまった。靴を脱げないので、そのままシュラフに入る。かなり遅くなり、疲れていたのでお茶を飲んで浅い眠りにつくしかなかった。毎度思う反省点だが、高性能のスコープで壁を観察できれば、まともなビバーク・サイトを探せるのではないかと……。でも、現場ではそうもいかないのだが。

4月22日、昨日より劣悪なビバーク（雪崩でテントが流されかけた）となったので一睡もできず、さらに今日も雪だ。心なしか、少し強くなっているように見える。だが10時ごろ、我々は当たり前のようにクライミングを再開した。

あと少しで稜線。この壁の傾斜ならチリ雪崩程度で、それ以上は拡大しないだろう。深刻なスピード不足になりつつあるが、着実に高度を稼ぐ。

頂稜に達する手前は深い雪となってきた。即座に、セラックわきに平らな所が見つかった。早いが15時30分ごろ、６１００m地点でビバークする。夜、あまりにも雪が降るので雪かきをする。

4月23日、9時30分ごろに出発するが、膝上のラッセル1ピッチでやめた。視界が10mほどしか利かないし、雪崩の危険も大いに出てきたため、６１００mで停滞とする。食料の食い延ばしが始まる。スプーン5杯のマッシュ・ポテトが晩ご飯。

4月24日、晴れてきた。3日間の雪が積もり、ここから頂上まで緩い雪稜だが、雪崩の危険性を感じる。一日、雪が落ち着くのを待つことに。ここで待つことが重要だと感じた。しかし、とにかく夜が寒い。

4月25日、雲ひとつない晴天。7時ごろに出発。南には威容を誇る三角形のミニヤ・コンカが見える。その左にはソン・ヤッツェン峰がどっかりと座っている。きれいだ。申し分のない登頂日和。皆、思い思いに写真を撮り、残りの登りを笑顔で進んだ。2羽の鳥が僕らの横を飛んでいる。祝福してくれているのだろうか。その浮遊に見とれているうちに、気づくとすべての視界がパノラマになっていた。9時25分、山頂着。３６０度、真っ白な世界がどこまでも広がっている。体の底から伝わる歓びを一村、増本、長門で分かち合う。

粘り、耐えて、堪えて、あきらめなかった結果、頂上が踏めた。高所に新しく納得のいくラインを引く。クライミングを始めたころからの夢がひとつ実現できた。これでまた、次のステップにチャレンジできる。一歩一歩着実にステップ・アップすることで大きな山も登れるのだ、と実感できた瞬間でもあった。

よくよく考えると、結局、僕にはこんなことが性に合っているのだろう。はたからは、見ようによってはかなり無益な、非生産的な行為に思えるかもしれない。だが、大切な物事は目に見えない、はかないものだろう。でも、心では感じられる。そんな物事をこの先、感性を研ぎすまして、少しずつ段階を上げて獲得していくだろうと、ダッドメインの山頂で感じた。山頂を背にして、ほかでは決して味わえない満足感と安心感が、僕の体を満たしてくれた。

これだから山登りはやめられない。

登攀データ

ダッドメイン（6380m）東壁・新ルート

ルート名：雨ニモ負ケズ（東北で被災されている方々へのエールの意味を込めて命名。東北の詩人・宮沢賢治の詩「雨ニモ負ケズ」の題名を拝借させていただいた。詩のイメージのように、どんな辛いことがあっても、清らかで献身的で、つつましく、愛情あふれる人間こそが理想とするところであるからだ。がんばれ日本！）

登攀期間：4／20～4／25　6日間

標高差：1900m（中央ルンゼのクレバスから山頂まで）

ルート・グレード：ED1、WI4、M5R（コンティニュアスも入れて21P）

下降：同ルート（中央ルンゼまで15Pの懸垂下降）

なお、ダッドメインは第2登？（2004年にニュージーランド隊、Jo Kippax' Sean Waters）。東壁は初登攀だと思われる

◇メンバー

一村文隆（Giri- Giri Boys、同人クライミングファイト）

増本　亮（Giri-Giri Boys、同人クライミングファイト）

長門敬明（Giri- Giri Boys、同人クライミングファイト、秀峰登高会）

◇登山期間

2011年3月26日～4月30日（36日間）

◇山域

中国四川省大雪山脈ミニヤ・コンカ山群、燕子沟

◇日程

3／26　成田～北京～成都

3／27　成都（ミーティング、買い出し）

3／28　成都～磨西

3／29　磨西～燕子～3150mBC設営

3／30　BC～4050m～BC（順化活動のため、デポをしに行く）

3／31～4／3　悪天のためBC停滞

4／4　4000mでテント泊（順化活動1日目）

4／5　4450mでテント泊（順化活動2日目）

4／6　4800mでテント泊。5200mまで登高（順化活動3日目）

4／7～8　5200mでテント泊。5400mまで登高（順化活動4～5日目）

4／9　5200m～BC。5400mまで登高（順化活動6日目）

4／10～14　BCレスト

4／15　ダッドメインへgo upするが、悪天でBCへ（エド

ガー南東壁への谷の出合までBC移動、2650m）

4／16　悪天のためBC停滞

4／17　エドガーへ偵察。3000m付近で断念

4／19　ダッドメインへアプローチ。4100m（ABC）でテント泊

4／20　晴れ。早朝、ABCを出発して登攀開始、5450mでビバーク（登攀1日目）

4／21　5950mでビバーク。雪が降り始める（登攀2日目）

4／22　6100mで吹雪のためビバーク（登攀3日目）

4／23　1P登るが吹雪のため引き返す。6100mで停滞（登攀4日目）

4／24　晴れ。雪が落ち着くのを待つ。6100mで停滞（登攀5日目）

4／25　晴れ。山頂～4100m（登攀6日目）

4／26　4100m～BC

4／27　BC～磨西

4／28　磨西～成都

4／29　成都

4／30　成都～成田

◇装備

ロープ：8・1㎜×60m2本（ベアール）

カム：№0・3～2

ナッツ：1セット

トライカム：№3・5、5、6

ピトン：ナイフ・ブレード4枚

アイス・スクリュー：6個

スノーバー：2個

テント：ICIゴアライトX（底開きジッパー付き）

シュラフ：600g（カバーなし）

ジェット・ボイル：（バーナー予備持参）

ガス・カードリッジ：3缶

ウレタン・マット：各自

◇食料

アルファ米、インスタント・ラーメン、マッシュ・ポテト、スープ、みそ汁、粉末ジュース、BCAA（Power Navi）など2泊3日分。

行動食は1人3日分で900g。飴、シリアル・バー、チョコ、柿の種、パワー・ジェルなど。

◇高所順応

燕子沟をグローヴナー方面へ行き、グローヴナー南面の氷河から西へ1本隣の谷。その谷を詰めると顕著なコルがある。5200mで2泊、5400mのコルまで上がった。それ以上は、労力の割に標高を稼げないのでやめた。

◇気候と土地柄

4月は日本と変わらず春山に近い。霧と雨が多い所だ。植生も日本とあまり変わらない。BCを設営した初期は雪に覆われていたが、次第に溶けていった。燕子沟は観光地化が進みつつあるので林道も整備されている。燕子岩という地名が3700mにあり、そこまで道がついている。BCも日本の林道に設営しているような感じで、ネパールやパキスタンの遠征とは趣が異なる。初めてなら面喰うのが必至だろう。地元の少数民族・イ族が毎朝、薬草採りにバイクで来たりもする。

*この登山隊は、日本山岳会の海外登山基金の助成を受けて実施されました。どうもありがとうございました。

ナムナニ峰、未踏の南面から北面へ縦走

平出和也・谷口けい

７６９４ｍの頂上に突き上げる標高差２０００ｍの南東壁を目指してから、幾歳月経っただろうか。私（谷口）の膝の怪我のせいで、この遠征自体が延期にもなった。チベットに来るまでも長かったけれど、来てからも長かった。ＣＴＭＡ（中国チベット山岳協会）と何度も話し合って交渉を重ねた。１年も前から、私たちの予定する登攀ルートと行程表をメールでやり取りしていたのに、やっぱり何も分かってはいなかったのだ。送られてきた登山許可証には「ノーマル・ルート（北西面）」、標高も「７０９４ｍ」と間違っている。確認すると、返事は「ノー！プロブレム」。私たちが目指すのはナムナニ峰南面のロンゴー谷である。この谷の情報が欲しいと言えば、「ノー・アンサー」。

現地で初めて顔を合わせたリエゾン・オフィサー（ＬＯ）のタシは、何度もナムナニ遠征隊に同行したことがあるというので、少し安心する。それでも油断は禁物。「念のため確認だけど、私たちが行きたいのはノーマル・ルートではなくて山の裏側。南面に入るロンゴー谷を詰めて、南側の壁を登りたいって知ってるよね？」と聞いてみる。「なんだって？」……って、やっぱりＬＯに情報は何も伝わっていない。チベットへ遠征するには、ここから冒険と闘いが始まる覚悟が必要だというのは、前回学んだことだ。

ＬＯのタシは、広大なチベット高原で早速、羊飼いのおじさんをつかまえて「ロンゴー谷って知ってるか？　それどこ？」と聞いている。近くの集落では、ベース・キャンプ（ＢＣ）への荷役馬の手配をするべく、畦道を歩いて声をかけるが、今は収穫の時期で忙しいのだと、なかなか話を聞いてもらえない。

だいたい彼らにとっては「登山ってなんだ?」っていう世界に違いない。

それでも、すご腕ＬＯのタシは、数日後には馬と馬方を手配してきてくれ、我々はついに、謎のロンゴー谷への入り口に立った。谷の入り口は狭く、急峻な岩壁に挟まれている。ゴルジュの門といったところか。ゴルジュ内を遡行するなんて無理、この谷には結局入れないのか――。

と思ったら、崖のはるか上部に踏み跡があった。夏の間、この谷の上流にヤクを放牧しているのだということが、あとから分かった。無事、未知のロンゴー谷へ入谷して第一関門通過。しかし、ガレた崖の斜面を行く行程で、馬の脚に傷がついてしまったことと、果てしなく続くこの谷の奥に快適なＢＣを求められるか確信がなかったので、地図上で予定していたＢＣ（南東壁下の氷河舌端）まで6時間ほどの行程を残した所で、荷を降ろしてＢＣとする。豊かなせせらぎが流れ、マーモットとカモシカの遊ぶ４８００ｍの台地だ。

ここから先は、間違いなく人跡未踏。岩ゴロのモレーンを丸一日歩いて、南東壁が見える所までたどり着いた。

これまで南東壁の情報といえば、大西保さんにいただいた遠方から撮影した写真だけで、実際にこの目で見るまで、本当に登れる代物なのかどうかは分からなかった。目の前に現われた壁は、長かった氷河のどんつきから両手を広げて立ち上がっていた。頭は雲の中でよく見えないけれど、やはり懸念していたセラック帯が上部にある。夜中と朝方に、それが大きく崩壊して雪崩れた。セラック帯の中に突き上げる明瞭なリッジに、１本だけラインが見えた。登るならあそこしかない。

７０００ｍ近くまでの順応を兼ねて、南西稜に突き上げる幾つもの氷河のなかのひとつを登った。登ってみると、想像以上に複雑なこの山の地形を知らされる。巨大なセラック帯に阻まれたり、周りからの落石がひっきりなしだったり、クレバスがパクパクと口を開けていたり……。

こんなふうに、ナムナニの南面をあちこち踏査しながら、この山に精神的にも近づいていく。

10月1日、初めの偵察から2週間後に、意気揚々と南東壁の裾に立った。見上げる壁は、好天続きで偵察のときより黒くなっている。登り始めてすぐに、「ドーン」と頭上で轟いた。セラックの崩壊だ！　アックスにしがみついて壁にぴたりと身を寄せる。チリ雪崩はかぶったものの、直撃ではなかったので登り続ける。偵察時に予定していたラインは落石の雨だったので、紆余曲折しながら、安全だと思われる場所を登っていく。

しかし、ふと見上げると、やっぱりそこには懸垂氷河が得意げな顔をして私たちを見下ろしていた。そんなあいつに向かって、登り続けていいものか。自然の脅威が相手では、逃げて生き延びるのが、自然を相手に遊び、闘う者の掟だ。そうはいっ

南面から北面への縦走が完了したのだ。

ても、こんなに恋焦がれてやってきた相手をそう簡単にはあきらめられなくて、「今すぐ降りるべきだ」と言うパートナーに、ひと晩だけ納得する時間をくれと頼んで壁の中でビバークし、自分を納得させた。

10月5日、改めてBC出発。南面のどの氷河も未踏。そのなかのひとつから選び、南東稜と南西稜が合流する所へと向かう。幾つもの小ピークが連なり、未踏のナムナニ南峰へ。そして、雪壁をつないで主峰へ。気温があまりにも低くて雪が固まらず、プロテクションが取り辛ければ、ラッセルも辛く苦しい。しかし、景色だけは常に最高だった。チベット、西ネパールからインド・ヒマラヤまですべて見える。2008年にふたりで登ったインドのカメット峰南東壁が、ラインまではっきりと見える！

10月9日、南面から頂上を越えた瞬間に、聖山カイラスとマナサロワール湖が目の前にあった。それは分かっていたことだったのだけれど、これまでの道のりと、その威風堂々たる山々の姿に、ちっぽけな自分は感動して、360度の景色を欲しいままにした。

さて、次なる問題は下降。CTMAとしては、登攀した場所を下降すること、という決まり。我々は当初の目的である縦走を完遂すべく、「登攀した場所は危険過ぎるため」ノーマル・ルートである北西面を「安全策」として下降した。無事、ナムナニ



降雪のなか、傾斜の増したミックス壁を乏しいプロテクションでリードする一村





ダッドメイン東壁と新ルート



中央ルンゼの下部雪壁を登る



ロープを結び合ってクライミング開始



4 月 21 日朝。前夜、岩の陰に作ったビバーク・サイト。テントの底の 3 分の 1 は宙に浮いている



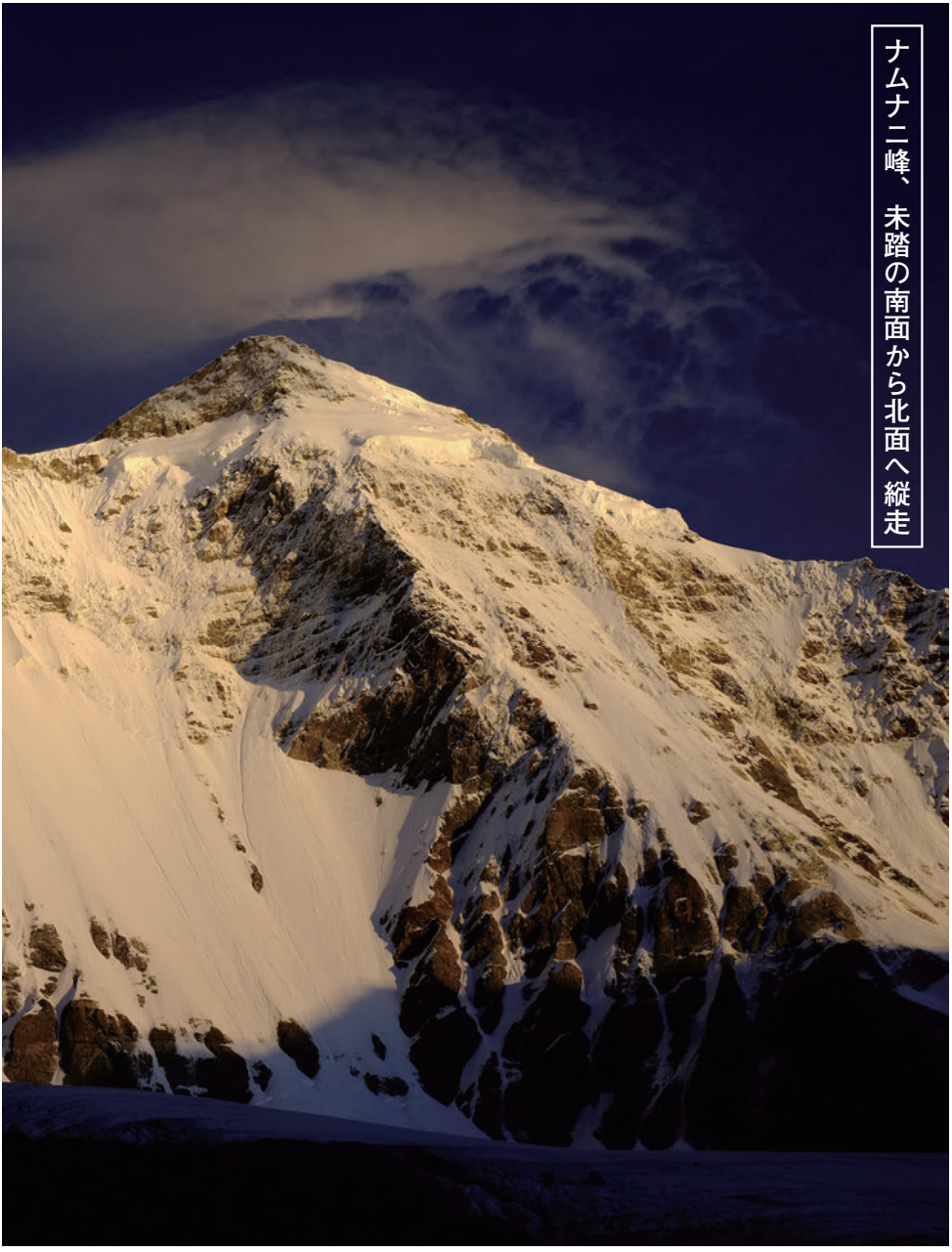
ミニヤ・コンカをバックに快晴の頂上稜線を行く



ダッドメイン山頂にて。左から増本、一村、長門



登攀ルートを懸垂下降。15 ピッチで中央ルンゼに降り立った



した。右手の稜が予定ルート



最初に目指したのはこの南東壁であったが、上部の懸垂氷河を見て、C1 で撤退することに



ナムナニ南面の氷壁を登る谷口



ヒマラヤの大展望をバックに登攀中の平出



ナムナニ頂上からは、2008 年にその南東壁を登ったカメットが遠望できた

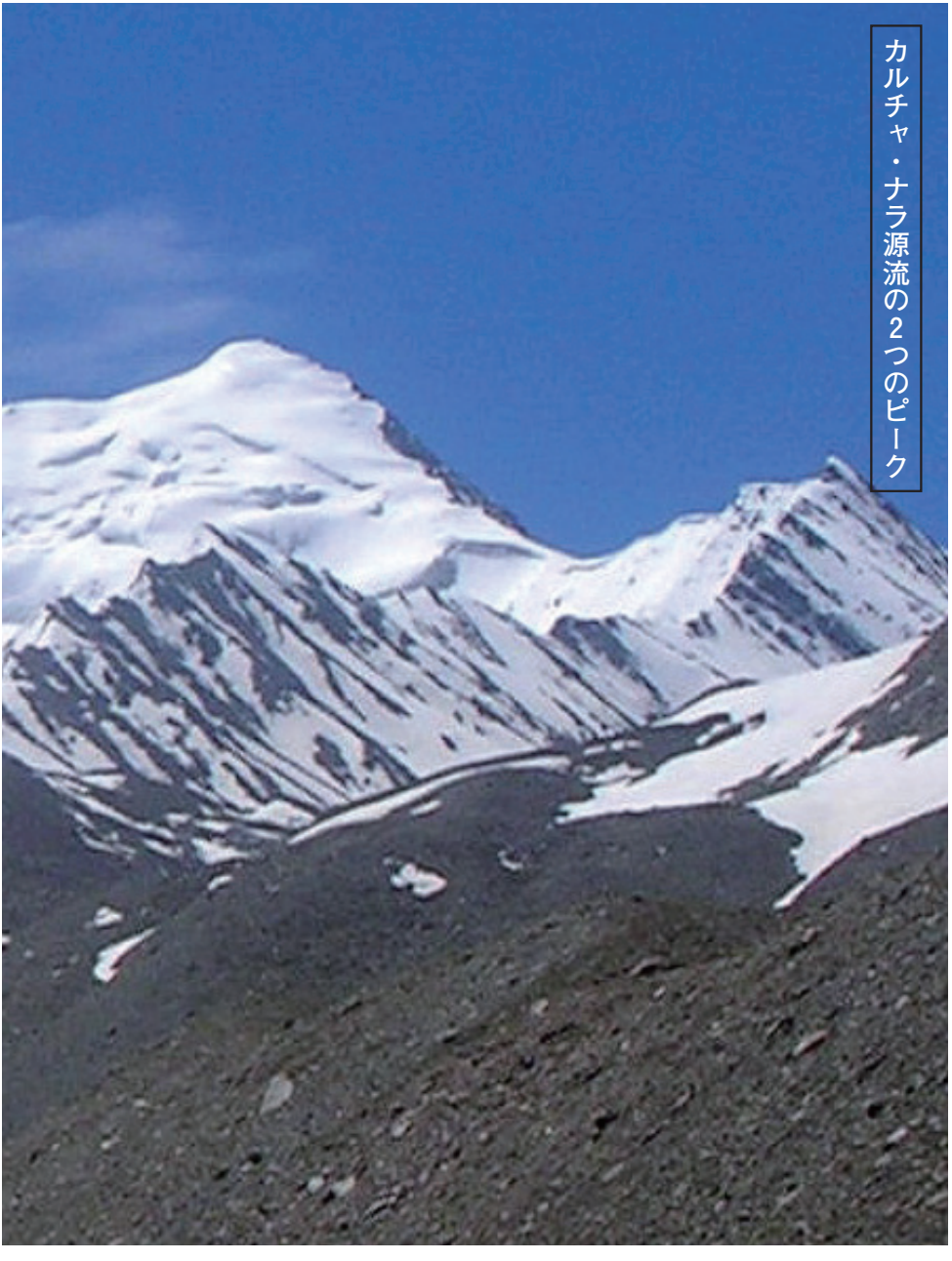


頂上からの展望。北面にはマナサロワール湖と、遠くカイラス山が望まれた





ナムナニ山頂に立つ平出（右）と谷口



カルチャ・ナラ源流の2つのピーク



チェマ峰(6105m)北面



チェマ峰登頂に成功、歓喜の声を上げる隊員たち



アッチェ峰(6066m)北面

インド・ヒマラヤ／カルチャ・ナラ源頭の2つのピーク

日本山岳会東海支部インド・ヒマラヤ中高年登山隊

はじめに

東海支部も１９８０年代後半から中高年支部員の増加が目立ち始めた。支部設立時の志向である高所登山は青壮年によって継続されていたが、中高年にも高所登山に対する期待が高まってきた。そこで、夏期に登山が可能なインド・ヒマラヤのラダック、ラホール、スピティ地区に目標を定め、１９８８年にヤン峰（６２３０ｍ）に登頂した。その後、11次14隊がこの地区の６０００ｍ峰を目指し、目標の15座すべてに登頂している。内７座は初登頂である。これらにより50歳以上の登頂者は延べ59名（女性15名）に達している。

当初、計画を立てるにあたって愛知医科大学の協力を得て、１９７８～２００１年にかけて16項目の体力測定を行なった。個人として、また項目によっては同年代の平均値以上の測定値が出たものの、全体的には「自己評価が測定値を上回っている」すなわち、普通のおじさん、おばさんであると指摘された。

これにより、当初は身の丈に合ったピークハントになったが、尾上　昇遠征実行委員長の示唆もあり、未知への願望抗しがたく、第５次隊から未踏峰への挑戦が加わった。当然、事前の偵察が計画の前提となった。それがかなわない場合は、先遣隊を派遣しルートの選定を行なった。３次隊までは高所ポーターに伍して荷上げ、ルート工作を行なったが、隊員の加齢に伴って、荷上げやルート工作を高所ポーターに依存するタクティックスに移行しているのが現状である。

この23年間にわたる登山活動中、１９９７年のラダックにおけるクーラ峰（６５４６ｍ）初登頂。１９９９年に登山隊として初めて登山許可を得た、スピティ北部のパレ・チュ川流域の

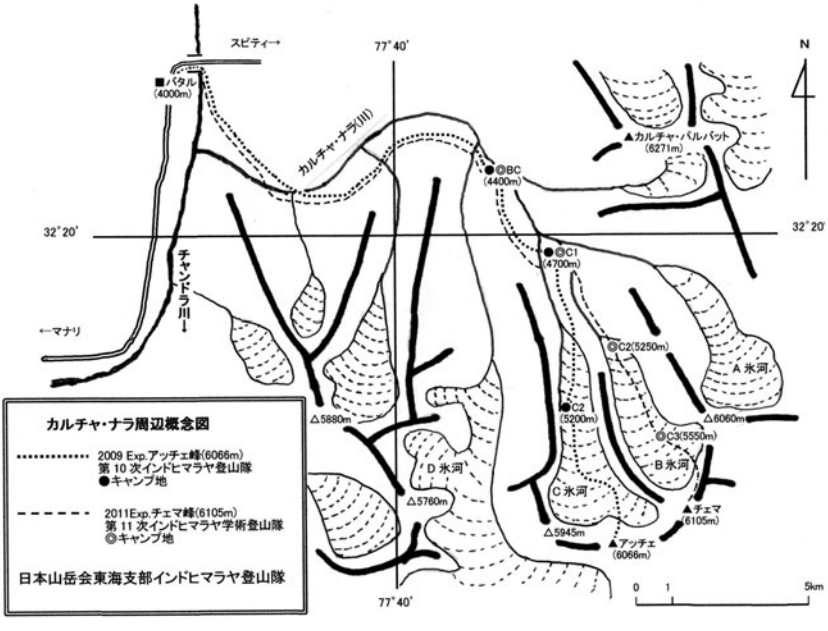
ウムドン・カンリ峰（６６４３ｍ）、ドゥン峰（６２００ｍ）の初登頂。２００１年、支部設立４０周年記念登山のガングスタン峰（６１６２ｍ）集中同時登頂は印象に残っている登山である。

カルチャ・ナラ（Karcha Nala）について

行政区は異なるが、ラホール地区のバタルからしか入ることができない。ほぼ北緯32度20分に沿って流れ、バタルの南１・５㎞でチャンドラ川に合流する長さ17㎞ほどの小さな川である。右岸にはカルチャ・パルバット（６２７１ｍ）、フルーテッド・ピーク（６１３９ｍ）がそびえ、左岸には長さ4～10㎞の４本の氷河が扇状に展開している。我々は便宜上東からA～D氷河と仮称している。それぞれの氷河の源頭には６０００ｍ峰が北東から南西に連なっている。

バタルから１日で４４００ｍのBCに達することができるが、ジープで到着できるバタルの標高は４０００ｍで、入山前の高所順化が必要である。

（鈴木・記）



アッチェ（６０６６ｍ）初登頂　第10次インド・ヒマラヤ登山隊２００９

鈴木常夫

［行動記録］

出発までに申請ピークのXビザが下りず、急遽、オープン・ピークを現地にて申請することにした。

６月23日、鈴木がデリー着。翌日から日本大使館を訪問、ＩＭＦにてカルチャ・パルバット峰の登山許可取得、トランシーバーの輸入、開局許可取得、連絡官を交えてブリーフィング、装備購入、ルピー両替など先発の仕事を終えた。

６月26日、松原、足立がデリー着。チャンディガールを経て６月28日、マナリ着。

６月29～30日、現地エージェントとの契約確認と支払い。マナリ・デポのテント、ガス・カートリッジなどの装備点検、固定ロープやブルーシートの購入。コックと献立の打ち合わせ、高所ポーターへは前払い金支払いや、事前に依頼したカルチャ・ナラの偵察報告を受けた。

７月１日、ジープにてマナリ出発。ロータン・パスを越え、チャンドラ川を遡り、ダダルプ（３４００ｍ）を経て７月２日、バタル着。

７月３～５日、南ダッカ氷河４６００ｍ付近にて高所順化を行ない、７月６日、バタルへ戻った。

７月８日、エージェントのスタッフ、高所ポーターたちとともに馬でキャラバンをスタート。平坦なカルチャ・ナラ右岸の河原を歩くこと２時間ほどで、流れに遮られる。右岸の切り立った崖を慎重にトラバースする。眼下はカルチャ・ナラの急流。再び河原に降り立ち、カルチャ・ナラをまたぐ大きなスノー・ブリッジで左岸に渡り、山腹を巻いてかなり大きな沢を徒渉する。再び山腹を少しずつ高度上げながら巻き、Ｄ氷河からの沢を徒渉し、台地状の４４００ｍにＢＣを設営した。ここから見上げるカルチャ・パルバット南面は、頂上付近に雪はあるものの、ほとんどガレ場で水は得られないため、南東面からのルートを求め、カルチャ・ナラ上流を目指すことにする。

７月13日、左岸４７００ｍにＣ１を設営したものの、南東面からのルートも見いだせなく、連絡官の了解を得て、Ｃ氷河源頭の６０００ｍ峰を目指すことにした。これまでは晴天が続いたが、この日を境に天気が崩れ、雨、ミゾレ、雪の日が15日まで続いた。

７月17日、Ｃ氷河の末端はほとんど礫に覆われているので歩

きにくく、ときどき氷河右岸の小尾根を巻いたりして登り、源頭の美しい雪峰の全景が見渡せる雪原上の５２００ｍ地点にＣ２を設営した。

（足立・記）

［登頂記］

７月18日、Ｃ２を５時30分に出発。雪原をラッセルしながら２時間、Ｃ２から高度差で300ｍほど登った地点が雪壁の取付で、ここから本格的な登りになる。Ｃ２から頂上までの標高差は約９００ｍ。残念ながら鈴木は雪原で、足立は取付で断念した。

ルート上には傾斜のきつい階段状の雪壁があり、１週間前の降雪のせいか上部に登るにつれ雪が深くなり、高所ポーターたちが立ち往生してしまってラッセルを交代する。長時間続けたと思ったが、下山時に確認したら20ｍ程度だった。それほど苦しいラッセルだった。その後もラッセルを繰り返し、14時30分、３名の高所ポーターとともに頂上に立った。Ｃ２から９時間の登高だった。頂上はガスがかかり、パノラマ写真が撮れなかったことは残念だった。

下山は、緩んだ雪に足をとられたり、小さなヒドン・クレバスに落ちたりしながらも無事、取付点に戻ることができた。ガスも消え、振り返ると私たちのトレースが頂上までくっきり続いているのが見えた。改めて眺めると、なんと美しい姿の山か。心の中で何度も「さよなら」と言ってから、仲間の待つＣ２へ戻った。

（松原・記）

７月20日、ＢＣ集結。７月23日にＢＣを撤収して、７月26日、マナリ帰着。我々の登ったピークは、その山容からラホール語で「娘」を意味するアッチェ（Ache）と命名し、３人の老人たちの、ひと夏の冒険は終わった。

隊長：鈴木常夫（74）
隊員：松原立雄（75）
隊員：足立直行（66）

チェマ（６１０５ｍ）初登頂　第11次インド・ヒマラヤ学術登山隊２０１１

星　一男

［行動記録］

２０１１年７月15日から８月23日まで、㈳日本山岳会東海支部設立50周年の記念事業の一つとして、第11次インド・ヒマラヤ学術登山隊が派遣された。２００９年から計画し、２０１０年６月に目的の山を決め、併せて４回目になる地学、気象関係の学術調査を行なうことにした。２０１０年11月にインドのＩＭＦに登山申請を行ない、仮許可が取れたのが２０１１年２月、入国ビザを出発の２日前に取得し、ひとり先発隊として出発した。

７月15日にデリーに着く。入山許可をＩＭＦで受け取り、日本大使館に計画書を提出する。19日には本隊もデリーに到着。７月21日朝、マナリ（標高約２０００ｍ）に移動。７月22日、鈴木マネージャーと合流。高所ポーターを伴って行なったカルチャ・ナラの偵察報告と現地情報を得た。

７月26日、不通になっていたロータン・パスが開通したとの情報が入り、午後、３台の４ＷＤトヨタ車と１台のトラックに荷物を満載して出発。ロータン・パス（３９７８ｍ）を越え、27日にバタル（４０００ｍ）のキャンプ地に着く。この地域はドライエリアと呼ばれ、年間降水量が２００㎜程度で、真っ青な空と強風が名物の乾燥地帯である。キャラバンの準備をするなか、チャンドラ・タールを往復して高所順化を行なった。偶然にも日本山岳会名誉会員のハリシュ・カパディア氏に会い、カルチャ・ナラ流域に関する貴重な情報をいただいた。また、目的の山が未踏峰であることも分かり、隊員一同の士気が上がる。

７月30日、馬に荷物を載せてキャラバンが始まる。氷河からの急流の徒渉や、羊が作った道をたどり、同日、ＢＣ（４４００ｍ）に到着。

８月３日にＣ１（４６８０ｍ）、８月６日に氷河上にＣ２（５２５０ｍ）、８月７日に急遽設営したＣ３（５５５０ｍ）に入る。氷河は単純涵養氷河で、アイス・フォールもなく平坦な氷河であった。インド人スタッフとアタックに向けルート工作を行なう。隊員は幸いにも顕著な高度障害は出ていない。全員登頂に向け目処が立ってきた。

ところが、翌８日に頂上へアタックするつもりだったが、夜中から雪が降り始める。

8月9日の早朝、ようやく雪がやみ、曇り空で頂上の様子が分からないが、アタックを開始。幸い大雪にならず状態も良い。ヒドン・クレバスに注意しながら氷河を最奥まで詰め、約1時間で5700mの雪田に着く。隊員の体調も良い状態を保っている。

100mほどの雪壁も、フィックス・ロープを使い順調に高度を上げていく。アイゼンの効きも良く、快調な登攀ができる。雪壁を登りきると傾斜が緩くなる。10時ごろから太陽が顔を出し、風もなく急に温度が上昇し出す。隊員のひとりが空気が薄いためか辛そうだ。

11時25分、最後の急斜面を踏ん張り、全員が登頂する。ところが、頂上は雪庇と尾根との区別がつかず迂闊に動けない。眼下の北面の壁には大きなクレバスが幾つも見える。その場で各自写真を撮り、20分ほどで下山を開始する。雪が緩み出してきたので下山を急ぐ。14時にC3に降りる。後日振り返ってみると、結果的に、登頂条件が整った本当に幸運な一日であった。

8月10日、BCに下る。撤収作業を済ませるも、8月12日夜から雪が降り、20cmの積雪となる。馬がBCへ上がってこないので、8月14日、隊荷をBCに置いたまま個人装備のみを持ってバタルに下った。しかしバタルも雪で、チャンドラ川沿いの道路もズタズタに寸断されていて、ロータン・パスは通行止めとのことなど、情報が交錯していて決断を迫られた。

8月17日、ようやく東回りのルートであるクンザム・ラ（4551m）が通れるとの情報が入り、夕方バタルを離れ、ジープでカザ、スムド、レコンピオ、クルを経由し、やっとの思いで20日午前2時、マナリに戻ることができた。エージェントのスタッフも頑張って隊荷をマナリに届けてくれた。これも遠征ならではの経験であった。

8月22日にデリーのIMFへ報告したが、初登頂とチェマ峰（Chemma Peak）の命名が認められた。

8月23日夜、デリー発の日航機で全員帰国した。

感想としては、登山日程と隊員の体調管理について概ね計画どおりにできたことは幸運であった。しかし、天候に関しては神様のいたずらか全く予測不可能で、難しい判断を強いられた。

隊　長：星　一男（60）
学術隊長：田辺元祥（61）
隊　員：篠原　豊（72）
隊　員：久世勝己（62）
隊　員：石井　仁（69）
マネージャー：鈴木常夫（76）

（注）IMF：Indian Mountaineering Foundation　の略

なお、後援を愛知県、愛知県山岳連盟、中日新聞社からいただいた。

日本山岳会東海支部　インドヒマラヤ中高年登山隊　年齢別構成表(50 歳以上)

□男性登頂者　○女性登頂者
◎＝初登頂　■男性非登頂者　●女性非登頂者

次数	年度	山 名(標高)	年齢	50歳以上の平均年齢	高所ポーター雇用率%
1	1988	ヤン(6230m)		51.8	18.0
2	1990	ガングスタン(6162m)		53.5	33.0
3	1993	メントーサ(6443m)		57.2	37.5
4	1995	ストック・カンリ(6153m)		59.9	33.0
5	1997	◎クーラ(チャルン)(6546m)		59.7	50.0
6	1999	◎ウムドン・カンリ(6643m)		52.8	71.0
6	1999	◎ドゥン(6200m)		64.5	67.0
7	2001	ガングスタン(6162m)北面　集中登山		58.8	83.0
7	2001	ガングスタン(6162m)南面		63.9	67.0
8	2005	◎6206m無名峰		61.3	133.0
8	2005	◎c6080m無名峰		57.0	133.0
8	2005	ドゥン(6200m)		57.2	100.0
9	2007	シャルミリ(6069m)		65.2	85.7
10	2009	◎アッチェ(6066m)		71.3	133.0
11	2011	◎チェマ(6105m)		64.5	120.0

50　60　70　(歳)

(注 1) 高所ポーター雇用率は 50 歳以下の全隊員数を含んでの比率　(注 2) 第 8 次隊より 50 歳以下の隊員の参加は無い

増えた山の名、消えた山の名

――意外な土地に存在していた山岳密集地域

宮下啓三

序言

緑爽会は、山の自然を守ろうとする情熱を持つ日本山岳会員たちの集まりです。２００４年2月を1回目として、緑爽会で私はアルプスをテーマに話をしてきました。今年で早や8年目、これが私のアルプス談義の最終章となります。

１９６３（昭和38）年春に日本山岳会に入会させていただいて以来、やがて50年。私は多くの個性豊かで人間味あふれる人たちとお付き合いを楽しんできました。自分の人生の重要な一部分が、日本山岳会での人間同士の交わりであったと感じています。

ご恩返しのつもりで、私は本業の専門分野での仕事のかたわら、スイス・アルプスの文化と民俗の歴史について語ったり書いたりしてきました。

しかし、私が日本山岳会へのご恩返しの最大の仕事として行なったことが、日本山岳会の人たちに知ってもらえていません。その仕事とは、**槇有恒（まきありつね）のアイガー東山稜の初登攀**を語る文章をドイツ語に翻訳することでした。１９２１（大正10）年9月に、小柄な日本人が難攻不落と思われていたアイガー東山稜を、地元のスイス人のガイドたちの協力を得て登り切りました。アルプス登山史に残る大きなできごとでしたが、その登攀の詳細を綴った槇有恒の日本語の文章の内容は、スイスで知られずにいました。私は、スイスの登山家で登山史の研究者でもある人から頼まれて、アイガー東山稜征服の苦労を語った文章をドイツ語に翻訳しました。日本山岳会の図書室にある『**Eiger（アイ**

ガー）』という美しい書物の中に、私の訳が収められています。私の行なった翻訳は、日本人のアルプスでの活躍を証言するものとして歓迎されました。その翻訳を一つの章とする書物は、1998（平成10）年に出版されてから今なお版を重ねているとのことです。翻訳の苦労が報いられました。日本山岳会の会員たちに気づいてもらえないので、自分からこの事実を報告させていただいた次第です。

槇有恒の輝かしい業績が新聞で大きく伝えられたのをきっかけとして、日本の登山の歴史に大きな変化が生じました。それまで夏の時期の尾根歩きが主流であった登山が、冒険好きな大学生たちによる岩登りと冬のスキー登山隆盛の時代を迎え、それがヒマラヤへの遠征に至る道筋をつけました。

しかし、登山の発展と近代化をほめそやすばかりではいけない、と私は感じました。その発展の犠牲になったものがある、それについて考えたい、と思いました。その矢先の昨年5月、私は自覚症状のないまま重い病気に冒されていることを医者から告げられました。治しようのない癌が消化器官の内部に生じているというのです。応急手当で生き延びさせてもらっているうちに、2012年2月の緑爽会における話の依頼が来ました。緑爽会の切り盛り役の一人である松本恒廣君は、私の小学校の同級生であり、松本君の父君（松本信廣）は大学山岳部で大島亮吉の親友であり、槇有恒とも山行をともにした人でした。その松本君からの頼みを断る気になれませんでした。

私の病気のことを知らずにいた松本君から、2012年2月に話をして欲しいと電話で言われたとき、病気を告白した上で、なおかつ話をさせて欲しい、と私は言いました。万一、日本山岳会に身体を運べない場合には、原稿をどなたかに読み上げてもらって欲しい、とも言いました。自分自身の口からだろうと、他人の口からだろうと、私は遺言の一部として、今までの緑爽会での話に締めくくりをつけたかったからです。

最終回となる今日、話の舞台をスイス・アルプスから日本に移して、みなさんを驚かせたいと思います。

今日私は、前半と後半の2つに分けて話します。お手元に、前半のための資料としてのプリント3枚をお配りしました。休憩の時間をとって、後半の資料をお配りします。みなさんを驚かせる話の種を先に知られたくないからです。

前半は主として**日本百名山**を手掛かりにして語ります。百名山についての、みなさんそれぞれの記憶を呼び起こしながらお聞きください。

第一部　増えた山の名

自慢話をする山岳地帯の川たち（分水嶺と流域面積）

大阪府を大阪都にするなどというケチなことを言わずに、日本全土から都道府県の境目をなくしてしまいましょう。鉄道も道路も都市も消して、日本を山と川だけの自然な状態に戻してしまったらどうなるか？

1枚目のプリントの『**関東地方の分水嶺と河川流域**』と『**中部地方の分水嶺と河川流域**』をご覧ください。日本でいちばん高い地域をカバーする2枚の地図に、分水嶺と主な川の流域だけを描きました。そこに私は**深田久弥の**『**日本百名山**』の章の番号である数字を書き込みました。第72章の富士山が第71章の丹沢山と第73章の天城山に挟まれているといった具合です。何番がなんという山か、お仲間同士で当てっこをしてお遊びください。

この2枚の地図に合計71の名山の位置が示されています。

中部地方の上半分を大きく占めている**信濃川**が言います。「私は日本でいちばん長い川だ。甲武信ヶ岳の北側の水源から日本海まで、３６７㎞。北アルプスの槍・穂高から浅間山、谷川岳に至るまで、日本百名山の23座が私の流域にある」

すると、**天竜川**が言います。「私は流域面積で信濃川の半分、長さは3分の2ほどしかない。でも、甲斐駒ヶ岳から聖岳までの南アルプスの錚々たる山々と、木曽駒ヶ岳から恵那山に続く中央アルプス、それに霧ヶ峰や八ヶ岳もある。百名山の12座が私の領分にある。私の方が信濃川より名山の密度が高い」

『日本百名山』中の悪沢岳は、その頂上の場所にこだわれば大井川の流域にあるのですが、深田久弥は天竜川の分水嶺に属する荒川岳を悪沢岳と束ねているので、天竜川の勢力範囲に加えました。

「その程度で威張るなよ」と言うのが**大井川**です。「自分の長さは信濃川の半分以下だし、流域面積は天竜川の4分の1ほどだけれど、南アルプスの6つの百名山を持っている」

流域面積を百名山の数で割ってみれば、信濃川は（１１９０÷23＝）５１７平方㎞、天竜川は（５０９０÷12＝）４６３平方㎞となるのに対して、大井川は（１２８０÷６＝）２１３平方㎞。確かに大井川の言うとおり、信濃川と天竜川を黙らせるほどの百名山含有率です。面積について見れば、大井川が信濃川の2倍半の密度で名山を持っています。

「ちゃんちゃらおかしい」と北の方で文句をつけるのが**黒部川**です。「白馬岳から鹿島槍ヶ岳、さらに立山と剱岳まで9座が自分の流域にある。長さも流域面積も大井川の半分しかないくらいの短くて狭い川だけれど、魅力的な山の密度においては自

分がいちばんだ」

なるほど、流域面積について計算すれば、（６８２÷９＝）76平方㎞の面積に百名山１つとは、立派な成績です。

４つの川の言い争いを聞いていた**富士川**は、日本最高の山である富士山と日本第２の高さを誇る北岳を持ちますが、百名山の密度を自慢する話に加わらないことにしました。「自分の流域には９座しかないから」と思って黙っていました。

はるか北、北海道の**利尻島**も論争に口を挟もうとしましたが、思いとどまりました。百名山のある島として１８２平方㎞の流域面積に利尻富士をそびえ立たせて、大井川よりも百名山の含有率が高いのですが、黒部川には勝てません。

流域面積の広さにおいて日本第１位は**利根川**であって、西は浅間山から東は筑波山まで、百名山を数多く持ちますが、面積当たりの含有率は低いものとなります。第２位の**石狩川**、第４位の**北上川**、第５位の**十勝川**も同様です。

「こっちの勝ちだ」という小さな声がします。日本海に注ぎ込む２つの小さな川です。火打山の頂上から北に延びる尾根の東側の谷の**能生川**と西側の谷を流れる**早川**です。これら小さな川の主張にも耳を傾ける価値がありそうなのですが、残念ながら黒部川の百名山の含有率には一歩及ばないようです。でも、川１つに百名山１つというユニークさは評価してあげたいと思います。

地上から見る山々の名前

日本の中央部に位置する中部地方と関東地方の分水嶺と川筋および百名山の数についての数字を**２枚目のプリントの左側、「参考」**というタイトルをつけたところに並べておきましたのでご覧ください。注目しておきたいのは、福島県西部を流れる**阿賀野川**の健闘ぶりです。その阿賀野川の流域にある山の１つが尾瀬の**燧ヶ岳**です。頂上も斜面も完全に福島県にあります。分水嶺ではありません。ところが、北側の尾瀬沼と中央と西側に流れ出る野尻川が福島県と群馬県の境目となっています。どうしてこんなことになったのか？　尾瀬沼の水を地下に通した管で東京電力が利根川に引き入れているという理由で、燧ヶ岳を分水嶺だという説があります。自然状態を重視する私はこの説を無視して、燧ヶ岳を阿賀野川の流域にあるものとして、分水嶺の議論から引き離すべきだと主張します。

この「参考」の下の方に、**ヨーロッパ・アルプスの大きさ、河川の長さなどについての数字**を掲げておきました。ついでに**アルプスの分水嶺と主要な河川の流域の地図**を添えました。たった４つの河川がアルプスを占領しています。日本の川たちは、その規模においてとうていかないません。

でも、**ヨーロッパのアルプスと日本の山々との間に共通する現象**が見られます。古い時代の地図に描かれたときの姿が似ていたのです。

3枚目のプリントの右上、『**16世紀のスイス地図の一部**』をご覧ください。スイスの東北部を描いた地図で、右側にチューリヒ、その左にチューリヒ湖、上がスイス中央の東寄りにあるフィーアヴァルトシュテッテ湖。左に寄った所にヴェーゼン湖があります。元の地図に色はありませんが、分かりやすいように湖に青い色をつけました。

ヴェーゼン湖とは、かつて**辻村伊助**がサン・モリッツでセガンティーニ美術館を訪ねた後、チューリヒに向かう途中、気まぐれに列車を降りて滞在した場所です。そのとき、辻村伊助は西の方に向かって散歩してグラールスという町の北側に立つ山々を写真撮影しました。『スウィス日記』に載っている写真の中に、**スイス民謡**『**おおブレネリ**』の舞台となった地点がぼんやり写っているのですが、辻村伊助自身は全く気づいていませんでした。写真に写った山々の中に、「フレネリ」という名の娘の伝説、すなわち、人の言うことを聞かない我がまま娘に罰が当たって、頂上近くの万年雪に閉じ込められたまま麓の村に戻らなかった、という伝説の舞台が隠れていたのです。この伝説が『**おおブレネリ**』というスイス民謡の元になりました。そして、グラールス山群の右側に見える湖（クレーンタール湖）が、「おおブレネリ、あなたのおうちはどこ？　わたしのおうちはスイッツランドよ、きれいな湖水のほとりなのよ」という歌詞にある「きれいな湖水」であったのです。

この古いスイス地図の一部分で、みなさんによく見ていただきたいのは、第一に山の描き方です。日本の子どもたちが描く山の形を連ねたように山脈が描かれています。所々に「mons」という文字が四角形の中に見えます。「山々」という意味のラテン語です。一つ一つの山に名がつけられた形跡がありません。この地図が表わしていた最重要の情報は川筋です。山脈の間に道がついているように見えますが、湖水から出ているところを見れば、道ではなくて川筋であることが分かります。川は、古い時代の人々が交通する際にいちばん大事なものでした。川沿いに道がつけられていたので、川と道の両方を並べて描く必要がありませんでした。

川のある所に人の通る道があり、川沿いに人の住む場所がある、という単純な原則は、そのスイス地図の下、『**富士見十三州輿地全圖之内　相模・伊豆・甲斐・駿河・遠江五國圖**』に共通します。富士川に沿って甲州の奥に進む道筋の部分を見ていただいています。江戸時代末のこの地図も、川筋を描くことによって人の通る道を省略しています。川筋に沿ってたくさんの地名、つまり人の住む集落の名が書かれています。川筋に沿っていない道だけが特に筋をつけられているのですが、それはごくわずかです。

山の名前がいくつか書き込まれています。ランドマーク、つまり方向を確認するための目印として利用されていた山の名で

す。八ヶ岳の左手、川の尽きる所まで行けば、その先は信州です。左手に鳳凰山、地蔵嶽、駒ケ嶽の名が並びます。川筋とそれらの山々の間の山の描き方はきわめて機械的です。山の個性を描き分けようという意思が全く見られません。つまり、スイス・アルプス地方の古い地図と全く同じ原理で、日本人は地図を作っていたのです。

この絵図に名前のあがる山々のうち、「イサルガ岳」は今の「笊ケ岳」（２６２９ｍ）で、早川が西から富士川に合流するあたりで、早川の谷の奥に笊を伏せた形に見えます。白根三山とは別個に「農鳥岳」が名を知られていたようです。一方、「神座山」（１２７０ｍ）は、大室山の東、河口湖駅の南西12㎞の位置にありますが、「神座洞」という神域を持つことによって名が知られていたのでしょうか？　「天目山」は、中央本線の初鹿野駅の東、１３４０ｍの山で、武田氏滅亡の地に建てられた祥雲寺の山号でもあるという因縁で名が高かったのでしょう。「金ヶ嶽」は「金ケ岳」（１７４０ｍ）で、茅ケ岳の東北側に寄り添うように立つ山です。茅ケ岳と重なるように見えて、ランドマークになっていたと見えます。「御嶽」は金峰山の別名でもあるのですが、ここでは昇仙峡の北の山の呼び名「御嶽」のこと。左下の「諏訪嶽」などについて私は確認をするに至っていません。

江戸時代末期に作られた『**信濃國全圖**』の内から、２つの部分を切り抜いてお目にかけます。江戸時代としては、山の形をしっかり描いているところに特徴のある地図です。その地図の、碓氷峠から諏訪湖の近くまでと、諏訪湖から峠を越えて木曽川沿いの谷に出る道筋の部分を見ていただきます。江戸から京都までの、東海道と並ぶ重要なルートであった中山道の核心部です。碓氷峠の南に、山の名前こそ書かれていませんが、荒船山と分かる形の山が見えます。

苦労して碓氷峠への道を歩いた旅人にとって、浅間山は特に大きく見えたのでしょう。この地図でも、川筋が丹念に書き込まれています。浅間山が背後に低く小さくなるにつれて大きさを増すのが立科山、つまり蓼科山です。３０００ｍに近い八ヶ岳をさしおいて、２０００ｍにも及ばない鉢伏山（１９２９ｍ）が大きく描かれています。最大の難所である**和田峠**を越える旅人にとって、大きな器を伏せたような、鉢伏山の穏やかな姿が心を慰めたからでしょうか？

江戸時代の日本で、１８１０年代の文政年間に出版されて、街道筋を歩く旅人たちのガイドブックとなった本の一つが『新版諸国道中細見記』ですが、それの中仙道、つまり江戸から京都まで山岳地帯を通る中山道のコースを説明する記述の中で、和田峠について「**和田　此処は日本一高き所なり**」と書かれていました。必要に迫られて難儀な旅をしなければならない人たちにとって、信濃川の流域と天竜川の流域を分かつ和田峠は、

越えなければならない、きつい登り下りに堪えなくてはならない難所でした。海抜１５２０ｍほどの峠ですが、趣味や物見遊山で登るわけでなく、必要に迫られて越える人々にとって、まさしく日本で一番高い所と感じられたのでしょう。

この地図では、中山道および上田を経て千曲川沿いに長野の善光寺に至る道に沿って、宿場のある土地が丁寧に記されています。千曲川から離れて諏訪湖に至る中山道が、川沿いの道でなかったことにも理由があったのでしょうが、長い道を行く旅人の目に見える最大の山が浅間山であり、蓼科山であったのでしょう。そうして、諏訪湖を経て木曽川沿いに歩くようになった旅人の目に、何より大きく見えたのは乗鞍岳と御嶽でした。どちらも大きい塊に見える火山であることを特徴とします。切れ目なく続く山脈は目印として不適当でした。

この地図は、当時としては珍しく信濃と飛騨の間の山々、すなわち北アルプスの姿を詳しく描いていますが、焼岳と穂高嶽の間の距離がいかにも長過ぎます。焼岳の左側の「硫黄山」とは何か？　焼岳の別称である「硫黄岳」のことであって、１つの山が２つに描かれてしまったのでしょうか？　焼岳の右手の「丸岳」は、松本平の西南の方向に見える「鉢盛山（はちもりやま）」によく似た形に見えます。一方、「野麦峠」の文字が面白い傾き方をしているのが目を惹きます。この峠は、「女工哀史」で知られるようになるより前から、信濃の住人たちにとって重要な峠でした。特に冬、富山湾で獲れる脂ののった鰤（ぶり）が、神通川を遡り、野麦峠を越えて信州側に運ばれました。裕福な信州人にとって海の産物である「寒鰤（かんぶり）」は、正月の祝いの膳における最大の贅沢でした。鷲羽岳が本当に見えていたのかどうか？　私には鹿島槍ヶ岳に似た形をしているように見えます。

旅人にとっての「頂上」は、山のてっぺんにではなくて峠にありました。「峠の頂上」という言い方をした例は、**正岡子規**が箱根に行ったときの文章のほかに、**柳田國男**や**大島亮吉**の紀行文に見られます。

飛騨山脈つまり北アルプス、木曽山脈つまり中央アルプスの山々は、谷間を川沿いに歩く人たちにとっては、古い時代のスイスの谷間を行く人々にとってのアルプス山脈と同じで、道をふさぐ壁のようにしか見えていなかったはずです。

ここまでに私の言いたかったこと――――――――

ここまでが私の話の前半部分です。この部分で私が言いたかったことをまとめてみます。

下から見る目線で認識できる山、つまり谷間の川沿いに旅する人々の目に見える山とは、「山」という漢字に似た姿をしていて、麓から頂上までを一つのまとまった絵として描ける山であり、それにふさわしいのが火山でした。

先ほど私は、関東と中部の地図に百名山の内の71座がある、

と言いました。その71の山々が百名山の全体を象徴しているかと尋ねられたら、「そうではない」と私は答えます。北海道から東北にかけての、私の作った地図に載っていない18の山々の内の14が火山です。伊吹山より西の11の山の内の5つが火山です。つまり、私の作った地図にない29の名山の内の19が火山です。圧倒的に火山が多いのです。

一方、関東と中部の概念図に見られる71の名山の内の火山とは、国土地理院の作った資料などを見ると、古い時代に火山であったことを証明する岩石が見つかったという理由だけで火山の仲間入りをさせられている槍ヶ岳と穂高岳を加えても22座。火山でない山々が絶対多数を占めています。火山でない山と峰の多くは、明治時代に入って三角測量によって高さを知られ、その高さによって価値を認められて名前をつけられました。

日本の山々より100年以上も前に同じことがヨーロッパ・アルプスで起こっていました。精密な地形図が作られる過程で、山や峰の一つ一つに名前がつけられました。山と峰の数が一挙に増えて、高さが数字で表わされるようになったので、山の高さを競い、峰の数を競うゲームが始まり、アルピニズムとも呼ばれる登山の流行する時代が来ました。その流れの中で生まれたのが日本山岳会でした。

つまり、谷間の川沿いの土地から見えない山や峰が、高さと名前を得て、活動意欲のある人たちを刺激して登山に誘ったことから、近代の登山の歴史が刻まれてきました。

人間が谷間や平地からの**「下からの目線」**では識別できるはずのない山々と峰々が、**「横からの目線」**によって計測され、**「上からの目線」**で描かれるようになった地形図とともに誕生したのです。

実例の一つとして、私の父の郷里である天竜川沿いの農村から見える**鬼面山**をあげます。高森町から飯田市にかけての土地から東の方にその山が見えます。夕陽を受けて赤く染まると、3つの峰が赤い鬼の2つの耳と頭頂部、その下の起伏が怒った鬼のむき出した牙のように見えます。「鬼の面」という意味で、天竜川の右岸に住む人たちがそれを「鬼面山」と名づけました。現代の地形図は右耳の先端を最高地点として標高1889mという数字を載せています。鬼面山はただの点に化してしまいました。名前の由来を地図は教えてくれようとしません。ガイドブックは山頂に至るコースについて語るだけです。

下から見える形に基づいてつけられた山の名は、鉢伏山、飯盛山（いいもりやま）、高尾山（たかおやま＝「尾」は屋根を意味していて、尾根が続く山の呼び名）、鍋割山（鍋が割れて逆さになった形）、丸山（山頂が丸い形）と丸森（東北地方では「森」が山を意味することが多く、山頂部の丸い山）、家形山と四阿山（ともに家の形に見えることによる）等々、文字で絵を描くに等しい山名です。

詳細で正確な地形図の発達によって、多くの新しい山と峰、およびそれらの名が生まれ、それに数字が書き込まれました。それによって、多くの先輩たち、および私たち自身の登山意欲が刺激されました。その一方で、地形図の発達が多くの山々を消し去ったのではないか、というのが私の抱く疑問です。

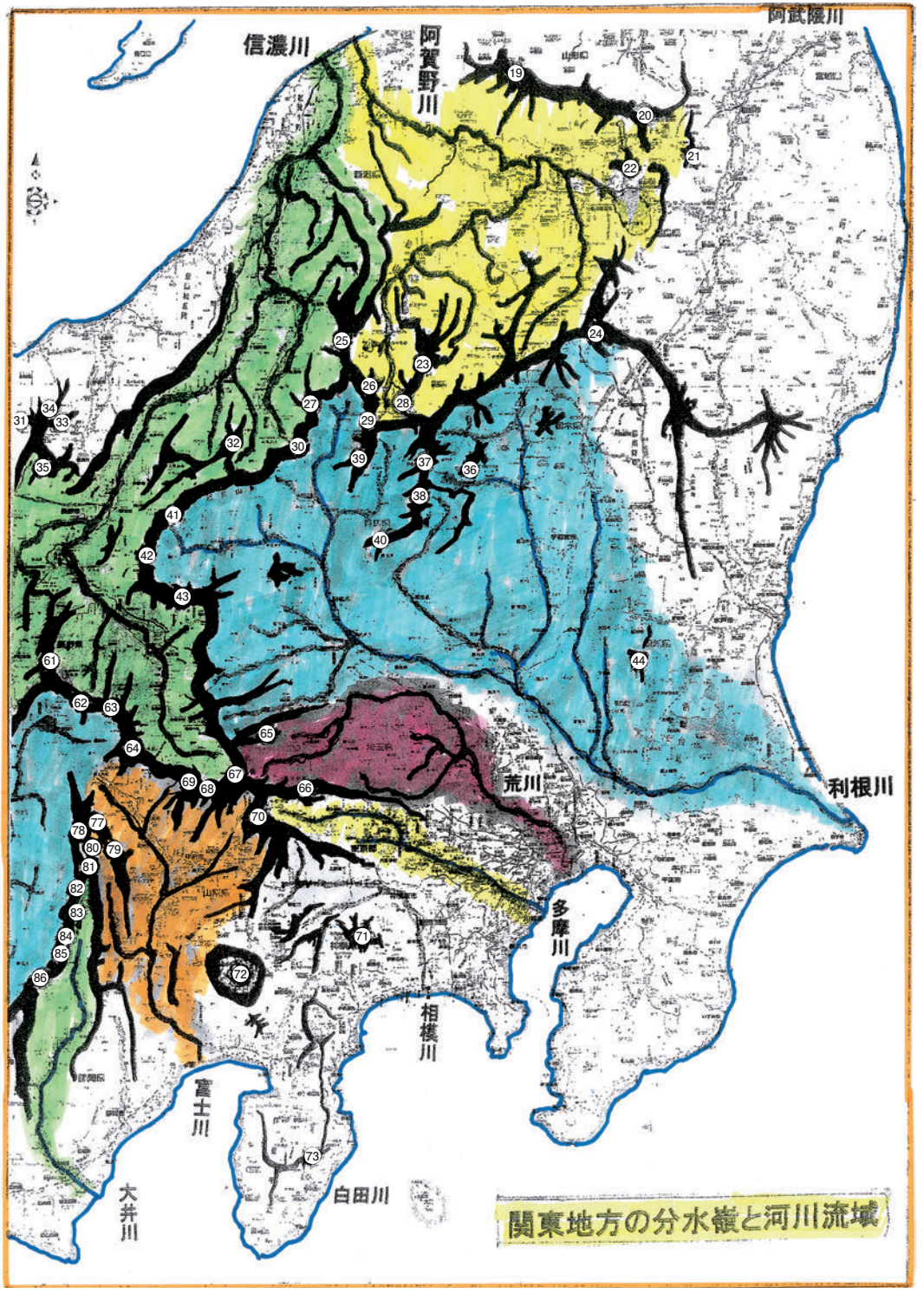
それに加えて、地形図が一つの「山」や「岳」を多数の「峰」に分解した結果、奇妙な現象が生まれました。古くから日本人は「八」を「たくさん」という意味で使ってきました。「八ヶ岳」は「たくさんの峰を持つ山」という程度の意味でした。現代人は地図に8つの峰を書き込もうとしました。その結果、八ヶ岳の北半分に8つ、それに加えて南半分に8つの、名前と標高の数字を持つ峰が地形図に書き込まれました。結べば一本の山脈である八ヶ岳の、編笠山から赤岳を経て蓼科山までの間に「横岳」という名の山が2つも出現するという奇妙な結果を生じました（赤岳の北にある横岳が2830m、蓼科山の南にある横岳が2473m）。

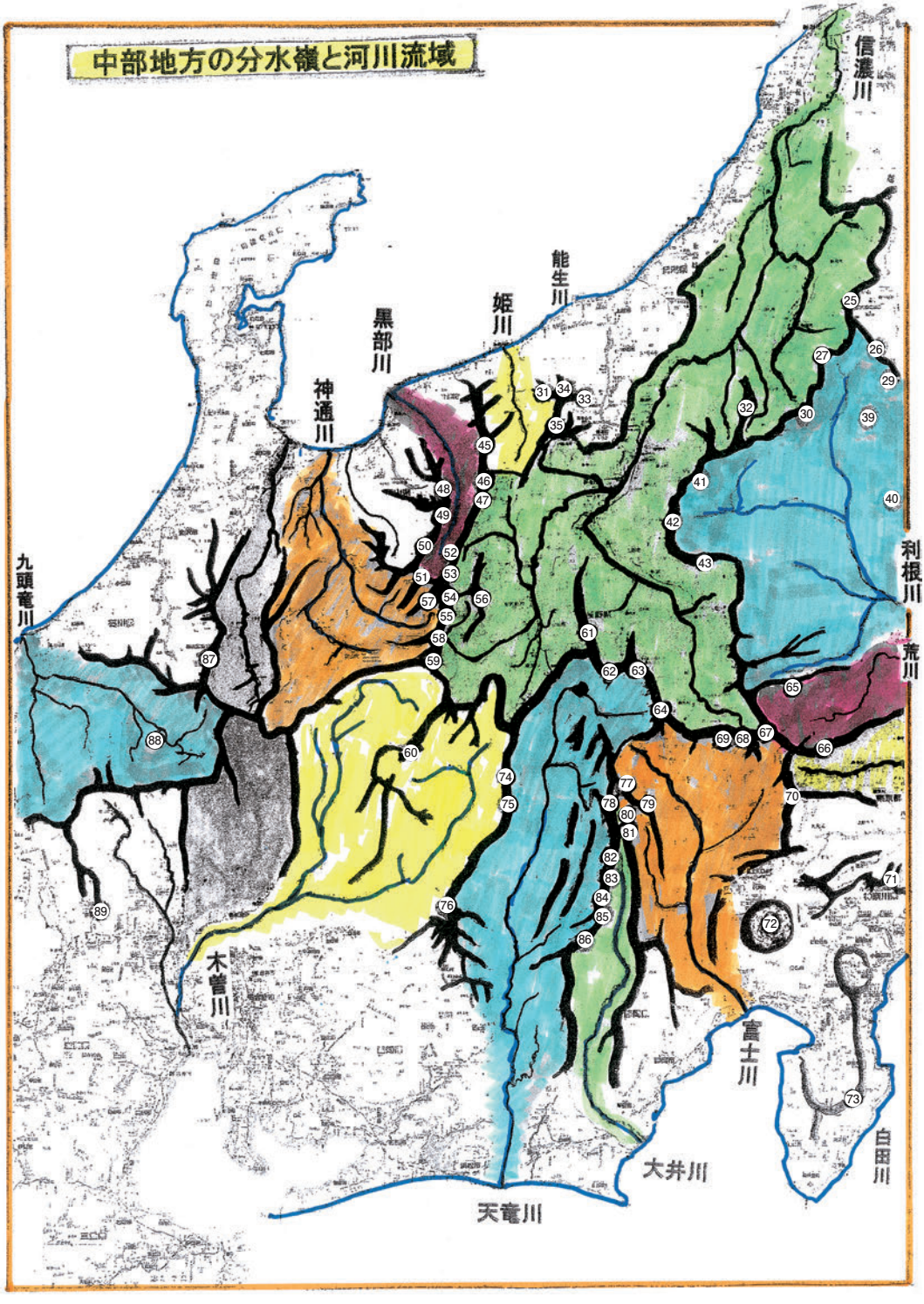
測量の対象となる峰の数が増えるにつれて、地図を作る人たちは横着になるばかりであったようです。その結果、峰に差別が生じました。穂高岳の手前にあるから前穂高岳、北にあるから北穂高岳、そして南穂高岳とした方が辻褄の合いそうなのに、西穂高岳という名を生みました。そもそも「東・西・南・北・中・小・前・後・奥」といった文字を持たされた峰たちは、独立した峰としての資格を認めてもらえないがために、価値を低められています。「中岳」や「間ノ岳」は2つの峰の間に挟まって独立を許されません。奥秩父の最高峰である「北奥千丈岳」（2600m）は「奥千丈岳」（2409m）の付録にすぎないかのような名前に甘んじています。槍ヶ岳の南にある「中岳」と「南岳」も、いかにも付属品にすぎないかのような名前です。日本第2位と第4位の高さである「北岳」と「間ノ岳」も、名前のつけ方に安易さが感じられてなりません。吾妻山には「西吾妻山」と「中吾妻山」と「東吾妻山」が並んでいますが、一番低い中吾妻山がいかにも居心地の悪そうな様子をしているように見えてなりません。これと似ているのが立山と剱岳の西にある大日岳です。大日岳（2490m）・中大日岳（2500m）・奥大日岳（2606m）というぐあいに3つの峰が並びますが、「中」は中心にそそり立つ峰であることを意味しません。槍ヶ岳の南にある中岳は、いかにも便宜的で人情味のない名前です。木曽駒ヶ岳と宝剣岳に挟まれた中岳の場合もこれと似ています。

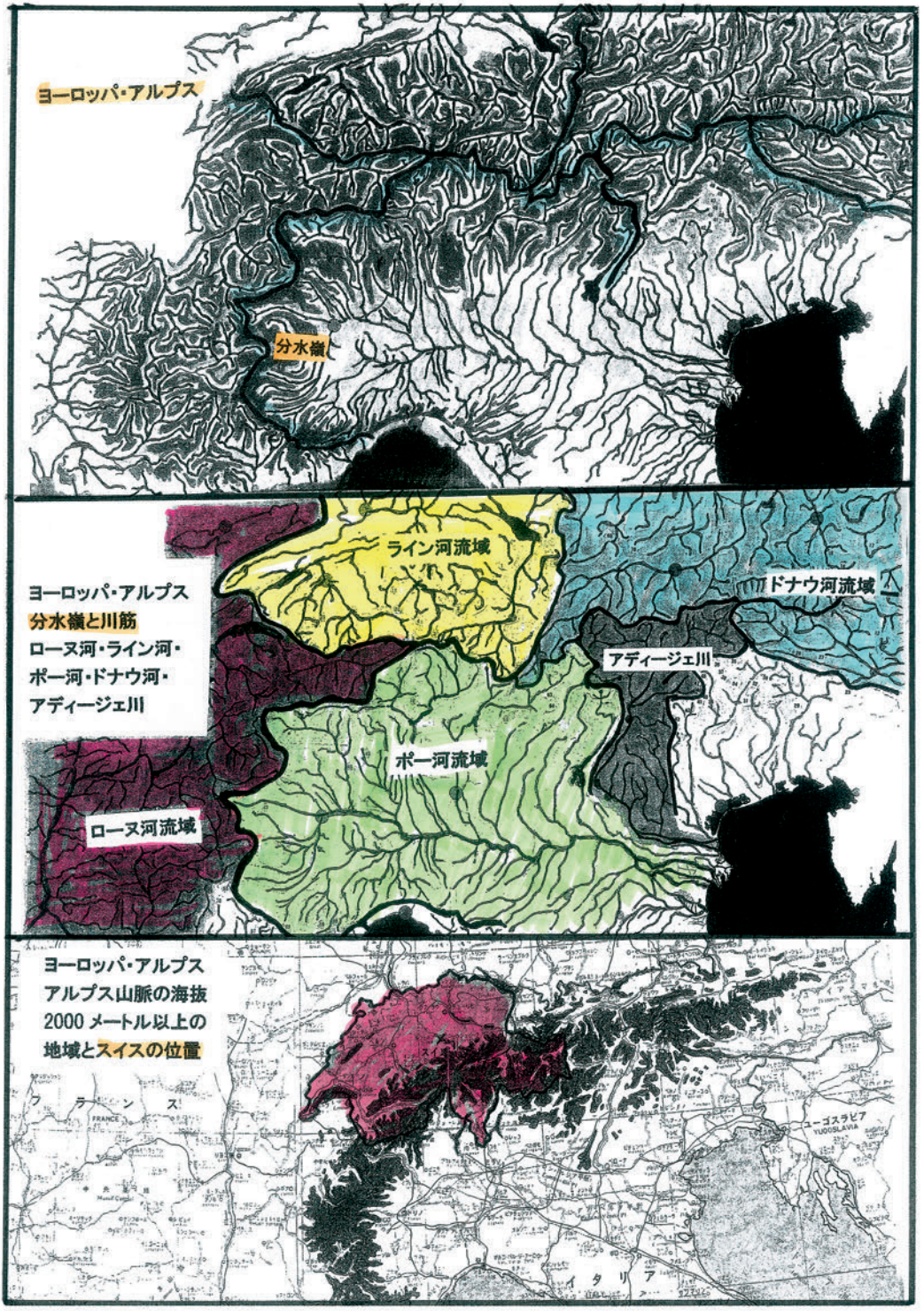
こぼれ話

文字どおりに「上からの目線」によって地図が作られるようになったことの犠牲者の一人が、**深田久弥**でした。

映画『**剱岳　点の記**』は、幾多の困難を乗り越えて剱岳に三


阿武隈川
信濃川
阿賀野川
荒川
利根川
多摩川
相模川
富士川
白田川
大井川
関東地方の分水嶺と河川流域


中部地方の分水嶺と河川流域
信濃川
能生川
姫川
黒部川
神通川
九頭竜川
利根川
荒川
木曽川
富士川
白田川
大井川
天竜川


ヨーロッパ・アルプス
分水嶺
ヨーロッパ・アルプス
分水嶺と川筋
ローヌ河・ライン河・
ポー河・ドナウ河・
アディージェ川
ライン河流域
ドナウ河流域
アディージェ川
ポー河流域
ローヌ河流域
ヨーロッパ・アルプス
アルプス山脈の海抜
2000メートル以上の
地域とスイスの位置
フランス
FRANCE
ユーゴスラビア
YUGOSLAVIA
イタリア

参考：　河川流域・河川長と日本百名山

利根川（**流域面積 16842** ㎢〔日本第１位〕・**幹川流路延長322**㎞〔日本第２位〕）

16842（流域面積）÷13（流域内の百名山数）＝1296 ㎢

16842÷14＝1203 ㎢　（燧岳は山頂も山麓も福島県に属しますが、麓の尾瀬沼から東京電力の導水管が利根川水系に水を供給していることを理由にして分水嶺とする説があります）

信濃川（流域面積 **11900** ㎢〔第３位〕・延長 **367** ㎞〔第１位〕）

11900÷23＝517 ㎢

木曽川（流域面積 **9100** ㎢〔第５位〕・延長 **229** ㎞〔第７位〕）

9100÷3＝3033 ㎢

阿賀野川（流域面積 **7710** ㎢〔第８位〕・延長 **210** ㎞〔第 10 位〕

7710÷9＝857 ㎢

天竜川（流域面積 **5090** ㎢〔第 12 位〕・延長 **213** ㎞〔第９位〕）

5090÷12＝424 ㎢：5090÷11＝463 ㎢（悪沢岳を荒川岳と切り離して扱う場合）

富士川（流域面積 3990 ㎢〔第 15 位〕・延長 128 ㎞〔第 33 位〕）

3990÷11＝363 ㎢

荒川（流域面積 2940 ㎢〔第 19 位〕・延長 173 ㎞〔第 15 位〕）

2940÷2＝1470 ㎢

九頭竜川（流域面積 2930 ㎢〔第 20 位〕・延長 116 ㎞〔第 40 位以下〕

2983÷1＝2983 ㎢

神通川（流域面積 2720 ㎢〔第 22 位〕・延長 120 ㎞〔第 40 位前後〕）

2720÷6＝453 ㎢

大井川（流域面積 1280 ㎢〔第 47 位〕・延長 168 ㎞〔第 30 位前後〕）

1280÷6＝213 ㎢

黒部川（流域面積　？・延長 86 ㎞）：百名山 9

相模川〔山梨県内では桂川〕（流域面積 1804 ㎢・延長 115 ㎞）：百名山 2

姫川（流域面積　？・延長 58 ㎞）：百名山 3

ヨーロッパ・アルプスの場合

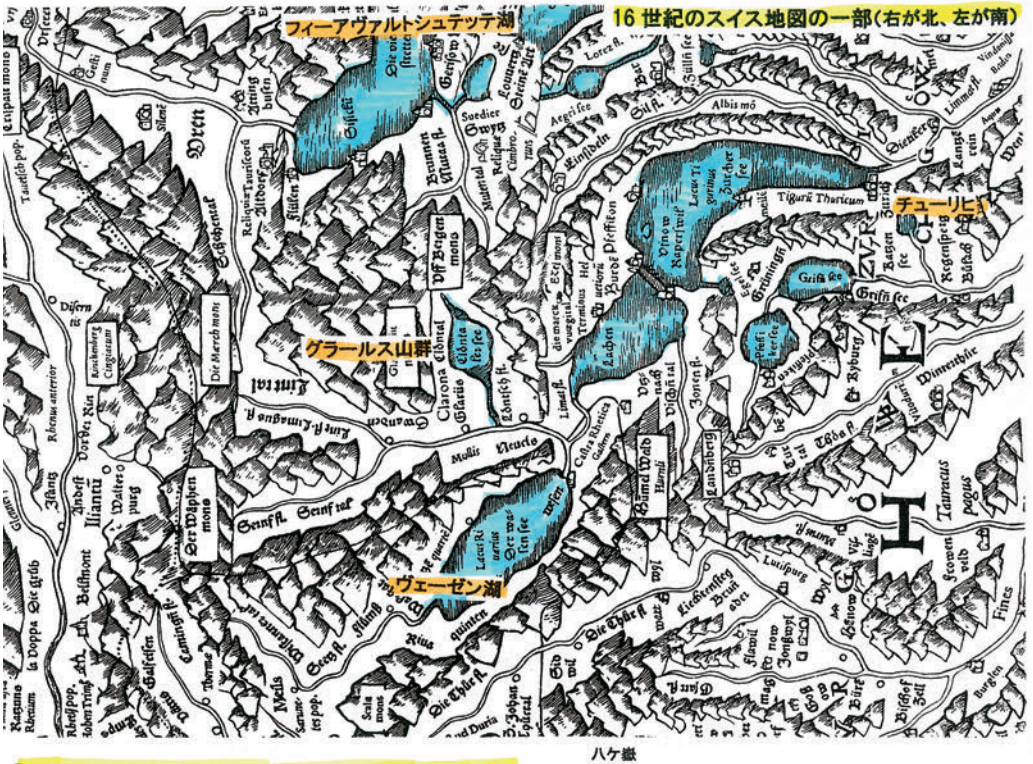
ライン河（ユングフラウ等）流域面積 252000 ㎢・河川長 1320 ㎞

ポー河（モンテローザ等）流域面積 70000 ㎢・河川長 2020 ㎞

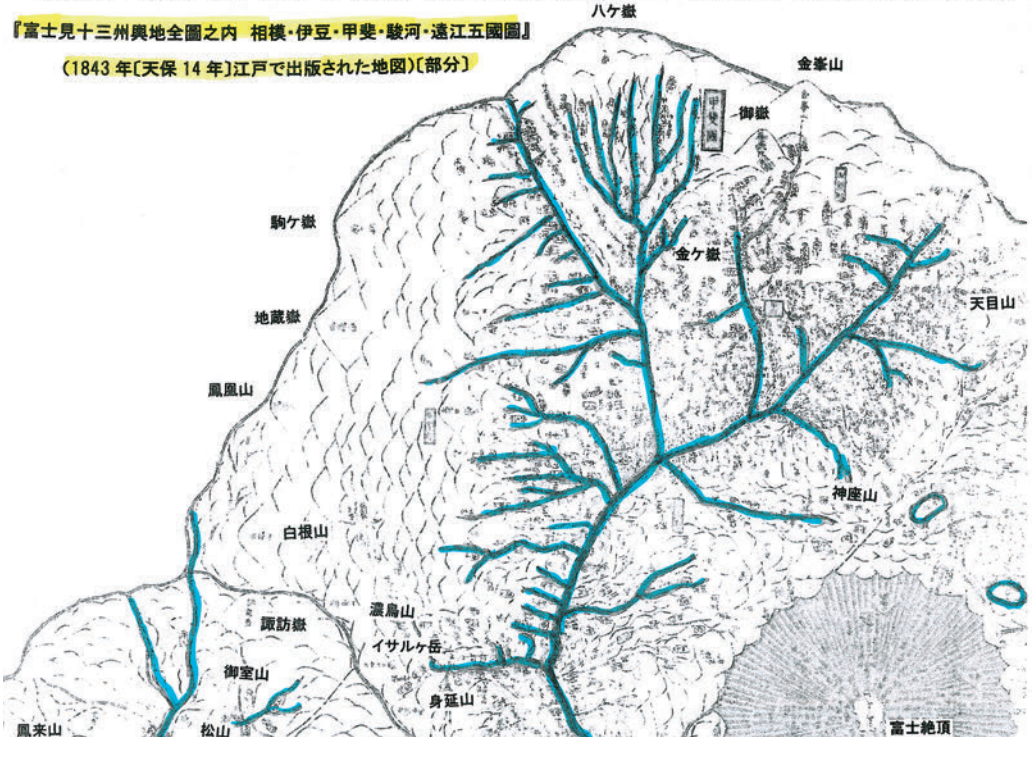
ローヌ河（モン・ブラン、マッターホルン等）流域面積 99000 ㎢・河川長 812 ㎞

ドナウ河（ピツ・ベルニナ等）流域面積 81 万 7000 ㎢・河川長 2850 ㎞

スイス国内（事実上スイスはこの４つの河の上流域を国土としています）：ライン河流域（スイス総面積の 67.7%）・ローヌ河（18%）・ポー河（9.6%）・アディージェ川（0.3%。スイス東南部の谷）

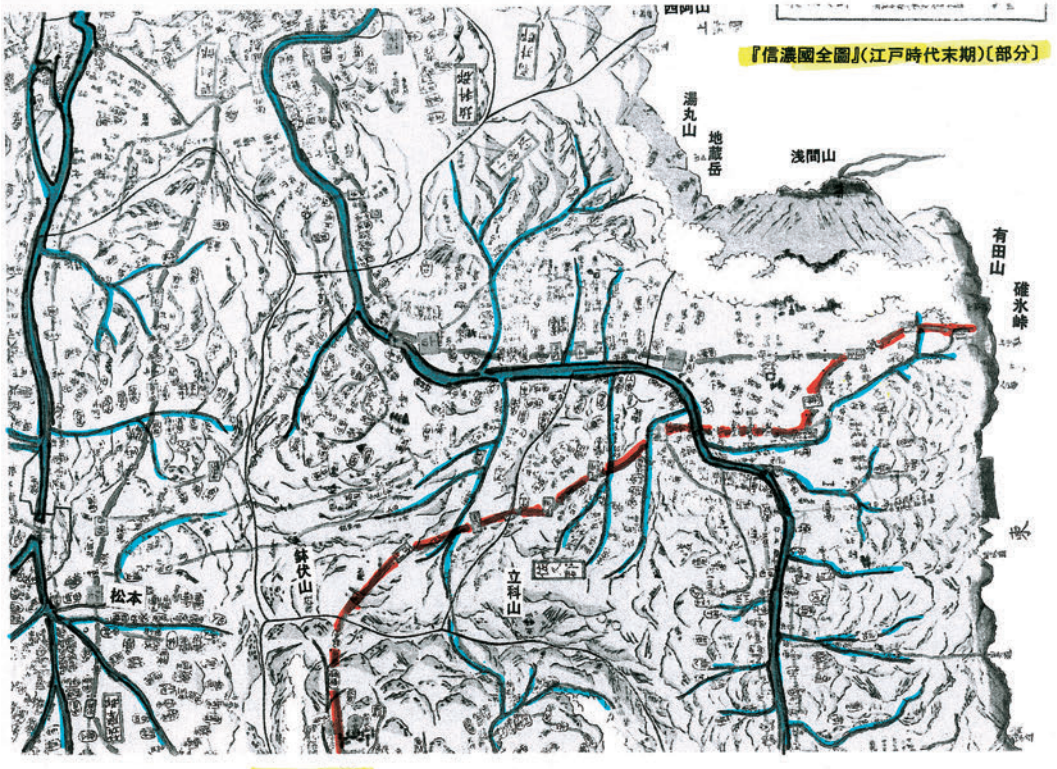


16 世紀のスイス地図の一部（右が北、左が南）

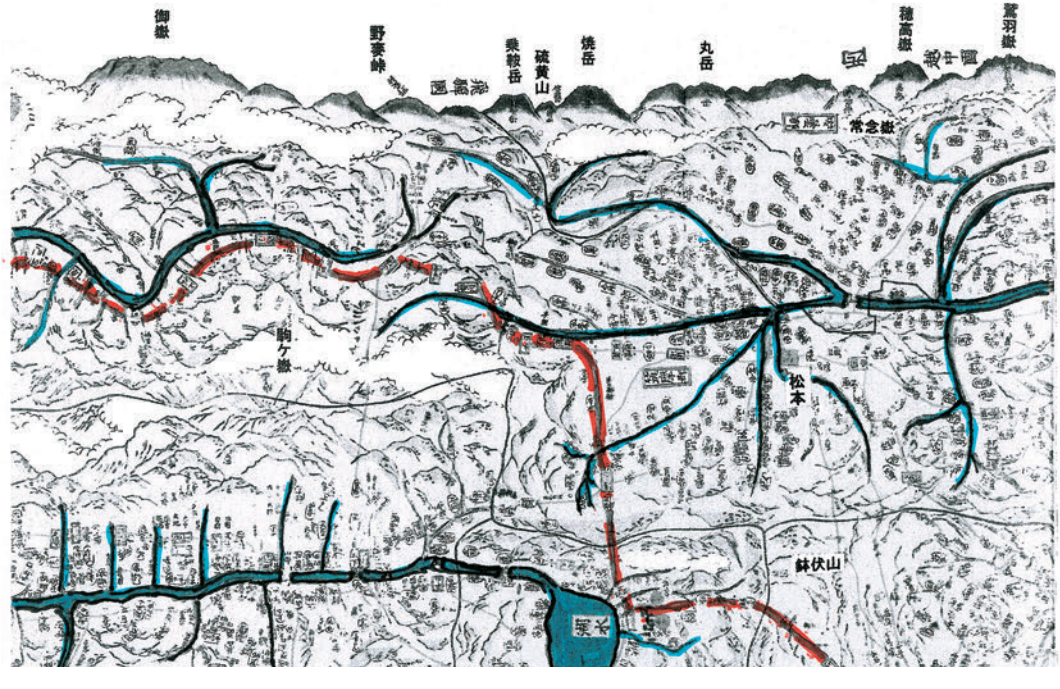


『富士見十三州輿地全圖之内　相模・伊豆・甲斐・駿河・遠江五國圖』

（1843 年〔天保 14 年〕江戸で出版された地図）〔部分〕

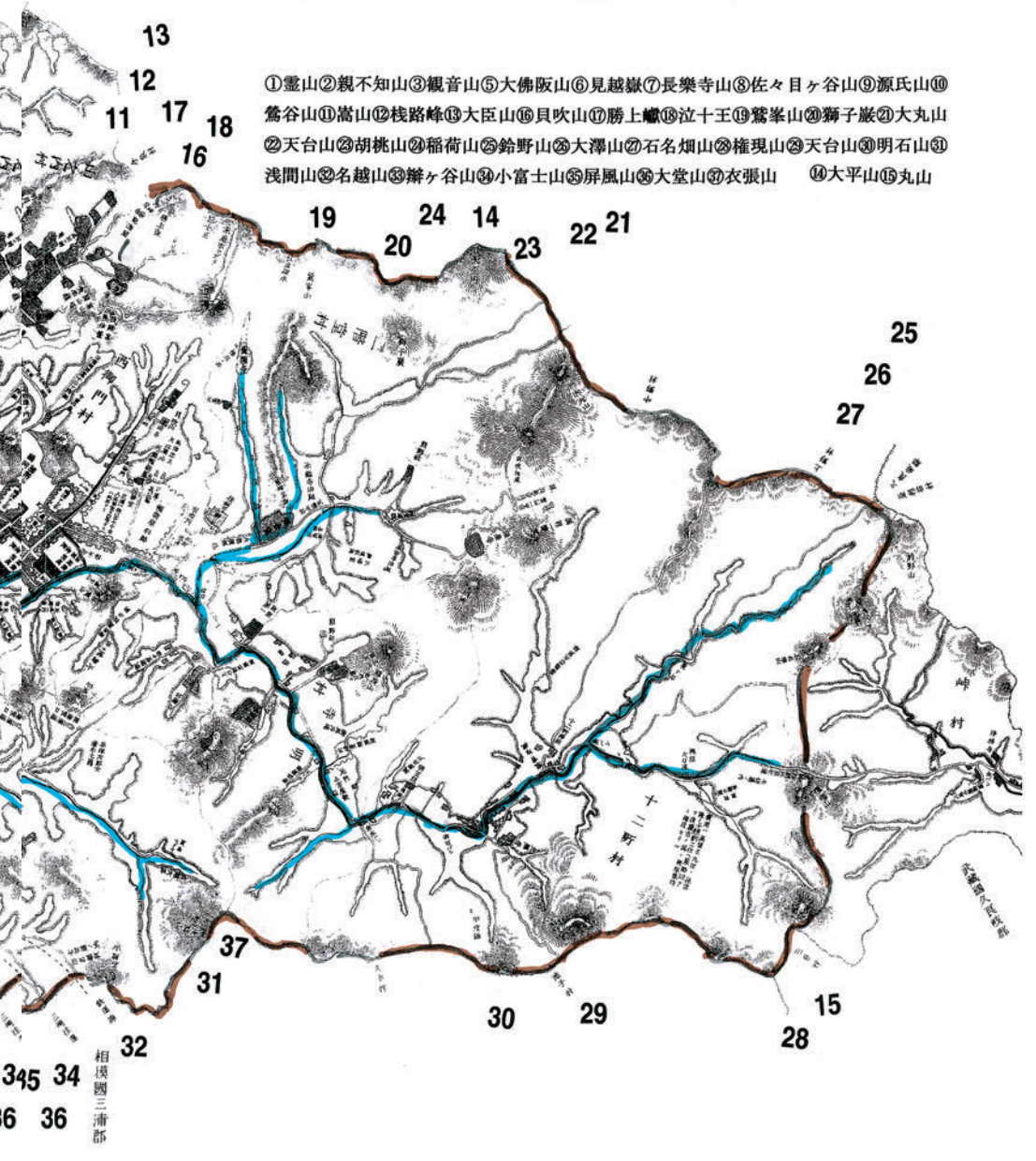


『信濃國全圖』(江戸時代末期)〔部分〕



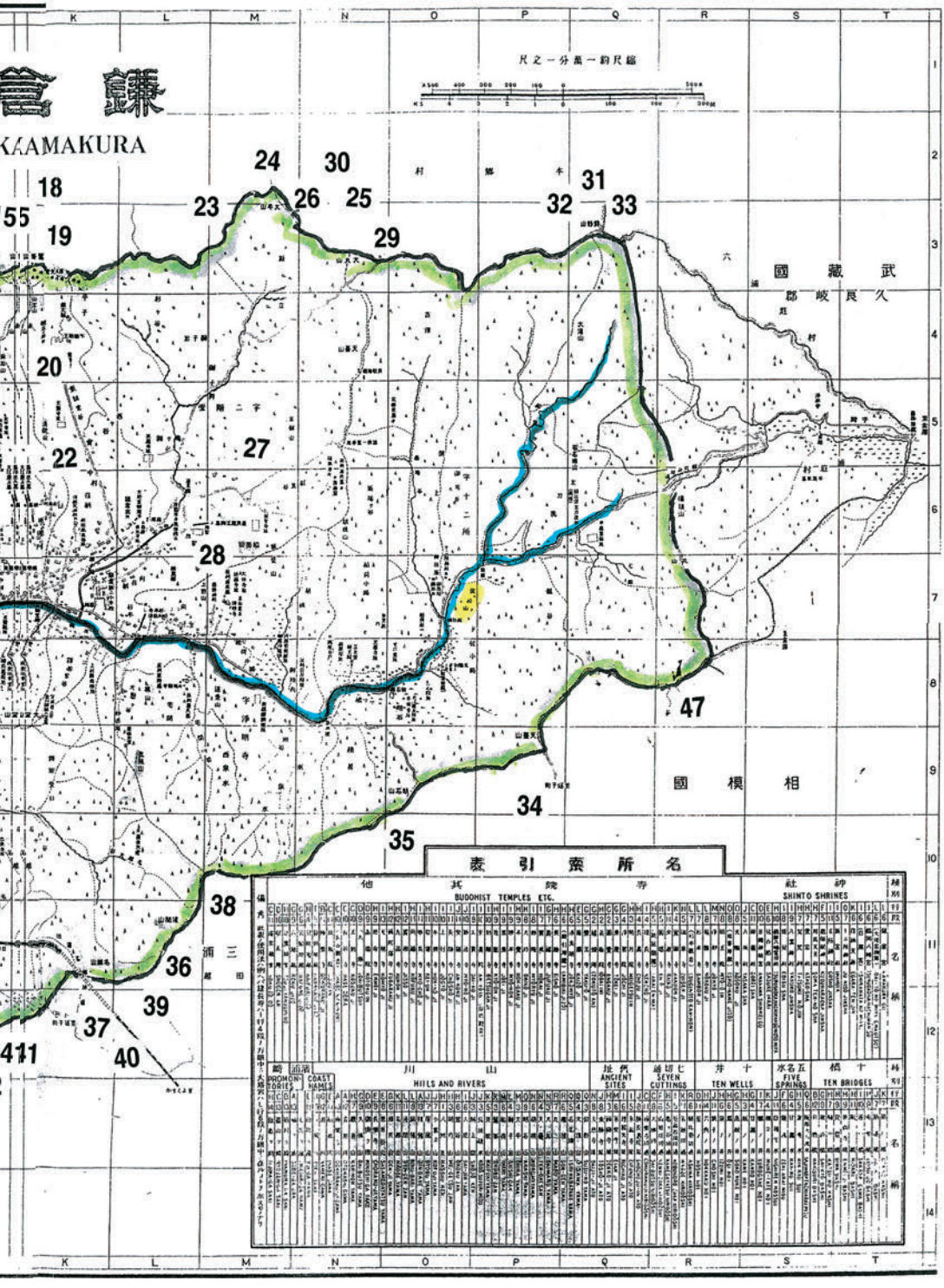
『信濃國全圖』(江戸時代末期)〔部分〕

『鎌倉実測圖』(明治 24 年 1891 年)〔銅版・鎌倉最初の実測図〕





1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
33
35
36

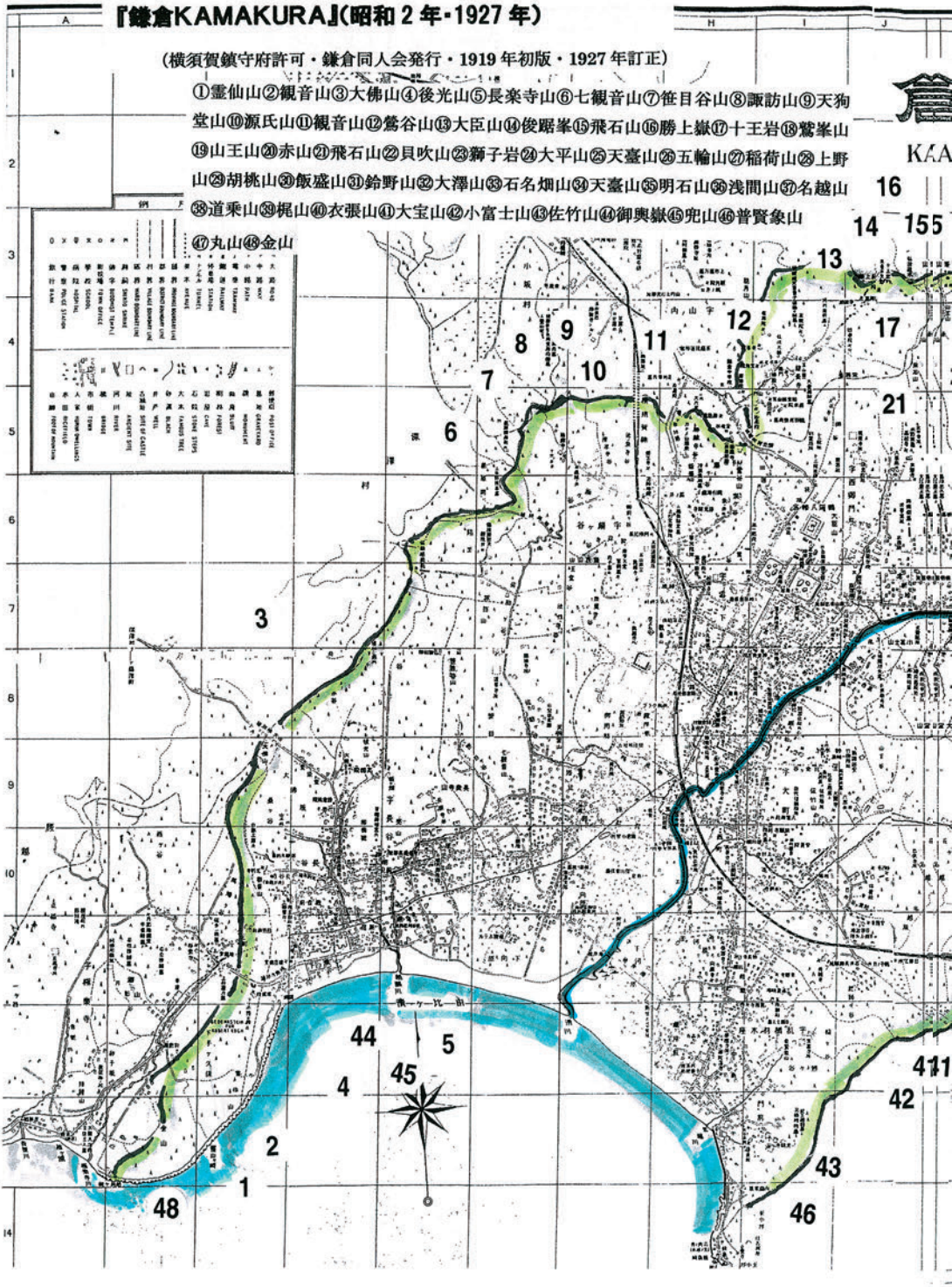


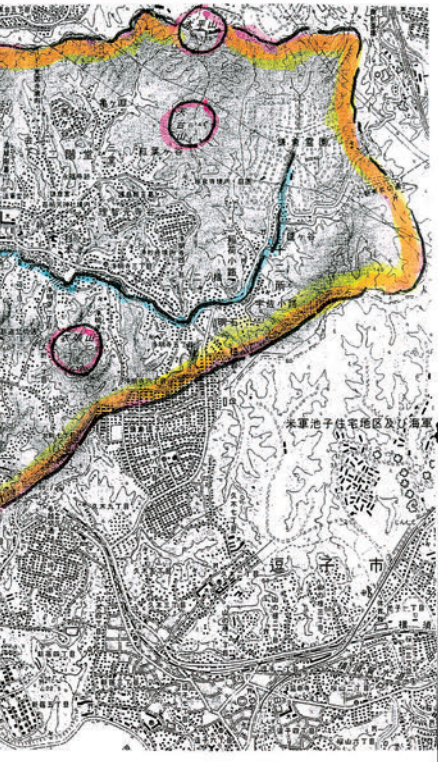
鎌倉
KAMAKURA
縮尺約一萬分之一尺
武藏國
久良岐郡
相模國
名所索引表
BUDDHIST TEMPLES ETC.
SHINTO SHRINES
HILLS AND RIVERS
ANCIENT SITES
SEVEN CUTTINGS
TEN WELLS
FIVE SPRINGS
TEN BRIDGES
COAST HAMLS
PROMONTORIES

『鎌倉KAMAKURA』(昭和２年・1927年)

(横須賀鎮守府許可・鎌倉同人会発行・1919年初版・1927年訂正)

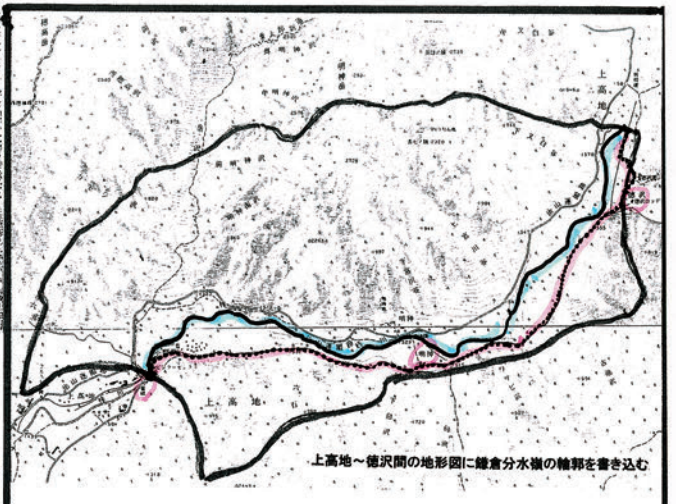
①霊仙山②観音山③大佛山④後光山⑤長楽寺山⑥七観音山⑦笹目谷山⑧諏訪山⑨天狗堂山⑩源氏山⑪観音山⑫鷲谷山⑬大臣山⑭俊聖峯⑮飛石山⑯勝上嶽⑰十王岩⑱鷲峯山⑲山王山⑳赤山㉑飛石山㉒貝吹山㉓獅子岩㉔大平山㉕天臺山㉖五輪山㉗稲荷山㉘上野山㉙胡桃山㉚飯盛山㉛鈴野山㉜大澤山㉝石名畑山㉞天臺山㉟明石山㊱浅間山㊲名越山㊳道乗山㊴梶山㊵衣張山㊶大宝山㊷小富士山㊸佐竹山㊹御輿嶽㊺兜山㊻普賢象山㊼丸山㊽金山



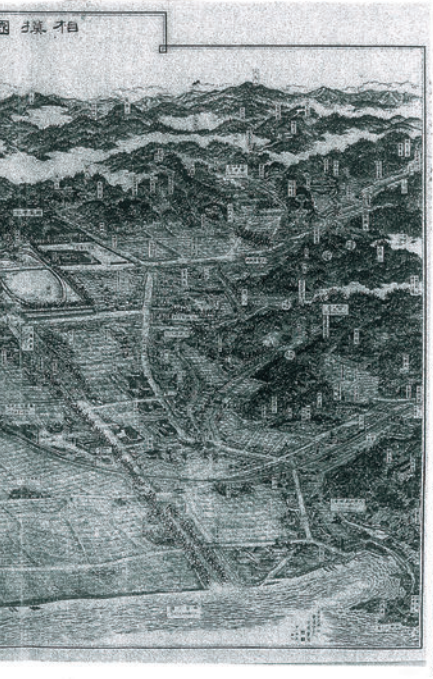


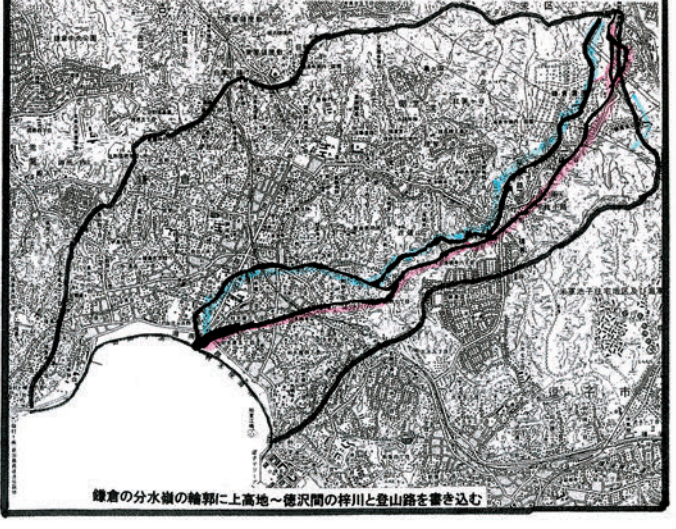
分水嶺の上と内側に数多くもつ川はどこにあるのか





上高地～徳沢間の地形図に鎌倉分水嶺の輪郭を書き込む





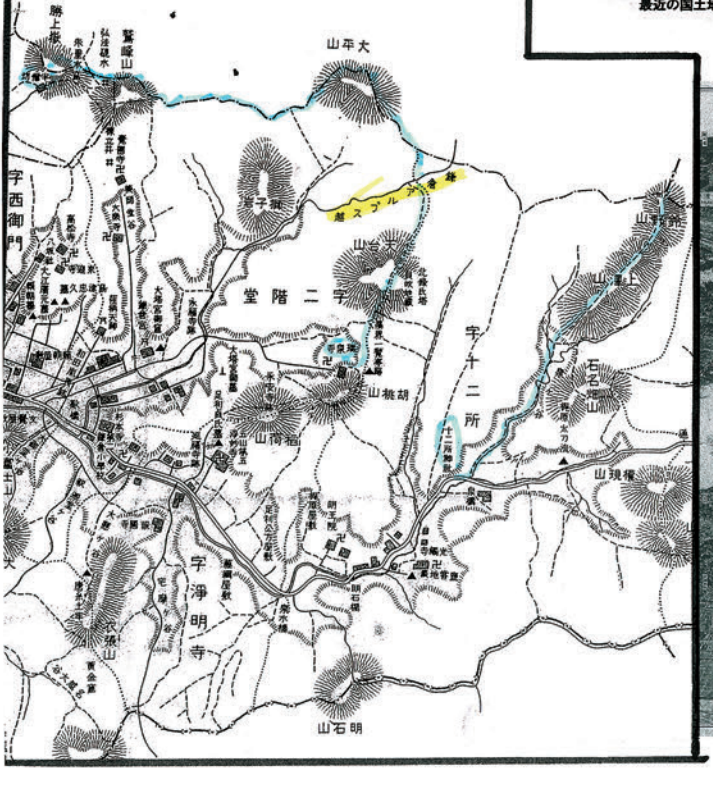
鎌倉の分水嶺の輪郭に上高地～徳沢間の梓川と登山路を書き込む

鎌倉アルプス

最初は建長寺の背後にある半僧坊から大平山を経て瑞泉寺に至るコースと十二所神社から六国峠に至るコースの呼び名でした。関東大震災（1923年）の後に復興した鎌倉町が「海の銀座」として海水浴客を誘うのと同時にハイキングコースの開発に力を入れ、**1937年（昭和12年）**に**「鎌倉ハイキングコース開き」**をおこないました。鎌倉町が公認するよりも前に「鎌倉アルプス」の愛称が使われていたことを証明するのが、鎌倉の史跡と名称を詳しく語る『鎌倉大観』（1902年〔明治35年〕初版）の1928年（昭和3年）の版の付図に見られる**「鎌倉アルプス越え」**の文字です。



最近の国土地理院発行地形図での鎌倉の山と川





角測量の石を埋め、やぐらを立てて測量した人たちの業績を讃える、見応えのある作品でした。それは、「横からの目線」で山々の頂に張り巡らされた三角点を結んで線を引く作業でもありました。こうして日本の山岳の高さが測られた結果が、地形図に記された高度を示す数字でした。

深田久弥は百の名山を選ぶ際に、「千五百米（メートル）以上」という条件を設定した上で、筑波山（８７６ｍ）と開聞岳（９２４ｍ）の２つに特別に参加資格を認めました。

ところが、高さの条件に合わない山がもう1つ生まれてしまいました。**『日本百名山』の「阿寒岳」の章**を見ると、「一五〇三米」と記されています。ところが、宇宙に飛び出した衛星による「上からの目線」による高度測定という最新技術によって、阿寒岳の最高地点である**雌阿寒岳**の標高が１４９９ｍに修正されてしまいました。

それでも、『日本百名山』の文庫本の発行元である新潮社と朝日新聞社は、素知らぬふりをして、「一五〇三メートル」としています。著者の気持ちを尊重してなのか、出版部員の怠慢によるのか、私は知りません。

前半の話はここまでです。ここで休憩時間をいただきます。ひと息ついていただく間に、後半の話のための資料をお配りします。

第二部　消えた山の名

関東地方南部の山名密集地帯

休憩を設けたのは、後半部分の資料であるプリントを隠しておきたかったからです。驚くほど多くの山の名を持つ地図がどこで作られていたか、その場所を秘密にしておきたかったからです。

『鎌倉実測圖』という名の地図は、近代的な手法による地形図として最初の鎌倉地図でした。１８９１（明治24）年、日本の近代登山史の幕開け前に発行された、三角測量による地図です。それ以前の鎌倉の地図は、斜め上から、または斜め下から絵で描く形をとって作られていました。3枚目のプリントの真ん中の下にそれの古い実例の一つである**『相模國鎌倉名所及江之嶋全圖』**を入れておきました。登ってみたくなるほど堂々とした山々が描かれていました。

当時の鎌倉町は現在の鎌倉市の3分の1ほどの広さ、いいえ狭さでした。2度の町村合併で鎌倉市の現在の範囲ができました。それ以前は、横須賀線の鎌倉駅を中心とする、海と山に囲

まれた土地に北鎌倉駅周辺の土地を加えただけの狭い土地でした。

由比ヶ浜に注ぐ滑川（なめりがわ）を中心とする谷間を囲む分水嶺を表わす線を、私がこの実測図に引きました。その分水嶺の上と、それの内側に記された山の名は合計37座。番号をつけてみました。虫眼鏡の助けを借りる必要がありますけれど、番号の下の方、または上の方をご覧になると山の名を見つけることができます。

37でも十分な多さです。現代の私たち、高い山に登ることに慣れた私たちの目には、古都鎌倉を包む風景が山に見えませんが、そこに多くの山があると感じる人たちがいたことをこの地図が証明します。

鎌倉アルプスの出現

1927（昭和2）年に発行された『**鎌倉 KAMAKURA**』は、タイトルにだけ英語の綴りを誇らしげに掲げています。

この地図を元にして作ったのが3枚目のプリント右上の概念図です。これが神奈川県の鎌倉市を流れる滑川の流域にある山たちのありかを示すと思う日本山岳会員は一人もいないでしょう。この図の元になったのは、横須賀鎮守府の認可を受けて発行された公式の地図でした。

太平洋戦争時代の記憶をお持ちの人たちの世代にしかお分かりにならないでしょうが、鎌倉の南にある横須賀は、長崎県の佐世保と並んで日本海軍の最重要拠点でした。東海道線の大船から枝分かれして三浦半島に至る横須賀線は、首都と横須賀の海軍の港を結ぶために造られた路線でした。途中の鎌倉は鎮守府、つまり日本防衛の要の土地を管轄する役所の支配圏内にありました。その鎮守府公認の鎌倉地図に見られる山の名は48座。

現在の鎌倉市の面積は39平方㎞。のちに加わった2つの地域を除き、その上、古い鎌倉から北部の谷（北鎌倉駅から建長寺を経て鎌倉八幡宮方向に登る坂の最高地点まで）と西部の谷（極楽寺の周辺の谷）を切り落とせば、せいぜい3分の1強ほどの狭さでしかありません。およそ15平方㎞ほどにしかならない分水嶺の内側です。そこに48の「山」と「峰」が密集していたのです。

「公に出版されて不特定多数の人の目に触れた印刷物」という条件をつけた場合に、これほどの密度で山の名が刷られた例を私はほかに知りません。

1902（明治35）年に佐藤善五郎という人の書いた『**鎌倉大観**』という、鎌倉の地理と歴史と観光名所を詳しく語る鎌倉案内書に添えられた地図でも、同じ地域に17の山の名が書き込まれていました。日本山岳会誕生の3年前の出版でした。

この『鎌倉大観』はその後も版を重ねられました。**1930**

（昭和5）年発行の『鎌倉大観』の付録である地図では、山の数が25に増えていました。そして、その地図に**「鎌倉アルプス越」**の文字を見ることができます。鎌倉アルプスを横断して鎌倉市の中心地から横浜方面に向かう道筋をそう呼んだのでした。

この「鎌倉アルプス越」のルートについて、大佛次郎編『鎌倉歴史散歩』（１９５７年刊、河出新書）の中に、次のような面白い記述があります（筆者は阿倍正道）。「関所跡の史跡指導標の前を左に入る小路は、旧道で、鎌倉宮の東側に出、永福寺址を通り天園に達し、『峰の炙』で有名な円海山護念寺に延びている。近年ハイキングコースとしてにぎわうが、『江戸時代から炙をすえに行く鎌倉近在の人々により開かれた道である』と古老は語る。」（同書１０８～９頁）　円海山は横浜市に属する海抜１５３ｍの山。鎌倉から近いその山中の寺が炙で有名でした。

この「鎌倉アルプス越」という言い方は、その2年前、『鎌倉大観』の、１９２８（昭和3）年発行の改訂版の98頁にすでに出現していました。

「（建長寺の坐禅窟から）二三町にして頂上に登れば半僧坊奥の院があり、更に北方の眺望が開けて來る。これから峰を傳つて横濱方面に出られる。吾人は之を鎌倉アルプスの縦走といふ」

17～25～37～48と、年を経るごとに、鎌倉地図の、滑川の分水嶺とその内部の山の数が増えていったことに驚かされます。鎌倉案内書の筆者や地図の作成者が好き勝手に増やしたわけでなく、歴史と地理の関係を語るうちに情報量が増えたためです。これほどの山々を分水嶺と支脈に持つ地域がほかにあるでしょうか？　その上、「鎌倉アルプス」の意外に早い出現！

今でこそ「長瀞アルプス・多摩アルプス・武蔵アルプス・三浦アルプス」などの呼び名が、ハイキングのためのガイドブックに見かけられますが、それらのどれにも先んじて「鎌倉アルプス」が鎌倉の分水嶺の中心部の呼び名となっていました。私は１９５０年代後半の学生時代に、しばしば鎌倉の裏山を歩きました。「鎌倉アルプス」の名がついていました。それを私は登山ブーム時代にあやかった鎌倉市役所の思いつきにすぎないと思っていました。しかし、それは私の大きな誤解でした。

「鎌倉アルプス」の名を誰が思いついたのか、まだ謎のままです。少なくとも、日本全国に見られる「アルプス」の内で最も古いものの内に属することは、疑いようがありません。

私は今、みなさんに鎌倉アルプスに行け、と言う気はありません。かつて鎌倉アルプス最高の休息地点として賑わった場所の北側に住宅地が造成され、次にゴルフ場が造られたかと思ったら、その東側に横浜市の墓地ができました。鎌倉市の奥、滑川の水源地帯にはさらに大規模な墓地が造成されました。鎌倉アルプスは尾根筋を残すばかりです。

それでも鎌倉の分水嶺である山々は辛うじて残ってくれています。ただし、南側の逗子市との境に巨大な団地が造られた結果、古い鎌倉地図に名前を載せていた山が2つ、完全に消えました。

深田久弥と鎌倉アルプス

1932（昭和7）年9月、**深田久弥**が鎌倉に引っ越したのは、カリエスを病んでいた妻（北畠八穂）の健康を気遣ったためでした。文藝春秋の社員が見つけてくれた二階家に引っ越してきました。その家は鎌倉宮に近い所にあったのですが、1934（昭和9）年、家の脇に鎌倉青年団によって「鎌倉アルプス登山口」という標柱が建てられたのに驚きました。

「鎌倉アルプスなんて名は大げさだけれど、散歩には気持ちのいい丘陵地であった。天園という山は僕の家からも近いので屡々出かけて行ったが、左手に東京湾をへだてて房総半島を、右手には相模湾の向うに伊豆半島を、手にとるようにはっきりと望めた」（『初秋の鎌倉』1934年）

その後整備されていくうちに、半僧坊から瑞泉寺に至るコース、源氏山から浄智寺に至るコース、十二所神社から六国見に至るコースの3つが組み合わされて「鎌倉アルプス」の整備が進み、1937（昭和12）年、朝日新聞社主催の「新神奈川観光線ルート」に「鎌倉北部分水嶺コース」が入選しました。

同じ年の7月下旬、鎌倉ペンクラブが「鎌倉アルプス試歩会」を企画しました。でも、鎌倉駅前の集合場所に、歩く気で集まった鎌倉文士は、永井龍男と川端康成と大島得郎の3人だけで、大佛次郎が見送りに来ただけだったそうです。馬車で建長寺まで行って、半僧坊から天園に行き、そこから横浜市の杉田に出て馬車で南京町（現在の中華街）に向かったとのことです（清田昌弘『かまくら今昔抄60話　第二集』冬花社、2009年97頁以下）。

深田久弥は、1936（昭和11）年2月初め、鎌倉に30㎝を超える積雪があったとき、スキーを担いで天園に登って、建長寺までツアーを試みました（小池時一『聞き書き・茶房りんどうの想い出』1983年）。鎌倉アルプスでのスキー滑走は、深田久弥にとって最も低い標高におけるスキー・ツアー記録でした。

誰が山を必要としたか

鎌倉の多くの山の中に「天台山」がありました。京都の比叡山の別名である「天台山」が鎌倉の山につけられたのは、京都にあやかろうとしたせいだ、と地元の歴史を研究する人たちが言います。鎌倉幕府の中心地から見て東北の方角にあり、京都における比叡山の位置に符合します。でも、それは歴史好きの人たちの過剰な解釈であって、「天台」とは「山頂が（台のよう

に）平たい山」のことであって、鎌倉の地図の一つに、南側の分水嶺の一つに同じ名がつけられていたことがそれを証明します。

低い場所に「小富士山」がありました。日本の風景の縮図として、シルエットが富士山に似て見えなくもない低い山がそう呼ばれました。「屏風山」は屏風を立てたように見えるところからついた名でした。「衣張山」は、源頼朝が暑い夏の日にこの山に白い衣を張って、雪景色に見立てて涼しい気分になったと言い伝えられますが、真偽のほどは不明です。いちいち説明していたらきりがありません。

貴族的な雰囲気を漂わせた京都から政権を奪って、鎌倉に幕府を開いた源頼朝をはじめとする東国の武士たちが、分水嶺を城郭代りにして、狭いながらも首都を築きました。その狭さの感覚から精神的な解放感を得るための一つの方法として、城のような分水嶺の、ちょっとした出っ張りの一つ一つに名前をつけたと推理することができます。その一方で、人里に近い場所の一つ一つについた山の名は、居住地と田畑を縫って造られた道を歩く人たちにとっての目印、つまり住人たちにとってのランドマークとしてであったと思われます。尾根筋のいちばん人里に近い所にある、丘のような場所に山の名がつけられていたところにご注目ください。

狭い空間に生活する人たちにとって、多くの山を持つことは、狭さから精神的に解放されるための心理的な手段であったとも思われます。この点は、なぜ人は山に名前をつけたのか、という一般的な問題として検討してみる価値がありそうです。

とにかく、高い山たちが数多く並ぶ場所にではなくて、意外や意外、東京と横浜から近い観光名所の土地に、山岳密集地域が存在したという事実を、印刷されて売り買いされた出版物を証拠としてご報告して、私と一緒に驚いてください。

鎌倉の狭い土地に閉じ込められた状態で暮らす人々が、自分たちの世界を広いもの、高いものとして感じようとしたことの反映であったでしょうし、高い人工物の城壁を築く手間を省いて、周囲の山々を防御の柵とした鎌倉幕府の武家貴族の風流心の表われでもあったのでしょうが、理由はどうであろうと、鎌倉は山の多さを、地図という文献資料において示してくれました。

上高地に行って鎌倉の大きさを実感する

同じ縮尺の、国土地理院発行の地形図を使って、鎌倉の核心部の広さ（＝狭さ）を測ってみます。プリントの右側に上下に並ぶ奇妙な地図をご覧ください。

滑川が太平洋（相模湾）に注ぐ河口地点を河童橋に合わせます。滑川の川筋を梓川および横尾に至る登山道に近づけます。登山道といっても、横尾までは都会人たちが散歩気分で歩ける、

平坦な道です。河童橋から徳沢まで、ゆっくりめに歩いても2時間半ほどです。徳沢の先、新村橋の吊橋に至るより前に、古都鎌倉を縦断したに等しい距離を歩いたことになります。

上高地と鎌倉の地図を重ね合わせてみれば、あれほど多くの山の名を持った鎌倉の範囲内に、穂高岳と明神岳に属する峰のたった1つも入りません。上高地から徳沢に至る道筋を見下ろす前穂高岳は、159mの高さでしかない、鎌倉アルプスの最高峰である大平山を「山」と呼ばせる気にならないでしょう。

でも、前穂高岳も、その南にそびえる明神岳も、新しい時代に上から目線の地形図が作られる過程で生まれたり、公認されたりするようになった新しい山たちであって、鎌倉の山たちより若いのです。

地形図を作る官公立機関が（今では国土地理院が）、日本全土の地図を統一基準で整備する過程において数多くの山の名前を生み出した一方で、一定の基準に従って山の名前を取捨選択した結果、かつて鎌倉地図に見られた数多くの山たちの名が消されてしまいました。**最新の国土地理院の地形図**を見れば、△点のついた天台山（141・3m）のほかに大平山（159m）、衣張山（120m）、源氏山（93m）の3つが残るのみです。これら4つ以外の鎌倉を包む分水嶺上の山々、そしてその内部の山々は、すべて消え失せてしまいました。自然に消えたのではなく、地図を作成する側が設けた全国的な基準によって淘汰されたと思われます。これと同じことがほかの土地でも起こっていたに違いありません。下からの目線による山々が、上からの目線による地形図によって駆逐された結果、人々は生活の次元から見る山々とのつながりを絶たれたのです。地形図によって全国規模で「里山（さとやま）」が消された、と言い換えることができます。

人と自然の風景との関係を雄弁に語ってくれていた江戸時代の地図から、無機的で官僚的な基準による地形図が整備される過程において、多くのものを得られた反面で何かが失われた、と私は思います。そうとも知らずに日本山岳会の会員たちが、年次晩餐会の翌日の懇親山行と称して、山の歴史への思いを全く持たずに無邪気に「鎌倉アルプス」を歩いたのは、ごく最近のできごとです。この懇親山行を企画運営した集会委員の人に尋ねてみたら、「近くて行きやすいから」という以外の動機はなくて、鎌倉の山の歴史への関心は全くないとのことでした。その程度の日本山岳会の会員であることに、私は恥ずかしさをさえ感じました。その私の気持ちを、緑爽会の会員である方々に理解していただけるでしょうか？

再び「鎌倉アルプス」について

もう一度「鎌倉アルプス」にこだわってみます。

私の目に触れた限りでは、佐藤善次郎著『**鎌倉大観**』（横浜・弘集館発行、1902〔明治35〕年初刊）の、1928（昭和

3）年の改訂版の98頁、勝上巓（しょうじょうけん）の項目での、次の言及が最も古いものです。

「（建長寺の坐禅窟から）二三町にして頂上に登れば半僧坊奥の院があり、更に北方の眺望が開けて来る。これから峰を傳つて横濱方面に出られる。吾人は之を**鎌倉アルプスの縦走**といふ」

横浜市に属する金沢八景または金沢文庫と半僧坊を結ぶ稜線は、かつてハイキング・コースとして賑わっていたものの、前に言いましたように、住宅地とゴルフコースと大規模な墓地が鎌倉アルプスを挟むように造成されて、かつての縦走の楽しみを味わえません。現在の鎌倉アルプスは大平山で南に折れ曲がり、瑞泉寺の裏に出る、「縦走」と呼ぶにはかなり寂しい規模のコースとなってしまっています。

とにかく、「鎌倉アルプス」は意外な古さを持っています。

この鎌倉のアルプス縦走路にあった山々を含めて、多くの山の名が国土地理院の地形図から消されました。今日の地形図に山として認知されている4つの位置関係に注意してみましょう。鎌倉アルプスの最高地点である大平山、なぜ選ばれたか理由が不明ですが市街地に近い衣張山、鎌倉幕府の歴史を思わせる源氏山。これらは一応均等の距離を持って三角形を描きます。残る1つの天台山は大平山のすぐ南にあります。この山が特別な意味を持つのは三角点が置かれているからです。地図を作る側の勝手な都合ということができないでしょうか？

今、私はみなさんに「だから鎌倉アルプスに登りに行きましょう」と呼びかけるつもりはありません。せっかく行ってみようとお思いの方がおいでであるのなら、地図から消えた山たちをしのぶために、そして、かつて鎌倉に住んだ人たちが何を山と呼んだのかを理解することを目的となさってください。人と山の関係について深く考える機会になり得るからです。

東京でも同じことが起こっていた――――――――

私は東京都港区元麻布で生まれました。いいえ、私の生まれたとき、その場所は東京市麻布区でした。六本木、一の橋、広尾などに取り巻かれる麻布の高台は「麻布山（あざぶさん）」と呼ばれていました。

JR中央線の東京駅と吉祥寺駅の間にある駅の名前を並べてみます。神田・御茶ノ水・水道橋・飯田橋・市ヶ谷・四谷・信濃町・千駄ヶ谷・代々木・新宿・大久保・東中野・中野・高円寺・阿佐ヶ谷・荻窪・西荻窪。それらの駅の最後の文字を並べてみます。**田・水・橋・橋・谷・谷・町・木・宿・久保（＝窪）・野・野・寺・窪・窪**。谷間の川沿いに鉄道が敷かれたこと、その両側が、低かろうとも台地状の丘と山であることを思わせます。

住宅地と交通路が谷間から小高い所へと広がるうちに、都市

の住人たちは山を失いました。それにつれて山と丘の名が東京から急速に消えていきました。辛うじて残っているものの一つが青山です。「青」は『万葉集』の昔から「緑」を意味しましたから、青山とは「緑の山」でした。青山学院から青山一丁目辺りまで、明治時代まで豊かな緑の土地であったと言われます。

現代に残る駅名や地名を手懸りにして、今は見なくなってしまった東京の自然の地形を思い起こしていただきたいと思います。

その上で、私たちの活動エリアである山岳地帯に目を向ければ、地図作成のために多くの山の名が生まれた一方で、人里に近い山たちの名が駆逐されてきたことについてお考えください。

私が、日本地図から、利害関係者の力関係が生んだ都道府県とその境目を取り払って、河川流域と分水嶺だけの地図を描いてみる気になったのも、鎌倉の山たちの運命に関心を抱いたのも、同じ気持ちから出たことでした。国家的な規模による地形図が多くの新しい山と峰を生む一方で、人里に近い数多くの山の名を駆逐してきたのではないか、という疑問を私はぬぐうことができません。官僚的な情報操作の胡散臭さを私に感じ取らせます。そして、鎌倉の山々も例外ではありえずに、地図から名を消されました。

1894（明治27）年から95（明治28）年にかけての時期に、それまで日本でいちばん人口の多かった新潟県を第2位に落としたのが東京市でした。稲作主体の農業国家だった日本が、工業中心の都市型国家に変わりつつあることを象徴します。ちょうどその頃に**志賀重昂**の『**日本風景論**』が出版され、**小島烏水**がその本から大きな影響を受けて槍ヶ岳に登りました。それが日本山岳会の結成の端緒になりました。偶然の一致にすぎなかったのでしょうか？

工業化による交通手段の革新と都市生活者の経済的な余裕が、旅行と登山を容易なものとし、ますます多くの人が遠くて高い山々に気をとられるうちに、生活空間の中の、身近で低い山々を慈しむ感情を持ちにくくなったのではないでしょうか？

地形図に登録された山と峰のすべてが登りつくされて、「いくつ登ったか」という数勘定ばかりが目立つ昨今、自分たちの身近な生活空間において山を感じ、その自然を味わうことのできる人たちが、自然を自分たちの力で守ろう、再生しようという気概を抱くようになったことに私は救いを感じます。緑爽会もそのような機運のなかに誕生しました。

しかし、人間が自然を守るのが先か、自然から人間を守るのが先か、という厄介な問題を私たちはつきつけられています。

3月11日の皮肉

2011年**3月11日**に起こった東日本大震災は、『日本百名

山』の著者にとっても、不幸な日でした。なぜなら、百名山の踏破に生き甲斐を感じる人たちが尊敬してやまない**深田久弥の誕生日**にもあたる日でした。これから先、深田久弥誕生日祝いと称し賑やかに祝杯をあげる催しを自粛しなくてはなりません。

その深田久弥がほかでもない鎌倉の住人でもありましたが、東日本大震災を経験したり、その後の成り行きを体験したりしたら、どのような反応を示したでしょうか？

2011年12月8日の朝日新聞の神奈川県版に載った記事を、深田久弥が目にしたとしたら、どう思ったでしょうか？

神奈川県が、東日本大震災級の大地震や津波に襲われた場合を想定して対策を練り始めたと伝える記事は、14・4ｍ級の津波が鎌倉を襲った場合、三方を山に囲まれた鎌倉市の中心部が壊滅的な打撃を受ける、と伝えました。江戸時代、慶長年間に起こった大津波が14・4ｍの高さだったことにちなむ数字です。古都の景観を守るために15ｍ以上の高さの建築物を造らせないできた鎌倉市の市民たちは、山が身近にあって逃げ場を提供してくれることを深く感謝することでしょう。

山が先か、海が先か？　どちらを優先して考えるべきなのか？　山の自然の美しさを愛でるという審美的な感覚だけで、自然保護を考えるわけにいかないという問題がつきつけられています。自然から人間を守るという、逆方向の考え方を加える必要があります。

深田久弥は、百名山の選抜にあたって、山の姿かたちという、「下から目線」を大事にした人でしたから、私たちの議論に加わってくれたことでしょう。

「里山」を見直すことの意義

私の話はここで終わってもよいのですが、大震災と大津波に怯えるところで締めくくるのであっては、悲しすぎます。

自然の災害に怯えて暮らすよりは、ときたまに暴力をふるう自然を受け入れながら、できる限り自然と仲良くして暮らすのが賢明な生き方です。緑爽会の人たちは、そういうことをよくわきまえる人たちの集団です。自然と人間の間のバランスがよくとれた生き方を考えつつ実践する緑爽会に、一冊の本を推薦しておきます。

『里山創生』という題の本は、私が2度目の入院生活から自宅に戻った直後、松本君から「来年2月の緑爽会の話を頼む」と電話のかかってきた日の前日に発売されました。「神奈川・横浜の挑戦」という副題を持つその本は、大都市圏の生態系の好ましくない変化を食い止めるために、里山の復活と創生に取り組む人たちの努力について報告することを内容としています。丹沢のシカによるブナ植生の破滅的な状況、相模川流域での外来種生物の進出などの現状と、それを食い止めるための対策と

努力における多くの人々の協力が報告されるなかで、鎌倉の土地利用と緑地保全についても語られています（砂土原聡他編、創森社刊）。身近な山である「里山」を主要なテーマとするこの本は、高尾山などで森林復活の実践を行なってきた緑爽会の行動と重なる部分をたくさん含んでいます。

自然災害に怯える受身の状態であるよりも、身近な山々で自然を慈しむ能動的な実践に多年の登山経験を生かすこと。それこそが山岳会らしい、希望に満ちた行動です。日本山岳会の今後のご活動に期待する言葉によって、私は今日の話を締めくくります。

これで終わりとします。長時間、耳を傾けてくださってありがとうございます。一部分だけでしたが、遺言を語ることができて、私はうれしく思っています。

［付記］　本稿は２０１２年2月16日、日本山岳会緑爽会における宮下啓三会員の講演を再録したものです。しかしながら、この原稿をお送りいただいた4日後の5月6日、同会員はご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

『山岳』編集委員会

執念の東チベット・易貢蔵布2011――空白の12日

中村　保

国際山岳連盟（UIAA）カトマンズ総会

東チベット踏査に先立って、国際山岳連盟UIAAの招聘により今年（2011年）の10月7日、カトマンズで講演をした。日本からはUIAAのメンバーである日本山岳協会から前会長の田中文男さん、現会長の神崎忠男さん、常務理事の小野寺斉さんが総会に参加し、最終日に開催されたアジア山岳連盟UAAの総会には、日本勤労者山岳連盟から理事長の斉藤義孝さんが参加された。

UIAA年次総会は毎年違った国で開催されているが、今年は「ネパール2011山岳年」に因んでカトマンズで開催の運びとなった。海外からは100人強が参加、ネパール登山協会がホスト役として受入れに協力し、前会長のアン・ツェリン・シェルパさんが設営と進行に尽力された。10月5日から9日までSoaltee Crowne Plaza Grand Hotel（5つ星）で開催された2011総会のスケジュール概要は、左記のとおりであった。来年は韓国・済州島での開催を予定している。

10月5日：役員会、10月6日：マネージメント委員会、10月7日：シンポジウム ①遠征 ② アイス・クライミング ③ 気象変動 ④中村の講演、10月8日：UIAA総会、10月9日：UAA総会。

私が個人的に招待されるきっかけを作っていただいたのは、知日派のマイク・モーティマー会長とリンダ・マクミラン女史である。2011年1月末の日本山岳協会創立50周年記念祝賀会の席で、ご両人が提案してくれた。マイクさんはカナダ山岳会の元会長で、カナダ登山界の外交官的な存在である。持病の心臓病が心配ではあるが……。小生はおふたりとも親しくお付

き合いしてきた。

講演もさることながら、カトマンズ総会に海外から参加する顔ぶれをあとから知り、これは行かねばならぬと思った。英国の代表的な登山家ダグ・スコット夫妻、マーチン・スコット（前アルパイン・クラブ副会長、前エベレスト基金理事長）さん、アメリカからはアメリカ山岳会名誉会長ビル・パトナムさん、元会長マーク・リチー夫妻、ニューランド山岳会の元会長ジョン・ナンカビスさん、もちろん地元のアン・ツェリン・シェルパさんなどなど、濃淡はあるが親しい友人との再会が嬉しく、皆さんと親しく交歓することができた。個人的な付き合いになるが、ロンドンではマーチンさんの家の鍵を持たしていただいていた。

ビル・パトナムさんはロバート・ベイツ亡きあとの2人目のアメリカ山岳会名誉会長で、アリゾナのフラッグ・スタッフにある世界的なローウェル天文台の館長をしている。小生のアメリカ山岳会名誉会員への推薦者であり、私のことを気にかけていただいている。

リンダさんは元アメリカ山岳会副会長で、ヨセミテ自然保護委員会の委員長を務め、現在はＵＩＡＡ山岳環境保護委員会の委員長をしており、山岳保護に関して世界の山岳環境保護団体と広く連携して活躍している。

世界の登山界で現在最も精力的に活躍しているのがダグ・スコットさんとマーク・リチーさんであろう。功成り名を遂げたクリス・ボニントンさんとは少し異なり、ダグ・スコットさんは英国登山界に留まらず、山岳行事でフランスの「ピオレドール（黄金のピッケル賞）」やＵＩＡＡで重鎮の役割を担い、またネパールではＮＰＯ活動を展開している。そのダグさんを支えているのが奥さんのトゥリッシュさんである。2年前の初冬、アルパイン・クラブの名誉会員に認証されたときの旅で、湖水地方で講演をしたとき、ダグさんの家に泊めていただいた。ふと、奥さんとふたりになった折、ダグとの再婚のこと、ダグの活躍ぶりについてしみじみ話してくれたことが頭から離れない。来年はぜひ家内と一緒に湖水地方に来るように、と勧められた。

マーク・リチーさんとは最も縁が深い。２００３年のアメリカ山岳会総会（この年はラスベガスにて）で初めて講演をしたときの会長が、若干44歳のマーク・リチーさんだった。奥さんのテレサさんは、ペルーのコルディエラ・ブランカのふもとの町ワラス出身で、ペルー登山界の草分けセサール・モラーレスさんの親戚である。２００６年には日本山岳会創立１００周年記念祝賀会にご夫妻を招待した。以後、日本で、インドで再会している。今回のＵＩＡＡカトマンズ総会でもマークさんの活躍ぶりが目立った。

マークさんとテレサさんは、アメリカ東部で製材・家具製造・

インテリアの会社を経営している実業家でありながら、マークさんは現役で最強のトップ・クライマーのひとりである。２０１１年８月に宿願の東カラコラム、世界第２の未踏峰サセル・カンリⅡ峰（７５１８ｍ）にアメリカ山岳会現会長のスティーブ・スエンソン、フレディ・ウィルキンソンと３人で初登頂した。フレディは30歳、アメリカ最強の若手クライマーである。『岳人』12月号の「現代アルピニズムのプロファイル」に掲載されている。現役の会長がヒマラヤの難峰に挑む、日本の登山界では考えられないことである。アメリカ登山界の若さを象徴している。

私の講演は「To the Final Frontier―Alps of Tibet and Beyond」。１６０枚のイメージをパワー・ポイントで紹介した。司会はマーチンさんにしていただいた。冒頭に、添付の地図でチベットのアルプスには２７０峰もの未踏の６０００ｍ峰が存在することをアピールした。氷河や気象条件、森林保護についての質問に答えた。知られざる世界を紹介できたことで、自画自賛になるが、好評だったと言えよう。講演を終えたその足でバンコク・成都経由東チベットの踏査に向かった。

東チベット許可問題――易貢蔵布へ

横断山脈研究会の老年探検隊三羽烏は、10月11日、成都に集結した。四川大地探検公司の張継躍社長も参加予定だったが、南京に住む父親が脳梗塞で入院したため急に取りやめになった。メンバーを紹介し、全体の日程（気温は午前７～８時）をまとめておこう。

日本人メンバー　中村　保（76歳）、永井　剛（79歳）、新谷　忠男（65歳）

中国人メンバー　ガイド：次仁徳吉、通称　アワン（チベット族　33歳）
コック：ケルサナ（チベット族　40歳）
運転手：グ・ダップ（チベット族　33歳）
リナ・チフ（漢族　52歳）

10月13日：成都からラサ（快晴）空路
10月15日：ラサ３７００ｍ―八一鎮３０１０ｍ　林芝地区公安（ラサ　晴　5℃、八一鎮　曇）車
10月16日：八一鎮―色季拉４５００ｍ―通麦２１２０ｍ―易貢郷２２６０ｍ（曇・小雨　10℃）車
10月17日：易貢郷―八盖２８４０ｍ―日卡３３２０ｍ（曇　10℃）車
10月18日：八盖―臥普２７２０ｍ（曇・雨　8℃）車
10月19日：臥普　天気待ち（雨・曇　6℃）
10月20日：臥普―C1　２９４０ｍ チベットのジャングルを行く（曇　6℃）　馬・徒歩
10月21日：C1―C2　３２００ｍ　チベットのジャングルを

行く（曇　3℃）馬・徒歩

10月22日：C2—江普氷河展望地点3240m往復（曇　4℃）徒歩

10月23日：C2—江普氷河展望地点往復（朝一部晴　1℃）徒歩

10月24日：C2—江普氷河展望地点往復—C2（朝快晴　マイナス4℃）徒歩・馬

10月25日：C1—臥普（曇　5℃）　徒歩・馬

10月26日：臥普（曇・雨　3℃）

10月17日：臥普—易貢措—通麦—魯朗3340m　（曇後晴　0℃）車

10月28日：魯朗—色季拉—八一鎮　林芝地区公安に出頭（朝快晴　マイナス5・5℃）車

10月29日：八一鎮（曇　2℃）

10月30日：八一鎮（林芝空港）から成都（曇　4℃）空路

10月31日～11月1日：成都から日本　空路

＊八一鎮（バイーチェン）林芝（ナインチ）色季拉（セチ・ラ）通麦（タンマイ）易貢郷（イゴンシャン）八盖（バケ）日卡（レガ）臥普（ウォプ）江普（ジャンプ）魯朗（ルナン）

10月15日、ガイドのアワンが八一鎮で林芝地区公安局に登録を済ませたところで、東チベットの外国人許可問題につて説明を受ける。

中　村「外国人の東チベットへの入域について許可の状況を総括的に説明して欲しい」

アワン「去年、そして今年2011年は以前にも増して難しくなっている。6月にラサで行なわれた、チベット解放60周年祝賀行事のあと7月からさらに厳しくなった。昌都（チャムド）地区には、1ヶ所の例外を除いて外国人は入れない。一部のラマ僧が散発的に反抗しているのが、外国人を近づけない理由らしい。念青唐古拉（ニンチェンタングラ）山東部北側の辺覇（ベンバ）県、洛隆（ローロン）県はオフリミットである。例外は、観光地になっている崗日嘎布（カンリガルボ）山群の拉古（ラグー）氷河と、米堆（ミドイ）氷河への起点となっている然烏（ラウー）である。那曲（ナチュー）地区は、場所によっては外国人が入れない所もある。林芝地区は川蔵公路（南路・ルート318）の通過と公路沿いの町の立ち寄りは許可されるが、公路から外れて奥に入ることはできない。今まで自由に入れた観光地の八松（バソン）湖さえ、外国人は許可が厳しくチェックされている。今年の8月にフィンランドのノキアの社員を八松湖に案内したとき、許可があったにもかかわらず、手違いで林芝地区公安局から2000

元の罰金を取られた」

「ただ、外国人のオフリミットは公布されているわけではなく、申請しても許可が下りないのが現状である。昌都地区東南部の左貢（ツォゴン）県、芒康（マルカム）県もクローズされているので、英国のミック・ファウラーが狙う秘峰ダムヨン（６３２４ｍ）は、２０１２年も無理だろう」

中　村「我々に発給された公安局の許可には魯朗、通麦、波密（ボミ）、米堆、然烏の町の名前があるだけで、我々が入ろうとしている場所の名前がない」

アワン「公安は責任逃れもあり、奥地の郷（村と県の中間の行政単位）や村の名前を記入してくれない。強く求めれば許可そのものを発行してくれない。あとは応用問題である。奥地に入る場合、公安の出先がある郷に泊まるのを避け、公安の目が及ばない村にいるか、野営をした方が安全である」

中　村「今回の我々の計画は、執念の易貢蔵布（イゴンツァンポー）下流部の踏査である。計画ルートはＥメールですでに連絡してあるとおりである。よろしく頼む」

「青海省の状況はどうだろうか。数年前に大地震のあった玉樹（ユシュ）周辺はどうだろうか」

アワン「チベット自治区内ほどは厳しくないようだ。アメリカの川下りチームが念青唐古拉山東部北側の怒江（ヌジャン、サルウイン川）上流部の下降を目指したが、昌都地区には入れず断念した。その後、青海省西部のメコン川源流と上流部に転進し、玉樹を起点とした活動ができたと聞いている」

計画ルートについてアワンと３つのオプションのおさらいをする。

１．八盖をベース：①八盖北側の氷河と未踏峰の探査
　　②八盖から易貢蔵布を遡り、通行不能といわれる幻のゴルジュ帯に接近

２．臥普をベース：③チベットのジャングルを通過して江普大氷河に接近、未踏峰探査

２００９年の踏査で、アワンの臨機応変な交渉能力は立証済みである。英語は堪能である。私が今までともにしたガイドの中ではアワンの右に出る者はいない。今回もスリリングだったが、結果として実りある成果につながる役割を担ってくれた。

道々アワンから地方特有の話を聞き、勉強になる。気性の荒い、好戦的なカンバがほとんどの東チベット（カンバの住む地域を「カム地方」と呼ぶ）の中で、念青唐古拉山東部の南側のコンボ地方と波密地方は固有の習俗を培ってきた。コンボの衣装、帽子のデサインが独特である。コンボのチベット族は性格

が穏やかで、宗教心が比較的希薄、五体投地はやらない。従順なためチベット自治区政府は管理しやすい。そのコンボ地方の新しい中心が林芝地区の八一鎮である。ヤルン・ツァンポーの支流、尼洋河（ニシアンヘ）の開けた谷に位置する。舗装された川蔵公路を東に1時間上れば、名峰ナムチャ・バルワとギャラ・ペリ三山を望める色季拉（４５００ｍ）に着く。8月1日（八一）は中国人民解放軍の建国記念日。標高が低くて（３０００ｍ）温暖で、植生の豊かな土地は漢族には住みやすい自然条件である。人民解放軍の基地がここと近くの米林に造られ、広東省の支援を受け近代都市に変貌しつつある。漢族が80％のチベット第4の都会である。ホテル、レストラン、喫茶店の従業員はすべて漢族で、チベット族はいない、とアワンは言う。グリーン・ハウスが普及し、野菜は豊富である。有機栽培の野菜が高値で売られている。リンゴと梨の産地でもある。２００６年に福建省の援助で「尼洋閣」なる蔵東南文化博物館ができ、チベット族の中のマイノリティーであり、ツァンポー大屈曲部に棲むメンパ族とロパ族の文化を紹介している。展示は充実している。商業空港ができ、成都との便が毎日飛んでいるがいつも満席である。因みにチベットの都市の大きさの順序は①ラサ②シガツェ　③ツェダン　④八一鎮　⑤昌都である。

漢族が実効支配するチベット自治区政府は、好戦的で反抗的なカンバを目に見える形で統制管理するためいろいろ手を打っている。その一つが移住政策である。昌都地区の中で最も手を焼いている貢覚県のカンバ80家族を、コンボ地方工布江達県の北の谷に移住させている。波密県松宗（ソンゾン）の南の秋朗（ドンチュ）蔵布谷にも数家族が移住している。カンバの性格についてよく言われることは、争いが絶えない、血みどろの抗争をする、牧草地や冬虫夏草の縄張り争いをする、復讐心が強く何世代にもわたって復讐劇を繰り返す、などである。カンバの抗争を公安警察当局が収められないときは、ラマ僧が出てきて解決する。ラマ僧の影響力、存在は大きい。

最後の辺境――空白の12日

東チベットと乾燥した中央チベットの天気は異なる。ラサは晴天の日が多いが、川蔵公路の米拉山（メイラシャン）峠（５０１３ｍ）を境に東側のヤルン・ツァンポー支流域は湿潤で降雨量多く、天候は不安定で晴天は少ない。今年も秋にもかかわらず雨が多く、12日の間で快晴と晴天はわずか2日間の午前中だけだった。あとは曇りと雨であった。

10月16日に八一鎮を発って川蔵公路をたどり、通麦から易貢蔵布に入った。ナムチャ・バルワは雲の中だった。小雨の中、夕刻、易貢郷に着いた。招待所が数軒できている。この先の道路事情を確認したところ、八盖の先の日卡まで自動車道路ができていることが分かった。２００６年に易貢郷から馬で4日か

かった八盖まで55㎞の行程は、バイク・車では4時間である。

10月17日、易貢郷から八盖に入る。今年の易貢蔵布は澄んだ青い清流ではなく、雨が続いたせいか水量多く白濁している。自動車道はほぼ旧道に沿って易貢蔵布の左岸をたどる。1993年に伐採禁止令が出されたお陰で、手付かずに残っている針葉樹の原生林が美しい。

1970~1990年にコンボ地方（特に八松湖周辺）と波密地方（特に傾多〈チンドウ〉周辺）で乱伐が行なわれ、その傷跡は今でも生々しい。易貢措（湖）と塔魯（タルー）の間のゴルジュは壮観である。1935年に訪れたキングドン＝ウォードは、本流のヤルン・ツァンポー以上の景観と書き残している（*Assam Adventure*, 1942 London）。村落の家屋は増えて整備され、屋根は赤いカラー鉄板に変わっている。塔魯、瑞（ル）、嘛（バ巴）、木玉（ムユー）など記憶に残る村落を通過して、昼には八盖郷の中心の村に着いた。易貢郷から八盖までの自動車道は、1年半前に開通している。八盖から先の日卡までも最近建設された。

八盖を踏査の拠点にする以上、自動車道が通じて開設された波密県公安局の派出所に出向いて、登録せざるを得ない。早速アワンが出かける。公安には漢族のチーフとチベット族の部下がいた。ふたりともまだ若い。ここで懸念していた問題発生、「許可証には八盖郷は記載されていない。ただちに引き返して、日本人と中国人全員が波密県公安局に出頭せよ」と通告される。今度ばかりはアワンの交渉力も功を奏さなかった。粘り強く喰い下がったが、漢族のチーフの態度を変えさせることはできなかった。贈り物作戦も利かない。アワンは自分のコネクションを使って電話をかけ、なんとか活路を見出そうとしたが駄目だった。結果、「一晩だけ公安の宿舎に泊めてやるが、明朝、必ず波密に出発せよ」と譲歩してもらえなかった。若い漢族の公安官は、独断で我々の無許可滞在を黙認すれば、責任問題になることを恐れたのだろう。

断念して次の方策を考えねばならなくなった。その前に公安の目を盗んで車で新道を日卡まで往復した。八盖の村人は、5年前に訪れて2泊したときはフレンドリーだったが、今回は公安を意識してか村人は余所余所しかった。それでも、2008年にやって来た東北大登山隊の世話をしたことを話してくれた。ここ2、3年、奥地の郷にも公安の出先が増え、チベット族の村人に対する監視が厳しくなっていると実感する。

日卡と上流部の嘉黎（チャリ）県忠玉（ツォンイ）郷の尼屋（ニウ）との間に存在する「幻のゴルジュ帯」への接近は今回も不発に終わった。果たして通行可能か。今年の夏、波密のラマ僧が単身で通過を試みようとしたが、危険過ぎて引き返したという。1935年にキングドン＝ウォードが道に迷いながら通過して以来、外国人は未だ誰もそのゴルジュを見ていない。喜

寿を迎える私に、そのチャンスは来るだろうか。易貢蔵布沿いの自動車道は上流部（嘉黎県）と下流部（波密県）を結ぶ計画はない。下流部は高所にある日卡が終点だが、川沿いに新道を造り、日卡から５００ｍほど下った地点に橋を架け、右岸の龍普（ロンプ）村まで自動車道を延ばす計画はある。２００８年3月に、東北大は龍普を基地にして６０００峰の探査をしている。

さて、この先どうするか。波密県公安局に出頭すれば油を絞られた上に退去を命じられ、今回の計画はそこで終わりとなる。波密には行かずに、江普氷河の踏査を迷わず決断する。アワンにとってはガイドとしての責任とリスクがあるが、同意してくれた。

10月18日、公安が監視する小雨のなか八盖を出発する。塔魯の少し手前で、比較的広く開けた支流で源頭に江普氷河を擁する臥普谷（波密県の地図では夏曲〈シアチュー〉蔵布）に入る。自動車道は分岐点から7㎞ほどの臥普村まで通じている。臥普村は11戸、皆コンボのチベット族である。途中のネーチン村は14戸と大きい。無許可の踏査行が始まった。我々は運良く、臥普村で新築中の立派なチベット族の家に泊めてもらう。早速キャラバンの手配をする。雨が夜中じゅう降り続く。19日は天気改善の兆しはないので停滞。日本人3人が寝起きした部屋は豪華な薪ストーブが設えられた大きな居間で、絨毯を敷いたベッドが4つある。夜になると近所の村人がテレビを見に集まり、小劇場となる。以下「東チベット・ジャングル紀行」の日記を転載する。

20日：天気は曇りだが落着いているので、馬8頭、馬方兼荷担ぎ8名で10：00時にキャラバン出発。全部「馬」で「騾馬」はいない。針葉樹の巨木の原生林を進む。無人のワプ根巴（ゴンパ、ラマ寺、２８４０ｍ）で昼食。根巴には8世紀にインドからこの谷にもやって来たといわれる聖者ペマサンボーが祀ってある。裏手にゾウ（ヤクと牛の交配種）を放牧している2軒の人家がある。根巴を過ぎるとすぐ亜熱帯的なサルオガセが大木にまつわりつく密林の悪路となる。大きな石楠花の木もある。泥、岩、木の根の歩きづらい道なので馬は悪戦苦闘、馬から降りてもしんどく、歩くのはきつい。馬に乗っていても蔓が体に巻きつき、落馬する危険がある。馬方のひとりが馬に引きずられ、胸を蹴られて谷に転落、ひどい打撲傷を負う。

大柄だが若くて可愛い尼さんが、馬方として参加した。無許可でついてきた。というのは、尼僧は県政府に必ず登録され、帰属する尼寺から無許可で移動することは許されないからである。午後2時、キャンプ・サイト（C

1、２９４０ｍ）に着く。落ち葉の上にテントを張る。外国登山隊を経験しているコックの料理は悪くない。夕食はスパゲティ、サラダ、トマトと卵の炒めもの。老人向きメニューである。

21日：雲が垂れ込め天気は悪い。チベットのジャングルを進む。ほとんど馬から降りて歩く。先行の3人の馬方が、踏み跡（ヤク道）を頼りに道を塞ぐ樹木や蔓を鉈のような重い大きい山刀で切り倒して馬を通す。直径20㎝の木をあっという間に切り倒す。昼少し前に毒蠅の集団に出遭い避難する。午後2時ごろ、途中で道を失う。馬方が偵察に行き、戻ってきたのでキャンプ（Ｃ2、３２００ｍ）する。Ｃ2は湿った場所だが、テントは快適。アワンが江普氷河の偵察に行く。依然、目指すピークは雲の中。夜中、断続的に雨が降る。

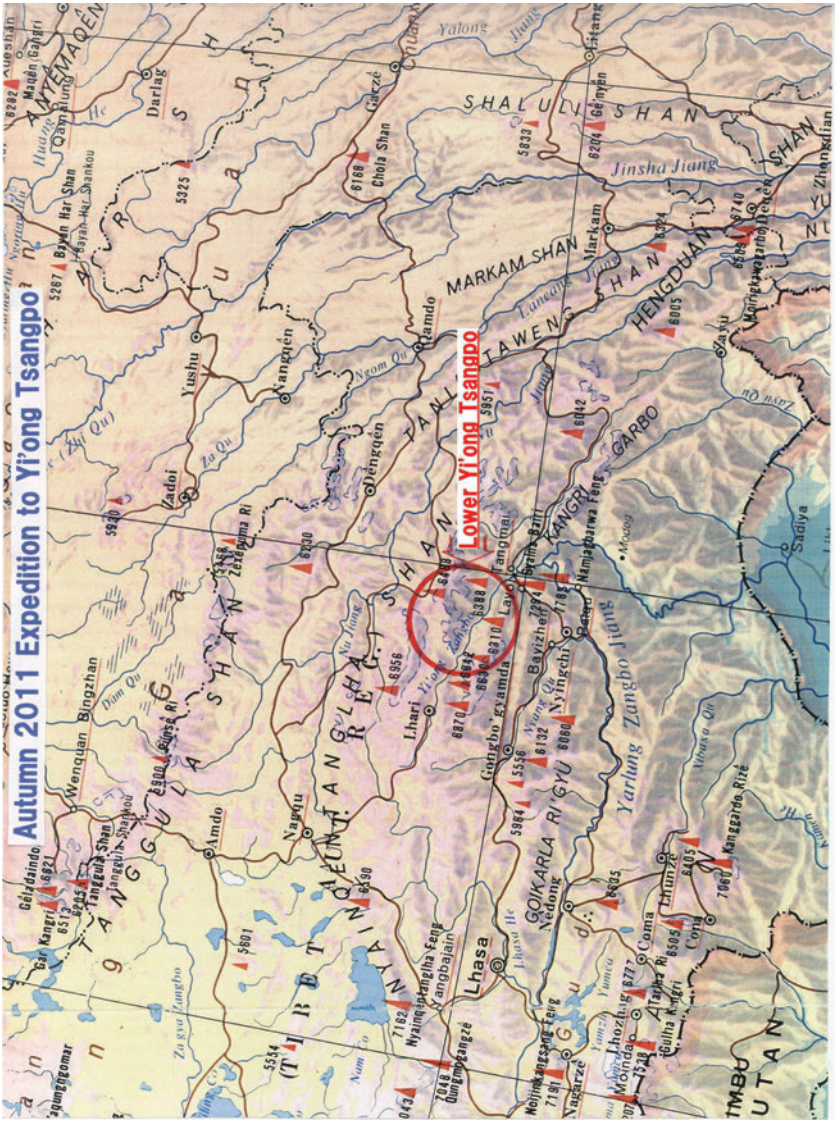
22日：天気は回復しないが午後、偵察に出かける。Ｃ2から先踏み跡はない。細流が次々と行く手を遮る。歩きづらい樹林帯を迷いながら1時間ほど登ると、江普氷河を展望できる地点に着く。下は急峻な崖で下りられない。デブリに覆われた大氷河の下部と末端は見えるが、上部と周囲の山は雲に覆われている。今日まで8日間、悪天候が続いている。

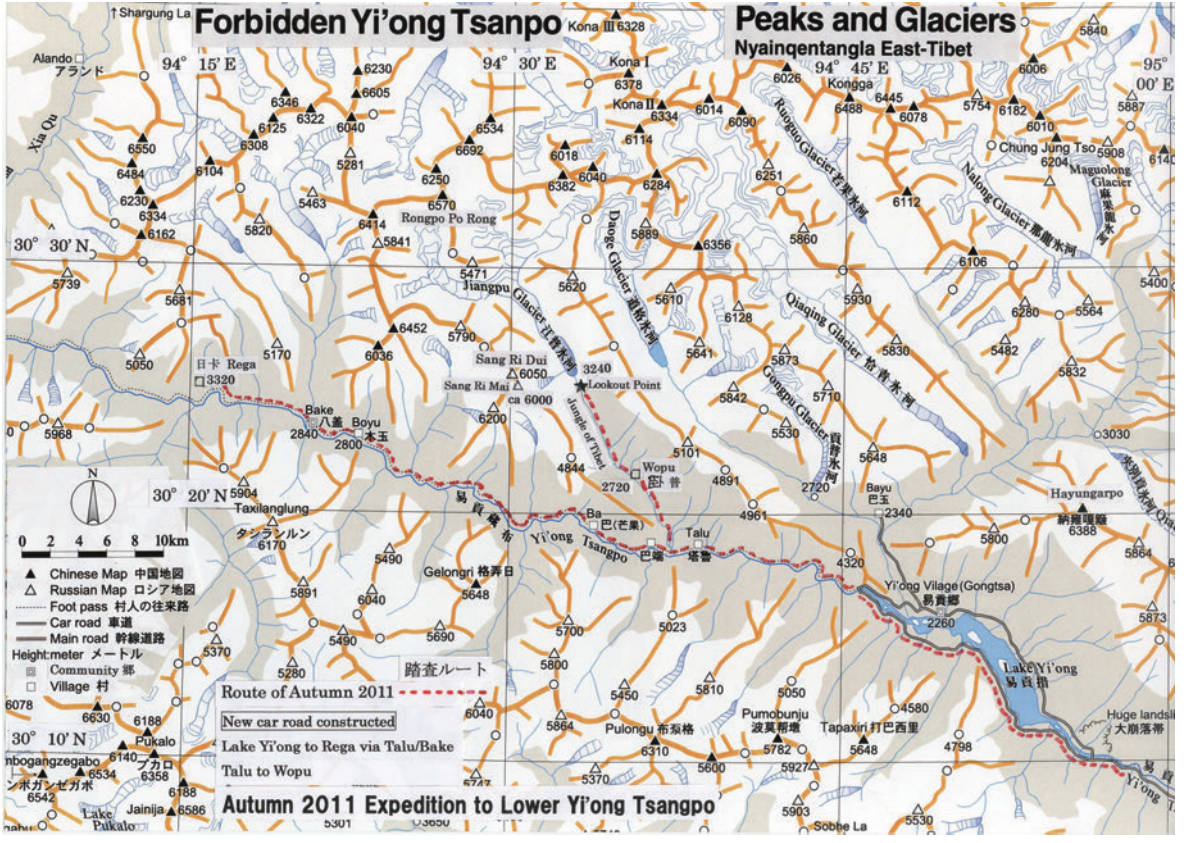
23日：気温が下がり、高度計は気圧が少し上がってきたことを示している。霧が晴れ、青空が見えてくる。午前9時半、勇躍展望地点へ向かう。晴れてはきたが氷河源頭正面の６５７０ｍ峰の圧倒的な南壁に懸かった雲が消え去らないのが残念。右岸の６０５０ｍ峰東壁が雲間に現れる。一応の成果は得た。

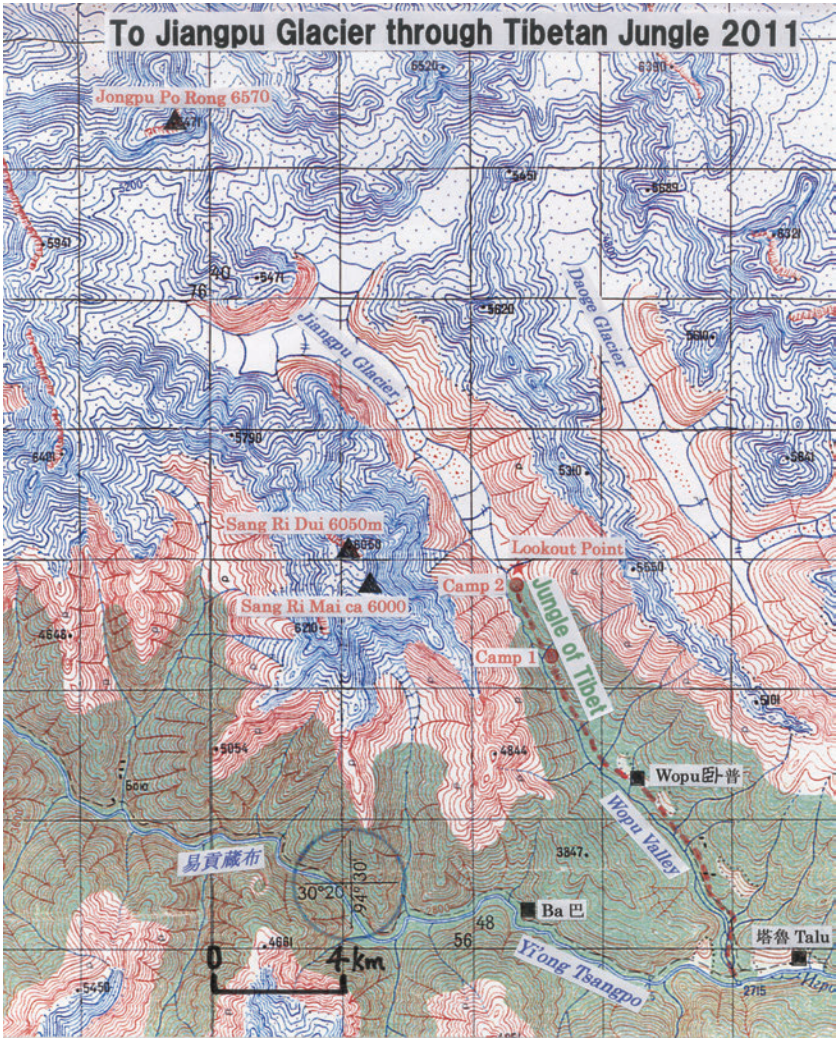
24日：待ちに待った快晴が訪れた。気温が下がり気圧が上がった。7時45分、夜明けとともに展望地点に向かう。新調してきたCanon EOS X5 90～400mmは、今日のために持ってきた。６５７０ｍ峰南壁の完全なプロファイルを撮る。６０５０ｍ峰とそれに連なるca ６０００ｍ峰の東面も完全に姿を現わす。江普氷河へのアクセスは、一応の成果を上げた。午前10時にはＣ2に戻る。見上げるca ６０００ｍ峰東壁で新雪雪崩が発生し、轟音が木霊する。Ｃ2を撤収してＣ1に泊まる。帰りのキャラバンも歩いてもきついし、馬に乗れば鞍が不安定で恐ろしい。大怪我をした馬方はＣ1で留守番していた。

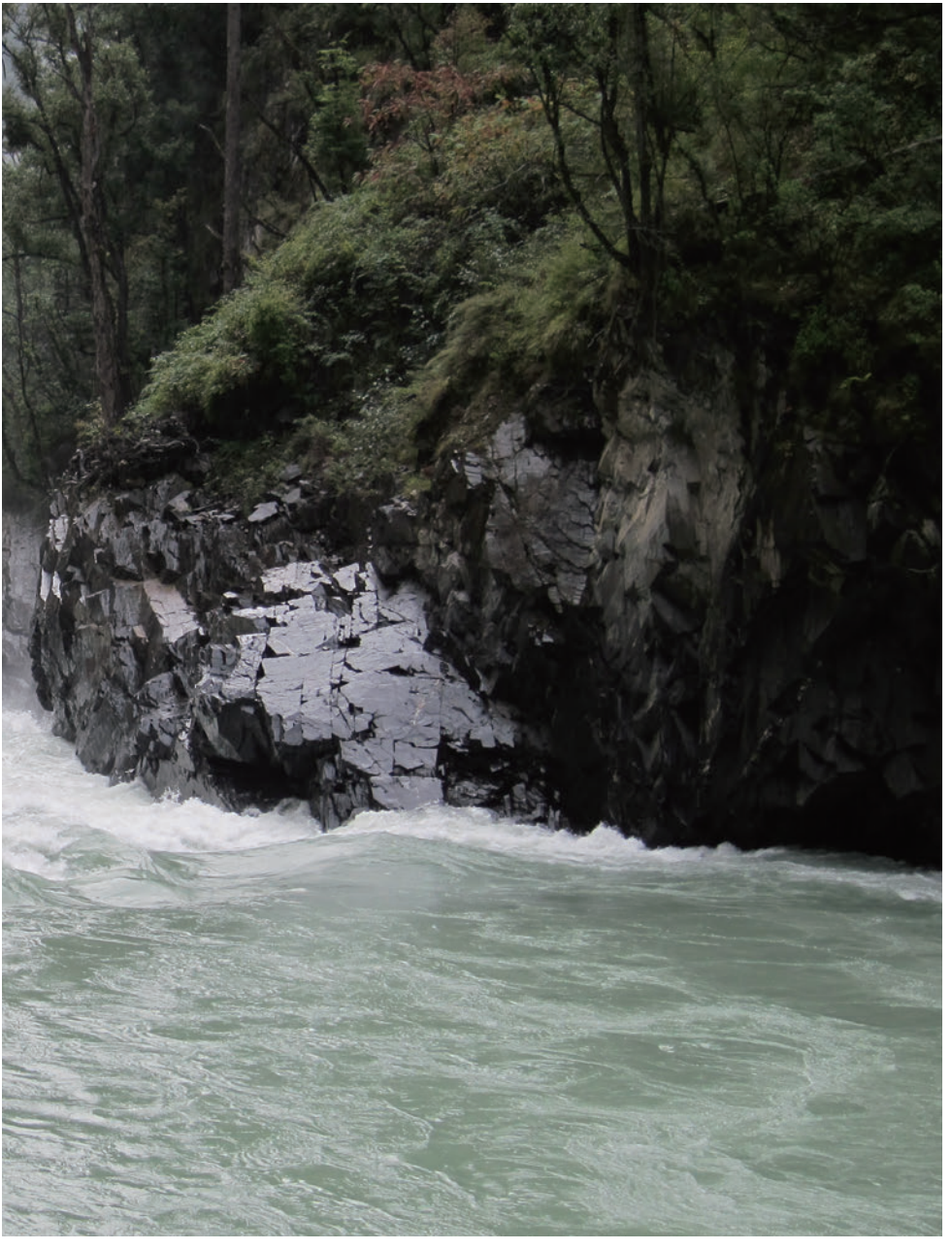
Ｃ1に4頭の大きなゾウがやって来て塩と食べ物をねだる。放っておくと夜中にテントが荒らされるので、つなぎ止める。天気は午後まで持たなかった。夜、雨になる。

25日：Ｃ1を午前9時に発って12時に臥普に着いた。帰りは早い。6日間のキャラバンを無事終了。ワプ根巴の裏手の


Autumn 2011 Expedition to Yi'ong Tsangpo
Lower Yi'ong Tsangpo
Lhasa
Nyingchi
Bayi
Tongmai
Lhari
Nagqu
Amdo
Yushu
Darlag
Gaizedaindo
Wenquan
Bingzhan
Tangula Shan
Nyainqentanglha Feng
Yangbajain
Damxung
Nam Co
Zagyu Tsangpo
Nedong
Gongbo'gyamda
Layue
Zhaxigang
Zadoi
Nangqen
Yushu
Yalong Jiang
Darlag
Gaizé
Chola Shan
Yushu
Nangqen
Nyom Qu
Zamdo
Lancang Jiang
Markam
Jinsha Jiang
Zhanang
Yarlung Zangbo Jiang
Kangri Garpo
Manjatsarwa Feng
Modoi
Sadiya
Kangzarda Ri
Coma
Tsunza
Lhozhag
Moinda
Qulha Kangri
Alatsa Ri
Nagarze
Yamdrok Co
Lhari He
Nyang Qu
Za Qu
Nu Jiang
Zelegama Ri
Bayan Har Shan
Tanggula Shan
Jangdui Shan
Gelaindaxiang
Baqên
Kangri
Amdo
Nagqu
Lhasa
Nedong
Gongbo'gyamda
Bayizhen
Nyingchi
Tongmai
Layue
Lhari
Zhaxigang
Nyainqentanglha Feng
Yangbajain
Damxung
Nam Co
Zagyu Tsangpo
Yushu
Zadoi
Nangqen
Darlag
Gaizé
Chola Shan
Yalong Jiang
Jinsha Jiang
Markam
Lancang Jiang
Zhanang
Yarlung Zangbo Jiang
Kangri Garpo
Manjatsarwa Feng
Modoi
Sadiya
Kangzarda Ri
Coma
Tsunza
Lhozhag
Moinda
Qulha Kangri
Alatsa Ri
Nagarze
Yamdrok Co
Lhari He
Nyang Qu
Za Qu
Nu Jiang
Zelegama Ri
Bayan Har Shan
Tanggula Shan
Jangdui Shan
Gelaindaxiang
Baqên
Kangri
Amdo
Nagqu
TANGGULA SHAN
TIBETAN PLATEAU
GANGDISE SHAN
NYAINQENTANGLHA SHAN
TANGULA SHAN
GOIKARLA RIGYU
MARKAM SHAN
HENGDUAN SHAN
SHALULI SHAN
TAWENG
ANYEMAQEN SHAN
GANGDISE SHAN
NYAINQENTANGLHA SHAN
TANGULA SHAN
GOIKARLA RIGYU
MARKAM SHAN
HENGDUAN SHAN
SHALULI SHAN
TAWENG
ANYEMAQEN SHAN


Forbidden Yi'ong Tsanpo
Peaks and Glaciers
Nyainqentangla East-Tibet
Shargung La
Alando
アランド
94° 15' E
94° 30' E
94° 45' E
95° 00' E
30° 30' N
30° 20' N
30° 10' N
Kona III 6328
Kona I 6378
Kona II 6334
Kongga
Chung Jung Tso
Maguolong Glacier
Ruoguo Glacier
Nalong Glacier
Daoge Glacier
Jiangpu Glacier
Qiaqing Glacier
Gongpu Glacier
Rongpo Po Rong
Sang Ri Dui
Sang Ri Mai
Lookout Point
Jungle of Tibet
Wopu
Rega
Bake
Boyu
Taxilanglung
Ba
Talu
Yi'ong Tsangpo
Gelongri
Bayu
Hayungarpo
Yi'ong Vilage (Gongtsa)
Lake Yi'ong
Huge landsli
Pumobunju
Tapaxiri
Pulongu
Pukalo
Jainija
Lake Pukalo
Sobhe La
Xia Qu
0 2 4 6 8 10km
Chinese Map 中国地図
Russian Map ロシア地図
Foot pass 村人の往来路
Car road 車道
Main road 幹線道路
Height:meter メートル
Community 郷
Village 村
踏査ルート
Route of Autumn 2011
New car road constructed
Lake Yi'ong to Rega via Talu/Bake
Talu to Wopu
Autumn 2011 Expedition to Lower Yi'ong Tsangpo


To Jiangpu Glacier through Tibetan Jungle 2011
Jongpu Po Rong 6570
Jiangpu Glacier
Daoge Glacier
Sang Ri Dui 6050m
Sang Ri Mai ca 6000
Lookout Point
Camp 2
Camp 1
Jungle of Tibet
Wopu 卧普
Wopu Valley
易貢藏布
Ba 巴
塔魯 Talu
Yi'ong Tsangpo
30°20
94°30
0
4km





荒れ狂うイゴンツァンポーの流れ。イゴン湖(易貢措)と塔魯(タル)の間



秋の刈り入れ風景。イゴンツァンポー・巴(バ)村付近にて



イゴンツァンポー支流、臥普(ウォプ)村のたたずまい



チベット山刀を駆使してジャングルを進む。臥普(ウォプ)谷にて



アワン(チベッタン・ガイド)と筆者(右)。臥普(ウォプ)谷 3240 m地点にて





江普(ジャンプ)氷河とジョンポ・ポ・ロン(6570 m)。臥普(ウォプ)谷 3240 m地点より望む



ジョンポ・ポ・ロン(6570 m)南面と江普(ジャンプ)氷河。臥普(ウォプ)谷 3240 m地点より望む



ソン・リ・マイ（ca6000 m）東面。臥普（ウォプ）谷 3240 m地点より望む



ソン・リ・ドウ（6050 m）東面。臥普（ウォプ）谷 3240 m地点より望む





ナムチャ・バルワ(7782 m)西面。川蔵公路の色季拉(セチ・ラ)より望む



5790 m峰南面。イゴンツァンポー支流・臥普(ウォプ)谷より望む



イゴンツァンポー・イゴン湖



ギャラ・ペリ(7294 m)南西面。川蔵公路の色季拉(セチ・ラ)付近より望む



チバ・カンリ(6846 m)南西面。川蔵公路の色季拉(セチ・ラ)付近より望む



馬に乗る筆者とラバ使いたち。臥普(ウォプ)谷にて



たき火を囲むガイドや馬方たち。臥普(ウォプ)谷にて

人家付近で新谷さんがチベット犬に追いかけられ、逃げ帰った。

易貢蔵布に下る谷に懸かる渓谷型氷河の中で、江普氷河は恰青氷河に次いで2番目に大きい氷河である。全長21㎞、氷河面積132・7㎢ある。中段で3つの氷河が合流する大氷河を、幾つもの6000m峰が囲繞する。念青唐古拉山東部で最も未踏峰が集中している。江普氷河から雪の峠を越えて、北側のマライポ氷河を下って金嶺（ジンリン）郷から辺覇へ往来する道があると村人は言う。人民解放軍のチベット侵攻時、兵士がこのルートを通りマライポ氷河で凍死したと想像される。

キャラバンから戻って臥普村に2泊した。易貢蔵布の右岸、塔魯の対岸に聳えるはずのプロング峰（6310m）を写真に収めるため粘ったが、天候と位置関係のため成功しなかった。村人から江普氷河源頭の6570m峰とC2から東面を望む2つの6000峰の山名を聞いた。6570mが聖山ジョンポ・ポ・ロン、後者は6050mがソン・リ・ドウであり、ca6000mがソン・リ・マイである。チベット語でドウは「高い」マイは「低い」を意味するとアワンは言う。遠望できるので確かだろう。馬方たちには、翌日から麦の種まきなど秋の畑仕事が待っている。

臥普村の人口は70人、11家族（11戸）、収入源は漢方薬用の薬草、茸類、冬虫夏草である。ネーチン村は人口75人、12家族（14戸）である。泊めてもらった家の家族で2人の若い聾者が馬方の中にいた。臥普の谷には同じような障害者がいるらしい。長い間の近親結婚のせいかもしれない。

10月27日、朝から小雨だったが、10時ごろから青空が見えてきたので、易貢蔵布の右岸の山の写真を可能な限り撮る。しかし、成果はぱっとしない。アワンがキャラバンで怪我をした聾者の馬方を、易貢郷の病院に連れていって入院させる。その途中でラサの旅行社から電話が入った。林芝地区公安局から旅行社に「3人の日本人とガイド1人が行方不明になっている。もし連絡がついたら、ただちに林芝公安に出頭するよう伝えろ」との指示が出された。旅行社は慌ててアワンに、ただちに帰り林芝公安に釈明せよ、と命令した。

かくして「空白の12日」は突然幕切れとなった。我々に出頭を命じた波密県公安局は、いつまで待っても日本人が現れないので、本部の林芝公安に日本人はすでに帰ってしまったのかどうか問い合わせたのが発端である。我々は慌ただしく荷をまとめて、急ぎ臥普村を出発して帰路についた。波密県内に留まらないため一気にドライブして、午後8時過ぎに魯朗に着いた。皮肉にも天気は好転しつつあった。

10月28日は快晴、朝早く魯朗を発った。ナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリ三山の雲が芸術的にまとう、素晴らしい写真を撮

ることができた。アワンは午後の勤務が始まる3時半以前の、係官が少ない時間帯を狙って午後2時に林芝公安に出頭した。そのときアワンが報告した公安局の次長は事態をよく知らなかったらしく、アワンの説明にうなずき簡単に釈放してくれた。ところが、それを聞いた所長は怒った。アワンをもう一度出頭させるために八一鎮のホテルを片っ端から調べ、アワンのいるホテルと部屋番号を突きとめた。公安の女性がアワンを呼び出しに来て、公安に連れていった。ジェスチャーかも知れないが、強面のカンバの所長はときおりテーブルを叩いて、厳しくアワンを問い詰めた。12日間、どこに泊まり、何をしていたか一日一日詳しく説明させられた。

アワンはストーリー・テラーの才覚もあるようだ。公安での尋問を想定して、説明のシナリオを考えていた。八盖を出たあとは奥地には入らず、まず通麦付近でキャンプし、その後、川蔵公路沿いで山の写真を撮るためにキャンプしながら移動した、観光地である崗日嘎布の拉古氷河の近くで5日間キャンプしたなど、なんとか12日間の辻褄を合わせて逃げ切った。所長から釈放されたあと、もう一度ほかの係官から呼び出しを受け、泊まったホテルを確認させられた。

「波蜜県公安から出頭を命じられたのに、なぜ行かなかったのか」との追求はなかった。公安局の面子だろう。運転手がアワンと一緒に呼び出されなかったのは幸いだった。運転手だったら、おそらくすぐぼろを出したに違いない。運転手を追及しなかったのは、我々の行動をそれほど重大に受け止めていなかったのかも知れない。

こうして一件落着、30日に林芝空港から成都に飛び立った。緊張感ある旅だった。〝Anything happens in China, nothing is impossible in China.〟である。

文化大革命の影響、開発による過疎化

江普氷河踏査のキャラバンで、今回は奇異なことに気がついた。8人の馬方は誰も煙草を吸わず、酒も呑まないことである。いつも馬方やガイドはヘビー・スモーカーが多く、酒も好きである。その理由は臥普の村に帰ってきて分かった。

1966年から文化大革命の嵐が吹き荒れた10年間、紅衛兵はチベットの僧院を攻撃、破壊した。僧院を閉鎖された僧侶たちは、それぞれ出身地の村に帰った。文革が終息した1970年代末から1980年代の初めに宗教の自由が認められ始めると、僧侶たちは村に小さな根巴（ラマ寺）を造り、村人の啓蒙をした。経典の勉強を始めさせ、酒、煙草をやめるよう説いた。少年に対しても同様に指導した。アワンの故郷である、ラサに近いヤムドク湖の周辺でも、僧侶が指導した遺風が今も残る村があるという。

臥普の谷にも敬虔な人格者のラマ僧が追放されて戻ってき

た。ラマ僧は小さなラマ寺を造り、村人に仏の教えを説き、善行を積むよう指導した。煙草や酒の悪癖を絶つよう諭した。その結果、臥普の谷では今でも多くの村人は酒を飲まず煙草を喫はない。でも、例外者はいる。泊まった家の隣では地酒を造っていた。「ボラ」と呼ばれる大麦から造る、アルコール度が25度程度の蒸留酒で、独特の香りがあり味はまろやかである。

余談だが、アワンは清潔好きである。部屋を丁寧に掃除する。冷水で体を頻繁に洗う。よく洗濯をする。永井さんを除く、不精で不潔な老年隊の中村・新谷とは違う。理由を訊いてみた。僧侶になるための修行時代は、毎日の掃除が日課だった。洗濯も冷水で体を洗うこともその習慣が残っているから、と言う。馬方として来た若い尼さんも、キャンプ地C1の河原で上半身裸になって冷水で体を洗っていた。

臥普の村では家の建て替えが進んでいる。県政府が指導している「奥地にではなく、道路に近い所に移転する」という条件を満たせば、新築に対して補助が出る。これはチベット全土で行なわれている指導らしい。監視の目の届きやすい所に住まわせようというのが狙いだろう。かくして、不便な奥地はますます過疎化していく。臥普村の場合、新築に対し一戸当たり1万元（14万円）の補助が出る。村には新築の家屋が集合し、開発により過疎化は加速する。

序章で「開発のパラドックス」を書いた。東チベットの歴史的、地政学的な背景があり、入域許可問題がますます微妙で不確定になっている昨今の状況を見るにつけ、外国人にとっては「遠ざかる辺境」を改めて実感せざるを得ない。しかし、来年は変わるかも知れない。それが中国だろう。そう期待したい。

アワンから聞いた話をもう一つ紹介しよう。「ヤク」についてである。チベット遊牧民の変貌の一断面を表わしている。チベット自治区政府は、ヤクと羊の保有頭数に関し遊牧民に規制を課している。遊牧民一人当たりの許可される最大保有頭数は、ヤク15頭あるいは羊50頭か、その組み合わせである。5人の家族でヤクだけを保有する場合は、75頭である。この頭数を超える場合は、殺してゆかねばならない。ヤクと羊の両方を飼育する場合は、例えばヤクを5頭持つと、羊の飼える頭数は30頭程度に制限される。

アワンの出身地の家ではヤクは1頭のみで、皆売ってしまった。ヤクだけでは収入源としては足らないので、村全体でも25頭しか残っていない。チャンタン高原の遊牧民の中には、ヤクを売ってトラックを買いにラサに出てくる者もいる。戻って遊牧生活を続けることは難しいだろう。那曲地区比如県の遊牧民の中には、冬虫夏草の稼ぎでラサに家を建てて住み、年にシーズン中の2ヶ月だけ冬虫夏草採りに比如に来る者もいる。遊牧民の将来に懸念と不安を抱くのは、私だけではないだろう。

おわりに

長年の発見の旅でたどり着いたのが、易貢蔵布の未踏域である。踏査から帰って「やり残したこと」があると、悔しさを夢にまで見て再挙を考える。許可問題の地政学的な壁もあるが、易貢蔵布の上流部と下流部の間、尼屋（ニウ）と日卡（レガ）の間の天嶮のゴルジュ帯はどうしても気になって仕方がない。キングドン＝ウォードが１９３５年秋に道に迷いながらも通過したときには、トレイルはあったようだ。彼は易貢蔵布下流部のゴルジュ帯は、本流のヤルン・ツァンポーよりも壮観であると『アッサム・アドベンチャー』に書いている。

しかし、地元のチベット族は、今では新しく道を造り、崖には梯子と桟橋を架けなければ行けないだろう、と言う。怖いもの見たさで、ますます行って覗いて見たくなる。２０１０年夏の雲南四川踏査から戻ってしばらくしたら、９月末に眩暈とふらつきが起こった。原因を突き止め治療をするために、脳内部と脳血管、頚椎、血流、耳、眼の精密検査を６ヶ月行なったが分からず、症状改善の兆しはなかった。不安を抱きながら２０１１年秋の易貢蔵布下流部踏査を敢行した。ところが、不思議なことに旅行中に眩暈は消えていき、再発はしていない。パソコンのやり過ぎが原因だろう。人間の体は微妙である。長年苦しんだ膝痛も、１９９６年に登り降りの激しい梅里雪山巡礼路を、齋藤淳生さんに処方していただいた鎮痛剤薬を飲みながら、２週間かけて一周したら治ってしまった。

しかし、足腰は確実に弱ってきている。喜寿を過ぎてまで危険な冒険に挑むのは、無理があり過ぎる。そろそろアームチェアー・トラベラーに比重を移した方が無難だろう。英語版全４巻の完成は悲願なので、継続して取り組んでいく。易貢蔵布には２００１年から都合６回入った。私にとって「執念の易貢蔵布」と言いたい。早晩、その記録を総合的にまとめて映像化したい。四川省の未踏峰をアップデートし、英国の『アルパイン・ジャーナル』２０１２年号に書くことも約束している。宣教師の苦闘を横糸に、東チベット探検史のまとめも当面の課題と考えてはいるが、旅の虫が静かにしていてくれるだろうか。

山と溪谷社から出した三部作『ヒマラヤの東』『深い浸食の国』『チベットのアルプス』は、今となっては尻切れトンボである。その後のさらに深化した踏査、探検史、海外での講演活動の集大成を、「ヒマラヤの東」第４弾として完結編『最後の辺境――チベットのアルプス』を２０１２年４月に東京新聞社から世に送ることができ、第二の人生の区切りをつけられることは幸せである。

四川省西部高地の未踏峰　2012

中村　保

難攻不落だった央莫龍主峰（6060m）が2011年10月にアメリカ・中国合同隊により初登頂され、最後の課題の一つが解決された。四川省西部高地の未踏の6000m峰は少なくなった。しかし、魅力のある5000m峰は数多く残されている。この章ではそれらの未踏峰に関し西から東へ山域別に整理して、最新の情報を提供したい。左記は主な未踏峰と全体図である。

1. 雀兒山北部―ポルジャボ・セゾン山塊

セジョンⅠ峰（5816m+）、セジョンⅡ峰（5816m）、ノブユグア（5594m）、5574m峰、ポルジャボ（5472m）、5654m峰

2. 岡嘎山塊

岡嘎主峰（5688m）、5591m峰、5582m峰ほか5400～5500m峰数座

3. 工卡拉山

カワロニⅠ峰（5992m）、カワロニⅡ峰（5928m）

4. 扎金甲博山塊

5725m峰、5500m峰数座

5. 相丘切克山塊

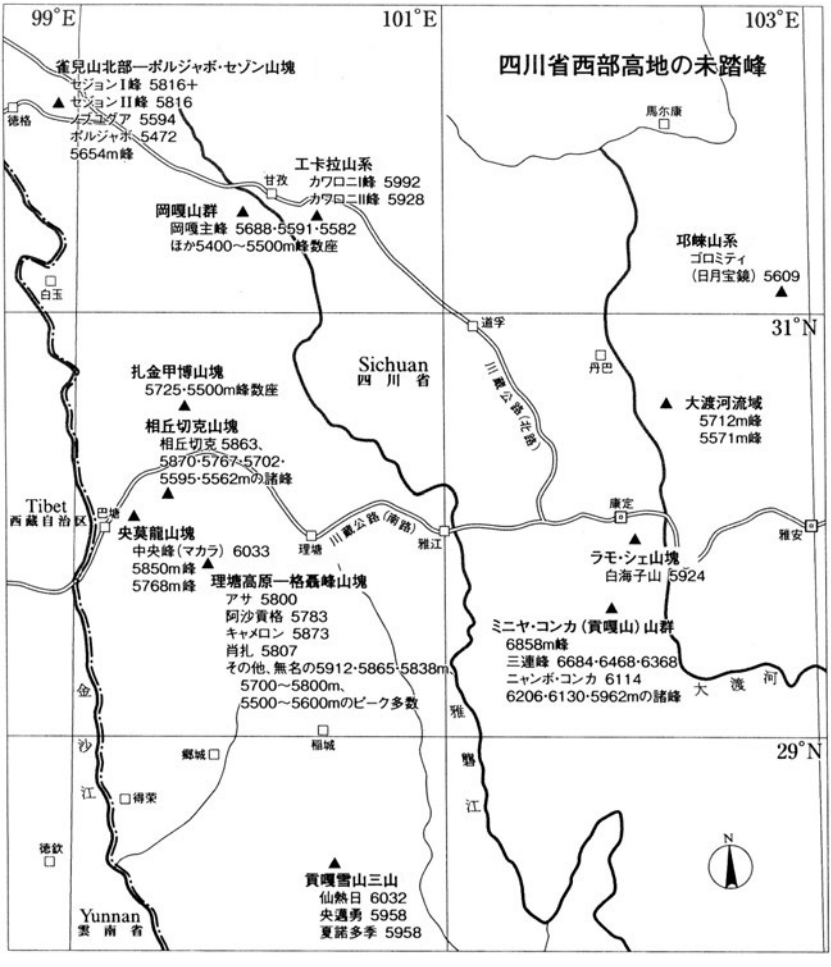
相丘切克（5863m）、5876m峰、5767m、5702m、5595m、5562mの諸峰

6. 央莫龍山塊

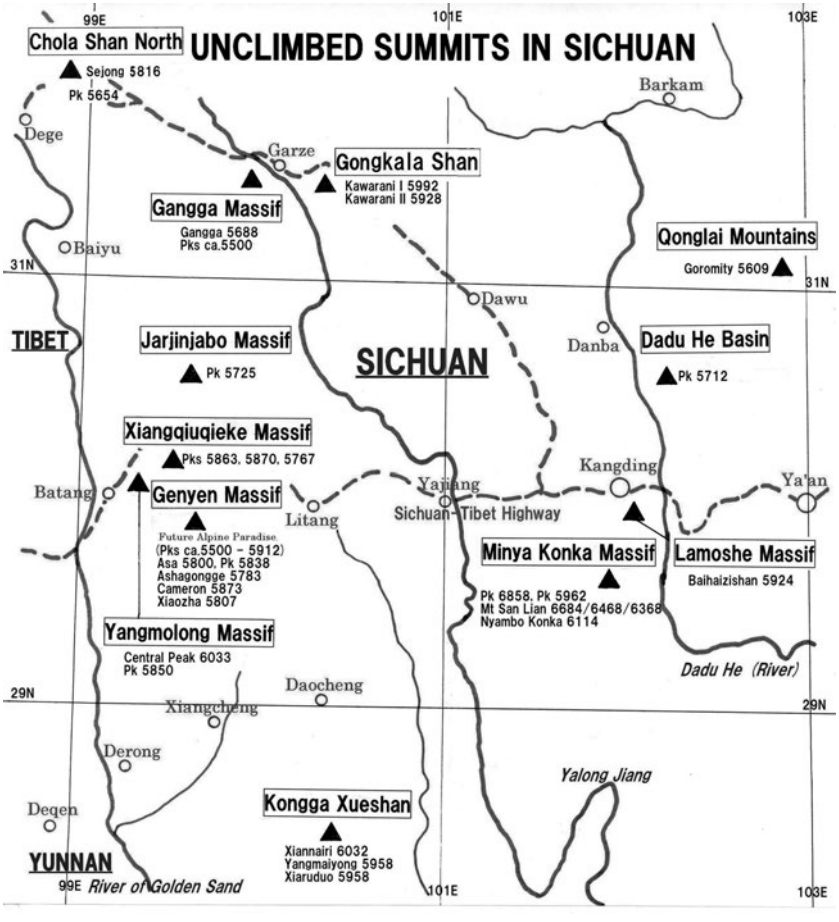
中央峰（マカラ、6033m）、5850m峰、5768m峰

7. 理塘高原 格聂（ゲニ）峰山塊

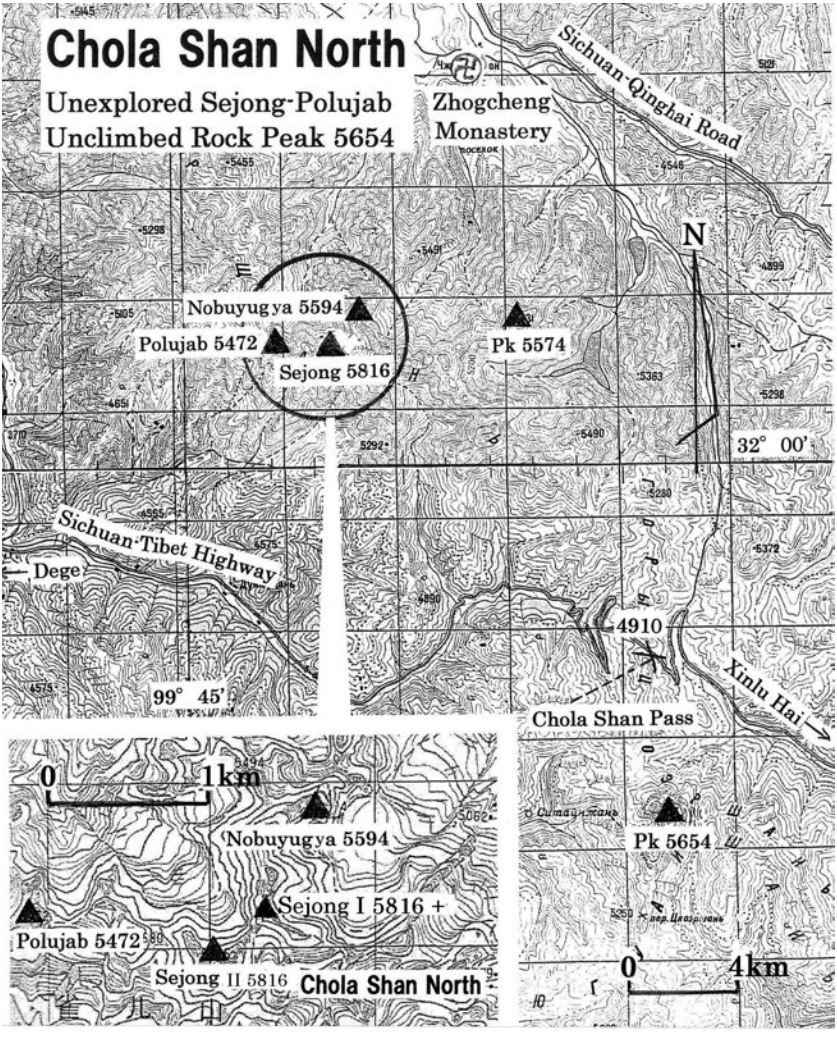
アサ（5800m）、阿沙貢格（5783m）、キャメロン



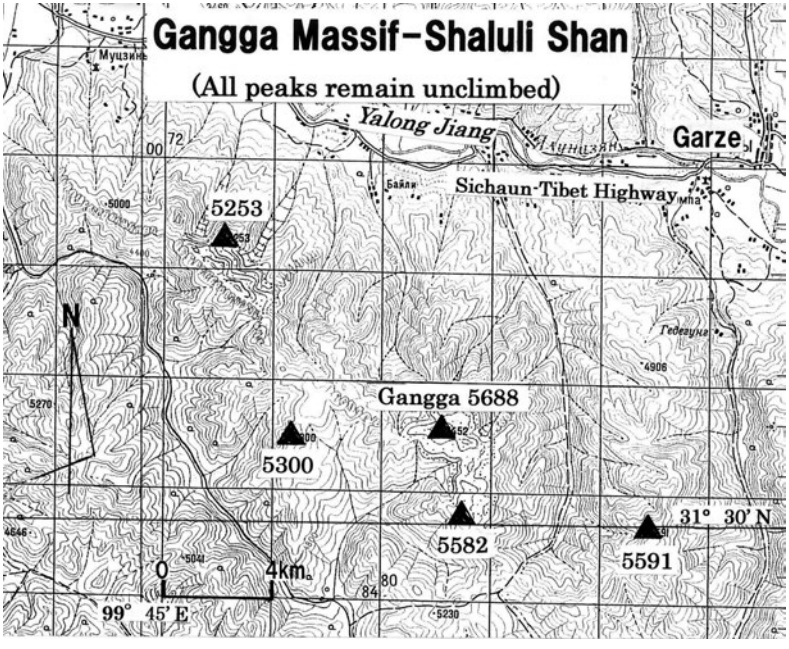
四川省西部高地の未踏峰
99°E
101°E
103°E
31°N
29°N
雀兒山北部—ポルジャボ・セゾン山塊
セジョンI峰 5816+
セジョンII峰 5816
ノブコグア 5594
ポルジャボ 5472
5654m峰
徳格
馬尔康
工卡拉山系
カワロニI峰 5992
カワロニII峰 5928
甘孜
岡嘎山群
岡嘎主峰 5688・5591・5582
ほか5400～5500m峰数座
邛崍山系
ゴロミティ
(日月宝鏡) 5609
白玉
道孚
丹巴
Sichuan
四川省
川蔵公路(北路)
扎金甲博山塊
5725・5500m峰数座
大渡河流域
5712m峰
5571m峰
相丘切克山塊
相丘切克 5863、
5870・5767・5702・
5595・5562mの諸峰
Tibet
西蔵自治区
巴塘
央莫龍山塊
中央峰(マカラ) 6033
5850m峰
5768m峰
理塘
川蔵公路(南路)
雅江
康定
雅安
ラモ・シェ山塊
白海子山 5924
理塘高原—格聶峰山塊
アサ 5800
阿沙貢格 5783
キャメロン 5873
肖扎 5807
その他、無名の5912・5865・5838m、
5700～5800m、
5500～5600mのピーク多数
ミニヤ・コンカ(貢嘎山)山群
6858m峰
三連峰 6684・6468・6368
ニャンボ・コンカ 6114
6206・6130・5962mの諸峰
大渡河
金沙江
雅礱江
稲城
郷城
得荣
徳欽
貢嘎雪山三山
仙熱日 6032
央邁勇 5958
夏諾多季 5958
Yunnan
雲南省
N


UNCLIMBED SUMMITS IN SICHUAN
99E
101E
103E
Chola Shan North
Sejong 5816
Pk 5654
Barkam
Dege
Garze
Gongkala Shan
Kawarani I 5992
Kawarani II 5928
Gangga Massif
Gangga 5688
Pks ca.5500
Qonglai Mountains
Goromity 5609
Baiyu
31N
Dawu
TIBET
Jarjinjabo Massif
Pk 5725
SICHUAN
Danba
Dadu He Basin
Pk 5712
Xiangqiuqieke Massif
Pks 5863, 5870, 5767
Kangding
Ya'an
Batang
Genyen Massif
Yajiang
Litang
Sichuan-Tibet Highway
Future Alpine Paradise
(Pks ca.5500 - 5912)
Asa 5800, Pk 5838
Ashagongge 5783
Cameron 5873
Xiaozha 5807
Minya Konka Massif
Lamoshe Massif
Baihaizishan 5924
Pk 6858, Pk 5962
Mt San Lian 6684/6468/6368
Nyambo Konka 6114
Yangmolong Massif
Central Peak 6033
Pk 5850
Dadu He (River)
29N
Daocheng
Xiangcheng
Derong
Yalong Jiang
Deqen
Kongga Xueshan
Xiannairi 6032
Yangmaiyong 5958
Xiaruduo 5958
YUNNAN
River of Golden Sand

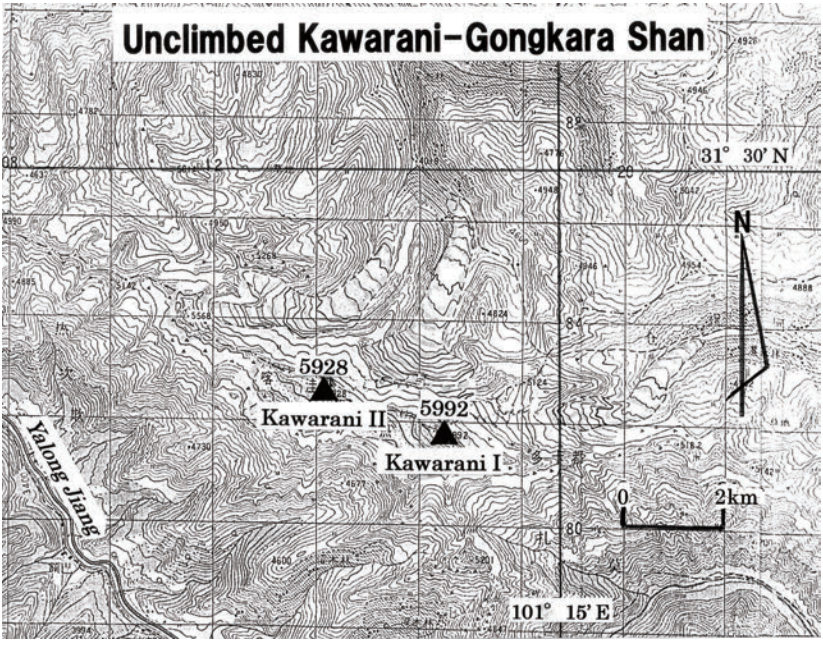
雀兒山北部


Chola Shan North
Unexplored Sejong-Polujab
Unclimbed Rock Peak 5654
Zhogcheng
Monastery
Sichuan-Qinghai Road
N
Nobuyugya 5594
Polujab 5472
Sejong 5816
Pk 5574
32° 00'
Sichuan-Tibet Highway
Dege
99° 45'
4910
Chola Shan Pass
Xinlu Hai
0
1km
Nobuyugya 5594
Sejong I 5816 +
Polujab 5472
Sejong II 5816
Chola Shan North
Pk 5654
0
4km

岡嘎山塊―沙魯山



カワロニ―エ卡拉山



（5873m）、肖扎（58027m）、その他無名の5912m、5865m、5838m、5700～5800m、5500～5600mのピーク多数

8. 貢嘎雪山

仙熱日（6032m）、央邁勇（5958m）、夏諾多季（5958m）

9. ラモシェ山塊

白海子山（5924m）

10. ミニヤ・コンカ（貢嘎山）山群

6858m峰、三連峰（6684、6468、6368m）、ニャンボ・コンカ（6114m）、6206m、6130m、5962mの諸峰

11. チョンライ山系

ゴロミティ（日月宝鏡、5609m）

12. 大渡河流域

5712m峰

1. 雀兒山北部

四川省西部高原の横断山脈の北部の山群である。北西側は雅礱江の支流・玉隆河が、南側は金沙江の支流・麦宿河が取り囲み、山群の北は莫拉山、東南は沙魯里山の岡嘎山塊につながっている。東経99・1度、北緯31・8度に位置している。

雀兒山山群を便宜的に、甘孜から徳格に通ずる川蔵公路（北路）上の雀兒山峠（4910m）を境に南部と北部に分類する。四川省で最も美しい氷河湖・新路海の南に聳える山群の最高峰・雀兒山Ⅰ峰とⅡ峰の6000m峰を擁する南部がメインの山塊であるが、中国人民解放軍の地形図では、峠の北側も雀兒山と表記されている。南部の6000m峰と幾つかの5000m峰はすでに登られているが、峠に近い南側の5654mの顕著な岩峰（116頁上段の写真）は未踏である。

北部は6000mには届かないが、手付かずの山塊である。川蔵公路から分岐して四川省から青海省へ通ずる青康公路沿いの名刹、紅帽派の竹慶寺の南側にある山々である。土地のチベット族は最高峰をセジョンⅠ峰（5816m+）と呼び、Ⅱ峰（5816m）、ポルジャブ（5472m）、ノブユグア（5594m）があり、ほかに幾つかの5400～5500mの峰々が存在する。未踏域ではあるが、氷河は発達していない。2000年秋に中村・永井が初歩的な偵察をしたのち、2011年の夏に東北大の大江隊が同じく北面を偵察しているが、全容の解明と登攀ルートの選定はこれからである。いずれの隊も竹慶寺をベースに行動した。地図と写真は日本ヒマラヤ協会発行の季刊『ヒマラヤ』№459に掲載の、大江隆夫氏の報告を参照されたい。

2. 岡嘎山塊――沙魯里山山系

この山塊は金沙江の支流、雅龍江の南側に沿って雀兒山の東から甘孜の町の南まで、５４００ｍから５６８８ｍまでの峨々たるピークが連なる。標高こそ低いが岩峰が多く、１９１８年に訪れた英国の領事・探検家エリック・タイクマンは、その壮麗さに感嘆している。北面に氷河を懸ける最高峰・岡嘎（５６８８ｍ）は、数年前に長野岳連の隊が試登したが不成功に終わった。これが唯一の記録で、すべてのピークは未踏である。いずれ注目を浴びるであろう。

［注記］　中国の地図では、沙魯里山は理塘高原を縦断して格聂（ゲニ）峰山塊から貢嘎雪山に至る広大な地域を指しているが、山系として隣接する山群との境界は必ずしも明確ではない。

3. 工卡拉山―カワロニ

甘孜の町の南東約30㎞、雅龍江の北側に連なるのが未踏の工卡拉山である。カワロニⅠ峰（５９９２ｍ）、Ⅱ峰（５９２８ｍ）の北面が川蔵公路から望まれる。南面は甘孜から南に通ずる街道から望まれる。英国隊と山梨県の隊が数年前にアクセスしたが、いずれも土地のラマ僧に阻まれて、なすことなく退散している。２０１１年に東北大の大江隊が踏査の候補に取り上げたが、聖山で、地元のチベット族の反対を理由に康定にある甘孜登山協会の許可が取れなかった。現状では外国人によるこの山塊の登山は無理だろう。四川省の山の登山許可の難しさの一例である。地図と写真は季刊『ヒマラヤ』№４５９に掲載の、大江隆夫氏の報告を参照されたい。

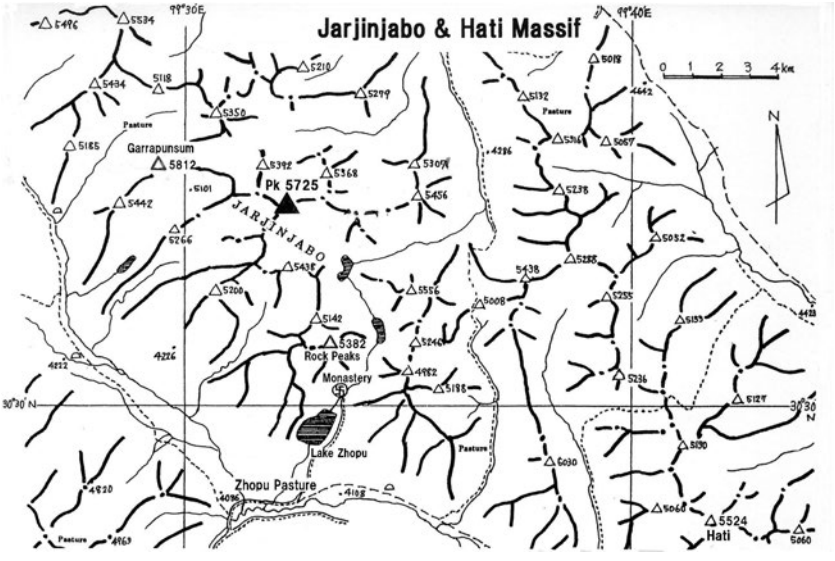
4. 扎金甲博山塊―５７２５ｍ峰

川蔵公路（南路）の北側、夏塞山塊の北に東西に広がる、美しい措普牧場の北に連なるのが扎金甲博山塊である。パタゴニアを小ぶりにしたような５３００ｍクラスの花崗岩の岩峰群と措普牧場、青く澄んだ氷河湖、歴史あるチベット僧院は、シャングリラを彷彿とさせる。２０００年６月に中村と永井が登山家としては初めて入域し、世界に紹介した。２００１年に日本隊が岩峰の１つを初登頂、その後、アメリカ隊がほとんどの岩峰を登った。山塊最高峰のガラプンスム（５８１２ｍ）は、英米隊により２００７年に初登頂された。第２の高峰（５７２５ｍ）が未踏として残されているが、さほど魅力的な山ではない。周辺には５５００ｍクラスのピークが多くあるが、マイナーである。

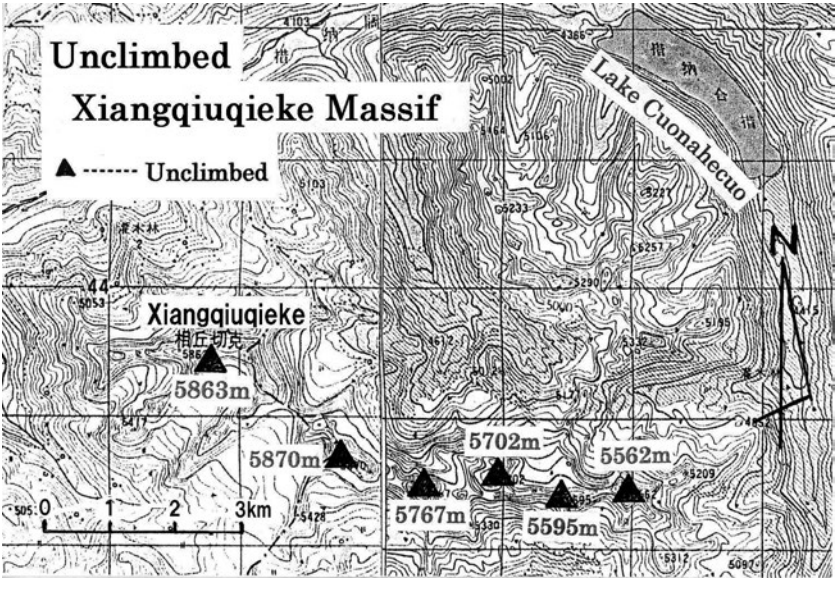
5. 相丘切克山塊

四川省西部高地で最も知れられていない山塊である。川蔵公路の南側、央莫龍山塊の東、理塘高原の西の端、東経90・30度、北緯30・10度に位置する。西から東へ５８７０、５８６７（中

扎金甲博山塊



相丘切克山塊



国名：相丘切克 Xinagqiuqieke）、５７６２、５７０２ｍの顕著なピークが連なり、さらに東に５５００～５６００ｍの峰々が延びている。北側には大きな氷河湖・クオナヘ措がある。この山塊は２００５年秋に、山梨岳連隊により探査された。

２００５年10月に山梨岳連隊が川蔵公路から接近し、初めて北面の山容を大きな氷河湖・措納合措（Cuonahecuo 湖）越しに偵察し、山容が明らかになった。２０１０年夏に中村と永井が南面の偵察を目指したが、土地のチベット族の協力を得られず断念した。２０１１年秋、ニュージーランドの若手クライマー男女のペアが南面から登頂を狙ったが、ベースキャンプから先で突然、村のチベット族の反対に遭い引き返さざるを得なかった。本格的な登攀はこれからの課題である。

6. 央莫龍山塊

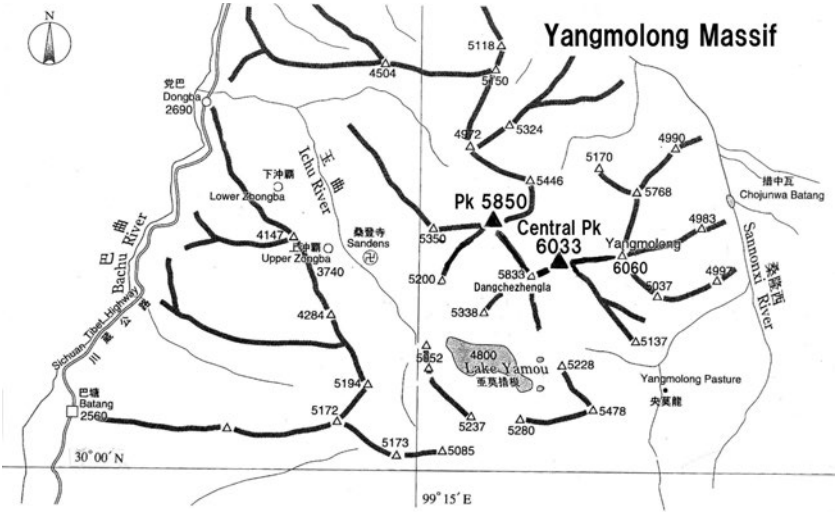
東経99・25度、北緯30・0度、金沙江に近い巴塘の東北東15～20㎞の所に位置している。最高峰の６０６０ｍ峰から西に６０３３、５８３３、５８５０ｍの４つのピークが連なる。山塊の南側には海抜４８００ｍの大きなヤモー湖がある。６月上旬でもまだ全面凍結している。中国人民解放軍の10万分の１の地図には「党結真拉」という名称があるが、土地のチベット族に聞いたところでは、５８３３ｍのピークを指す。央莫龍は付近の放牧地の名前だが、四川登山協会は２つの６０００ｍ峰を央莫龍と呼んでいる。６０６０ｍが主峰、６０３３ｍがマカラ（Makara、中央峰）である。

ＢＣまでのアプローチは近く、巴塘から2日のキャラバンで行けるが、谷によってはチベット族の村人は排他的である。党結真拉（５８３３ｍ）は、２００２年に日本の横断山脈研究会の京都隊が初登頂し、２００７年春に中国隊が第2登、２００７年秋にアメリカ・中国合同隊が北面の新ルートから第3登をしている。２００２年には、韓国隊が６０３３ｍの中央峰を初登頂したとの情報があったが、未確認であるのでここでは未踏とする。

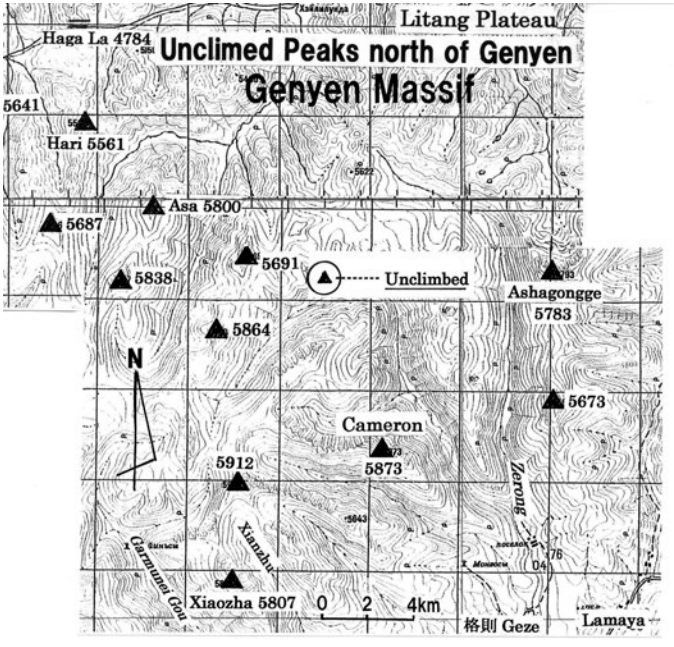
難峰の主峰に最初に挑んだのは１９９１年の日大隊である。以後、英国隊、アメリカ・中国合同隊が２００７年から２０１１年にかけて北面、南面から数回チャレンジし、２０１１年10月に北面から登頂した。

２０１０年11月にジョン・オットー、ティム・ボートラー（Tim Boetler、カメラマン）と中国のクライマーが、北面からヤンモーロン主峰に挑んだ。アプローチの楽な桑曲谷は入ることが禁止されているので、党巴から東の谷に入り、５０００ｍの峠を越えて北面に入った。峠からの下りは急峻で、数回のアプザイレンが必要だったという。苦労して北稜に挑んだが、２００７年の英米隊の５４００ｍとほぼ同じ場所が最高到達点だった。桑曲谷が閉ざされている現在、北面に入るアプローチ・ルートを

央莫龍山塊


Yangmolong Massif
Pk 5850
Central Pk
6033
Yangmolong
6060
Lake Yamou
Yangmolong Pasture
Dongba
2690
Lower Zongba
Upper Zongba
3740
Sandens
Batang
2560
Ichu River
Bachu River
Sichuan-Tibet Highway
Chojunwa Batang
Samonri River
4504
5118
5750
4972
5324
4990
5170
5446
5768
4983
4147
5350
5200
5833
Dangchezhengla
4997
5037
5338
4284
5137
5852
5228
5194
5172
5237
5280
5478
5173
5085
30°00′N
99°15′E

格聂峰山塊


Litang Plateau
Haga La 4784
Unclimed Peaks north of Genyen
Genyen Massif
5641
Hari 5561
Asa 5800
5687
5691
Unclimbed
5838
Ashagongge
5783
5864
N
5673
Cameron
5873
5912
Zerong
Xianzhu
Caermunei Gou
Xiaozha 5807
0 2 4km
格则 Geze
Lamaya

見つけた意義をDave Wynne-Jonesは評価している。アメリカ・中国合同隊の同じメンバーで2011年10月に、2010年と同じルートをたどって遂に初登頂に成功した。ジョン・オットーは、四川の山に最も精通している登山家である。

この山塊で注目されるべき未踏峰は、中央峰と5850m峰を残すだけとなった。

7. 理塘高原 格聂（ゲニ）峰山塊――アルパイン・パラダイス

探検家が目にしてきた沙魯里山山系の中心部、東経99・8度、北緯29・8度に位置するゲニ峰（6204m）は、1988年に日本ヒマラヤ協会隊により南面から初登頂されている。イタリア隊が2005年に東壁の新ルートから第2登、2006年晩秋にアメリカの有名なクライマー、チャーリー・ファウラーとクリストフ・ボスコフが東壁新ルートに挑み、雪崩で遭難死し話題をまいた。2006年にはイタリア隊が第3登をしている。

第2の高峰、猛禽の嘴のような5964mと鋭鋒・サチュン（5716m）はアメリカ隊によりすでに登られてはいるが、ゲニ峰の北～北東に数多存在する未踏の5600m～5900mの岩峰、秀峰は、まさに将来のアルパイン・パラダイスである。主なピークを列挙する。

（1）北面が川蔵公路から見えるアサ（5800m）、阿沙貢格（5783m）

（2）ゲニ峰北東の花崗岩の城砦・キャメロン（5873m）、顕著な肖扎（5807m）

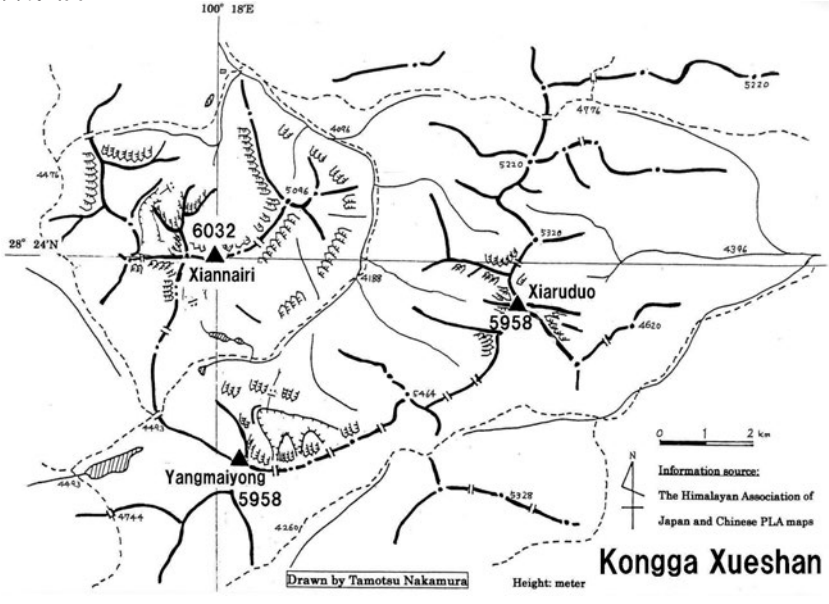
（3）ゲニ峰の北側に集中している5600mクラスの岩峰群と、さらに北側の5833m峰、5700m～5900m峰

理塘からラマヤへ通じる公路の、鍛冶屋三兄弟峠（4800m）付近から望む山塊東面のパノラマは壮観である。

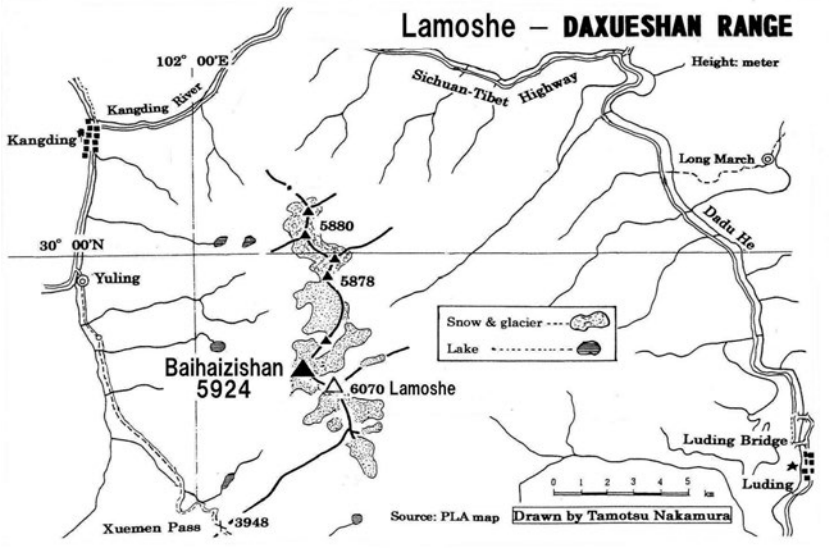
8. 貢嘎雪山――四川のシャングリラ

沙魯里山山系の最南端、東経100・3度、北緯28・4度に位置する。この名称は貢嘎山（ミニヤ・コンカ）と同名で紛らわしいが、古くから使われていた。最高峰の仙熱日（6032m）、央邁勇（5958m）、夏諾多季（5958m）のいずれも未踏の山である。外国人でこの山塊を初めて写真で世界に知らせたのは、ジョセフ・ロックである。1928年に、黄帽派チベット仏教徒の四川省の拠点である木里から接近した。ロックは央邁勇を「ジャムベヤン」と呼び、そのプロファイルでナショナル・ジオグラフィックの表紙を飾った。このピークは6000mにはわずかに届かないが、純白な円錐形のピラッミドは美しい。その秀麗な姿が、聖なる信仰の山として崇拝する人たちに畏怖の念を起こさせても不思議ではない。

貢嘎雪山



ラモ・シェ山塊—大雪山系





雀兒山北部　セジョンⅡ峰(5816 m)北西面。竹慶寺付近より望む　撮影＝大江隆夫



セジョンⅠ峰(左、5816 m+)とノブユグア(右)。竹慶寺付近より望む。撮影＝大江隆夫





岡嘎山塊　5591 m峰東面。甘孜の南の谷から望む



雀兒山北部　5654 m峰北面。雀兒山峠付近から望む



岡嘎主峰(5688 m)北面。甘孜の少し西から望む



カワロニⅠ峰(右、5992 m)とⅡ峰(左、5928 m)。甘孜の南から望む。撮影＝大江隆夫



措普牧場から見た扎金甲博(右の雪の頂、5725 m)南面



相丘切克(5863 m)南面。央莫龍方面より望む。　撮影＝ティム・ボートラー



主峰から見た央莫龍中央峰、マカラ(6033 m)〈右〉　撮影＝ティム・ボートラー



央莫龍山塊　5850 m峰北西面。主峰へのアプローチから望む。　撮影＝ティム・ボートラー



格聂(ゲニ)峰山塊　ca5600 m峰東面。乃谷根巴(ラマ寺)の北の谷から望む。撮影＝カトゥカ・マンドゥロワ





央莫龍主峰（左、6060 m）と中央峰、マカラ（右、6033 m）北東面。川蔵公路方面より望む



貢嘎雪山・仙熱日(6032 m)北面。貢嘎沖古から望む



貢嘎雪山・央邁勇(5958 m)西面。貢嘎沖古の南の谷から望む



ラモ・シェ山塊　白海子山(5924 m)西面。康定付近から望む

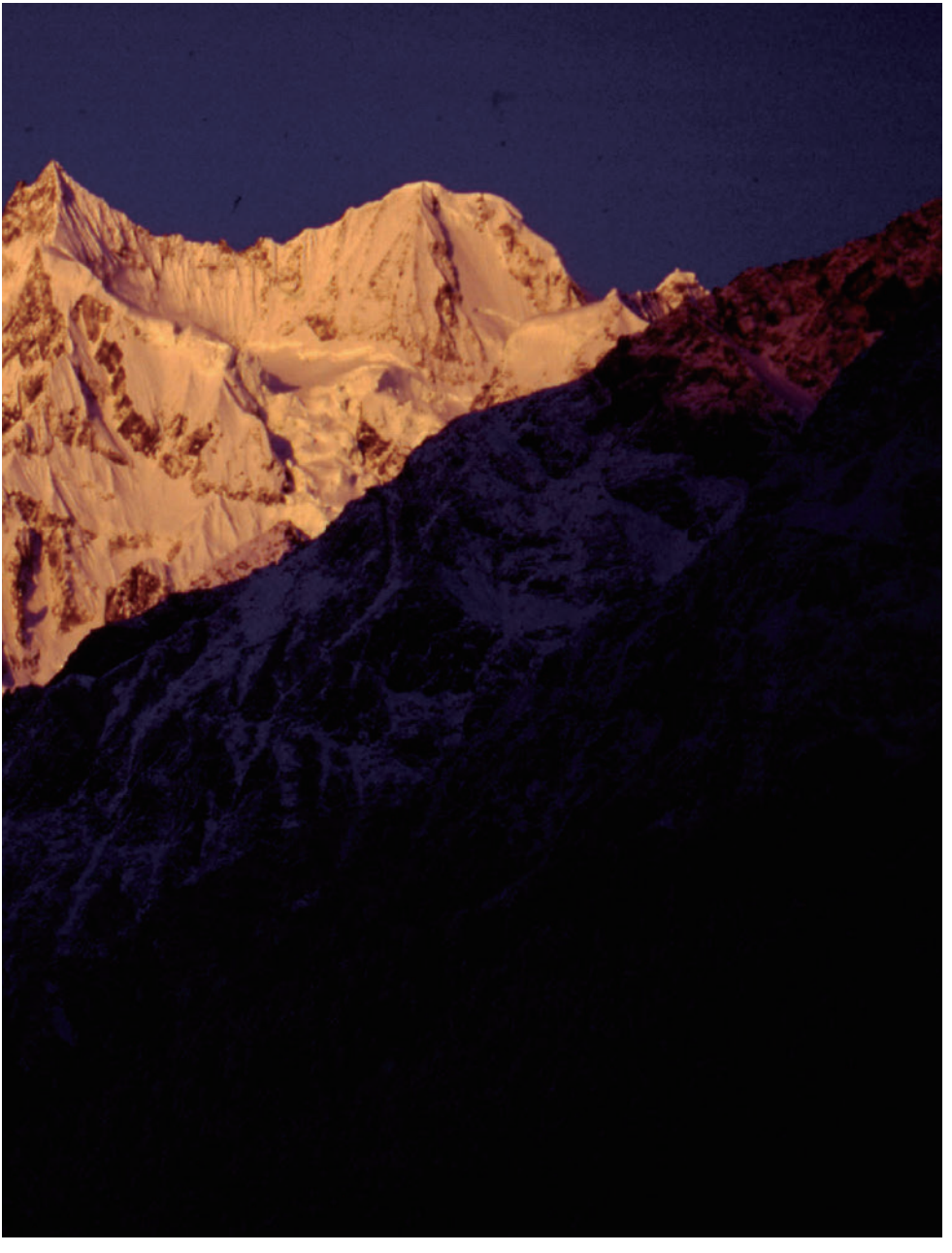


ミニヤ・コンカ山群のニャンボ・コンカ(6164 m)西面。子梅山峠の北から望む　撮影＝ペドロ・デチン





貢嘎雪山・夏諾多季(5958 m)北西面。貢嘎沖古の南の谷から望む





ミニヤ・コンカ山群の三連峰(6684 m、6468 m、6368 m)。ハイルーゴウより望む。撮影＝張少宏



チョンライ山系・ゴロミティ(5609 m)南面。巴郎山峠の北側から望む



大渡河流域　5712 m峰北面。丹巴の南から望む

貢嘎雪山で本格的な登山が試みられたのは、１９８９年になってからである。日本ヒマラヤ協会隊が仙熱日を狙ったが、登れなかった。１９９３年には２人のアメリカ人が央邁勇を試登したが、歯が立たなかった。その後、アメリカのナショナル・ジオグラフィックの隊が夏諾多季に挑んだが、登れなかった。２００６年秋、ゲニ峰で遭難死したチャーリー・ファウラーとクリスティン・ボスコフは無許可でアタックし、頂上500ｍまで迫ったが、雪の状態が悪く断念した。現在はすっかり観光地化が進み、基地になる町には香格里拉（シャングリラ）の名前が付けられている。稲城県当局が自然環境を厳しく管理しており、地元チベット族の聖山であることから、登山許可を取るのは難しい。

9. ラモ・シェ山塊

康定のすぐ東側の山塊である。山名の由来は定かではない。１９３０年にミニヤ・コンカを中心に大雪山を本格的に探査・測量したアーノルド・ハイムの地図には載っているが、ラモ・シェは最高峰（６０７０ｍ）の名称で、山塊全体に対しては打箭炉山と記している。ラモ・シェは１９９３年にアメリカ隊が初登頂した。その後、アクセスの便利さもあって脚光を浴びて、未熟な中国パーティが遭難事件を引き起こしている。２００９年にチェコのクライマーが単独で第２登をした。

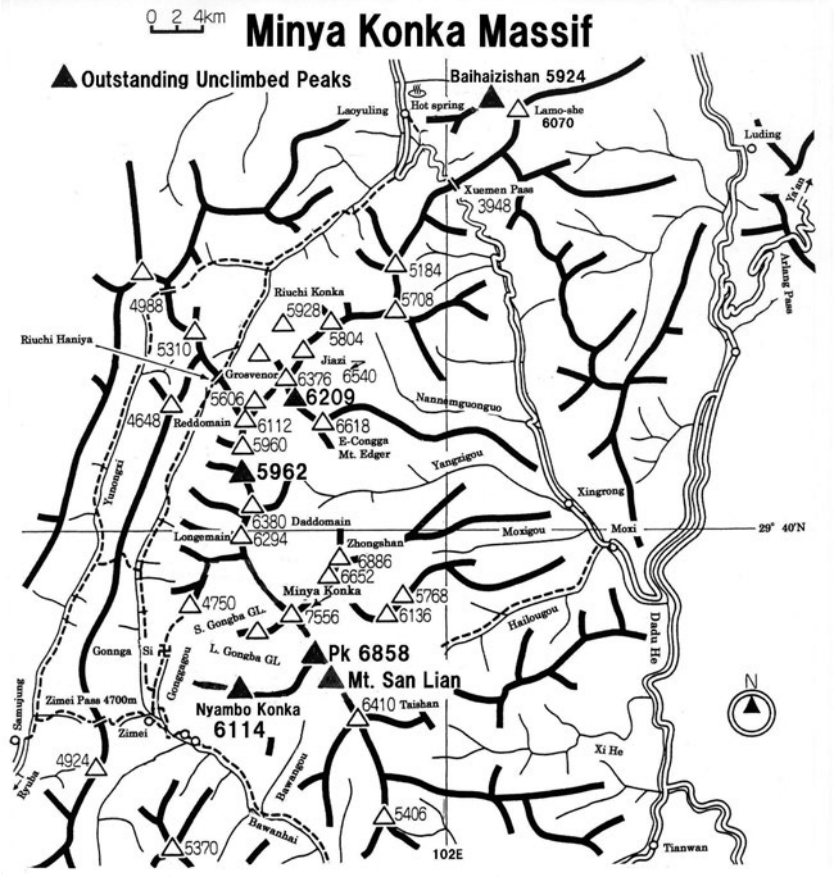
山塊は主峰ラモ・シェから北に連なるピークで構成されている。白海子山（５９２４ｍ）、笔架山（５８８０ｍ）、蛇海子山（５８７８ｍ）、さらに幾つかの５５００～５６００ｍのピークがある。１９９３年にフレッド・ベッキーのアメリカ・カナダ・ＮＺ合同隊がチャレンジし、蛇海子山を初登頂した。その後、中国隊も挑んでいる。残る未踏のピークは白海子だけである。懸垂氷河と岩の登攀が主体となる、難しそうな山である。康定の街から直接谷に入ってＢＣを造り、ただちに登攀を始められるほど至近な位置にある。

10. ミニヤ・コンカ（貢嘎山）山群――大雪山系

チベット語で「最も高い雪の山」を意味する貢嘎山は大雪山山系の中部、チベット高原の東の端にある。南北60㎞、東西30㎞にわたり、主峰（７５５６ｍ）は東経１０１・８度、北緯29・６度に位置する。絶え間ない地殻活動が複雑な褶曲構造を造り、東西のスロープは河床まで５０００ｍの高度差がある。衛星峰を含め20以上の６０００ｍを超えるピークがある。氷河も発達している。

ミニヤ・コンカ主峰（７５５６ｍ）は１９３２年に初登頂されて以来、２００２年までに８回登られた。ルートは１９９８年、韓国隊の北東稜以外はすべて北西稜経由である。ミニヤ・コンカは日本にとって「悲劇の山」である。１９８１年に北海

ミニヤ・コンカ（貢嘎山）山群



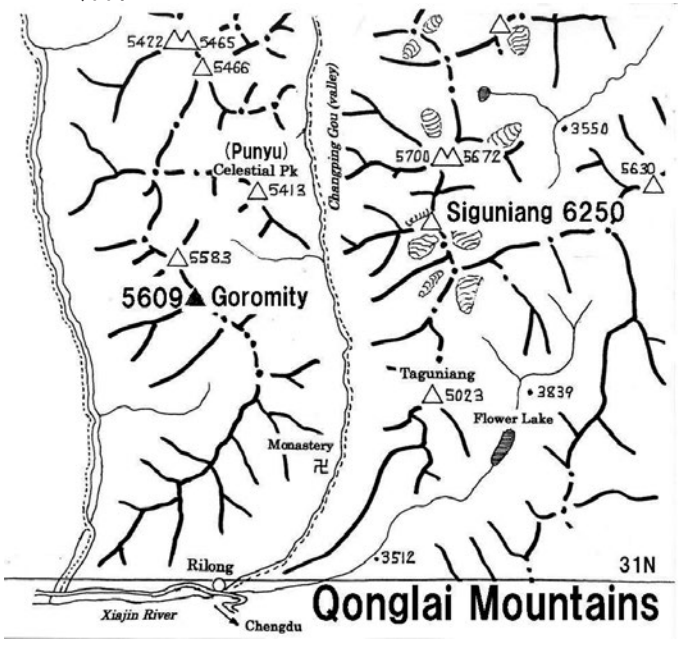
道山岳連盟隊は、滑落によって8人を一度に失う大量遭難を引き起こした。1982年には市川山岳会・松田宏也氏の奇跡の生還。このとき仲間の1人が遭難死している。1994年には日本ヒマラヤ協会隊が4人を失った。すべて北東稜を目指した隊が引き起こした遭難である。北海道山岳連盟隊は1997年に登頂し、ようやく悲願を果たした。主峰ミニヤ・コンカの登頂と衛星峰の初登頂のクロニクルをまとめてみた。

1932年：ミニヤ・コンカ初登頂　北西稜　アメリカ隊
1957年：ミニヤ・コンカ第2登　北西稜　中国隊　6名死亡
1981年：中山峰（6886m）、岱山（6410m）初登頂　スイス隊
チブロンギ・コンカ（5928m）初登頂　英国隊
1982年：ミニヤ・コンカ第3登　北西稜　スイス隊
ミニヤ・コンカ第4登　北西稜　アメリカ隊
嘉子峰（ジアズ、6540m）初登頂　アメリカ隊
1984年：ミニヤ・コンカ第5登　北西稜　ドイツ隊
1997年：ミニヤ・コンカ第6登　北西稜　日本隊（札幌）
1998年：ミニヤ・コンカ第7登　北東稜　韓国隊
1999年：レドメイン（6112m）初登頂　日本隊（学習院大）
2001年：マウント・エドガー（6618m）初登頂　韓国隊
2002年：ミニヤ・コンカ第8登　北西稜　フランス隊
2003年：グロヴェナー（6367m）初登頂　英国隊
2004年：ダドメイン（6380m）、ロンジメイン（6294m）初登頂　NZ隊
2008年：ドノゴンバ（5960m）初登頂　アメリカ隊
2009年：無名峰（6134m）初登頂　ロシア隊

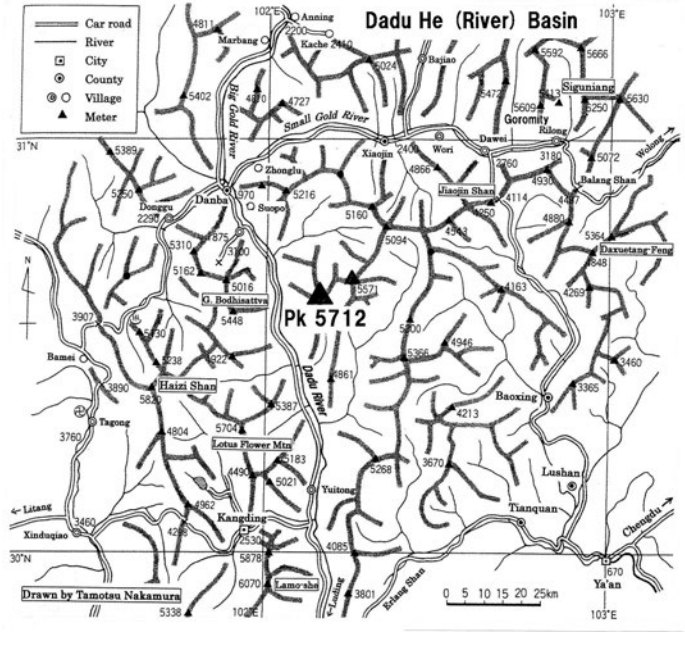
四川省で最大を誇るこの山群に残されている未踏の6000m峰は少なくなったが、まだ数座はある。ミニヤ・コンカ主峰から南に延びる山稜上の6858m峰、6684m、6468m、6368mの三連峰、および南西にあるニャンボ・コンカ（6114m）、主峰の西の6418m峰と、マウント・エドガーと嘉子峰を結ぶ主稜線上にある6206m峰と6130m峰、ダドメインとドノゴンバの間の5962m峰がまだ登られていない。ニャンボ・コンカは2009年にアメリカ隊が挑んで敗退しているが、あとのピークは手付かずである。

衛星峰のマウント・エドガーの圧倒的な東南壁、グロヴェナー西壁、ダドメイン東壁に新ルートが開拓されているが、最大の

邛崍(チョンライ)山系



大渡河流域



課題として残されているのは、主峰ミニヤ・コンカの南西壁である。今年（２０１２年）、アメリカ隊が狙っている。

11. 邛崍（チョンライ）山系――四姑娘山と岩峰群

チョンライ山系は大渡河と岷江の分水嶺を形成している。今は観光客とトレッカーで賑わっている最高峰の四姑娘山（６２５０ｍ）も、チベット族により聖山として崇められている山である。高さの順に６２５０ｍ、５６６４ｍ、５４５４ｍ、５３５５ｍの４つのピークが並ぶ。主峰（６２５０ｍ）は東経１０２・９度、北緯31・1度に位置する。岩と氷の殿堂、主峰の登攀史を簡単に記す。

１９８１年：同志社大学隊により南面から東稜を経て初登頂
１９９２年：広島山の会隊が南壁初登攀
１９９４年：アメリカのチャーリー・ファウラーが単独で南壁の別のラインを登攀
２００２年：英国のミック・ファラー（現アルパイン・クラブ会長）が北西壁を初登攀
２００４年：アメリカのジョン・オットー率いる中国隊が東稜経由登頂
２００８年：アメリカのジョンソン・ケロッグ組が北西稜初登攀
２００９年：中国人クライマー、ヤン・ドンドンのパーティが南壁に新ルートを開拓
２００９年：ロシア隊ムルシェフが北西壁を新ルートで登攀（その後の登攀は省略）

四姑娘山および周辺の岩峰群開拓の先駆者は、アメリカのクラマーである。ここ30年の間に岩峰群はほとんど登られた。１９８３年に天を突く円錐形の岩峰、神山・プニュー（セレスティアル・ピーク、５４１３ｍ）を、アメリカ隊が初登したのが最初である。１９９０年代に幾つかの顕著なピークが登られているが、近年、岩壁登攀がますます活況を呈している。欧米クライマーの登攀は枚挙に暇がないが、２００５年夏の山野井泰史のポタラ山北壁初登攀と、２０１０年の山梨岳連の牛心山東南壁初登攀は記しておこう。２０１０年にアメリカ隊がセエルデンプ（野人峰、５５９２ｍ）を初登頂したので、四川在住の写真家、大川健三さんに確かめていただいたところ、確実に未踏峰と言えるのはゴロミティ（５６０９ｍ）だけ、との情報を得た。ゴロミティ（中国語名：日月宝鏡峰）については季刊『ヒマラヤ』№459に掲載の、大江隆夫氏の報告（テキスト・地図・写真）を参照されたい。

12. 大渡河流域

大雪山の主脈からかなり離れ、大渡河の東側の一部はチョンライ山系に入るが、広域的に捉えてここに分類しておく。川蔵公路の北、丹巴までの大渡河峡谷の東西両側には、多数の５００ｍ峰が存在する。左岸の無名の最高峰（５７１２ｍ）など、山容は特定されていない。東は長征の難行軍で名高い４０００ｍクラスの夾金山であり、民族的にはチベット族から羌族に住み分けが移っていく地域である。夾金山はその東端でチョンライ山系につながる。メジャーではないが、知られざる山域と民俗・歴史を紀行する楽しみが残されている所である。

日本山岳会会員・棟方志功と立山

五十嶋一晃

はじめに

立山の雄山神社峰本社は江戸時代末期に建て替えられたが、それ以前の部材といわれている板に、棟方志功画伯から「天地合掌之所」という墨書を揮毫していただいた。それを２００２（平成14）年に富山県「立山博物館」へ寄贈した、という話を富山市の岳人から聞いた。由緒ある板に「天地合掌之所」と書かれた名言に感動を覚え、棟方志功の登山について関心を持ち、資料の収集を始める。

調査を重ねているうちに、棟方志功が１９４５（昭和20）年、富山県福光町を疎開先として選んだのは、民芸関係よりも、むしろ能の「善知鳥（うとう）」との関わりが原点であることを知る。筆者は以前から立山地獄説話の一つである能の「善知鳥」を学ぶ機会があり、立山博物館を訪れて学芸員から説明を受けたことや、能楽の修業にいそしんでからちょうど50年に及んでいる友人がおり、親善公演のために2回カトマンズを訪れ、エベレストを遊覧飛行で眺めているなど浅からぬ因縁があり、「棟方と立山」についての興味が増幅した。

当然ではあるが、世界のムナカタに関する作品（板画、倭画、油画、書、着物、陶器や俳句、短歌と書籍）や類稀な人柄については、棟方志功の多くの作品集、文献・資料があり、かつ詳細に述べられている。ところが、棟方が日本山岳会富山支部の会員であったことについては、いずれにも全く触れられていない。棟方の常設展示館である福光美術館の館長ですら、棟方が会員であったことは初耳であるという。棟方は自然を好み、立山へ3回登っている。その折に、山で制作した作品を山小屋などに残していたことも判り、これを機会に「棟方の山」をまと

めてみたいと考えた。

ここでは棟方志功に関わる情報の内、関係者の間では多少知悉されているものの、一般的には全く知られていない棟方の登山に焦点を当て、疎開先であった富山福光時代、つまり日本山岳会富山支部時代を中心に、「棟方の山とその心」を汲み取りたいと考える。

そこで、富山県南砺市福光にある福光美術館と棟方の疎開先住居であった「愛染苑」を、豪雪の2月6日に訪れ、奥野達夫館長より懇切丁寧な説明を受けた。

筆者の方から館長には、福光美術館の常設展示の一人である石崎光瑤画伯は、日本山岳会の会員（１９０８〈明治41〉年5月入会、１５０番）で、１９０９（明治42）年7月24日、近代登山としての剱岳初登頂者4人の内の一人であったこと。１９１６（大正5）年に単身インドに渡り、8ヶ月余りに及ぶ旅行でヒマラヤの諸峰を撮影していることなど、光瑤の登山における足跡を語り、同じく剱岳初登者の一人である福光出身・元小松製作所会長の河合良成氏も日本山岳会の会員（１９０９〈明治42〉年5月入会、２０３番）であったことなどを話した。

一方、棟方が「毛勝山」を描いたといわれる2枚の油絵は、棟方の心や意識に浮かんだ風景、つまり心象風景を描いたもので、毛勝山以外の山を描いている、と判断するに至った。それについても取り上げてみたい。

なお、棟方のみが使っている言葉があり、その主なものの意味を棟方の著書から引く。

＊板画（はんが）＝「わたくしも板画をはじめたころは、版という字を使っていたんだが、板画の心がわかってからは、やっぱり板画というものは板が生まれた性質を大事にあつかわなければならない、木の魂というものをじかに生み出さなければダメだと思いましてね。ほかの人たちの版画とは別な性質から生まれていかなければいけない。板の声を聞くというのが、板という字を使うことにしたわけなんです」（『花深処無行跡』より）。１９４２（昭和17）年に発行した、随筆集『板散華』の後記で「版画」を「板画」と改めることを宣言している。

＊柵（さく）＝「（柵というのは）四国の巡礼の方々が寺々を廻られるとき、首に下げる、寺々へ納める廻札、あの意味なのです。この札は、一ツ一ツ、自分の願いと、信念をその寺に納めていくという意味で下げるものですが、わたくしの願所に一ツ一ツ願かけの印札を納めていくということ、それがこの柵の本心なのです。ですから納札、柵を打つ、そういう意味にしたいのです。……一柵ずつ、一生の間生涯の道標を一ツずつ、そこへ置いていく。作品に念願をかけておいていく、柵を打っていく。そういうことで『柵』というのを使ってい

るのです」（『板極道』より）。

＊裏彩色＝「これ（裏彩色）は裏から絵具を着彩するのではなくて、しみ込ませるというところにねらいがあります。板木につけた墨がしみこんで出来上がる道程と同じように、絵具が紙の裏面から、表面にしみ込んで行くということが、板画の性質にさからわない道程なのです。自然に筆を通じて色彩が、板されて行くのです。描かれたものではなく、しみ込んで行くことによって、板画と同じ他力により出来栄えを見ることができるのです。そういうところから『裏彩板画』ができました。墨一色では感じがこめられない、というときの表現様式の一つにこの技法を考えました」（『板画の話』より）。

＊ほかの主な言葉では、油画（あぶらが）とは「油絵」を、倭画（やまとが）とは大和絵、墨描きの着彩画をいう。

なお、これ以降、各位の敬称は省略する。

1．板画（版画）家・世界の「ムナカタ」

棟方志功については、万人が知るところである。また、すでに多くの人によって語られており、ここで棟方論を展開するつもりはない。しかし、「棟方の山とその心」の理解を深めるために、少々おさらいしておきたい。主な受賞（章）・外国での活動に限定して一覧にしたので一読願いたい。

・1930（昭和5）年1月、26歳、第7回白日会展で油絵「澄秋」などを出品、白日賞受賞。

・1932（昭和7）年1月、28歳、第9回白日会展に油絵「荘園」などを出品、F氏賞受賞。

5月、第7回国画会展「亀田長谷川邸の裏庭」で奨学賞受賞。

・1938（昭和13）年10月、35歳、第2回文展に「勝鬘譜（しょうまんふ）・善知鳥版画曼荼羅」（のちに「善知鳥版画巻」に改題）31棚のうち9棚を出品し、版画では初の特選受賞。

・1940（昭和15）年3月、36歳、第15回国画会展に前年制作の「呵吒譜・二菩薩釈迦十大弟子版画屏風」（のちに「釈迦十大弟子」に改題）を出品し、翌年4月、37歳、佐分賞受賞。

・1946（昭和21）年10月、43歳、第2回日展に前年に制作した「鐘渓頌・公案『鯉雨』板画経」（のちに「鐘渓頌」に改題）を出品し、岡田賞受賞。

・1952（昭和27）年4月、48歳、スイス・ルガーノで開催された第2回国際版画展に「女人観世音板画巻」を出品し、優秀賞受賞。

・1955（昭和30）年7月、51歳、第3回サンパウロ・ビエンナーレに「釈迦十大弟子」「湧然する女者

達々」などを出品し、版画部門最高賞受賞。

・1956(昭和31)年6月、52歳、第28回ベニス・ビエンナーレに「釈迦十大弟子」「柳緑花紅頌」など11点を出品し、国際版画大賞受賞。

・1958(昭和33)年1月、54歳、「ヨーロッパ巡回日本現代絵画展国内展示会」が開催され「湧然の柵」ほか2点を出品する。その後、イタリア、ドイツ、フランス、ユーゴスラビア、エジプト、イランの6ヶ国11都市を巡回する。

・1959(昭和34)年1月、55歳、ロックフェラー財団とジャパンソサエティーの招きで渡米。ニューヨーク、ボストン、クリーブランド、シカゴ、シアトル、サンフランシスコの各地の大学で板画の講義と個展を開催。夏、ヨーロッパを旅行し、このときゴッホの墓を訪れ、11月帰国。

・1960(昭和35)年2月、56歳、青森県褒賞受賞。日展評議員となる。

・1962(昭和37)年1月、58歳、富山県・真言密宗大本山日石寺より法眼位を受ける。京都市嵯峨の法輪寺より法眼位を再叙位される。

・1963(昭和38)年4月、59歳、藍綬褒章を授与される。

・1965(昭和40)年1月、61歳、日本の木版画に尽くした功績により1964(昭和39)年度朝日文化賞受賞。

2月、ワシントン大学の招きで2度目の渡米をし、ワシントン大学で「日本の木版画」について講義する。イタリア・フローレンス学士院から名誉会員に推される。

6月、ダートマス大学から名誉文学博士号を受ける。

12月、62歳、東京国立近代美術館に版画を寄贈したことにより紺綬褒章を授与される。

・1968(昭和43)年1月、64歳、ニューヨークを出発し、帰国の途につく。途中、ハワイ大学で板画について講義する。

5月、青森市制施行70周年記念式に際し功労者として表彰される。

・1969(昭和44)年2月、65歳、青森市名誉市民（第1号）の称号を贈られる。

・1970（昭和45）年1月、66歳、第11回毎日芸術大賞受賞。11月、67歳、文化勲章を授与され、文化功労者として顕彰される。
・1975（昭和50）年9月13日、72歳、死去。同日付で従三位に叙され、銀杯1組を賜る。

詩人の草野心平は棟方と肝胆相照らす間柄であったが、草野に「わだばゴッホになる」と題する次の詩がある。

〝鍛冶屋の息子は。／相槌の火花を散らしながら。／……／わだばゴッホになる。／とわめいた。／ゴッホになろうとして上京した貧乏青年はしかし。／ゴッホにはならずに。／世界の。／Munakata になった。〟と詠んだ。棟方を表す名句である。

2．立山地獄と青森を結ぶ能「善知鳥」

棟方志功が富山、特に霊峰立山となぜ結びついたのであろうか。福光美術館館長は、棟方が太平洋戦争中の疎開先に富山を選んだ本当の理由は、立山への畏敬の念が一番の動機であると思う。富山で最も心を寄せたのは立山であろう。立山連峰の山々や水辺に咲く草花の美しさに感動した。その中でも特に地獄谷は棟方にとって関心が強かった。それは能の「善知鳥」が原点である、と指摘する。

能の「善知鳥」は、作者不明、曲の成立についても未確定ではあるが、初演は1465（寛正6）年2月、将軍・足利義政の援助により、シテ観世（音阿弥）で上演された。場所は前（マエ）の場面は越中国（富山県）の立山、後（ノチ）の場面は陸奥国（青森県）の外の浜（謡曲では「外ヶ浜」を「外の浜」としている）が舞台である。「ウトウ」とは東北や北海道の沿岸に生息するウミスズメ科の海鳥をいう。

このように棟方の生地である青森の外ヶ浜と富山の立山地獄は、能の「善知鳥」の舞台でつながっている。外ヶ浜とは陸奥湾に面した地域、青森市と東津軽郡一帯の古称であり、現在の青森市は、江戸時代の1624（寛永元）年、青森村になるまで善知鳥村と呼ばれていた。その後、1889（明治22）年4月に青森町、1898（明治31）年4月に青森市となる。棟方が生まれた1903（明治36）年の住所は青森市大字大町1番戸で、現在は青森市安方に変わった。

善知鳥神社の門前で生まれ育った棟方は、1930（昭和5）年4月、赤城チヤとの結婚式を善知鳥神社で行なっており、旧善知鳥村には特別な郷愁を抱いていた。棟方は言う。「私は今でもこの名、善知鳥をそのまま善知鳥市でありたかった。青森市というより善知鳥市の方がどんなにかこの街の名にふさわしいことか知れない」と言ってはばからない（2008年12月28日付、日本経済新聞）。青森・善知鳥村の子、棟方志功は、こうして立山と結縁していたのである。



能楽「善知鳥」後(ノチの場面)シテの老人　写真提供＝観世流十三世　林喜右衛門師

謡曲「善知鳥」のあらすじは、前の場面の立山では、諸国を旅する修行僧が、陸奥外の浜へ行く途中、越中の立山に立ち寄る。立山の霊場に着いた僧の目前には、地獄さながらの風景があり、その恐ろしさにおののきながら下山を始めると、一人の老人に出会う。老人は「私は外の浜の猟師をしていた者で、去年の秋に死にました。陸奥へ行くのであれば外の浜の猟師の家を訪ねて、妻子に蓑と笠を手向けるよう伝えて欲しい」と頼む。そして証として、老人は自分が着ていた麻衣の片袖をちぎって僧に渡し、僧が立ち去るあとを見送りつつ姿を消す。

後の場面では、僧は外の浜の猟師の家を訪ね、妻子に老人の伝言を語る。妻は驚きつつ亡夫の形見の衣を取り出し、僧が預かった片袖を合わせてみると、ぴたりと重なった。やがて僧が蓑と笠を手向けて死者のために仏事を営み、冥福を祈ると猟師の霊が現れる。亡霊は、後世の報いも忘れて殺生に明け暮れ過ごした在りし日を語り、鳥の中でも親子の情愛が深いと言われる、善知鳥ばかりを殺した罪を懺悔する。冥土で化鳥となった善知鳥に追いかけられ、地獄の責め苦を受ける有様を見せ、どうか自分を助けて欲しいと僧に弔いを頼みつつ亡霊は消え失せる、というストーリーであり、生きるために罪を犯してしまう人間の業を鋭く描いた作品である。

棟方に「善知鳥」という能を教えたのは、1938（昭和13）年当時、内閣統計局労働課長、のちに東京鉱山監督局長で民芸運動に関わりのあった水谷良一だった。民芸運動を起こし、日本を代表する思想家である柳宗悦の指示で、水谷は棟方に教育を施す立場にあった。水谷はまず、棟方がこれまで謡曲に取材した板画を制作していないので、それを描く話を持ちかける。まだ能を知らなかった棟方に、能の基礎からじっくり説明したうえで、棟方の故郷である青森が舞台の「善知鳥」という謡曲があることを説明する。曲の説明が終ると、水谷はやおら立ち上がって、棟方の目の前で「善知鳥」の曲を謡い、かつ舞い始めた。

棟方は記す。「水谷様の『善知鳥』の舞が続きます。名人に達した舞でした。すざましく恐ろしく、烈しく哀しい舞でした。わたくしは、両手がワナワナとふるえて気が昂りました。コレダ、コレダと感動しました。舞が終るとわたくしは、頭と手を畳につけて『では、さようなら』と言って駆け出しました。すっ飛ぶようにして水谷様のお宅を出、道々『善知鳥、善知鳥、善知鳥』と声を出して、駆けに駆けました。素晴らしい演出である。素晴らしい感動ぶりである」と。そして「『善知鳥』の板画にとりかかりました。『大和し美し』の時と同じように、食べるのも眠るのも忘れました。仕事になると、わたくしは夢中でした。十五枚の板に表裏三十面の『善知鳥』が出来上がり、わたくしは水谷様に見せました。『こうも、よくやった』と水谷様は

感動して下され、そのうち九図を選んで、文展に出品してはどうかと言って下さったのでした」（「私の履歴書」）。このような感動の高まりから傑作が生まれている。

「善知鳥」の版画は、謡曲と同じようでは型にはまり過ぎるので、能からなるべく離れて、版画独自の構想で描いている。したがって善知鳥の版画には、謡曲の場面にないものが出てくる。

この作品は、１９３８（昭和13）年5月に日本民芸館で展示されたあと、その中から8図を選び、新たにカットにあたる三面六臂六足の像を加え、「勝鬘譜（しょうまんぷ）」、善知鳥版画曼荼羅（のちに「善知鳥版画巻」に改題）」と題して10月の第2回文展に出品した。審査員は油絵を専門に描いている人たちのみであったが、帝展・文展を通じて官展では初めて版画が特選受賞という、嬉しくも忘れられない作品になった。これで棟方は一躍版画界の新しい波として嘱望され、また画壇での地位を確立した。

立山地獄信仰の内、能「善知鳥」の位置づけについて若干触れておきたい。立山地獄説話が文献に現れたのは、平安中期、１０４０年代ごろの成立とする『大日本国法華経験記』第１２４「越中国立山女人伝」、および平安末期、１１２０年代ごろ成立とする『今昔物語集』巻第14の「修行僧が越中立山に至り小女に会う語・第7」、「越中国書生の妻、死にて立山地獄に堕つる語・第8」と巻第17の「越中立山地獄に堕つる女、地獄の助を蒙る語・第27」である。この2つの仏教説話集には、越中立山の地獄は死者の霊魂が集まる所として登場し、立山は山中に地獄がある山として、山岳修行者や都の貴族・僧侶の間で認識されていた。鎌倉初期（１１９２～１２４０年）に入ると、増補国語辞典『伊呂波字類抄』10巻本の「立山大菩薩顕給本縁起」には、立山山中に八大地獄の顕現したことが記されている。

室町時代の能「善知鳥」は、平安末期のころには貴族社会に知れ渡っていた『今昔物語集』の「立山地獄説話」を主な素材としており、12世紀の『地獄草紙』などに見られる「鶏地獄」のモチーフや、津軽地方の『新撰歌枕名寄』の「善知鳥説話」などが組み合わされて成立した。室町時代の１４６５（寛正6）年に初演となったが、永きにわたる説話を、幽玄な能の美で表現したのである。

3．富山福光疎開時代

疎開前の棟方志功および家族については次のとおり。

棟方志功は１９０３（明治36）年9月5日、青森市で刃物鍛冶職・棟方幸吉、さだの3男、9男6女の第6子として生まれる。１９１０（明治43）年に青森市長嶋尋常小学校に入学。小学校のころから凧絵とネブタに興味を惹かれ、絵を描く。

１９２０（大正9）年、17歳で青森地方裁判所の弁護士控所給仕となり、仕事の合間に合浦公園などへ写生に出かける。この年、母さだが41歳で死去。１９２１（大正10）年の春、青森

在住の洋画家小野忠明が、雑誌『白樺』に掲載されたゴッホの「ひまわり」の原色版を棟方に見せ、棟方はそれに感銘を受けて油絵制作の意欲が高まる。１９２４（大正13）年、21歳の９月に絵の修行のため上京し、翌年の２月に、東京教材出版社に１年半ほど住み込みで勤務する。10月26日、父幸吉が56歳で死去。

１９３０（昭和５）年４月、青森市善知鳥神社において赤城チヤと結婚し、翌年の６月、長女けよう。１９３３（昭和８）年10月、長男巴里爾（ばりじ）。１９３５（昭和10）年９月、次女ちよゑ。１９４１（昭和16）年11月、次男令明（よしあき）が生まれる。

太平洋戦争が激しくなり、東京も空襲の危険が迫った１９４５（昭和20）年４月、棟方一家は、民芸仲間で福光町の光徳寺の住職・高坂貫昭の世話で、町の女医・松井寿美子の協力を得て、富山県礪波郡福光町に疎開する。棟方41歳であった。１９５１（昭和26）年、48歳の11月に、疎開先の福光町から東京都杉並区荻窪に転居した。福光には６年８ヶ月の間、居を構えていた。

この期間に日本山岳会富山支部が発足し、支部会員になる。退会年月は明確ではないが、東京へ帰るまでの期間は会員であったと思われる。一番働き盛りのこの時期であるが、そのひとこまについて簡単に触れる。

この期間の棟方および家族に対しての受け止め方は、人によって偏りがあり、ここではいろいろな代表的見解を織り交ぜ、棟方の「福光との関わり」と「蜃気楼にあこがれた魚津」について述べる。

まず、「福光との関わり」であるが、棟方と福光とのつながりは１９４０（昭和15）年から始まる。１９３８（昭和13）年に、福光の浄土真宗光徳寺の住職・高坂貫昭が、雑誌『白樺』の縁により陶芸家で民芸運動と深く関わりのある河井寛次郎を知り、１９４０（昭和15）年に河井の紹介で、東京中野の棟方家を訪ねた。翌年、棟方の希望する富山湾に蜃気楼の出る時期を見計らい光徳寺に招く。棟方は寺に着いて襖二面に般若心経を描いた。光徳寺は福光の町中から２㎞ほど離れているが、棟方はそれ以降、毎年のように光徳寺を訪ねている。福光町には松井寿美子という女医がおり、棟方の妻チヤと同年で、感受性豊かな心温かい美女だった。棟方一家は福光疎開中、常に彼女の心のこもった援護の手で支えられ、元福光図書館長で日本民芸協会砺波支部長を務めた石崎俊彦は、日常生活はもとより創作活動の摺りを手伝うことや、著名人が訪ねてくる窓口などの事務的な業務も手伝った。

棟方が福光を疎開先として選んだのは、何故であろうか。次の５点に集約される。

１つは、棟方は『板極楽』にこう書いている。１９４５（昭和20）年の初め、「当然故郷の青森を考えましたが、どうしても故郷には、醜をさらしたくなかったのでした。そうしたときに、

福光町の光徳寺の高坂貫昭師、松井寿美子先生の誘いがあって、思いがけず、その町に疎開しました。疎開のためにこの風景のよい、おだやかな北陸の町と縁をもつようになったのでした」とある。

2つ目に、このころの棟方は出世願望が強く「故郷には錦を着て帰るものだ」と言っていた。棟方は1938（昭和13）年の第2回文展に「善知鳥板画巻」を出品し、特選を受賞している。しかし、青森へ帰るには、まだ錦を着ているとは思えないところがあった。中央に出て活躍している県人の仕事を認めたがらない青森県人の気質をよく知っているだけに、帰ってからの不快さが目に見えるようで、どうしても踏ん切りがつかなかったのではなかろうか（棟方の長女の婿・宇賀田達雄著『祈りの人　棟方志功』）。

3つ目に、よく当たるというので知られている相学の研究家から、棟方にとって青森の方角艮（うしとら）は凶で、吉は乾（いぬい）の方角、西北だと言われたことであった（前出『祈りの人 棟方志功』）、とあることから、占いも影響を与えたようだ。

4つ目に、戦争の混乱期で、青森は飢餓もあり、親子6人の生活を考えれば米どころ福光から誘いがあったことが、大きなきっかけになったのではなかろうか。

5つ目に、福光へ疎開する以前に制作していた「善知鳥板画巻」との縁である。これについては前述した。棟方は立山登山を行なったことで、郷土青森への思いが重なり、富山県の福光町へ疎開の話が進んだように思われてくる（2002年、㈶棟方板画館理事・宇賀田達雄の福光での講演）。

やがて福光出身の代議士・松村謙三、元小松製作所会長・河合良成、また、町の主立った人々の助けを得て、絵の仕事で生活を支えていけるよう道がつくことになる。富山にいる富山市民芸館館長・安川慶一、北陸銀行頭取・中田清兵衛などの助けを受けて、福光町での生活が始まったことを『板道楽』に述べている。

1946（昭和21）年12月、棟方は小学校の校庭に隣接する石崎俊彦の土地を借り、初めて自分の家を建てた。15坪の平屋建て、8畳と6畳2間に、玄関、台所、便所だけの仮設住宅仕様の住居に画室を加え、「絵小屋」と自称した建物だった。住居を「愛染苑」とし、画室は鯉雨画斎（りうがさい）と名付けた。棟方は「鯉雨は『龍』の当て字である。『鯉雨』といふ文字に訳が判って付けたものではありません。訳の判らない答えの持てないモノ、いわゆる文字の化物が欲しかったのですよ」（棟方著『鯉雨』）と説明している。

周りの農家から見ればこぢんまりした住まいである。冬期の校舎の窓から眺めた生徒が〝雪のなか　棟方志功は　寒かろう〟と俳句に詠んだ。

この愛染苑に県内外の著名人が集うことになる。柳宗悦著

『美の法門』には、「棟方の家『愛染苑』は当時、他に類を見ない大きな文化サロンを形成し、異文化交流が盛んに行われていた。こうした価値観の多様化こそが、創造力や独創性ある思考を生み、社会の活性化を生み出す。そして福光の文化が一変した」とある。

ところが、１９３６（昭和11）年に国画会出品の「大和し美し」で柳宗悦ら民芸運動の指導者に認められ、１９３８（昭和13）年には「善知鳥板画巻」で官展初の特選になり、１９４０（昭和15）年には「釈迦十大弟子」で国展の佐分賞に輝くなど、中央の画壇に着々と地歩を築きつつあった棟方も、福光では無名に等しかった。

福光町民一般の棟方理解の程度は、生徒の詩に表れている。〝うちのだいじなからかみに　棟方志功が絵をかいた　僕より下手な絵をかいて　うまいうまいとほめていた〟というもので、子供は親たちの噂を取り込んで、正直に詩文に表現している。

福光での棟方は、浄土真宗に「他力」の教えを学ぶ契機を得た。「富山では、大きないただきものを致しました。それは『南無阿弥陀仏』でありました。衣食住でも、でしたが、それよりもさらに大きないただきものであったのです」（『板極道』）。つまり、「他力本願」という精神世界に至っている。

日本山岳会の大間知邦太郎は『棟方志功全集』に、「福光疎開時代の６年間は、棟方さんには生涯の一番苦難の時だったと思われます。棟方さんの絵を理解しない越中人のなかで生きることは、日々不快なことで、この６年間は棟方福光禅堂修行時代というべきと思われます。そしてそれが棟方志功の人間作りに大変役立った６年間と、私は今も思っています。高坂兄の寺を出てまもなく居を構えた棟方さんから『子供たちに友達もでき、家も作ったから、福光に住むつもりだ』という言葉を聞き、仰天して帰京をすすめると、『富山へ来いといったのもあんた、東京へ進出せよというのもあんた、どうしろというのです』と棟方さんらしからぬ不安な顔を初めて見ました」とある。

１９４８（昭和23）年には、１年間に１９０点の作品を生み出した。２日で１点以上の割合だ。生涯を通じて１年間に最も多くの作品を制作した年であろう。棟方は「板を前にすれば作品が浮かび、それをなぞればいい」と述懐しているが、福光で他力に接し、直観力が研ぎ澄まされたと思わざるを得ない。

近代の日本画研究家・福井文夫は「浄土真宗王国といわれる富山への疎開は、結果的には民芸の理念を日常生活の中で実践するための絶好の機会でもあった。この意味において６年８カ月に及ぶこの疎開生活は、棟方のこの後の画家としての生涯に決定的な影響を与えるものとなった。……板画の戦後第一作『鐘渓頌』二十四柵を作った。鐘渓は京都・五条坂の河井の窯の名。棟方は『板画の道』で、『わたしを育てて下さった河井寛次郎先生に対する感謝の念をあらわしたものです』と。棟方は戦

前、板画は、絶対の白と絶対の黒の対比だと考えていた。そこに彼の板画の根本があった。ところが『鐘渓頌』には色彩が施された。戦後の、新たな棟方の『板画道』の出発だった」と、福光時代の創作活動を総括している。

棟方志功の一文に、「福光町に六年半お恩になりまして、その町の名誉町民に推すとかたじけなく請われましたが、わたくしのいたらない心身の足りなさを省みまして、願辞いたしましたが、その情恩になくばかりです」（１９７２年、北日本新聞元旦特集号）とあり、帰京で福光町を離れるときには、町の人々が駅や駅構内外いっぱいに集まり、汽車が発っても線路を追いかけていた、と続く。

１９５５（昭和30）年以降、福光に棟方の碑が多く建立された。山関係では１９５８（昭和33）年に〝桑山も蹶飛の院も秋ならむ　その裾山の竜胆咲けるや〟と彫られている碑が、赤御影石で、高さ３ｍの偉容で光徳寺の境内に立っている。

次に「蜃気楼にあこがれた魚津」について触れておかなければならない。

棟方は東京や福光から、たびたび魚津を訪れた。

その目的の１つは蜃気楼を見ることだった。棟方は福光町に疎開する以前から蜃気楼に関心を抱いており、１９４１（昭和16）年から毎年のように春には蜃気楼を見るため魚津の浜に立った。愛用の双眼鏡を首から提げて沖を眺めていた姿が多い。死去する前年の１９７４（昭和49）年にも魚津へ出向いたが、ついに蜃気楼は棟方の前に一度も現われなかった。

２つ目に、魚津から眺める立山連峰などの雄大な自然をこよなく愛したことによる。魚津の春の風物詩、神秘に満ちた自然現象は棟方の心をとらえ、立山連峰をはじめ魚津にゆかりのある多くの作品を残した。

３つ目に、魚津町長で初代魚津市長・金光邦三の存在が大きい。棟方は戦前から親交があった金光の招待で魚津市に行くようになった。棟方が福光町へ疎開してからは一層交流が盛んになり、東京に戻ったあとも足を運んでいる。棟方は金光から魚津の風物を描くよう、かなり多く依頼されている。のちに述べる「毛勝山」２枚もその一例である。

４つ目に海辺の町に生まれた棟方は、浜の気風がふるさとに近いものであり、魚津の人々のさっぱりとした男性的な気性が好きだったことと、ホタルイカなど新鮮な海の幸が好きであった。

以上の４点に集約される。

金光は戦前、兵庫県選出の衆議院議員で、戦後郷里の魚津町に戻って町長になり、棟方が帰京したあとではあるが、１９５２（昭和27）年から初代魚津市長を務めた。芸術の振興に力を入れ、棟方をはじめ近代詩文書を創設した書家の金子欧亭（おうてい）、俳

誌『辛夷』を主宰していた俳人の前田普羅を大切にもてなした。魚津俳誌『喜見城』の創刊にも携わっている。「喜見城」とは蜃気楼の別称で、棟方が表紙やカットを描いている。当時、魚津高校教員で、2002（平成14）年、文化功労者に選ばれた富山県朝日町出身の書家・大平山濤も魚津で棟方と芸術論を交わした一人であり、お互いの上京後も親交が続いた。

魚津市内には、棟方が多くの作品を残したにちがいない。市街地の半分近くを焼き尽くした1956（昭和31）年の大火によって、多くの作品を焼失している。

魚津に滞在中の棟方は、あちこちの山河を描いている。魚津城址に建っている大町小学校には、城の名残の松があり「常磐の松」と題した水彩画が残されている。これは棟方が同校で一服しているときに、教員に頼まれて描いたものであると言われているが、金光の依頼である。

棟方は魚津高校での講演など、魚津の人々と気さくに接していた。魚津市の宮津八幡宮の宮司・田代昭夫は、学校で棟方の講演を聞き、棟方が作品を描く姿も間近で見ていた。大平山濤が魚津高校書道部の顧問だったころの部員でもある。田代は東京の大学に進み、1955（昭和30）年に渋谷で開かれた棟方の展覧会に行き、芳名録に魚津の住所を書いたところ、棟方は「魚津の人が来てくれるなんて嬉しい」と大声で喜んだという。魚津出身ということで感激していた棟方は、心から魚津を愛していたのであろう。

4．日本山岳会富山支部会員としての棟方

津軽の自然の中で育ち、山登りが好きだった棟方を富山へ結びつけたのは、民芸関係者ではあるが、実質的には「立山の主」と言われた大間知邦太郎であった。

大間知は日本山岳会会員であると同時に、日本民芸協会の会員でもあり、富山県の民芸運動の中核でもあった。棟方の疎開先を富山へ誘った一人でもある。陶芸家の河井寛次郎に出入りしているうちに、棟方との親交が生まれた。

棟方志功は日本山岳会に1944（昭和19）年1月入会、会員番号2317番であった（注1）。1948（昭和23）年3月、富山支部発足と同時に富山支部の会員となっている。2名の入会推薦者は日本山岳会事務局では不明としているが、前述した富山市総曲輪の大間知邦太郎と富山市東四十物町の中田勇吉（十六代中田清兵衛）であろう。大間知邦太郎は1928（昭和3）年9月に入会し、会員番号は1091番。棟方志功が3回立山へ登っている内の2回同行している。それも1回目は1942（昭和17）年の夏で、棟方が日本山岳会へ入会する1年5ヶ月前であった。2回目は1949（昭和24）年夏に同行している。もう一人は、棟方の福光町での板画活動を支えた北陸銀行頭取の中田勇吉であろう。中田は日本山岳会へ1942（昭和

17）年2月に入会し、会員番号は２１８２番であるが、戦前から民芸運動に関わっていた。棟方は１９４０（昭和15）年から毎年富山へ行き、疎開前に日本山岳会へ入会しているが、そのころの中田は棟方らの民芸運動をかなり支援している。中田は１９６５（昭和40）年6月初旬に、十五代中田清兵衛の米寿記念に民芸館を富山市へ寄贈するなど、戦後も長く民芸運動を支えた一人であった。

富山支部の設立総会は１９４８（昭和23）年3月に行なわれ、設立と同時に大間知邦太郎や棟方志功は富山支部の会員となっており、「富山支部会報」第2号（１９４８年10月刊）の「会員通信」に棟方は、「今般御会御主旨を受け、日本山岳会（この方には前々から会員になつて居ります）支部御開部を祝します。よろしく入会をお許可くださいませ。その内富山に参上規定の会費その他を払込み仕ります。右　10日　富山県福光町　棟方志功」と載っている。

富山支部発足時には中田勇吉は東京在住で、発足には参加していない。しかし、１９５２（昭和27）年4月より１９５７（昭和32）年3月までの5年間を三代目富山支部長となり、再び１９６０（昭和35）年4月より１９８３（昭和58）年3月までの13年間にわたり、五代目の支部長として富山県の登山活動に大きな貢献を果たした。

「富山支部会報」第1号は、発足4ヶ月後の7月に発行された。棟方はその会報に「日本山岳會　富山支部會報」と彫った版画を寄せている。「富山支部会報」第1号の「編輯後記」に若林啓之助（第六代富山支部長）は「この会報の表紙木版は芸術院会員で本会々員の棟方志功氏をわづらはし、わざわざ刻んでいただきました」とある。ただし、棟方は版画関係組織を中心として種々会員になってはいるが、日本藝術院会員ではなかった。

この版画の題字は現在の会報No.89（２０１２年3月刊）まで用いられ、今後も継続するであろう。

棟方の日本山岳会退会年月は定かではない。１９５２年版の次に発行された１９５７年版（１９５８年3月末現在）の会員名簿、およびそれ以降の名簿には収載されていなく、１９５８（昭和33）年3月以前の退会である。富山県福光町から東京へ戻ったのは１９５１（昭和26）年11月であり、富山支部を離れているので、そのころに退会したのではなかろうか。

（注１）棟方志功の日本山岳会会員番号と入会年月について

棟方志功の会員番号は２３１７（日本山岳会事務局）と２２７４（日本山岳会富山支部）の記録がある。「富山支部会報」第1号（１９４８年7月刊）の「会員名簿及住所録」に「（会員番號）２２７４棟方志功　西礪波郡福光町」とあり、それ以降の富山支部資料にはすべて２２７４番と記録されている。入会年月は１９４４（昭和19）年1月（『日本山岳会百年史』）と１９

52年版会員名簿には「棟方志功　富山縣西礪波郡福光町　愛染苑内　（会員番号）2317（入会年月）昭和21年4月」とある。

正しくは入会が1944（昭和19）年1月で、会員番号は2317番である。その根拠を詳しく示すとかなり長くなるので端的に述べると、棟方入会以降、終戦までに入会した5人の会員の内3人は法大山岳部出身であり、私の先輩であるので、当時の入会には塚本繁松の面接があったことなどをよく聞いており、それを会員章などで確認していることと、「入会年月と会員番号の対応表」による。なお、会員番号2274番は日本山岳会事務局の資料によると「村瀬亮一　1943（昭和18）年11月入会」である。

戦時下であり、1945（昭和20）年5月25日の空襲によって日本山岳会の虎ノ門の会室が灰燼に帰すなど、戦中・戦後の混乱した状態が続いた期間に多くの書類を失ったようだ。この混乱期に錯誤や記録の不明箇所が生じており、その内の一人が棟方志功であった。

5.「御山々の記」などに見る立山登山

「富山県の御（おん）山と言えば、立山でしょう。剣岳も、その他の山々が、連なっていますが、この御山を仰ぐというか、かぶさって来るようにながめおがまれるのは富山市からが一番でしょう」。北日本新聞、1972（昭和47）年の元旦特集号に棟方志功が書いた「御山々の記」と題する冒頭の一文である。棟方が疎開先の福光を離れたのは1951（昭和26）年11月であり、それから20年過ぎても立山への畏敬の念を持っていた表れであろう。続いて「富山は、ほんとうに富山というのでしょうか。よい山々が、どこにも、ここにも見られながめられるところでした。どこに立っても座っても、また車に乗っていても、海に船に乗っていても山がキットそばにあるのです。山好きのわたくしは、富山でほんとうの景色という立派さを頂戴したような気がいたします。……こんなに美しく気高い位置ある御山の数々、御河の数々、神通、常願寺、庄川その他の名だたる名川が、この御県ほど見事につらなっているのは日本の先（ま）ず屈指の絶対と拝みます」とある。立山連峰は、富山平野あるいは富山湾から眺めると最も素晴らしい、と言い放っている。

棟方は立山への思い入れが強く、そこを神聖な場所として崇め、立山へは福光へ疎開する前と疎開中に2回、都合3回登っている。

「立山記」（『山と渓谷』113号、1948年7月号）、「御山々の記」、その他の資料を整理してみると、次のような立山行となる。

1回目は太平洋戦争が勃発した翌年の1942（昭和17）年の夏（注2）、棟方に同行したのは、富山在住日本山岳会会員の

大間知邦太郎と大間知の子供2人で、粟巣野～称名滝～八郎坂～弘法小屋～天狗小屋（泊）～室堂～一ノ越～雄山～大汝山～剱御前小屋（2泊）～大日岳～称名滝（泊）～粟巣野のようだ。「立山記」には、「富山より立山遠望」「大日岳」と題した板画が描かれており、4人で雄山へ登り、立山三山の縦走記が載っている。戦中の立山の状況が読み取れるので、登山記を拾ってみる。

称名滝を左に見ながら「あの胸が塞がる様な八郎坂を追ひ切つた」。「弘法小屋は未だ畳も整つて居なかつた程山は早かつた。あの頃は留守ながら戸錠のない小屋に積まれた米俵が天井まで届いてゐた」、「弘法から天狗までの間、弥陀ヶ原で暗くなつた道はいやに静かになつて、何だか山気といふ気振りが化けて鬼気を覆ふて身体を包んで仕舞つた」。天狗小屋では「蚤が居てねむれなかったのと、腹をこわしたお蔭でねむれなかったが、冬の様な寒さの夏は、何か置き忘れられた自分といふ者を、はつきりと身一つになつて考へて見たりした。それとはなしに眠つて仕舞つたが、それとはなしに気持よく目覚めさしてくれた、高い場所の自然の快さは、思はずの内に自然の生命かの様な不思議な想ひを体に入れてくれる。目の前の主峰、頂上はたとえるモノなく美しかつた」、「左に大日、右に薬師をいふた仏名の岳が位置し充分なところに裾をひろげてゐる。勿論、薬師は頂上のあたりは耳を切つた様にソゲてゐるのだ」、「室堂では、金剛杖に、三つづけざまに焼印を願わせられた。薬師のも大日のも頂上のもここでもらつた。ここから立山の一の越から五の越まで山肩に登つて行くのだが、天気がよくて、何よりであつた。あの砂利場を険しく切れば頂上だ。この山肩から右に這入つた細みちは、天皇様の御歌碑の為にみちした径だ。

《立山の空にそびゆるお、しさに　習へとぞ思ふ御代の姿も
——御歌——》

大間知令嬢は学校仕こみを自分に取つて段上げてソプラノでの唱歌は美かつた。雄山神社々司に、乞はれて、何故か絵を描き御礼に受けていたゞいた立山神社の扇はタタカイにも焼痍せられずに持つてゐる。『富士折立て』尾根づたいに、大汝、別山とつづけてさがり、下りたのが鶴ヶ御前の小屋だ。小屋主、三九郎氏の手塩にかけた料理、カモシカのライスカレーは名とほんとうの物か判らなかつたが豚より牛に牛より馬と似ても似つかかる味であった。親切一杯に御振舞ひくださつたことの有難さが今も親身に答いてはなれないのでゐる。二夜を明かして、この山三昧を酔ふ程浴びた。馬背を踏場にしての山つながりの下りは、真下に見える左手は、立山温泉、右の猫又、毛勝の峰々が青さが違つて絵の様に、美しい山なりを見せてゐた。前大日が盡きれば、『ヤセオネ』になつて、もう下山口の『猿ヶ馬場』

だ。この『越す』を越いて下つて下つて、発つた称名滝の横道に出た。夕闇ちかい陽に、泊を置いた。立山が望、様々と目胸にふさがり立ちはだかつて山より今更偉大だ」とある。

登山の形態が現在と異なることや戦時たけなわのころであり、若干注釈を加えなければならない。この登山記に「戸錠のない小屋に積まれた米俵が天井まで届いてゐた」とあるが、その後間もなく立山山麓でも米が不足した時代となるので、米俵に米ではなくほかの物も入っていたのであろう。天狗小屋でノミに悩まされたことは、当時の山小屋で多く発生している。当時は金剛杖に多くの焼印を押し、山行の多さを誇示する風潮があった。ところが、室堂では登山道から眺望した薬師岳や大日岳の頂上のものまで焼印しているが、これも戦時中の一つの現象であろう。昭和天皇の歌碑のことが書かれ、大間知令嬢はソプラノで歌ったと記されているが、当時の富山県では学校で教え、すべての県民が歌っていた、つまり県民歌のような「御歌」であった。昭和天皇が1929（大正13）年、陸軍大演習の観覧のために訪富し、11月3日、西砺波郡福生野（現・小矢部市）から立山連峰を遠望し、翌年の歌会始で発表された「御歌」である。雄山の社務所で絵を描き、お礼の扇子は大切に長い間所持しているようであるが、棟方がその場で揮毫した板は、関係者が抽選によって所有者を選び、芦峅寺の総代であった佐伯嘉助が当たったので芦峅寺へ持ち帰っている。鶴ヶ御前の小屋（現・剱御前小舎）ではカモシカのカレーライスであったとあるが、カモシカは禁猟であるにもかかわらず獲っているのも、戦中を物語るひとこまであろう。剱御前小舎から尾根伝いに大日岳方面へ向かったのであろうが、「左手は立山温泉」とは理解できない。当時の立山温泉は富山県三大温泉の一つではあったが、立山カルデラの底部にあり、この尾根からは見えない。棟方はこの山行で、大間知から槇有恒など3人が松尾峠で遭難を起こしたことを聞いて、松尾峠に立山温泉があると勘違いしたのであろう。下山口の「猿ヶ馬場」とは現在の「牛ノ首」（コル）から称名側に下りてきた途中の傾斜の緩い所をいうようだ。

この登山記で、鶴ヶ御前の小屋で「二夜を明かして、この山三昧を酔ふ程浴びた」という表現は、山好きな志功の心の内をよく表している。小屋は別山乗越にあり、眺望が良い所だ。

同行した大間知の長男・啓輔の話によると、視力が弱い棟方は、傾斜が急な所になると足元を慎重に確かめ、這うような格好になった。手には金剛杖、歩みは速くないが、一歩ずつ力強く前に進んだ。雄山山頂にたどり着いたのは昼過ぎ（注・昼過ぎとは思えない。当時の登山者は天狗小屋を朝早く発って、遅くても10時ごろには山頂に着いている。そして、宮司の朝拝も受け、ブロッケン現象にも出会っている）。眼下に雲海が広がり、すっきりとした青空がどこまでも続いていた。「雲の上を歩いていけるのではないかと思うほどきれいだった」。棟方は

飛び上がって喜び、すぐに大事そうに抱えてきた筒から丸めた紙を何枚も取り出し、剣岳をはじめ眼前に連なる壮大な山並みを写真を撮るような速さで描いた、と回想する。大間知は持参した扇子に棟方から剣岳などを描いてもらい、その内の3枚を大切に保管している。その1枚には「天地合掌処」と書かれている。大間知啓輔は棟方独特の太くて力強い字を眺めるたびに、そこに込められた深い精神性をひしひしと感じている、と言う。

「御山々の記」に、「三度のうちのどの一度だかの時に、雷鳥に連れられて頂上に立って雲の上に翳（かざ）された、自分の姿を虹の中に見たときのおもいに、胸熱くしています。その後、社務所から出て来た、宮司の朝拝に並んでの神事を受けたのも大事な思いを重ねました」とある。これはこの登山のときであろう。1942～46（昭和17～21）年は登山者が最も少ない時期であり、雄山頂上近くで「雷鳥に連れられて頂上に立つて」とあるのは人が少なく、雷鳥は人馴れしているころである。幸いブロッケン現象に出会い、それを拝んでいるようだ。

2回目は1949（昭和24）年の夏、日本山岳会富山支部発足時からのメンバーである3人が同行した。日本登山界の重鎮であり富山支部の評議員である牧野平五郎、1942（昭和17）年に棟方の立山登山に同行している大間知邦太郎、それに富山支部評議員である中田榮太郎との登山であった。コースは弥陀ヶ原から室堂に至り、そこで宿泊し、雄山登拝後、往路を下山しているようである。ただし、室堂で停滞しているときに、地獄谷や血の池周辺を散策していたと思われる。

この山行では室堂で「天地合掌之所」と板に揮毫しているが、次章で詳しく述べる。

3回目は1950（昭和25）年の晩夏、棟方は「高橋氏か、前田氏か……とおもいます」と「御山々の記」に記しているが、高橋良太郎である。高橋は当時、富山地方鉄道の取締役総務部長で、1972（昭和47）年5月には『日没　高橋良太郎第四句集』を出版している俳人でもあり、棟方とともに柳宗悦に師事していた。コースは弥陀ヶ原から室堂を経由し、雄山神社の峰本社を往復しているようだ。

福光図書館館長で棟方を最も世話した石崎俊彦が、棟方がこの山行の模様を石崎に語り、それを石崎が綴った草稿がある。それを要約する。

弥陀ヶ原で撮った1枚の写真があり、雄大な大日岳を背景にポーズを取る棟方は、さながら自分が描く仏の分身のような心境に浸っていたのであろう。写真の裏に「立山大日岳を後にして、生大日雑華堂」の書き込みがあり、「生大日」は大日岳に対して自己を大日如来に凝らしたつもりであろう。雑華堂は棟方の雅号だ。俳誌『辛夷』の1951（昭和26）年正月号にこの山行の俳句を次のように載せている。

〝立山の北壁削る時雨かな　立山を縦に下だすや蔬時雨〟

この山行は高橋良太郎の招きだった。棟方にとっては、善知鳥の供養の旅であった。山のたたずまいのそこここに、棟方は深い悲哀の感慨を込めて祈り、跪き供養した。そして自作板画の中の善知鳥の化身に、幽界に成仏ならずに苦しむ悲哀な猟師の霊を諫めるための山旅は終った。人一倍感激屋の棟方は、山のたたずまいの一草一石にも祈り跪拝を繰り返し、供物を捧げて冥福を祈った。心掛かりな供養を終えた安堵感からか、嬉しそうな笑顔で私に語ってくれた、という。

棟方の山登りで欠かせないのは、地元青森の八甲田山である。ここにはしばしば登っており、「酸ヶ湯温泉と八甲田」をはじめ多くの作品や「八甲田山」と題する紀行文も残している。特に酸ヶ湯の山案内人であり、ラッパで名を馳せていた名物男・鹿内仙人（本名・鹿内辰五郎、１９１９年、青森県知事・道岡秀道の命名）と多く登っている。仙人の素朴な人柄に棟方が親しみを感じ、良い友だちであった。

有名なエピソードとして、１９２９（昭和４）年、25歳であった棟方は、鹿内仙人と酸ヶ湯温泉の大原専務と連れ立って八甲田山へ登ったとき、仙人が竹笛を吹くと鷹が頭上を悠々と舞った。よく見ると、その鷹の両翼には日の丸のような白い紋様が浮かんでいる。それを見た鹿内仙人は、棟方に「これは神の鷹だ。志功よ、お前は世界一偉くなるぞ」と予言したというものである。以来、棟方はここを神のような鷹が舞う館〝神舞閣〟と称して、多くの作品とともに「神舞」の書を揮毫した。棟方は１９５４（昭和29）年に、この有様を大きさ４㎝ぐらいのバッジにデザインし、「八甲田山バッジ」とした。現在でも酸ヶ湯温泉で販売しているようだ。１９６５（昭和40）年に鹿内仙人は亡くなったが、八甲田山酸ヶ湯温泉の地獄沼の高台に〝山仙鹿内辰五郎頌碑〟が建っている。その揮毫は棟方である。

その他、福光に滞在中は近くの桑山を登り、「桑山御振舞」と題して俳句雑誌『辛夷』に載せ、自著『板愛染』に収載しているなど、多少の登山記を残している。

ただし、１９４６（昭和21）年６月30日に棟方夫妻は、前田普羅、織田一麿と桑山へ登っているが、『祈りの人 棟方志功』（前出）に織田は日本山岳会の会員となっているが、会員ではない。

（注２）「立山記」に「未だ、この土地に仮住いしなかつた何年か前」「鶴ヶ御前の小屋主三九郎」とあり、疎開は１９４５（昭和20）年４月、佐伯三九郎が剱御前小屋を経営したのは１９４２（昭和17）年からであることから、棟方の第１回の立山登山を１９４２（昭和17）年とした。

6. 立山は「天地合掌之所」とする畏敬の念

棟方志功が1949（昭和24）年の夏に2回目の立山登山を行なったことは前述した。同行者は日本山岳会富山支部の人たちで、牧野平五郎、大間知邦太郎、中田榮太郎であった。

その山行の途次、立山室堂に宿泊した折に、アルバイトの学生が棟方に揮毫を嘆願し、それに応じた棟方は、差し出された由緒ある板に「天地合掌之所」と書いている。学生とは、棟方に同行している大間知邦太郎の紹介で室堂で働いていた亀村兼介であった。亀村は1931（昭和6）年生まれの現在80歳、自営業の傍ら「高志山の会」の元会長を務め、「富山山想会」にも所属し、現在も山登りを続けている。

亀村の当時の回想録を要約する。

室堂に棟方さん一行が到着され、別館2階へ案内してお茶を持って行ったところ、大間知さんから棟方さんを紹介され、記念に「めったに会える人でないし、因縁だから棟方先生に何か書いてもらわれ」と言われる。即座に前日、雄山頂上の社務所から譲り受けた古い木材を思い出した。江戸時代の峰本社の解体材である。長い年月風雨に晒されて灰色になり、木目が浮き出ている年代物であるが、それを持ち出して棟方さんに差し出した。棟方さんはその板を眺めながら「これは立派な木だ。立山の歴史を感じる」と感嘆され、気軽に木板に墨で一気に「天地合掌之所」と書き記された。そして「立山は天と地をつなぐ神の領域で神聖な所だ」と説明された。気さくな感じで、知らなければ有名な版画家とは思えないほど庶民的な人柄であった。当日、室堂に宿泊していた富山市南部中学校の若い美術教師・青木先生が、棟方さんから版画・絵画について教えを乞うていた。

翌日、雨天で停滞日となったので、棟方さんは小屋の軒先で椅子に腰掛け、雄山のモチーフを油絵で描いておられた。「ありがたい、ありがたい」とつぶやき、ときには合掌しながら絵筆を握っておられたのが印象深い。厚い眼鏡を掛けて、キャンバスに鼻がつくほどに顔を近づけて描いておられた。棟方さんは人一倍、立山に神気を感じられたようで、立山礼讃の言葉が多かった。私は揮毫された木板を今回、立山博物館へ寄贈することにした。それは棟方さんが感じた立山を、多くの人々に感じて欲しいと考えたからである、と記している。これは2002（平成14）年7月31日付、亀村が立山博物館へ寄贈するときの文書の骨子である。

前述したが、棟方は「板画というものは板が生まれた性質を大事にあつかわなければならない。木の魂というものをじかに生み出さなければダメだ」という「板の声を聞く」想いと、旧雄山神社の部材に揮毫することが全く符合したともいえる。

棟方が揮毫した板は、2001（平成13）年4月22日付の北日本新聞によると、「立山で発見のケヤキ　峰本社（江戸末期建

て替え）以前の部材か」との見出しで「立山の雄山の西側直下に広がる山崎カール内で昨夏、大量のケヤキの建築部材が見つかり、江戸時代末期に建てられ、平成8年に建て替えられた旧雄山神社峰本社より、さらに古い社殿に使われていた材木である可能性の高いことが、21日までに分った」とある。発見したのは富山国際職芸学院の上野幸夫教授らで、ケヤキ材は、山崎カールの内部に点在していたほか、雄山から大汝山に向かう登山道の両脇でも見つかり、長さ1m程度の大型部材だけでも約20本を回収した、という。そして峰本社のすぐ裏側の岩場からは、和釘やかすがい、金メッキした飾金具、棟包銅板など33点の工具などと、宝賽品と見られる刀子（とうす）や矢じり、古銭など13点を発見している。上野教授は立山室堂の保存修理にも関わっており、日本建築史が専門である。教授に峰本社の部材の研究についての進捗状況を伺ったところ、部材は以前よりも幅広く散乱していることが分かり、毎年調査を重ねていて近々、中間報告をしたいとのことであった。本年（2012年）2月に確認したもので、報告が待ち遠しい。

立山信仰は江戸時代に入るとともに、峰本社が加賀藩から篤く保護された。歴代の藩主が220年間に10回建て替えを行なっている。現在の前の峰本社は、1860（万延元）年の建立で、総ケヤキ造り、高さ2・9m、横幅3m、奥行き1・8mであるが、銅板で屋根を覆っていた。それを1996（平成8）年に136年ぶりに建て替えた。発見した部材は、屋根の部分にあたる箕甲（みのこう）という部材の寸法などから、社殿自体の大きさは1860（万延元）年に再興した峰本社よりやや小さいと推定されている。

亀村兼介が雄山頂上の社務所から譲り受けた古い材木とは、タテ14cm×ヨコ100cm×厚さ4・5cmの旧立山峰本社の廃部材。揮毫の文言「天地合掌之所」は、当時、雄山神社の札などに記されて広く用いられた。

棟方が立山から感じた「天」という信仰や精神文化と、立山という自然の「地」で、雄山神社峰本社の社殿の一部と見られる部材との出会いは、奇跡的なことであったとも言えよう。

7．山を題材とした作品

棟方志功の山を題材とした作品に触れておきたい。画集より次の作品を抽出した。棟方はお礼代りに「板画」「油画」「書」などを、イメージが変わらない内に速成でその場で描き、あるいは揮毫しているように、福光疎開時代のみで2000点以上の作品を制作したと言われている。ここに取り上げた作品はその代表作ととらえてよい。各作品には、それぞれ山の特徴が描かれている。

(1) 山の作品

山を描いた作品を列挙する。富山福光疎開時代を中心に代表

的なもののみ取り上げるが、一応このような作品があるという程度に止める。

〈板画〉

・「愛染品板画巻（全16柵）」（1946・昭和21年）のうち「医王山雲湧の柵」「桑山旺夏の柵」各29×22cm（注・医王山は「いおうぜん」と呼ぶ）
・「火の願ひ板画柵（全72柵）」（1947・昭和22年）のうち風景画2柵　六曲一双屏風　各27×20cm　愛染苑蔵
・「流離抄板画柵（全31柵）」（1953・昭和28年）のうち「山火の柵」「叡山の柵」「深々の柵」各々31×27cm　福光美術館
・「龍胆（りんどう）の柵（A）」（1956・昭和31年）25×21cm
「桑山も蹶飛の院も秋ならむ　その裾山の龍胆咲けるや」棟方の歌が彫り込んである。
・「龍胆（りんどう）の柵（B）」（1956・昭和31年）35×24cm　愛染苑蔵
（A）と同じ棟方の歌が彫り込んである。

〈倭画〉

・「福光田園風景」60×128cm
・「小矢部川のほとり図」（1947〜49・昭和22〜24年）35×48cm　愛染苑蔵
・「桑山の図」22×51cm
・「山田の里」（1950・昭和25年）140×49cm　愛染苑蔵
・「四季福光風景」（1953・昭和28年）　各66×36cm　福光美術館蔵
・「福光風光の源玄」（1957・昭和32年）　60×73cm　福光美術館蔵
・「桑山の図」同じ題名で2枚目（1957・昭和32年）34×36cm
棟方が1951（昭和26）年11月に福光町を去り、東京へ帰ったあとに、福光を懐かしんで自らの歌と倭画を描き、福光町でお世話になった松井寿美子へ送られた作品。1994（平成6）年に福光美術館開館にあたり、松井より福光美術館へ寄贈された貴重な作品で、2003（平成15）年の棟方志功生誕100年を記念して、福光町紹介のポスターとして使用された。棟方は桑山を見るとよく拝んでいた。そして「桑山は富士山だ。私を育ててくれた山だ」と話していたという。画面の歌は「桑山も蹶飛の院も秋ならむ　その裾山の龍胆（りんどう）咲けるや」。「愛染呼冬」棟方の絵小屋（アトリエ・鯉雨画斎）と背景の医王山（いおうぜん）を描く。歌は「愛染のところと名てふすわがゑ小屋　菩薩八幡神守り給へや」

〈油画〉

・「医王山」36×56cm
・「赤松と岬と海と山小屋」（1948・昭和23年）　27×31cm　愛染苑蔵
・「袴腰風景」27×41cm　医王山、桑山とともに、袴腰山は福光

から見える袴の形をした特徴ある山である。

・「山海頌図」（1952・昭和27年）の「山の恩」130×162cm　金沢刑務所

・「立山連峰を望む海岸風景」と「毛勝山」の2枚については、次の（2）（3）で述べる。

（2）代表的作品「立山連峰を望む海岸風景」

富山県福光美術館に棟方の油画「立山連峰を望む海岸風景」（以下「立山連峰を望む」と略す）と題する90・9×72・7㎝、F30号の油絵が常設室に展示されている。NHK富山放送局が棟方本人から寄贈され、福光美術館に寄託した油絵である。絵は富山湾の海面上にそそり立つ立山連峰を描いており、福光美術館館長は、「棟方の作品の中で最も秀作である。棟方はゴッホにあこがれて絵の道に進み、ゴッホの油絵はイエローとプルシアン・ブルーで描かれており、この『立山連峰を望む』の油絵はまさにゴッホのプルシアン・ブルーと呼ばれる紺青と黄色で描かれている。棟方の油画は15号程度の小品ばかりであるが、これほどの大型作品は稀であろう」と言う。もともと棟方は、ゴッホの「ひまわり」を見て、一番描きたかったのは油絵であった。しかし、帝展に出品するが落選が続き、1928（昭和3）年に油絵「雑園」で初入選するものの、油絵に疑問を持ち版画に転向した。版画はせっかちで、猛スピードで仕上げる棟方に向いていた。しかし、油絵を描いているときが一番楽しいようで、晩年まで描き続けている。

「立山連峰を望む」を描いた経緯は、のちほど述べる「毛勝山」を描く姿勢とは異なっているので、やや詳しく説明を加えておきたい。棟方が1950（昭和25）年10月末に魚津を訪ねると、金光邦三・魚津町長宅で句会が開かれていた。それに参加したところ、出席者の中に魚津港大網元の島崎藤左衛門がいて、島崎は棟方に、30日の未明に船を出すからそれに乗船するよう勧める。当日、棟方は魚津の金光ら友人諸氏と、船上で魚津名物の鯛網を見学する。「海上の棟方は、早朝の澄み渡る立山連峰に双眼鏡を向けて、感嘆の声を頻発し、その全容を眼底に焼きつけていた」（『喜見城』第20号）。このときに、立山連峰を心から描きたいと思ったのであろう。

富山湾の早月川沖合の海上から見た、冠雪の立山連峰のインスピレーションを網膜に焼き付けた。福光へ帰ったあと2～3日後に仕上げているので、「立山連峰を望む」の絵は全くイメージだけで描いた。このときのお礼として、島崎にも海上から見た立山連峰関連の油絵を贈っている。

その後4年間を経て、1954（昭和29）年10月24日、富山市で行なわれる俳人・前田普羅（本名・忠吉）の追悼会に出席するために訪富するが、その前日、魚津に立ち寄り金光邦三を訪れる。翌日の午前に「毛勝山」の油画を2枚描き、急いで普羅追悼会の会場へ向かう。このときの模様を棟方はこう書いて

いる。「富山放送局からの『前田普羅先生を語る』放送の時間が来ているのを、中島（注・追悼会の式の司会者）さんから聞かされた。魚津市長、中島さんと三人鼎談といふ形が、よろしいだろうといふ事になって、この追悼句座の中だったが、前田先生を悼むこころをわたくし達は、放送局に着いた」（『辛夷』１９５４年12月号）とあり、『祈りの人　棟方志功』の著者・宇賀田達雄より福光美術館館長・奥野達夫宛の手紙には、「ＮＨＫ富山にそのときの油絵があるのは、当日午後ＮＨＫで普羅追悼の鼎談を行ったとき、ＮＨＫへの手みやげに寄贈したものでしょう」と書かれている。

現在、魚津から見た立山連峰を題材としたものは、５点確認されている。その所蔵はＮＨＫ富山放送局、魚津市役所、魚津駅、俳人・故吉田逸風、魚津港網元の島崎藤左衛門の子息であるが、棟方が魚津に残した多くの作品の一部に過ぎない。

(3)「毛勝山」を描いたとする2枚の油画の解

棟方志功が「毛勝山」を描いたとする2枚の油画を、筆者は毛勝山以外の山を描いたものと推測する。棟方の常設展示館である福光美術館館長は、「研究の課題として興味深い指摘です。調べた上ぜひ見解を示して欲しい」と調査を促す。

その作品とは次の2枚である。

Ａ「毛勝山の図」（作品集では「毛勝山」）
油画　72・7×60・6㎝　Ｆ20号　富山県魚津市所蔵、



旧魚津水族館付近から毛勝山を望む。2012年3月撮影　撮影＝佐伯郁夫会員



棟方志功の油画「毛勝山の図」（魚津市役所所蔵）　撮影＝佐伯郁夫会員



棟方志功の油画「魚津浜から毛勝山を望む」（JR 魚津駅所蔵）　撮影＝佐伯郁夫会員

市長公室に掲額

B「魚津浜から毛勝山を望む」

油画　画集では80・3×65・2㎝　F25号　筆者実測「72㎝×59㎝　F20号」　額縁に貼付された記録紙には「管理個所―金沢、作者名―棟方志功、号数―20、洋、風景、油、布、寄贈、取得―昭和29年、絵サイズ60キ72、額サイズ75キ87」とある。JR魚津駅所蔵、魚津駅事務室に掲額（未公開）

この油画2枚の写真を比較すると、ともに毛勝山を描いた絵であるとは思えない「A」は「剱岳」、「B」は「毛勝山以北の山」を描いたものではなかろうか。

この2枚は、1954（昭和29）年10月24日の午前中に、魚津市街の2ヶ所から描いている。具体的に示すと、「毛勝山の図」を描いた場所として3ヶ所の表現があり、作品集にある「魚津市の大海寺野」、金光邦三の言う「盛永五作氏邸の前方刈田」、同じく「大海寺野の盛永邸前」である。作品集などには、このときに棟方が「毛勝山」を描いている写真も掲載されている。この表示の場所を魚津市役所に尋ねたところ、「魚津市内の大海寺野」となる。もう1ヶ所は棟方の言う「水族館の楼上」で、現在は「大町海岸にあった旧魚津水族館の屋上」となる。

棟方の一文に、夜、魚津に着き金光市長宅に宿泊。翌日「今日は、魚津駅に市長が贈る立山を、水族館の楼上から見て、油絵で二十五号に描くといふので、気負ひたっていました。丁度前田先生の追悼会の日に、なっていましたが、この秋の天気は、この地方では珍しい好天といふので、その十時といふ追悼会座の前に、描かうといふので、檜川、浅尾、大平の三氏に市長と一緒で、好天の魚津の海岸に出て、水族館の楼上に、くっきりとした立山連峰を拝みました。『魚津駅に掛けるのだから時に、魚津の山がよいですね』

市長に言われて、わたくしは画架の向きを換いて、間も速く、筆が、うなっていました。立山から剣、それから魚津の山と言われるあの山を一気に描き上げて、わたくしの躰は汗でビッショリになっていました。追悼会には未だ一時間、絵具の手を洗はず車で、富山、西本願寺別院に着きました。

息せき切って車から下りて、会場に着いた時には、もう中島さんの『これで追悼会の式を終りといたします』そういふところであった」（『辛夷』1954年12月号）とある。したがって、「B」は「大町海岸にあった旧魚津水族館の屋上」から描いているもので、「A」は「魚津市内の大海寺野」となる。

700頁に及ぶ『祈りの人　棟方志功』の著者・宇賀田達雄は「棟方の写生は早くて、25号でも2、30分はかからないでしょう。富山市の西本願寺別院で開かれた前田普羅追悼会は、午前11時からでしたから、魚津で油絵は少なくとも2、3枚描いていると思います」（福光美術館館長宛の手紙）の一文がある。棟

方は朝から午前10時まで油画を描いており、2枚を描くことには疑問の余地はない。

「A」は、永らく金光邦三の所有であったが、その後、魚津市に寄贈された。贈呈書には「昭和二十九年十月二十四日　盛永五作氏邸の前方刈田において棟方志功先生描く毛勝山の図　魚津市制三十周年を記念シ魚津市ニ贈ル　昭和五十七年七月　寄贈者　金光邦三」と記されている。

まず、「A」から解きたい。筆者がこの油画は「剱岳」であると感じたのは、絵のスカイラインが明確であり、山の頂上から左方向、つまり北方稜線へ向かって三ノ窓、小窓、大窓がくっきりと描かれている。西面、つまり画面の手前に向かって太い線がある。これを早月尾根と見る。

剱岳の北方に聳える毛勝三山は、富山平野から眺めるとドーム型の山々で、北から毛勝山、釜谷山、猫又山が並んでいて、三山とも険峻な剱岳とは趣が全く異なっている。ただし、魚津市街からの毛勝山は、周りの山よりも重量感をもって迫り、魚津を象徴する山には違いはない。しかし、絵の山並みは毛勝山を描いたものではない。以上が根拠である。

筆者は1957（昭和32）年の春、積雪期の僧ヶ岳から剱岳までの北方稜線初踏破のために、魚津から北方稜線を執拗に眺めたことがある。雪のないときに小窓から僧ヶ岳間は十分な偵察ができず、上市から北方稜線を観察した感覚を基に、極地法でキャンプ7までの計画を立てたのであるが、魚津からの観察も怠らなかった。当年の冬の岩場登攀合宿も魚津を起点とした。実家が魚津にある2人の部員宅で、合宿の朝食用餅を各々2日間かけてついている。その他ガソリンなども魚津で調達した。このように、目的があって魚津から剱岳および剱岳の北方稜線をよく眺めていた経験からの判断である。

しかし、筆者個人の独断的な偏見を避けるために、客観的な見解を日本山岳会富山支部会員・佐伯郁夫にお願いした。

佐伯郁夫（5794番）は魚津市佐伯1番地に在住で、2012（平成24）年2月早々に市役所を訪ねている。市長公室に掲げられている棟方志功の油画「毛勝山の図」を見て、絵の全体と絵の右下に書かれた文字部分を拡大してデジカメで撮った写真が送られてきた。文字部分はカタカナで、「ヒルマ」（昼間のことか）「ムナシコ」（棟方の作品には自分の名をムナシコと書いていることが多くある）という文字は鮮明に撮れているが、あとは数字の「廿九」と読める文字が書かれていた。恐らく描いた「昭和29年」を指していると考えられる。

佐伯郁夫は山岳写真家であり、著書には立山連峰を中心とした案内書が多く、プロの山岳ガイドである。氏の手紙には「日本画のような写実的なものではなく、確実に剱岳であるとは云えませんが、剱岳という先入観念をもって視るなら剱岳と見ることができます。山頂より左側部分の切れ込みは大窓・小窓・

三ノ窓と見ることができますが、西側の特徴的な早月尾根や小窓尾根が描かれていませんので、スカイラインから想像して考えただけです。……もし魚津から描いた剱岳とするなら大窓など見えません。滑川から上市にかけてのように見えるがそれもはっきり特定できるような絵ではありません。私は断定する必要もないと考えます」と書かれていた。

早速、お礼を兼ねて「あの絵は毛勝山という先入観念を持って見るならば、毛勝山と見ることができますか」と質したところ「無理やり、あれを北峰とし、あれを南峰に当てはめても、毛勝山とはほど遠い」との返答があった。

筆者の認識する剱岳であろうとするならば、なぜ剱岳を描いたのであろうか。それを解くために棟方が山を描いた油画と、対象となる山を比較しながら検討を加えてみた。「毛勝山」を描いたという「剱岳」は、棟方の作品のなかでもかなり写実的だ。油画「医王山」はドーム型の山であるが、そのように描いてあり、毛勝山のみを特に峻険な山容に描いたものとは考えられない。

縷々比較を試みたが、結果として、棟方は以前からたびたび上市の大岩山日石寺を訪れている。１９４６（昭和21）年４月29日に訪れたときには、不動尊を見て霊感に打たれ、福光へ帰ってすぐに「松柏図」を描き上げている。重要なことの一つに、毛勝山とする絵を描いた７年３ヶ月後ではあるが、１９６２（昭和37）年１月、59歳のときに上市の真言密教大本山日石寺より、中世以降、僧に準じて医師・絵師・連歌師などに与えられた称号・法眼位を受けている。また、棟方は日石寺へ１９６６（昭和41）年４月吉日に「越中大岩山御本体不動明王黒本尊」を描いた板木を寄贈しているなど、両者の付き合いは以前からかなり深い。上市を訪ねたときにたびたび眺めた立山連峰、なかでも上市からの剱岳が眼に焼きついていた。したがって、魚津では毛勝山を描いているものの、意識の中に浮かんだ剱岳の姿を描いていた。つまり、心象風景を描いていたと考えられる。

「Ｂ」は１９５４（昭和29）年に開催された富山産業博覧会で、旧魚津水族館が第２会場となり、それを機に旧国鉄魚津駅の駅舎が改築された。その改築記念に金光邦三市長が棟方に依頼して描いた絵である。金光は棟方とは仲間内の感覚で、棟方が東京へ帰って有名になってからも魚津へ呼び、例えば、有名な松の木を切るので記念に絵として留めておくことを依頼していた。棟方もサービス精神で、パフォーマンスで描いていたようだ。「毛勝山」の２枚の絵もその一環である。この「魚津浜から毛勝山を望む」の油画は寄贈ではあるが、書面はない。

佐伯郁夫は「例によって写実的なものではない、どこの山とも特定できません。毛勝山であるなら南峰と北峰（最高点）の双耳峰であり、その間の鞍部から北側に秋まで残る長大な毛勝谷の雪渓が描かれているなら毛勝山ですが、オニギリのような

山容ではどこの山と特定することはできません」という見解であった。電話で伺うと、毛勝山より北の僧ヶ岳辺りの雰囲気の山だ、と言う。

2枚の毛勝山の絵は、制作を依頼されてその場で描いたもので、題材を見て感動を覚え、その感動の発露を誰からも強制されることなく描いたものとは相違があるのではなかろうか。心から描きたいと思った絵と、それに比べて、依頼されて描いた絵との相違である。「毛勝山」は「立山連峰を望む」と同様の油画でありながら、明らかに気が入っていないと感じられるので、毛勝山よりも北方向に画架を向けたのではなかろうか。

この2枚の「毛勝山」とする油画を、筆者自身が己の目で確認するために、掲示されている2ヶ所へ赴き観照している。

なお、油画の題目である「毛勝山」の呼び名は、棟方の作品集および筆者の見聞きしたほかの文献・資料では「けかちやま」との振り仮名が圧倒的に多い。毛勝山は現在でも「けかつやま」と「けかちやま」の二通りの呼び名があり、私は「けかつやま」と呼んでいる。その根拠は幾つもあげられるが、1つは、国土地理院の2・5万分の1地形図が「けかつやま」であることによる。

以上、日本山岳会会員であった棟方志功の山をまとめてみた。

小島烏水と四国

尾野益大

日本山岳会ができて間もなく１０７年。設立発起人で初代会長の小島烏水の誕生の地に、２０１２（平成24）年2月12日、四国支部が全国31番目の支部として発足した。ところで、烏水が四国の出身であることは案外、知られていない。烏水が乳児のころ四国を離れたからか、四国に関心が薄いからか分からないが、四国に触れた作品がほとんどないことが原因だろう。四国在住の岳人の話題にも、烏水の名はまず上がらない。そこで、これまで明らかになっている烏水の略歴や作品、烏水について書かれた著述を通じて、彼が生まれた時代背景、ゆかりのある四国の名所旧跡や自然、人物を書きとめ、烏水と四国の縁を掘り起こしてみたい。また、四国支部の活動として今後、烏水の顕彰にも取り組んでいきたいと思う。２０１３（平成25）年4月14日には、高松市の高松城で小島烏水祭を開催する計画だ。

生誕地は現在の高松市

小島烏水・本名久太の出生地は「香川県高松市」と思っている人が多い。彼のことをよく知る岳人でもそう答えるだろう。本当にそうだろうか。

香川県は四国の北東部に位置した県である。１２００年以上前、高野山に金剛峯寺を開いた真言宗の開祖・弘法大師空海が生まれた県といえば見当がつくだろうか。あるいは、源平の屋島合戦が繰り広げられた歴史の舞台といえば分かるだろうか。

香川県の面積は大阪府に次いで全国で2番目に狭い。内海の瀬戸内海に面するためか1年間の晴天日数が多く、温暖で明るい土地柄といえる。県庁所在地の高松市は、香川県でもその瀬戸内海に面している。

烏水の生誕地は、確かに現在の地名でいえば香川県高松市だ



本部から四国支部に寄託された小島烏水のレリーフ（佐藤久一朗名誉会員制作）　撮影＝羽田栄治会員

が、彼が生まれた１８７３（明治６）年12月29日には、香川県は存在していなかった。つまり、香川県は現在の徳島県にあたる名東県に併合されていた。烏水が父・寛信、母・サクの長男として誕生した厳密な住所は、だから名東県が正確といえる。

名東県は元々、平安初期の諸制度を集めた法典「延喜式」に記載された古代阿波（徳島県の旧名）の郡名・名方郡を東西に分けた地名に由来している。名方郡があった土地には阿波国府が置かれ、阿波を統治する国造家が住んでいた。

徳島県は讃岐山脈を挟んで香川県の南に位置している。徳島県には今も名東郡、名西郡が存在している。烏水が生まれたとき、名東県庁は現在の徳島県にあり、香川県には支庁が置かれていた。淡路島も名東県に属していた。

さて、烏水の誕生前後、名東県に限らず、四国の４県は複雑な行政区画の変遷をたどった。徳島・香川からなる名東県は、１８７３（明治６）年２月20日から１８７５（明治８）年９月５日までしかなく、それ以前の１年３ヶ月間とそれ以降の11ヶ月間は、両県は別々だった。

その後、１８７６（明治９）年８月21日から１８８０（明治13）年３月２日までは、現在の愛媛・香川両県が一緒になった「愛媛県」と徳島・高知が一緒になった「高知県」によって四国は構成されていた。四国が現在の４県で定着したのは、１８８０年３月２日以降のことだった。

乳飲み子の烏水が自分の足で歩き始めたころ、維新政府は徴兵令、地租改正条例、郵便制度、学制、太陽暦などの重要施策を次々と打ち出した。一方、地方では矢継ぎ早の新政策に即応できないばかりか、混乱続きだった。

少し前の１８７０（明治３）年には、徳島で旧徳島藩内の騒擾事件「稲田騒動」が発生した。家老・稲田家旧家臣が維新政府に士族編入を認めてもらおうと分藩運動を起こそうとしたのに対し、本藩の藩士が稲田家旧家臣を襲撃。維新政府が本藩の首謀者に切腹などを命じるとともに、稲田家側は士族編入の代償として北海道への移住を余儀なくされた。

香川でも民衆による「高松藩主帰京阻止騒動」（１８７１年）や、貢賦負担が軽減されないままの徴兵義務に不満を持つ民衆が、戸長ら村役人の邸宅など５００ヶ所以上を破壊した「西讃竹槍騒動」（１８７３年）が起こった。

烏水より少し早く生まれた名東県は烏水2歳の年、ついに分裂してしまった。四国山地の高峰・瓶ヶ森（１８９６ｍ）に源を持つ吉野川の治水費と住民の負担度を巡って名東県会で徳島、香川双方の議員の間に起きた意見対立が原因だったという。

烏水の短い四国生活と徳島・香川からなる名東県の時代は、皮肉にも同じ2年間だった。烏水は正に行政区画がさまよい、世情が不安定な四国動乱期に産声を上げたのである。

高松市番町と小島姓

小島烏水が誕生した現在の香川県高松市番町は、瀬戸内海に面して建つ高松城の南西に形成された旧城下町だ。全体で42万人の人口を抱える、高松市の中心市街地といえる。

約１４０年前、烏水が生まれたのは高松藩士の家だった。しかし、烏水は『日本アルプス』第4巻の「日本山岳景の特色」に「私は讃岐の産れで……」などと書いているだけで、詳細な住所を明らかにしていない。その後の調査・研究によっても、（当時の）三番丁、七番丁、（現在の）番町4丁目など数説あり、生誕地をここと指し示すことはできない。現実に転居した可能性も考えられる。

烏水が生まれた番丁（現在の番町）は、一体どんな町だったのか。「番町」は当時「番丁」という文字を使っていた。武家屋敷の場合、「町」の文字を用いないからだ。一帯には城に近い北から南へ一番丁、二番丁……と続き、徳川家康の孫にあたる初代高松藩主・松平頼重（水戸徳川家・光圀＝水戸の黄門さん＝の兄）が入ったころには、五番丁付近まであった。その後、十番丁まで形成された。現在は「〇番町（丁）」の呼称はなく「番町〇丁目」といっている。

１８４４（天保15）年の城下図によると、三番丁には10軒、四番丁には43軒あり、ほかの番丁などを含めると、侍屋敷は計４５９軒あった。

高松藩士の家系についてまとめた『讃岐松平藩士由緒録』（高松大学出版会）によると、１８００年代初期の文化・文政年間、高松藩士に小島家を名乗る家が3軒あることが判明している。いずれも姓の漢字は「小嶋」だ。

「小嶋又左衛門」家は、代によっては奥目附、馬廻番組、書院番組などを担い、「番町（現在の附属小学校）から近くの藩邸に移り……」とある。今の香川大学附属高松小学校は、県庁の南隣に細い道路を挟んで建っている。

付近には県庁のほか、香川県警察本部、高松赤十字病院、県立中央病院などの行政・文化・医療機関や名門・高松高校が建



小島烏水が『日本アルプス』の中で紹介している坂出市・五色台の崇徳上皇の白峯御陵

ち並ぶ。県庁旧本館付近には高松藩校「講道館」跡もある。また、高松市中心部を南北に抜ける中央通りに面して多くの企業がある。

中央通りは市のシンボル・ゾーンとして「日本の道百選」に入っているほか、約200本のクスノキが植わっていて、「日本街路樹百景」にも選ばれている。中央通りから道路を西方奥に入るにつれ、閑静な住宅地に導かれる。武家屋敷の面影はないが、高級住宅街の趣がある。

次に「小嶋七蔵」家は、代によって物頭格、大番組などを務め「番町（現在の工芸高校）藩邸に居住……」とある。高松工芸高校は、県庁北方の番町2丁目にある。近くには、松平頼重の命で水練を指導した今泉八郎左衛門盛行の邸宅跡や、高松藩最後の十一代藩主・松平頼聡（よりとし）が、高松藩朝敵事件によって謹慎した浄願寺（元は中央公園にあった）がある。

「小嶋市兵衛」家は、名前だけで居住地などは記されていない。

烏水に関する調査・研究では、烏水の家について「代々高松藩に仕えた家臣で書院番などを務めた」「父親は高松藩主に次ぐ側用人。家老に次ぐ上士の身分」と発表されているが、3軒の中に烏水の父・寛信の名は見えず、烏水がどの家と関係があるのか断定は困難だ。

ただ、小嶋姓であっても3家のすべて、あるいはいずれかが烏水の家系か、親類である可能性は極めて高い。なかでも小嶋

又左衛門家、小嶋七蔵家は、「明治初めに至るまで居住した」とある。烏水の長男・隼太郎が、祖父・寛信や父・烏水について「一家は親類中……」と書いており、親類が存在していたことも事実だ。

なお、烏水の父・寛信の出身である一条家は、この藩士由緒録に載っていない。

烏水が高松を離れた1875（明治8）年、三番丁には40戸・139人、四番丁には87戸・388人が住んでいたようだ。ただし、この中に烏水の家族が含まれていたかどうかは分からない。

高松藩における小島家

烏水の家は、高松藩でどのような格だったのだろうか。

ヒントとして分かるものでは『山岳　小島烏水記念号』（1949年）の中の「浮世絵研究家としての烏水先生」（藤懸静也）に、烏水の妻が述べた内容として次のように記されたものがある。「小島の家は松平家に仕えて祖母が常妙院様のおつきで、おもり役をしていまし……」

しかし常妙院について、どの藩主の正室か側室か子供か、あるいは藩士の関係者か、高松藩に関する現資料に記録はないようだ。

一方、『小島烏水　山の風流使者伝』（近藤信行著）に烏水の弟・栄の直話として「母親サクは幕末のころ、藩主頼聡の目黒の下屋敷（現在の港区白金台町）にあって行儀見習をつとめたことがあったという」との貴重な証言もある。

こうした烏水に関する著述を参考にしたり、高松藩士の記録にある「小嶋家」が烏水の家系と仮定したりすれば、烏水の家は代によって奥目附や馬廻番組、書院番組などを務めていて数百石の中級家臣とみられる。江戸時代は苗字、名前と同じ読み方の別の文字を当てることがあったほか、明治期に戸籍を作るときに改名することがあったため「小嶋」と「小島」は同じと見て差し支えないだろう。

烏水に関する著述で「奥家老」「家老格の家柄」と家格が上級として紹介されているが、根拠は詳らかでないのではないか。

仮に小島家が、現在の給料にあたる300石の知行取りだったとすれば、300石の米を収穫できる土地を治めていたことになる。時代によって、あるいは研究者によって換算は異なるが、1石は米約150kgで、10kg6000円と換算すると9万円。米1石は金1両だから1両も9万円。しかし、実態と合わせて職人の手間賃をベースにすると、1両は40万円という試算もある。つまり300石は最大に見積もれば1億2000万円で、莫大な給料を得ていたことになる。

しかし、軍役規定に従って複数の家来を雇わなければならず、それぞれに給料を払うと生活は大変だったようだ。それでも領



小島烏水の父が仕えていた高松藩主・松平家の高松城

内に庄屋を置き、物入りのときは次の年の年貢を担保に借金ができ、百姓に労働力を提供してもらうことができたため、武士の生活水準としては上のランクに入っていたという。

烏水が浮世絵や文筆のほか、山岳などいろいろな研究に熱心だった事実から見ると、そうした恵まれた家系の影響を受けていたことは十分推測できる。先述の「浮世絵研究家としての烏水先生」には「……錦絵を沢山愛蔵していて小島は子供の時から、それを見て楽しんでいたのだそう……」とあり「先生の研究は総て透徹しなければ、止まぬ熱烈さをもっていた。山岳の研究でも恐らくそうであろう」と続けている。

『小島烏水――』でも「久太（烏水の本名）の文学好き、芝居好きの性向は、母親から享けたものと思われる」と紹介している。いずれにせよ、小島家に関する文書が何も残っておらず、加えて、高松市が戦災に遭ったせいで多くの古文書を失ったため、烏水と高松藩との確かな関わりは断定できない。

烏水の家が仕えていた高松藩は、讃岐国（現在の香川県）の中東部を治める親藩中藩だった。親藩とは徳川家の親類の大名を意味し、御三家の水戸家と関係が深かった。

また、同じ四国で外様の蜂須賀家が治めていた徳島藩の八代藩主・宗鎮（むねしげ）は、高松藩公族・松平頼恕と高松藩士・佐野利左衛門の妹との間にできた子で、蜂須賀家に養子として入り、続く九代藩主・至央（よしひさ）も高松藩公族・松平頼恕と高松藩士・渡辺加兵

衛の姉との間にできた子で、同じく養子として入っている。

烏水と徳島藩との関わりについても、現在のところ不明である。

弘法大師空海生誕の地

烏水が生まれた現在の香川県は、真言宗の開祖である弘法大師空海が７７４（宝亀５）年に生まれた土地である。四国霊場八十八ヶ所の七十五番札所・五岳山善通寺（善通寺市善通寺町）の建つ場所が生誕地だ。元々は空海の父方の「佐伯氏の館」があったという。

烏水が四国霊場を巡った記事は見当たらないが、烏水はラジオ講座「本邦の山岳文学」の中で空海に触れ、山との関わりについて持論を展開している。

烏水は「日本の山岳文学は讃美と礼拝をもって始まった」と指摘。富士山（３７７６ｍ）や立山連峰を例に挙げて山に名前を付けるようになったのは後世のこととし、さらに「それに先立って山を実地に探検して登るというようなことをやった偉い人が一人あります。それは弘法大師でありまして」「空海、少年の日、好みて山水を渉覧し」と紹介している。

史実として、空海は徳島県東南部の太龍寺山（６１８ｍ）に登ったり、高知県東南部の室戸岬で修行したりした経験を著書に書き留めている。太龍寺山は空海が高野山よりも先に道場を開こうとしたと伝えられ、「西の高野」とも呼ばれる。

烏水は、太龍寺山や室戸岬とは別に、空海が西日本一高い石鎚山（１９８２ｍ）に登ったことを紹介し、「19歳のときに伊予の石鎚山に登られ、それから高野山を開かれた。京都の高尾山、その時分は随分幽邃な山だったろうと想いますが、これも登っております」としている。

また烏水は、空海が登山家であることを証明しようとしたのか、「当時地図もなく、磁石もなく、別に護身用の武器は太陽の光を、夜は星を目当てにして錫杖一本で山から山へと探検旅行しまして」とした後、山の探検家として優に伝わるべきであると高く評価。空海の山登りによって日本の山が非常に開けた、と強調したのだった。

現在でも多くの登山家や登山愛好家が登山を通じて自然の大きな力を感じるように、当時、空海が山林の中に寺院を建てたことに関して、烏水は「人間を自然に開放して、自然の力でもって人間が感化されるというようなことになってきたのではないか」と推測し、後世の人たちに与えた空海の役割の偉大さをしっかりと伝えようとした。

ただ、空海について熟知し評価した烏水だが、空海が四国出身だったことを知らなかった可能性がある。

なぜなら、烏水の文章に「……東北地方にも行き、中部はもちろんとして四国、そういう所まで行かれたということは、全

く弘法大師の偉い所でありまして……」とあるからだ。

烏水はまた、編著書『旅行談』の序文で、天然の地形や歴史などから見て日本人が旅行の経験を多く持っていることを述べ、宗教上の観念としての旅行もそれを盛んにしている、という趣旨の文章を残している。宗教上の観念の旅行には、空海が開いたと伝わる「八十八ヶ所巡礼」も含まれている。

兵庫県芦屋市に住んでいた烏水の弟・栄氏は「兄・烏水の想い出」という文章で、烏水が日本山岳会の創立前まで登山旅行が半分、後半分は演劇方面に熱中していたことを明らかにしている。烏水は、関西が特に好きであこがれ、単独または山岳会の仲間と、あるいは家族連れで十数回下阪し、名所古跡を探勝していたようだ。

ただ、具体的には吉野山（１９２８年秋）や、その後訪ねた生駒山、「曽根の星ヶ丘茶寮」に行ったことが分かる程度で、ほかの旅先は定かではない。

生誕の時代は隔たっているが、烏水が同郷の人・空海ゆかりの善通寺に参拝したかどうか、四国霊場の寺院のどこかに足を運んだかどうかは不明で、烏水の旅の足跡について想像は膨らむばかりである。

四国霊場八十八ヶ所と烏水

四国には「四国八十八ヶ所巡礼」「四国霊場巡り」という言葉があ

る。これは徳島、高知、愛媛と、烏水が生まれた香川の４県にある弘法大師空海ゆかりと伝わる寺院、計88ヶ所を順番に参拝することを指している。旅行好きだった烏水が、四国霊場巡りをしたかどうかは記録として見当たらないが、著書の中には四国霊場やそれにまつわる記述が幾つか見られる。

『旅行談』の序文では、まず旅について触れている。

「……旅はつらいものというのはいかにも当たっている、と同時に又、楽在其中というのも間違いはない、気候に夏もあれば冬もあるが如く、天地も人間のためには、温室ともなれば氷室ともなる。ただ苦楽いずれにせよ、日本人は旅行に就いて最も多くの経験を持っているということだけは争われない」と。

さらに天然の地形や人間の系統、歴史の連続からいって日本人は旅行に最も多くの経験を有しているだけに、苦にせよ楽にせよ、その中に趣味を会得している国民である、と見解を述べている。

烏水は続けて、伊勢参宮や金比羅詣と並んで取り上げた「八十八箇所巡礼」について「宗教上の観念よりしての旅行」と指摘した。金比羅宮は香川県西部にある旧国弊中社の有名な神社で、幕末には伊勢神宮に匹敵する賑わいを見せた。烏水の記述は、烏水が登山以外の一般的な旅行についても見識を持っていたことを裏付けている。

また別の著書『お札博士スタールの日本に対する警告』の中

では、米国の大学で初めて日本講座を講義した人類学者フレデリック・スタールが、白衣の行者姿で富士山に登ったことを紹介しているほか、「弘法大師の霊場たる四国八十八ヶ所に参詣して、札を打っ（納札）たり……」と書き、わずかだが参拝の内容について記している。烏水は四国八十八ヶ所巡礼の歴史や作法については特に述べていない。

一般的に、八十八ヶ所の起源や、なぜ寺の数が88ヶ所なのか、巡礼の順番やコースがいつどのようにして定まったのかは不明だが、文献から八十八ヶ所巡礼が定着したのは、17世紀に入ってからとされる。

１６３１（寛永８）年ごろの書『せっきょうかるかや（高野の巻）』の中に「四国遍路は八十八ヶ所」と出ていて、その後、１６５３（承応２）年に行なった１００日間の巡礼記『四国辺路日記』（僧澄禅著）や１６８４（貞享元）年には『四国遍路道指南（みちしるべ）』（宥弁真念著）が公になり、成立年代の根拠とされている。

霊場巡りは元々、修験者が海辺で行っていた修行が原初の形と考えられ、それが弘法大師空海を追慕する祖師巡礼になったといっていい。八十八ヶ所の各寺では、本堂とともに空海を祀る大師堂に参拝するのが慣例とされ、例えば、本堂の本尊と観音堂を参拝する「西国三十三ヶ所巡礼」とは異なる。

巡礼に欠かせず、巡礼の大衆化の重要な要素とされるのが、寺や寺の近くにある「善根宿」（宿泊場所）や情報を得る「遍路案内」の存在だ。これと合わせて、寺の近くの民家や道中で参拝者が地元住民から受ける善意の風習「お接待」も忘れてはならない。宿泊だけでなく食べ物や飲み物を無償で提供してもらえ、参拝者にとってこれほどありがたい恵みはない。

お接待をすれば、巡礼をしたのと同じ功徳が得られるといわれ、この風習は現在も受け継がれている。烏水が、どんなきっかけでお接待について知ったのかは分からないが『アルピニストの手記』の中ではこれにもきちんと触れている。

「四国のお遍路さんたちは、到るところで、茶をよばれ、米を施されるということだが……」と書き「行旅の人を助けるという人情は身にしみて嬉しい」と続けている。

実際にお接待を受けたわけでなく、伝聞の内容であっても、烏水の旅行好きを証明する一文といえる。

アルプスと四国の山々

地質構造上、日本にアルプスを求めることはできない。強いて求めれば大小高低の差は比較できないが四国山系こそ、すこぶるアルプス山系に類似したもの――。

烏水の『山水美論』にはそんな興味深い記述がある。ただ、山の内部の組織構造よりも外見から見て四国山系を日本アルプスと呼ぶ人はいない、と断っている。『日本アルプス』の中の「ラ

スキンの山岳論」でも、地質学者・ナウマンが構造上アルプス山によく似ているといった四国山系、と表現した箇所がある。

ラスキンは『近世画家論』などを著した英国の批評家で、画家のジョン・ラスキンのこと。本格的な登山はしなかったとされるが、山岳の美を伝えた功績で英国山岳会の会員になっている。志賀重昂は『近世画家論』に触発されて『日本風景論』をまとめ、烏水は22歳のとき、その本などを読んで影響を受け槍ヶ岳（３１８０ｍ）に登った。その後、烏水は「日本のラスキン」といわれた志賀重昂以上の「ラスキン崇拝者」になったといわれる。

さて烏水は、故郷四国の山々についてどんな風に描いているだろうか。

『日本山水論』に「四国に二山系あり、一系は紀伊より、他の一系は和泉より来り、共に海に伏して四国に再起す」と記し、讃岐山脈と四国山地の存在を指摘した。

讃岐山脈の山は、大麻山（５３８ｍ）、登尾山（８８７ｍ）、大川嶽（１０４２ｍ）、雲辺寺山（９２７ｍ）を取り上げている。いずれも『日本山嶽誌』にも載った有名な山だ。『日本山嶽誌』では、大川嶽は大川山（大仙山）と書かれているにもかかわらず烏水が「嶽」の文字をなぜ使ったのかは不明である。地図に掲載された多くの山々より、掲載されていないマイナーな登尾山を選んでいる点は驚きである。

大川山より高い讃岐山脈最高峰の竜王山（１０５９ｍ）や、古くから修験道の道場として知られる大滝山（９４６ｍ）が紹介されていないことも不思議である。

四国山地については、讃岐を除く三国境に起伏凹凸し四国の脊椎骨を作る、として徳島の剣山（１９５５ｍ）、祖谷山、愛媛の石鎚山を挙げ「歴落碧宵に衣皺（いしゅう）を熨（の）して、冬は天雪を布き、夏は天火に炙られ、この霊境をしていよいよ浄潔ならしむ」と美文で讃えた。

しかし、中津峰山（７７３ｍ）から皿ヶ峰（１２７０ｍ）まで一本の尾根で続く長大な四国山地の山の説明を、剣山と石鎚山だけで終わらせるのはどうかと思うし、矢筈山（１８４８ｍ）や寒峰（１６０４ｍ）など『日本山嶽誌』にも載った祖谷山系の有名峰を省いている事実には首を傾げたくなる。

讃岐山脈よりスケールが大きい四国山地の山をほとんど取り上げず、海部山地や法皇山脈、黒尊山系などを構成する山も省略したのは、本のページ数が限られていることもあっただろうが、烏水が讃岐に生まれたことが無関係でないのではないかと推測できる。

石鎚山と剣山について、烏水はほかにも幾つかある「日本の名山」として紹介している。名山に選んだ基準は宗教上、歴史上、あるいは名勝として一州一国の山岳代表として、よい道があり、何人も登攀が容易なことを挙げ、大小高低に関係しない

としている。

「四国山系がアルプスに似ている」とナウマンの記述を引用した烏水だが、烏水が四国の山に登ったかどうかは定かではない。山行記が見当たらないことから、登った可能性は極めて低いのではないだろうか。

『日本アルプス』（宮下啓三著）では、日本の近代アルピニズムの水源としてラスキンや地理学者である志賀重昂の著作があることを示し、このふたりは正に高山に登らなかったものの、多くの人々の胸に登山の情熱を植え付けたと指摘している。さらに「この事実を奇妙と思うにはあたらない。山は人の目と心を誘い寄せる力を持っている。ただし、その誘い方、誘われ方に時代の相が反映していた」と書き留めた。

そのふたりより多くの山に登った烏水が、たとえ四国の山に分け入っていなくても、彼が残した文章から、その時代としては最先端の情報や研究成果が読み取れるのは、類いまれな文才と山に対する情熱がそうさせたからに違いない。いかに山の素晴らしさを広めようとしたか、烏水の数々の著作を見れば一目瞭然である。

「四国山系こそアルプスに類似している」ことを証明した人は未だにいないが、烏水がその言葉を気に留めていたことは、やはり烏水が四国に生まれたことを意識していた証と思われて仕方がない。

同時代の同郷人たち

小島烏水が生まれた現在の高松市は、瀬戸内海に面している。瀬戸内海と周辺の自然は、日本の国立公園第1号として1934（昭和9）年3月、国の指定を受けた。これに尽力したのが、烏水誕生の年と同じ1873（明治6）年、高松市より東のさぬき市長尾の地主の家に生まれた小西和（かなう）である。

小西は朝日新聞の日露戦争従軍記者として満州、樺太、シベリアに行き、雄大な大陸を見たが、帰国後は瀬戸内海の美しさに惹かれ研究に没頭。成果として『瀬戸内海論』をまとめた。政治家にもなった小西は国立公園制定に力を注ぎ、『瀬戸内海論』発表から24年後、瀬戸内海国立公園化の夢を叶えたのだった。新渡戸稲造が「世界の宝石」と讃えた瀬戸内海は、小西によって名実ともに国の宝物となった。瀬戸内海のほか、霧島（宮崎・鹿児島）と雲仙（長崎）も同時に指定されている。

烏水自身も、中部山岳が1934年12月に国立公園の指定を受ける5年前、「日本アルプス国立公園のカアル帯」という文章を残している。日本アルプスの中で国立公園の候補地として上高地、白馬岳（2932m）、立山（3015m）の3つを中心とするものがあることを紹介し、「私見によれば、この三者は、不可分の関係として併合することによって日本アルプス特有の風景なるカアル帯を国立公園に編入したいと思う」と記した。ここで注目されるのは、烏水が世界で2番目（1890年、実

質的には世界初）の国立公園「ヨセミテ渓谷」を訪れた経験をもとに、カアルを不可欠とする中部山岳の重要性を論じた点である。

烏水は転勤のため１９１５（大正４）年、米・西海岸に渡航後、約10年間にわたり毎年夏、ヨセミテで遊び、次のように紹介した。

「神河内に比べ、渓谷の水と白樺の美しさや柔らかな草原は神河内が克ち、瀑布の壮観はヨセミテの独壇である。奥穂高とエル・キャピタン岩のそれとは奥穂高の方が胸の深さで勝りエル・キャピタンは垂直線の直截的荘厳性で負けていない」と。それらは烏水が著した『氷河と万年雪の山』『ヨセミテ渓谷への美的散歩』の中に多くのページが割かれている。

烏水の文章が国立公園指定に影響を与えたか否かは分からないが、山と海との違いはあっても、自国の自然に目を見開き、顕彰・啓発した小西和とともに烏水の功績は計り知れない。

烏水と同時代に生きた人はほかにも多い。烏水がすでに四国を離れていた１８８４（明治17）年、烏水同様、旧高松藩士の家に生まれたのが弁護士で政治家だった三木武吉。鳩山一郎内閣成立を目指して吉田首相と対決し、「陰の実力者」として保守合同の立役者になった人物だ。

１８８８（明治21）年、烏水と同じ番町（旧七番丁）に生まれたのが菊池寛である。時事新報社、大阪毎日新聞の記者を経て作家になった後、文藝春秋を興し、文壇の大御所として一世を風靡。芥川賞や直木賞を創ったことでも知られる。石川啄木に比肩される生活派の歌人・香川不抱（１８８８年生まれ）や『天の夕顔』の著者・中河与一（１８９７年生まれ）も讃岐産の人である。

終戦直後、東京大学総長になった南原繁が生まれたのは１８８９（明治22）年、東かがわ市だった。

烏水がまだ生まれていない１８６７（慶応３）年、綾南町の庄屋に生を享けた宮武外骨も文筆家として話題を集めた。威張っている士族に反発、風刺や諧謔を得意とし「讃岐平民宮武外骨」と自称して悪徳官吏や政治家、不節操な文筆家を茶化した。東大の吉野作造や尾佐竹猛らの知遇を得て１９２４（大正13）年には明治文化研究会を結成し、１９２７（昭和２）年には東大に付設された「明治新聞雑誌文庫」の事務主任に迎えられたりした。

現香川県生まれの多くの有名人が、烏水が山岳の世界、浮世絵の世界、銀行マンとして名を馳せた同時代に生きていたわけだが、烏水と直接的な交流があったかどうかは定かではない。しかし、烏水が同郷の同時代人の活躍を全く知らないわけはなかったであろう。間接的な刺激を受けていたことは想像に難くない。

そして、後世の人たちはそうした歴史を知ることによって、

烏水ら明治前後に生まれ活躍した人たちの気概というものを強く感じないわけにはいかない。

牧野富太郎に植物を学ぶ

日本の植物分類学の草分けとして知られる牧野富太郎は、小島烏水と同じ四国の地に生を享け、明治、大正、昭和の3時代を生きた。烏水が誕生する11年前の1862（文久2）年4月24日、現在の高知県佐川町で産声を上げた。

烏水が著した『アルピニストの手記』に、牧野富太郎について触れた文がある。「……牧野博士は横浜で知っている。横浜には牧野先生を仰いで植物学の実地指導を受けた若い人たちの会があった……」と。その会は1909（明治42）年10月に創立した「横浜植物会」と考えられる。また烏水が住んでいた西戸部の西戸部中学校で集会をしたり、横浜周辺で植物調査をしたりしていたことが富太郎の日記から分かる。烏水はそうした集まりに顔を出していたのだろう。

烏水は富太郎の講話に耳を傾けた思い出として「神奈川第一中学校教室で高山植物に関する講話を聴いて、駆け足で速記まがいの鉛筆を動かしたことがあった」と書き、そのときの草稿について「探せば出てくるかもしれないが、先生の校閲をわずらわせる勇気もない」と吐露している。

烏水が高山植物に強い関心を持っていたことは、エッセイ「或一冊の古本」を読むと分かる。その中で、ウォルター・ウェストンから贈られたシュロッター著『高山植物手引草』を例に挙げ、いかに感動したかについて記している。その本は牧野富太郎と三好学共著の『日本高山植物図譜』初版本が出た1906（明治39）年よりも古い本だったため、烏水は「シュロッターの本によって高山植物なるものの美しさを教えられた」と書き残した。

その後『日本高山植物図譜』の2巻目が出たときには、烏水は当時の唯一の権威書だったと指摘。「写生書だけに生動の芸術味が加わって19世紀前半の欧州アルプス山岳図書に見る如き、時代色と学術と工芸美の相伴した合奏を見た」と賞賛したほどだ。

烏水は富太郎については知っていたが、三好は知らなかったという。三好学は東大教授で、ドイツ留学中に本場のアルプスに親しみ、日本にもその種の図鑑が欲しいと富太郎に著述を勧めた人物だった。ちなみに同じ1906年、烏水と同郷四国の生まれで瀬戸内海国立公園の指定に尽力した小西和が『日本の高山植物』を世に出していて、三好が推薦の序文を寄せている。

牧野富太郎は1893（明治26）年、東大で松村任三教授の助手として働き始めた。しかし、松村とは仲が悪かった。烏水はそんな事情も知っていたようで、次のような経験を書き留めた。

「友人に松村博士の植物に関する本を貸そうとしたところ、手にも取らず押し戻した。友人は、牧野先生をいじめるような人の本を手に触れては先生に対して相済まないとつぶやいていた」といった内容だ。松村博士の富太郎に対する「圧迫は30年も続いた、と先生が自記していられる」とまで書いた。

日本山岳会が設立したころは登山だけでなく、高山植物への趣味が湧き起こった時代でもあった。山草や高山植物を栽培する趣味が流行したようだ。

牧野富太郎は日本山岳会の創設期の会員だった。会員番号がつく以前に入会したためか番号は不明で、紹介者は必要なかったようだ。日本山岳会が元々、日本博物学同志会の支会という形でできたことを考えると、博物学同志会の牧野富太郎が入会したのは自然の成り行きだっただろう。日本山岳会創設期の会員の内52人は、実に博物学同志会の会員でもあった。

１９０７（明治40）年発行の『山岳』第2号に会員の近況を数行で紹介する小さなコーナーがあり、そこに「会員牧野富太郎、矢澤米三郎、河野齢蔵は7月下旬八ケ岳に上らる」「会員牧野富太郎は8月下旬、肥前の虚空蔵山、多良岳、肥後の阿蘇山に登らる」と書いた記事などもある。富太郎は『山岳』に「利尻山と植物」なども発表している。

しかし、会員番号がきっちりつくようになった時代には、富太郎は日本山岳会を退会していたという。創設期の会員は６００人程度もいて、皮肉なことに、富太郎と相性の良くなかった松村任三教授は日本山岳会の特別会員だった。同じ高知出身で富太郎の幼なじみの植物学者・吉永哲馬も山岳会に所属していた。

富太郎はしばしば高知に里帰りした。１９０６（明治39）年、45歳のとき香川県高松市、小豆島を訪れ、１９０８（明治41）年には愛媛県松山市、そして１９０９（明治42）年8月、徳島県教育会主催の「剣山植物講習会」に出席するため徳島の剣山に登山するなどしている。１９５７（昭和32）年、満94歳で亡くなった。

烏水と坂本龍馬、そして坂本直行

小島烏水が高松藩の家に生まれる少し前、元土佐藩の郷士・坂本龍馬（１８３５～１８６７年）は、京都の近江屋で見廻り組に襲撃され亡くなった。三十歳余の若さだった。烏水と龍馬は同時代に生きたわけではないが、同じ四国の高松藩と土佐藩は、明治維新を通じて皮肉にも因縁があった。さらに龍馬の親類にあたる画家・坂本直行（１９０６～１９８２年）は日本山岳会の元会員で、北海道を舞台に活躍した。

大政奉還後、高松藩は鳥羽伏見の戦いで徳川方に味方して官軍と敵対。その後、朝廷は徳川幕府方に属する諸藩の討伐を行なうことになり、土佐藩は香川の丸亀藩、多度津藩とともに高

松藩と松山藩を攻撃するよう命じられた。これに対し高松・松山両藩はともに恭順の意を示したため、戦争には発展しなかったという。

朝敵と見なされた高松藩の藩主松平家や同家の家臣団は、四国を離れることになった。小島家も例外でなく、関東に移り住んだが恵まれた境遇を得られなかったといわれる。ただ、松平家は軍資金を献上することによって官位復命の恩赦を受け、高松藩は奥羽征討軍に加わるという複雑さを味わった。

烏水は15歳から20歳までの間に初期の作品として、維新で活躍した人物について「近世豪傑物語」と題した文章を残している。龍馬のほか、大鳥圭介、近藤勇、後藤象二郎、西郷隆盛ら二十数人を取り上げ、特に龍馬については「坂本龍馬、雨中に水練を学ぶ」と「坂本龍馬、死に臨みて豌豆を噛む」のタイトルで2回登場させている。

一つは龍馬が幼いころから水泳を習い、大雨の海でも技術を試すことができるといって練習したという内容の短文である。もう一つは、長州藩主の悪口を言った土佐藩士を藩主が捕らえ、自刃を命じようとしたとき、龍馬が訪れ、服の中からエンドウ豆を取り出して食べたというもの。

一方、坂本直行は龍馬の兄から続く直系の子孫という関係だ。龍馬に実子がいなかったため、１８７１（明治４）年、朝廷から「明治維新に功績があった人物の家が絶えるのは不憫」ということで坂本一族の中から家を継ぐことを促され、土佐坂本本家の五代目直寛が一族を継ぐことになり、１８９８（明治31）年、一族をあげて北海道浦臼に移住した。坂本直行は直寛の孫である。

なぜ、坂本本家は北海道へ渡ったのか――。

龍馬は北海道開拓の夢を綴った手紙を複数残しており、その中の１通は暗殺される４日前に書かれている。また、龍馬の妻・お龍から聞いた話として、龍馬は「北海道は海援隊で開拓する。私（お龍）も行くつもりで、北海道の言葉を一々手帳に書き付けて毎日稽古しておりました」という内容の伝聞も残っているという。つまり、坂本本家の北海道移住は、龍馬が果たせなかった夢を実現するためだったといえるだろう。

さて、坂本直行は北海道大学農学部に学び、山岳部を設立。日本山岳会には１９４８（昭和23）年に入会（３５８５番）した。原野開拓の傍ら、主に日高の山々や植物を描き続けた。豪胆さと繊細さを合わせ持ち、ずば抜けた体力で山に登り絵画をこなした。絵を売って遭難にまつわる費用を工面したこともあったという。

北海道土産の定番菓子「六花亭」の包装紙の植物図は直行のデザインとして知られ、六花亭製菓は「坂本直行記念館」も運営している。龍馬の手紙には写実的な絵図を書いたものがあり、直行を通じて枝の才能が北海道に花開いたと指摘する人も

いる。北海道の登山用品店「秀岳荘」は坂本直行が名付け親とされる。

烏水の現代性

時代を経ても色あせず、今も通用する烏水の考えを取り上げて締めくくりたい。烏水は亡くなる2年前の1946（昭和21）年、「山へ帰ろう――日本山岳会の復興と再生」と題した文章を会報「山」135号に寄せた。2011（平成23）年3月11日、突如起こった東日本大震災による被災を思うとき、大震災が関係地域の会員に強いている不幸は計り知れない。明治維新後、烏水一家も寂しい思いをしながら四国を離れた。晩年には第2次世界大戦の苦労を味わい、終戦後の現実を見て先の文章を綴ったのだった。東日本大震災による被災と重なって心打つものがある。

烏水はこう書いた。

「私共は、今廃墟の中に立っている……地面は焦土という単色な絨毯で覆われてしまった……日本山岳会の事務室も、瓦礫と灰になった。事務所ぐらい、というなかれ。山岳会成長の歴史があり……恐らく日本一と称しても不可なからうほどの山岳図書が集積せられ……それがすべて炎上した。物は心に繋がる以上、物と心とは截然と切り離せるわけにはゆかない」。地震と津波による今回の災難と、烏水が体験した戦災とは異なっても、眼前の惨状の様子は似たものだろう。

さて、烏水は「いつまでも茫然自失でいることは許されない。一体どうしたらいいのであろう」と自問し「一意専心に、山へと向かって真っしぐらに進むことが容易になってきている。山岳会の復興にしても、再生にしても、この清々しい境地から出直される」と続けた。そして「根本は人の問題である。人の気魄叡智の問題である。物はなくても、乏しくても、人は有る……人間の原高貴性に信頼しなくて何を信頼しよう。私は『苦しい時の神頼み』を取らなくて、寧ろ『苦しい時の人頼み』を取る」と書いた。

結論として「私共は、足並みを揃えて、かのマッターホルンの勇者ウインパーの山登りの歩き方のように、歩々重く、しかしながら確かに、徐々と故郷の山へ帰るべきである」と導き出し、「憲政の神様」と称された政治家・尾崎行雄の作歌一首で結んだ。

むらさきのつつじ花咲く里行けば　わが山恋ひしいざ帰りなむ

美を尊重する烏水の生き方を反映した文章も残っている。1935（昭和10）年に報道された富士山のケーブルカー建設計画に対する複数回にわたる抗議がそれだ。一つは「人間は未だ

美学などの成立しない前から富士山に打ち込んでいた……宗教の衰退時代であるから、仮に信仰の富士が人民から忘れられたとしよう、だが、それとしても富士の美しさだけは断然と残る」。もう一つは「国の鎮めでも、国の宝でも儲かりさえすれば傷を付ける、便利でさえあれば機械仕掛けで汚損するという了簡を、私は唾棄する」と抑えきれない怒りの気持ちを文字に表した。

烏水はすでに明治・大正時代に自然保護の視点を持っていた。「富士山保護論」や「上高地風景保護論」を書いたし、「八ケ岳森林の大伐採」と題して森林愛護を訴えた。

烏水の地名に対するこだわりも見逃すことができない。「上高地」は「神河内」であるべきだと主張した。「明治38年に、温泉宿ができて『上高地温泉株式会社』としたのが流布の原因となったのであるまいか」と推測。上高地は以前は「かみうち」とか「かみぐち」などと呼ばれ、文字は「神河内」を当てたと持論を展開している。しかし、その後、「上河内」説など烏水説への反論が出てきたのも事実だった。

烏水と関係はないが、地名に関して、地図製作のとき「代馬の嶽」を測量部が「白馬」と誤った字を当てた問題があるし、「五竜」についてもこの地方が武田氏の勢力圏にあった時代、残雪の形が武田菱に似ている点から「御菱（ごりょう）」と呼ばれていたのに反して「五竜」と誤載された例もある。こうした来歴の誤った山名は、探せば各地で枚挙に暇がないほど見つかるだろう。

最後に、烏水の趣味と好尚をもって彼を一層、身近に感じたい。それは1914（大正3）年、烏水のほか杉村楚人冠や正宗白鳥、北原白秋、永井荷風、夏目漱石、大町桂月ら61人を対象としたアンケートで『文章世界』に掲載された回答で分かる。

烏水はそこで、好きな花と樹木について「シャクナゲ」「シラカバ」と答え、好きな季節は「秋」と回答を寄せた。好きな歴史上の人物は「諸葛孔明」、世界で住みたいと思う所は「スイス」を挙げた。ほかに職業を選んでいたとしたら「才分あれば科学者」と記し、一番幸福に思うことは「健康のよろしきとき」、一番不幸に思うことは「病気のとき」と回答した。

1948（昭和23）年12月13日、享年74で泉下の客となった小島烏水。これまでに紹介した一連の烏水の事柄は膨大な量の中のひと握りに過ぎないが、多くの示唆に富んでいる上、平成の時代に生きる私たちの共感を得るものだと思う。烏水は近代アルピニズムを日本に初めて広めただけではなかったのだった。功績は限りなく大きい。

＊本稿「小島烏水と四国」は「日本山岳会関西支部報」（１３３～１３５、１３７～１４３号）に10回にわたって連載していただき、今回、全体を見直して加筆・修正を加えました。

＊また本稿執筆に際し、多くの文献を参考にさせていただきました。著者並びに関係者に感謝申し上げます。

新生・公益社団法人日本山岳会の誕生

――その移行を終えて――

会長　尾上　昇

日本山岳会は、平成24年4月1日より、これまでの法人の名称を「社団法人」から「公益社団法人」と改めた。その最大の理由は、平成18年に公布、20年に施行された新たな公益法人法に準拠する。その法律は一般社団・財団法人法、公益認定法、整備法の公益法人関連三法である。

そもそも公益法人とは、民法第34条に基づいて設立された社団法人と財団法人のことで、その設立のための条件は、一、公益事業を行なうことを目的とすること。二、営利を目的としないこと。三、主務官庁の許認可を得ること、の3つである。

この公益法人が我が国に誕生したのは、民法の制定された明治29年なので、今回の法改正は、実に１１２年振りということになる。この改正の主たる目的の原点になったのは、政府が目指す「官から民へ」「小さな政府」という行政改革の一環としてであった。

この公益法人関連三法の骨子は、これまでの社団法人と財団法人は、自らの選択によって、社団法人は、一般社団法人もしくは公益社団法人を、財団法人は、一般財団法人か公益財団法人のいずれかを選択して、申請移行し直すことを求めている。社団法人日本山岳会に当てはめれば、公益性の有無や目的にかかわらず、準則主義で法人格を取得できる一般社団法人か、公益性があると認定された団体が名乗れる、公益社団法人のいずれかを選択しなければならないのである。これ以外としては、ＮＰＯなどの非営利団体や任意団体への移行という選択肢もなくはないが、論外といえよう。そして、それらへの移行期限は５年以内と定められているので、平成25年11月30日までにどちらかへの移行を申請し、認可もしくは認定を得る必要がある。

さもないと、解散しなくてはならなくなるのである。

この申請は、一般社団法人にしても公益社団法人を申請するにしても、大変厄介で申請要件が満たされない場合には、団体内部の手続きを含めて初めからすべてをやり直さなければならず、期限直前の移行申請はリスクを伴うことから、日本山岳会では、1年半ほど前の申請とした。

この公益法人制度改革による政府の目論見は、新しい公益法人を活用して社会を活性化させることと、公益の増進を民に担わせることにある。既存の社団法人や財団法人には、それぞれ主務官庁があることから行政との結び付きが強く、公務員の天下り先の温床になっていることや、民業を圧迫したり、業務の独占が図られたりしていること。また、官製談合の日常化や補助金漬け、さらには、その優遇税制を利用した過剰蓄財の横行などの不祥事が次々と露見したので、これらを正すことも大きな狙いである。

これらのことは、我々日本山岳会にとっては無縁な話であって、十把一絡げにされるのは、はなはだ迷惑と言わざるを得ない。さりとて放置するわけにもいかないので、この移行作業に対応するため、プロジェクト・チームを山岳会内部に立ち上げて対処することにした。

このプロジェクト・チームには、それぞれのメリット、デメリットの精査、申請の難易度の比較、行政からの拘束力と自由度の差、公益目的支出計画の是非、社会的な信用度合いの比較、税制の優劣、今後の事業展開の方向性、会計処理方法への影響、支部への影響など、詳細な検討をお願いした。

およそ1年の検討を経て、理事会は公益社団法人移行を決定した。この理事会の意向を受けて、平成23年3月の総会では、公益社団法人移行の審議、そして、平成23年6月の総会では、新定款の承認を多数の会員の賛同を得て決議させていただいた。

この間、会報「山」の紙上や理事会、総会の場で、激しい議論の応酬が交わされたことは、記憶に新しいところである。

私自身も選択を迷った。私は、結論として公益社団法人移行に軸足を固めたのであるが、一般を主張する会員の意見も、公益を主張する会員の意見もいずれも間違ってはおらず、両者とも日本山岳会を慈しむ気持ちには、変わりはないのである。それを単にメリット、デメリットで判断したり、まして一時の感情に流されて決めるのは、厳に慎まなければならない。

山登りの鉄則である、迷ったら元に戻れ、である。私は、日本山岳会の設立の原点を見つめ直してみることにした。

日本山岳会は、何を求めて設立されたのであろうか、動機である。そして、設立以降どのような経緯を経て今日に至ったのであろうか、という素朴な問いかけである。改めて明治39年の設立主旨書と昭和16年に社団法人の許可を受けた時点の定款を

繙いてみた。

まず設立主旨書である。1800字にも及ぶ格調高い文章で、日本山岳会の設立主旨を謳っている。前段は省略するが、最後の下りに次の記述があった。**「之を大成するは、一に趣味嗜向を同じうする、諸君子の援護に待つの他はある可らず、蓋し是れ實に國民的事業にして、決して少數人士の能く為し得るところにあらざればなり、即ち本會成立の主旨を略記して、偏に大方の賛助を懇請するものなり」**である。

昭和16年の社団法人登記時の定款の第3条には**「本会ハ山岳ニ関スル研究、知識ノ普及並ニ健全ナル登山ノ指導奨励ヲ為シ、会員相互ノ連絡親睦ヲ図ルト共ニ、山岳及ビ登山ヲ通シテ国民ノ心身鍛錬並ニ自然愛護精神ノ昂揚ヲ図ルヲ以テ目的トス」**の文言が記載してある。

この両文から日本山岳会の目指すところは、広く国民的事業であるとし、極めて公益性の高い目的を標榜しているのを窺い知ることができる。私は、これを創始の志と捉え、公益社団法人としての存続が正しい選択であると確信したのである。

さらには、今度の公益法人制度改革で公益社団法人として示されている活動内容が、日本山岳会が従来から実施してきている諸事業のほとんどに当てはまっていることや、内閣府の定める公益社団法人としての諸条件を充分満たしていることにも意を強くした。言い替えれば、日本山岳会が公益社団法人となっても、支部も含めて今までと変わりない運営と事業展開が継続できるということである。

一方で今度の制度改革のもう一つの狙いは、組織自体に高いコンプライアンス（法令などを遵守すること）意識を持たせることと、より強いガバナンス（自らが自らを健全に統治すること）を求めている。言うまでもなく、公益法人としての道理を自ら律することを求めているのである。

具体的には、理事会の権限と責任が一段と強くなった。これまで、日本山岳会の意思決定機関は、総会を除いて理事会と評議員会であった。なかでも日本山岳会での評議員会の存在は、意思決定を図る上での大変重要な位置を占めていた。この評議員会が、新しい制度では、その存在が認められなくなったのである。つまり、意思決定機関の二重構造を禁止したのである。このことによって、理事会の権限と責任が重くなり、理事会への代理出席や議事の委任が認められなくなった。

また、すべての公益法人の所管官庁を内閣府に一本化したのも大きな特徴の一つであろう。これは、法人に対する認可・認定の統一性や行政指導の公平さや透明性を希求するための措置であると考えられる。

公益社団法人としてのメリットはいろいろあるが、なんといっても最大の利点は、寄付行為の免税であろう。提供する側も受ける側も大きなメリットがあって、早速複数の支部から、

この制度を生かした不動産の取得依頼の申し出があり、適正に登記処理を済ませている。そして、もう一つのメリットとして挙げたいのが、各支部の名称の頭に公益社団法人を名乗ってもよいことである。これは、本部から各支部へ交付している交付金・補助金の本部会計との会計処理の一体化を条件に認められた。このことは、支部自体に法人格が与えられたわけではないが、冠に公益社団法人を付すことによって、支部の各種の事業が有利に展開できるのは言うまでもないことである。

今度の公益社団法人移行については、プロジェクト・チームをはじめ、多くの会員の皆様の献身的なご努力をいただいたことを特筆しなければならない。改めて関係者の皆様に衷心より感謝の意を捧げたい。

この日本山岳会の公益社団法人化には、多大な精力を注ぎ込んだ。また、多くの会員の皆様にも随分ご心配をおかけした。だからといって、前述のとおり日本山岳会の本質が変わるわけではないのであるが、登記上では、今までの社団法人は解散、新しく公益社団法人日本山岳会が誕生したのも事実である。これを契機として、新しい魅力ある新生・日本山岳会の構築に、全会員が一丸となって取り組める絶好の機会であると認識するのも、新しい法人格を得た意義につながるのではなかろうか。全会員の皆様のご尽力を賜りたい。

公益社団法人化への経緯

新法人移行ＰＴ担当副会長　吉　永　英　明

内閣府公益認定等委員会の認定により、日本山岳会は平成24年4月1日、従来の社団法人の解散登記および公益社団法人の設立登記を経由し、名実ともに「公益社団法人日本山岳会」となった。

今般の公益法人改革法は、新法人の組織、運営および管理等について規定する「一般社団・財団法人法」、新公益法人の認定について規定する「認定法」、従来の公益法人の新制度への移行手続等について規定する「整備法」の改革三法から構成され、平成18年5月26日成立、同年6月2日公布、平成20年12月1日施行、平成25年11月30日までに一般法人か新公益法人に移行しなければならないとされたものであるが、平成18年の当初から本会の新法人への移行に役員等として関与してきたため、その経緯についてここに記すものである。

平成18年
6月14日　18年度第3回理事会（改革三法の政令等の内容が明らかになった時点で公益法人化ＰＴ（プロジェクト・チーム）を設置する旨承認）
11月14日　文部科学省青少年・スポーツ局主催説明会（平成18年度は、平山善吉会長のときである。理事会として法律公布後間もなく対応しており、しかも、公益法人化を志向していたことが伺える。広報委員会のマスコミ説明会で、スポーツ団体としては最も早い段階での対応と言われた。）

平成19年
3月2日～9月7日　改革三法の施行令等公布
6月13日　19年度第3回理事会（「公益法人化ＰＴ」設置、

第4回理事会で竹内哲夫氏を委員長とする委員選任）

10月4日　宮下秀樹会長ほか「社団法人公益法人協会」訪問、公益法人化の手続、メリット・デメリット等について伺う。）

平成20年

1月23日　19年度第9回理事会（「公益法人化推進と首都圏ブロックの支部化」について議論）

6月11日　20年度第3回理事会（「定款（案）検討委員会」設置、委員長・内田　博）

6月27日　文部科学省主催説明会参加

11月3日　文部科学省主催説明会参加

平成21年

1月23日　「公益法人化ＰＴ」と「定款（案）検討委員会」の合同会議開催

2月13日　20年度第10回理事会（「公益法人化ＰＴ」より提出された報告書「公益法人制度と日本山岳会の課題」について説明）

7月8日　21年度第4回理事会（「法人改革対応検討ＰＴ」設置、委員長・吉永、担当副会長・藤本、第5回理事会で7名の委員選任）

9月25日　21年度第5回理事会（「法人改革対応検討ＰＴ」第1回打合せ）

11月11日　太陽ＡＳＧ有限責任監査法人と顧問契約締結

平成22年

1月29日　「法人改革対応検討ＰＴ」より中間報告提出

2月8日　「定款（案）検討委員会」報告書提出

3月17日　21年度第11回理事会（「法人改革対応検討ＰＴ」中間報告説明）

6月12日　22年度第1回総会（「法人改革対応検討ＰＴ」の検討内容報告）

10月13日　22年度第6回理事会

11月10日　22年度第7回理事会

12月8日　22年度第8回理事会（以上、公益化・一般化の選択について議論）

12月2日　「法人改革対応検討ＰＴ」報告書提出（公益社団法人化のメリット・デメリット、定款・定款施行細則の変更（案）、支部の扱い、支部会計の一部一体化等について記載）

平成23年

1月12日　22年度第9回理事会（「公益社団法人」を目指すことを承認）

3月12日　22年度第2回総会（「公益社団法人」で認定申請することを承認、定款および定款施行細則変更

案説明）
3月2日　内閣府公益認定等委員会事務局と相談
5月19日　同右
6月18日　23年度第1回総会（「定款変更案」承認、「定款施行細則案」検討）
6月22日　23年度臨時理事会（「新法人移行PT」設置、委員長・佐野忠則、担当副会長・吉永）
9月28日　内閣府公益認定等委員会事務局と公益法人認定申請について打合せ
10月24日　内閣総理大臣宛公益認定申請書提出（以後、主として定款変更案の条文、海外登山基金等の積立金の扱い、支部の扱い等について数回にわたる問合せがあり、補正を行なう。）

平成24年
3月7日　内閣府公益認定等委員会より内閣総理大臣宛、公益社団法人化を妥当とする旨の答申
3月17日　23年度第2回総会（定款施行細則変更（案）承認、内閣府公益認定等委員会の答申報告）
3月21日　内閣総理大臣より認定書交付
4月1日　東京法務局において社団法人日本山岳会の解散登記および公益社団法人日本山岳会の設立登記経由
6月16日　24年度総会（公益社団法人日本山岳会設立報告）

以上、平成18年6月の改革三法時点から平成24年6月の総会における設立報告までの6年間の対応を時系列的に記した。この間、会員諸兄からは種々のご提案をいただいた。大部分は日本山岳会の将来を洞察した真剣なご提案が多かったが、なかには少々疑問を持たざるを得ない動きも見られ、大変残念な思いもした。また、一部の会員からは政治家に依頼して役所に圧力を、という話もあったが、私たちは正々堂々と法律に基づいて正面からの対応で、と考えていたので、こういうことも全くしなかった。

平成24年4月1日の公益社団法人移行後は、従来の「新法人移行PT」を改組、「法人運営適正化PT」として佐野忠則委員長の下、各種規程の立案、会計処理の適正化、内閣府等への対応を鋭意行なっている。今後は、公益社団法人としてコンプライアンスの徹底とガバナンスの確立に邁進しつつ、会員一丸となって活性化に向かうことを期待したい。

日本山岳会「YOUTH CLUB」設立の経緯

担当理事：森　武昭
リーダー：野澤誠司

1．はじめに（背景）

日本山岳会では、高齢化が進む一方で会員数の減少が問題提起されて久しい。図1は、この20年間の会員数と新入会員数を示している。図2は会員の平均年齢の推移を示している。会員数は2001（平成13）年の5995名をピークに、その後は毎年100名弱のペースで急激に減少している。一方、新入会員数は1998年から減少し始め、2008（平成20）年には100名を切ってしまった。会員の平均年齢で見ると、ほぼ毎年1歳ずつ高くなっており、現在では68歳になっている。そこで、2011（平成23）年11月現在での会員の年齢構成を調べてみた（図3）。なんと60歳以上が80％であり、70歳代と60歳代が70％の構成となっている。40歳未満はわずか5％である。この間、2002（平成14）年5月の総会で、若手会員を優遇する措置として、26歳未満の入会金免除と会費1万2千円を5千円に減免することを実行に移したが、これらの図で見る限り効果は見られていない。このままの状態が続くと会は衰退の一途をたどり、やがては会を維持できなくなることは明白である。

2．設立準備（JAC-YOUTH プロジェクト・チームの活動）

2009（平成21年）5月の総会で会長に選出された尾上昇は、このような情況に強い危機意識を持って臨み、就任直後の2009年6月の理事会で、JAC-YOUTH PT（プロジェクト・チーム）の設置を提案し、自らが担当理事となり、PTリーダーとして古野淳（2011年度からは理事）を指名した。そ

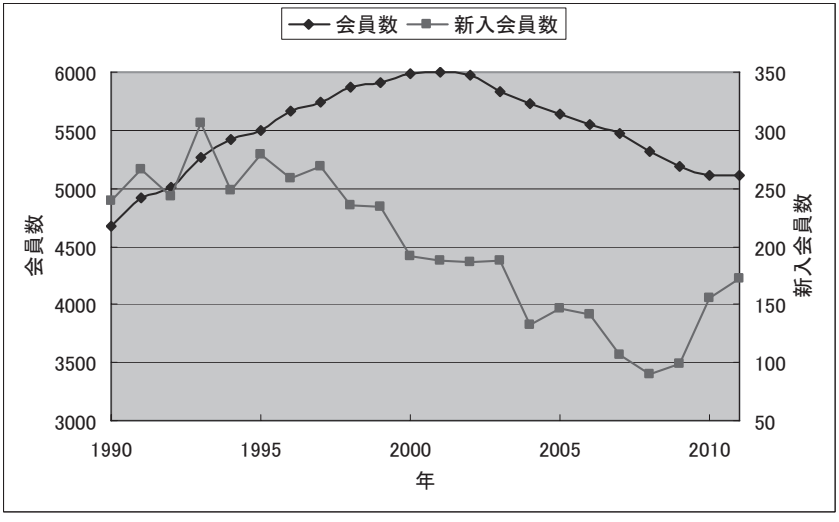


図１　会員数と新入会員数の動向

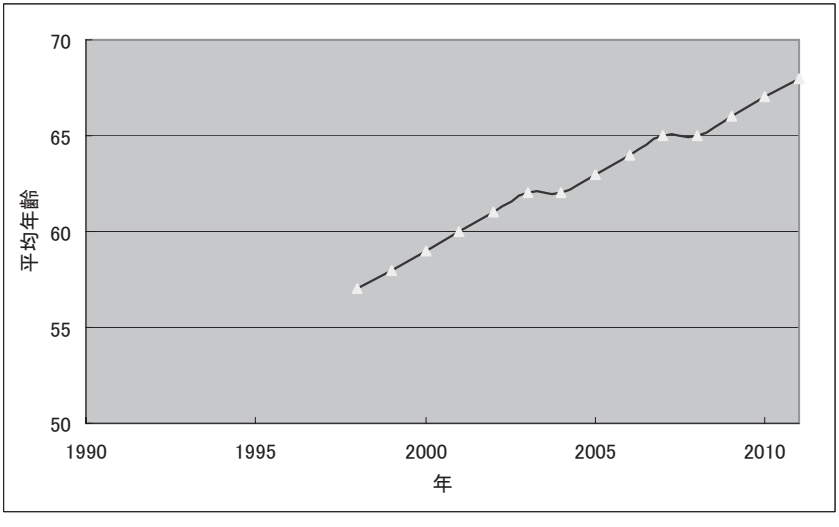


図２　会員の平均年齢

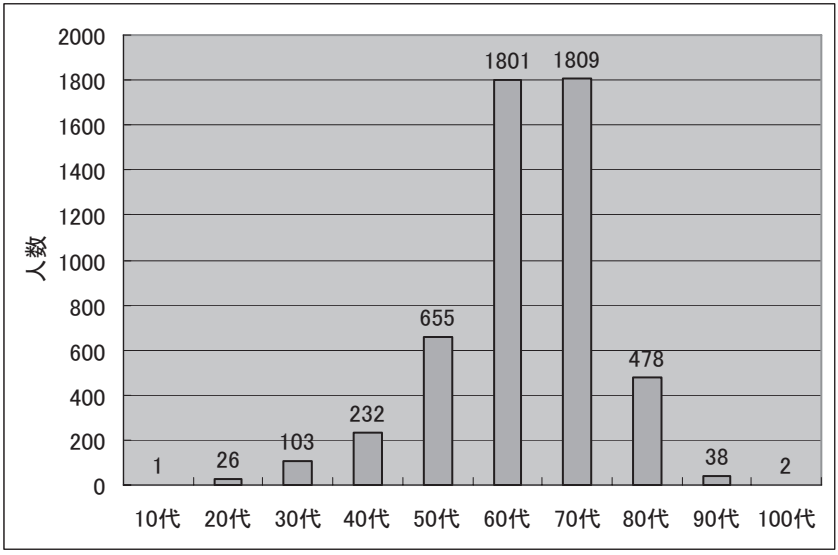


図３ 会員の年齢構成（2011年11月現在）

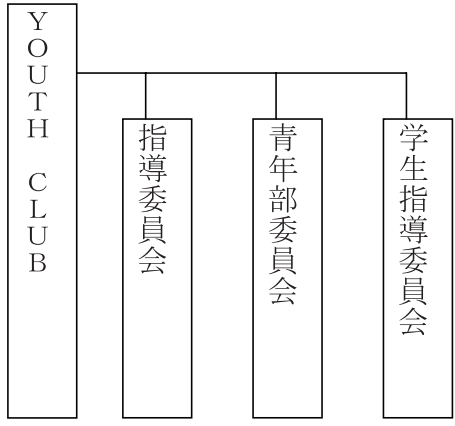


図４ YOUTH CLUBを中心とした新体制

の設置主旨は極めて単純明快で、とにかく若い会員を増やすこと、若手中心で活発な登山活動を行なうこと、次世代のリーダーを育成すること、の3点であった。

ＰＴでは、古野リーダーを中心に野澤誠司、中山茂樹、永田弘太郎、萩原浩司の各理事らが協力し、少しずつ動き出した。月１回のＰＴの会合には尾上会長も毎回出席し、メンバーを叱咤激励した。この３年間の活動記録を表１に示す。２００９年度の準備段階を経て、２０１０・２０１１年度は活発に活動していることが分かるであろう。実地ではハイキング、縦走、沢登り、フリー・クライミング、雪上訓練、冬山入門、雪洞実習、

冬山入門、山スキーなどで多様な内容となっている。また机上講習としては、ロープワーク、救急救命、冬山入門、気象、遭難防止などで構成されている。なお、この表には記載されていないが、月1回のPTの会合はもとより、青年部などの会合もかなりの頻度で開催している。これらの活動内容については、会報「山」の2012年1月号の巻頭で野澤が詳しく述べている。このように、かなりタイトな日程をこなしており、担当者の負担は相当なものとなっている。このため、上級クラスの山行においては、ごく一部ではあるが、プロの山岳ガイドにも依頼している。

図3に示したように、40歳未満の会員数は約130名であるが、その半数の65名は、このJAC-YOUTHの活動を通しての入会者である。また、この効果として、図1に示すように、新入会員数も2009年から増加に転じ、会員数も2011年には前年度とほぼ同数を維持し、ほんのわずかではあるが光明が見えてきたと言える。さらに、一部ではあるが、先鋭的な登山を指向する若者も出てきた。このように、若者向けの施策が着実に成果をあげ始めたのを受けて、これをさらに伸ばし確実なものとするために、次のステップへ歩み出すことになった。

3．YOUTH　CLUBの設立

2011年6月の総会で尾上会長が再選された。これを機に、会長は諸般の事情から、JAC-YOUTH　PTの担当理事に森　武昭を指名した。そして、PTも3年目に入り、上述のように活動も活発になり、成果も少しずつ上がってきて見える形となってきた。しかし、プロジェクト・チームというのは、ある特定の課題に対して臨時的に設けられる組織であって、恒久的なものではない。そこで、JAC-YOUTH　PTとしての活動を継続的に実施していくために、新たな委員会に相当する組織を設置することが必要となった。そうすると、既存の委員会で関連性のある「指導委員会」、「青年部」、「学生指導委員会」との関係をどうするかが課題となった。そこで、PTや関係する理事による活発な議論を経て、PTと3委員会の活動を有機的に結びつけることを目的として、図4に示すような新体制を2011年12月の理事会で提案し、2012年4月1日の公益社団法人への移行と同時に実施することで承認された。組織の正式名称も英文で「YOUTH　CLUB」と表記することとし、初代委員長（代表）に野澤誠司が就任した。また、守備範囲が広くなったため、担当理事として、野澤・古野・中山・森の4名体制で臨むことにした。

さらに、尾上会長は2012（平成24年）1月の理事会で、「YOUTH　CLUBの活動を促進し、量・質の両面でこれからの日本山岳会の核になってもらうためにも、2年間または数年間で1千万円を投入して、なんとしても若返りを図りたい」

との強いメッセージを発信した。理事会での賛同を得て、これからの活動方針を1～3月に集中的に審議し、3月の理事会でグランド・デザインが承認された。これらの案件は、3月17日開催の総会でも承認された。

4．YOUTH　CLUBの活動方針

YOUTH　CLUBの基本方針は、「自主運営を旨として、活発な登山活動を通して、会員を自己増殖させる」ことである。具体的には、以下の内容となっている。

（1）数値的目標

量的目標：40歳未満の若手新入会員　当面は50人／年、数年後には100人／年

質的目標：先鋭的クライマーなど次世代のリーダー格となる人材　2人／年

（2）活動内容

（A）広報活動（若手会員の入会へ向けたHP〈ホームページ〉の充実などの積極的広報）

（B）受け皿（登山装備などを充実して実践活動できる体制の整備）

（C）教育（講習・講演・野外教室などの実施）

（D）実践活動（次期リーダーを育成するための活動。必要に応じてプロガイドなどにも依頼予定）

（E）継続的活動（従来からの3委員会の活動の継続。例えば、指導委員会による上高地山研でのウェザー・ステーションの設置や冬期の遭難対策などの活動展開も計画されている）

特に、広報活動としては、SNS（ソーシャル・ネットワーク・システム）を導入するなど、最近の若者向けICT（情報通信技術）を積極的に利用することにしている。また、HPも充実させ、4月からは入会申込書もHP上からダウンロードできるように改めている。

（3）活動方針

会の方針としては、以下の点を確認している。

①現在の40歳未満の会員および一部スタッフは、このYOUTH　CLUBに全員加入する。今後入会する40歳未満の人もれなく加入する。

②現在のYOUTH　CLUBの位置づけは一つの「委員会」であるが、運営については自主運営を旨として、初心者向け講習、リーダー育成など活発な山行を行なっていく。

③活動の母体として、ハイキング、岩登り、沢登り、無積雪期縦走、雪山登山、山スキーなど、幾つかのジャンルのグループをつくり、少なくともどれか一つのグループに所属してもらうことによって、委員会としてのYOUTH　CLUBから山行企画の案内を発信するような仕組みをつくる。併せ

て、そのグループが若い仲間の入会を促進させる核（自己増殖）となる役目も果たす。

（4）活動計画

今年の4月から11月までの活動計画を表2に示す（内容を随時見直していくので、今後、一部変更される可能性がある）。昨年度と違って、初級から上級まで体系的な計画になっている点が特長的である。その内容については、日本山岳会のHPで見ることも、申し込むこともできる。具体的には、トップページの右側にある「YOUTH　CLUB講習会のお知らせ」をクリックすると、選択肢は4つあるので、希望する項目をクリックすると詳細が表示されるようになっている。特にこの中でも、初級のハイキングや本格縦走チャレンジ・コースなどに関しては、HPなどを通して非会員に呼びかけて量的拡大の足がかりになるものと期待されている。ただ、懸念材料としては、これらの計画を推進していくスタッフが十分確保できるかどうかである。また、保険についても十分手当するように留意している。

5．まとめ

日本山岳会にとって会員の若返りは、喫緊の課題である。YOUTH　CLUBがその重責を果たすべく組織され、ようやくその第一歩を踏み出したところである。そこで、2012（平成24）年4月18日に四谷のプラザ・エフで発足会を催した。当日は、若者を中心に約50名が出席した。尾上会長の激励の挨拶ののち、横山勝丘氏による南米・パタゴニアの山行報告、平出和也氏・谷口けいさんからの激励の祝辞などがあり、若者の登山意欲を鼓舞するに相応しい会となった。

YOUTH　CLUBの発足は、日本山岳会にとって画期的なことであるが、会長の目指すキーワード、「自主運営」と「自己増殖」を実現していくためには、前述した課題をクリアしていかなければならない。そのためには、会員各位が温かい目で見守っていただきたいと願っている。2012年4月1日に日本山岳会は公益法人として再出発した。その同じ日にYOUTH　CLUBが産声を上げたのも、何か運命的なものを感じる次第である。

表１ JAC－YOUTH活動状況（2009～2011年度）

年 度	実施時期	内　容	場　所	参加者数	備　考
2009年度	11月14日（土）	机上講習／ロープワーク	市ヶ谷	20	
	12月13日（日）	机上講習／救急救命	市ヶ谷	16	
	1月23（金）～25（日）	実地講習／雪上訓練	栂池高原	18	
	1月30日（日）	机上講習／冬山入門	市ヶ谷	28	
	2月6日（土）～7日（日）	実地講習／冬山入門第1回	雲取山	16	
	2月13日（土）～14日（日）	実地講習／冬山入門第2回	八ヶ岳	20	

年 度	実施時期	内　容	場　所	参加者数	備　考
2010年度	4月2日（金）～4日（日）	実地講習／冬山入門第3回	鳳凰三山	15	
	5月8日（日）	ハイキング	荒船山	3	
	5月22（土）～23（日）	山スキー	栂池高原	10	
	5月24日（火）	机上講習／ロープワーク第1回	市ヶ谷	24	一般対象
	5月31日（火）	机上講習／ロープワーク第2回	市ヶ谷	23	学生対象
	6月6日（土）	山スキー	富士山	10	
	6月12日（土）～13日（日）	実地講習／フリークライミング	小川山	7	
	6月26日（土）～27日（日）	ハイキング（植物観賞会）	栂池高原	6	
	7月11日（日）	実地講習／沢登り	丹沢	17	
	8月16日（月）～18日（水）	実地講習／雪上訓練	剱沢	中止	
	9月17日（金）～20（月）	剱岳波状登攀	剱岳	10	
	10月13日（水）	遭難防止セミナー（長野県警山岳警備隊）	東京体育館	100	一般対象
	10月16日（土）～17日（日）	実地講習／フリークライミング	小川山	8	
	11月14日（日）	机上講習／冬山入門	市ヶ谷	17	
	11月20日（土）～23日（日）	実地講習／雪上訓練	立山	10	
	12月5日（日）	机上講習／ロープワーク	市ヶ谷	23	
	12月12日（日）	机上講習／冬山気象	市ヶ谷	45	
	12月19日（日）	机上講習／救急救命	市ヶ谷	20	
	1月15日（日）	ハイキング	丹沢・大山	6	
	1月29日（土）～30日（日）	実地講習／冬山入門第1回	金峰山	16	
	2月19（日）	ハイキング	箱根・金時山	3	
	2月26日（土）～27日（日）	実地講習／冬山入門第2回	八ヶ岳	13	
	3月5日（土）～6（日）	山スキー	上越・東谷山	8	
	3月27（日）	実地講習／フリークライミング	奥武蔵・日和田山	13	
	3月26日（土）～27日（日）	実地講習／雪山・雪洞講習	谷川岳	中止	

年 度	実施時期	内　容	場　所		備　考
2011年度	4月22日（金）～24日（日）	実地講習／冬山入門第3回	上高地	17	
	5月21日（土）	実地講習／フリークライミング	奥武蔵・日和田山	13	
	7月7日（木）	机上講習／夏山気象	市ヶ谷		
	7月23日（土）	実地講習／沢登り	奥多摩・水根沢	3	
	7月31日（日）・8月14日（日）	実地講習／沢登り	奥多摩・水根沢	4	
	8月6日（土）～7日（日）	実地講習／沢登り	上越・白ヶ門沢	8	
	8月14日（日）	実地講習／沢登り	奥多摩・水根沢	6	
	8月21日（日）	実地講習／沢登り	奥多摩・水根沢	6	
	8月27日（土）～28日（日）	実地講習／沢登り	奥秩父・釜ノ沢	9	
	9月3日（土）～4日（日）	実地講習／沢登り	上越・東黒沢	中止	
	9月11日（日）	実地講習／沢登り	奥多摩・水根沢	7	
	9月10日（土）	実地講習／ハイキング	奥秩父・西沢渓谷	2	
	9月10日（土）～11日（日）	実地講習／フリークライミング	三ツ峠	8	
	9月17日（土）～18日（日）	実地講習／沢登り	奥多摩・川乗谷とシダクラ沢	5	
	9月22日（木）～25日（日）	実地講習／岩稜歩き・登攀・縦走	穂高岳	11	
	10月8日（木）～10日（土）	実地講習／ハイキング	北ア・焼岳	7	
	10月22日（土）	遭難防止セミナー（長野県警山岳警備隊）	JICA国際会議場	100	一般対象
	11月12日（土）	実地講習／ハイキング	筑波山	0	
	11月17日（木）	机上講習／雪山入門	市ヶ谷	10	
	11月25日（金）	机上講習／ロープワーク	市ヶ谷	20	
	12月14日（水）	机上講習／冬山気象	市ヶ谷	40	
	12月18日（日）	机上講習／救急救命	市ヶ谷	10	
	12月17日（土）～18日（日）	実地講習／雪上訓練	富士山	13	
	12月20日（火）	実地講習／雪上訓練	木曽駒ヶ岳	5	
	1月7日（土）～9日（月）	実地講習・山スキー	栂池高原	12	
	1月14日（土）	実地講習／地図読みハイキンク	三浦アルプス	10	
	1月28日（土）～29日（日）	実地講習／雪崩	栂池高原	16	
	1月28日（土）～29日（日）	実地講習／雪山とアイスクライミング	金峰山	16	
	2月7日（火）～8日（水）	実地講習／山スキー	栂池高原	4	
	2月18日（土）～19日（日）	実地講習／雪山	硫黄岳	15	
	3月9日（金）～11日（日）	実地講習／雪山・雪洞講習	谷川岳	15	
	3月17日（土）～20日（火）	実地講習／山スキー	栂池高原	7	
	3月24日（土）～25日（日）	実地講習／雪山	阿弥陀岳	5	

（注）1　上記のほかYOUTHメンバーを対象に実地講習会の補習を兼ねて個人山行を月に2～3回実施。
　　2　2011年度のグリーン・シーズン前半は、東日本大震災の影響もあり新たな講習を控え、実地講習の補習として沢登りを中心に実施。

表２　2012年度4月～11月　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ　全講習会スケジュール

■【基講】=基礎講習会（屋内）、■【ハイク】=初歩ハイキングコース、■【縦走】=縦走コース（初級・健脚向き）、■【Y】=中級･上級コース、
■【ロープ】=ロープ講習、■【沢】=初級・沢登り、■【外岩】=初級・外岩、■【岩稜】=三大岩稜登攀、■【山スキー】=中級・山スキー、
■【上講】=上級者屋内講習会、■【Ｓ】=会員限定

４月

7	土	【S】 甲斐駒
8	日	【S】甲斐駒
14	土	【沢】源次郎沢
15	日	【ロープ】日和田山・初級
21	土	【Y】富士山雪上訓練 【縦走】丹沢
22	日	【Y】富士山雪上訓練　【ハイク】岩殿山 【縦走】丹沢
27	金	【基講】地図
28	土	【S】常念山脈
29	日	【S】常念山脈
30	月	【S】常念山脈

５月

3	木	【S】穂高合宿
4	金	【S】穂高合宿
5	土	【S】穂高合宿
6	日	【S】穂高合宿
12	土	【沢】シンナソー
13	日	【ロープ】日和田山・初級
19	土	【S】梅池　【S】越後駒
20	日	【S】梅池　【S】越後駒
24	木	【Y】平日雪上訓練・岳沢
25	金	【Y】平日雪上訓練・岳沢　【基講】登山道具
26	土	【Y】雪上訓練・岳沢　【ハイク】読図 【縦走】尾瀬
27	日	【Y】雪上訓練・岳沢 【縦走】尾瀬

６月

2	土	【岩稜】北穂東稜
3	日	【岩稜】北穂東稜
5	火	【Y】平日・富士山
8	金	【ハイク】植物観察会
9	土	【外岩】三ツ峠　【ハイク】植物観察会
10	日	【外岩】三ツ峠　【ハイク】植物観察会
16	土	【縦走】谷川岳
17	日	【縦走】谷川岳
19	火	【基講】ストレッチ
23	土	【沢】シダクラ沢
24	日	【ロープ】日和田山・初級
29	金	【基講】熱中症

７月

4	水	【基講F】お茶会
7	土	【ロープ】小川山・初級植物観察会梶池
8	日	【ロープ】小川山・初級植物観察会梶池
14	土	【縦走】八ヶ岳　【ハイク】岩手 【S】穂高縦走
15	日	【縦走】八ヶ岳　【ハイク】岩手 【S】穂高縦走
16	月	【縦走】八ヶ岳　【ハイク】岩手 【S】穂高縦走
20	金	【基講】夏山気象
21	土	【外岩】谷川岳・クラシック 【沢】水根沢
22	日	【外岩】谷川岳・クラシック
23	月	【Y】平日・谷川岳
24	火	【Y】平日・谷川岳
27	金	【岩稜】北鎌尾根　【基講】カシミール 【S】奥穂高岳
28	土	【岩稜】北鎌尾根 【S】奥穂高岳
29	日	【岩稜】北鎌尾根 【S】奥穂高岳

８月

10	金	【縦走･Y】剱岳
11	土	【縦走･Y】剱岳　【Fハイク】上高地
12	日	【縦走･Y】剱岳　【Fハイク】上高地
13	月	【Y】剱岳・平日
14	火	【Y】剱岳・平日
15	水	【Y】剱岳・平日
16	木	【Y】剱岳・平日
17	金	【Y】剱岳・平日
18	土	【Y】剱岳・八ツ峰　【ハイク】キャンプ
19	日	【Y】剱岳・下山　【ハイク】キャンプ
20	月	【S】韓国・雪岳山
21	火	【S】韓国・雪岳山
22	水	【S】韓国・雪岳山
23	木	【S】韓国・雪岳山
24	金	【S】韓国・雪岳山
25	土	【沢】釜ノ沢
26	日	【沢】釜ノ沢
31	金	【基講】登山と健康

９月

1	土	【ロープ】小川山・初級
2	日	【ロープ】小川山・初級 【沢】川乗谷
14	金	【基講】パソコン
15	土	【縦走･Y】穂高　【ハイク】鳳凰三山
16	日	【縦走･Y】穂高･北尾;【ハイク】鳳凰三山
17	月	【縦走･Y】穂高　【ハイク】鳳凰三山
18	火	【Y】穂高岳・平日
19	水	【Y】穂高岳・平日
20	木	【Y】穂高岳・平日
21	金	【Y】穂高岳・平日
22	土	【外岩】穂高岳・クラシック
23	日	【外岩】穂高岳
25	火	【上講】用具
28	金	【基講】冬山気象

１０月

3	水	【基講F】お茶会
11	木	【ロープ】平日・小川山
12	金	【ロープ】平日・小川山
13	土	【ロープ】小川山・初級 【縦走】木曾駒
14	日	【ロープ】小川山・初級 【縦走】木曾駒
19	金	【基講】GPS
26	金	【基講】登山用具
28	日	【ハイク】笹尾根

１１月

3	土	【Y】岩・城ヶ崎　【Fハイク】御岳山 【縦走】甲斐駒
4	日	【縦走】甲斐駒　【Fハイク】御岳山
11	日	【ロープ】日和田山・初級
14	水	【Y】平日・関西
15	木	【Y】平日・関西
16	金	【基講】登山用具
20	火	【上講】医療
23	金	【山スキー】立山
24	土	【山スキー】立山
25	日	【山スキー】立山
27	火	【上講】レスキュー
30	金	【基講】冬山医療

図書紹介

ベアト・シュトラッツァーほか 監修
末吉雄二 訳
『セガンティーニ』

西村書店　2011年3月刊
A4判　246ページ　3800円＋税

原書にない絵が1点、この訳書にある（214ページ）。倉敷の大原美術館にある『アルプスの昼間』によって、訳書が付加価値を得た。これを原書の、同じ題を持つ作品と見比べてみよう（図版53）。遠景がアルプスの山並み、近景が牧草地。帽子を被って杖を手に持つ青い服の女性、そして羊たち。注文者の需要に応じて画家が同じような絵を繰り返し作成するのは珍しいことではない。しかし、比べてみれば、大きな違いに気づく。スイスの美術館にある絵では、山は雪で白く、羊が女性から離れていき、大原美術館の絵では、雪はほとんど消えていて、背後に群れる羊の中から1頭、女性に近寄って甘えている。訳書の125ページに、ザンクト・ガレン美術館の学芸員である人が、スイスにある『アルプスの昼間』を、女性が太陽の方向に顔を向けて春の景色に見入っている、と説明する。この説明は大原美術館の絵には当てはまらない。女性はけだるげに地面に目を落とす。山からは雪が消えている。初夏の昼間の倦怠を羊が慰めてくれようとしているのか？　ザンクト・ガレンにあるこの絵が大原美術館の絵と入れ替わっていたとしたら、日本のセガンティーニ・ファンの数は、増えていたか、減っていたか？

「山の詩人」尾崎喜八は、大原美術館の絵を意識して、八ヶ岳西方の牧場の、遠く北アルプスを背にして立つ女性を見て、セガンティーニの絵の情景を見る思いがした、という内容の詩を作った。「金と青との晩秋の真昼……もう初雪の笹べりつけた北アルプスの連峯が、ああ、遠くにセガンティーニの背景をひろげている」（『農場の夫人』）　誰がなんと言おうと、セガンティーニがスイスのアルプスの谷間に住んで描いた風景は、魅力豊かな色彩を帯びている。パレットの上で絵具を混ぜれば色の輝度が落ちる。彼は絵具の輝度を落とさないために、異種の色を混合しない方法を採った。フランスの「点描主義」の画家たちが、絵具の輝きを保つために色をこまかな点にして、明るい魅力的な色彩の作品を生んだのだが、輪郭線を犠牲にしなければならなかった。セガンティーニは絵具を細い線として使った。近くで見れば線であることに気づくのだが、離れて見ればそれらの線が混ざり合って鮮やかな色を保つ。空の青さ、山々

の雪の白さと岩の明るい褐色、近景の牧場の草の緑。それらの色が濁ることなく鮮やかに、絵を見る人の目に映じる。「分割主義」と呼ばれるこの技法がどのようにして生まれて成長したのか、その道筋を本書に収められている論文から知ることができる。

この大きくて重い『セガンティーニ』は、スイスの2つの美術館で催されたセガンティーニ作品展の図録と解説を基礎として、スイスの美術館と個人所有の作品ばかりでなく、スイス以外の国々にある作品を見渡そうとする。オーストリア領土であった土地に生まれ、そこがイタリアの領土になったとき、孤児になっていた少年の国籍変更の手続きを養育者が怠ったので、セガンティーニがイタリアでの修業と活動ののちにスイス東南部に移り住んだとき、国籍を持っていなかった。スイス滞在の年数が満ちて妻子はスイス国籍を得たのだが、彼自身はイタリア人でもスイス人でもないまま、41歳の若さで一生を終えた。つまり、彼の絵そのものが初めから山岳地帯の風景画だったわけではない。イタリアで成長させた才能と技術が、スイスのアルプス地方の風景と人物という新しい題材によって一挙に花開いて、「山岳画家」としての名声を樹立させたのであった。その結果、スイスの美術館と個人の所有する作品から受ける印象は、スイス以外の国に多数あるセガンティーニの作品が与える印象と同じではない。

この『セガンティーニ』は、スイスの美術館の学芸員たちの協力によって、スイスの国境を越えた、画家の生涯と作品の発展の歴史を、できるだけ詳細に語ろうという意志から生まれた。その結果、豊富な図版によって美麗なセガンティーニ画集となり、内容豊富な研究論文集にもなった。

生真面目な研究の成果を語る学術論文でもある解説文に目を通す意欲のある人は、「分割主義」と呼ばれる絵具の使い方を画家がどのようにして身につけたのか、西洋近代の絵画技法の歴史との関係を学び取って下さるとよい。アルプスの空と雪と草を鮮やかな色彩で表現する技術をセガンティーニが獲得したお陰で、私たちが彼の絵に心惹かれてきたことを悟るだろう。不幸な生い立ちによって父母の愛を体験できなかった彼が、しばしば「母性」をテーマとする絵を、アルプスの山々の世界で描き続けたのはなぜか？　風景画と思える絵の中に人間の運命を象徴的に表現することにこだわった画家の心理的な背景と哲学的な意図はなんであったのか？　そうした疑問にも本書が答えてくれている。

6人の筆者たちの書いていることの中に、解釈の不統一があったり、過剰と思える説明があったりする。絵画という芸術においては、鑑賞する人々それぞれに違った感じ方や理解の仕方があって当然であるのだから、絶対的に正しい解釈と称して他人に理解を押しつけるべきものではない。音楽の場合でもそ

うなのだが、哲学や文学、あるいは宗教や世界観を持ち込むと奇妙なことになるという例が40ページ以下に見られる。セガンティーニに絵の題材を与えたといわれる女性の友人の詩を、ゲーテの『魔王』の「換骨奪胎」と呼ぶのは正しくない。絵画を文学に関係づけようとするあまりに生じた、牽強付会の悪い例ではないかと私は思う。

反面、セガンティーニ自身が作品を単なる自然描写と思っていなかったとする主張に耳を傾けるべきだろう。彼は戸外で絵を完成することを実践した、と言われる。しかし、彼のアルプスでの絵を愛好するあまりに、サヴォーニンやシャーフベルクに行って、セガンティーニの絵にあるとおりの山々の姿を自身の目で見ようとして現地を訪れる日本人たちがいるけれども、セガンティーニは、特定の山を写真のように正確に描くことを目的としなかった。当時の絵画の潮流の一つであった「ユーゲント・シュティール」は、横に長い平面である画面に、自然を平行線として描く傾向を持っていた。アルプスの風景を描く絵のほとんどが、背後の天空に山脈を並行させ、近景に牧場や農地を配した。セガンティーニは自然の中で描くことを流儀としたけれども、精密に特定の山を描くという意味での写実主義者ではなかった。とりわけ、152ページに要領よく指摘する文章を見出すことができる。これをわきまえた上で、本書を展覧会場としてセガンティーニの絵画の世界を見渡せば、作品自体が画家と芸術を雄弁に語ってくれるだろう。

魅力豊かな本であることを率直に認めた上で、表記について見出される多くの誤りの是正を求めたい。例えば、画家がスイス最初の滞在地とした場所は「サヴォーニン」であって、「ザフォーグニン」とドイツ語式に表記する理由がない。スイスの小説家「マイヤー」が「メイヤー」とされているなど、人名と地名のカタカナ表記に改善を求めたい事例も多い。とりわけ、ドイツの有名な画家「マレー」が「マレース」とされている（16ページ）のは、美術専門書としての信頼度を減じているようで気にかかる。

（宮下　啓三）

小林　茂　著
『外邦図―帝国日本のアジア地図』

中公新書　2011年7月刊
新書判　282ページ　860円＋税

「外邦図」という言葉を、本書では極めて大きく要約して、「明治期から第二次大戦終結まで、日本がアジア太平洋地域について作製した地図」のこととしている。しかし、その内容は複雑にして多様であり、この言葉を用いた『測量・地図百年史』（国

土地理院・１９７０年刊）では、「外邦図や外邦測量という言葉は、陸地測量部で満州や中国、東南アジアなどを対象地域にした地図に与えた言葉である。この言葉には、作戦や戦闘行為のために必要な地図を、事前にあるいは戦中に秘密のうちに作成するという意味がこめられていたのであるが、この編ではもっと広い意味でとらえ、台湾、樺太、朝鮮等、かつて外地と呼ばれた領土や、その他日本の手で地図が作られたすべての地域の測量と地図」として取り扱うとしており、こちらの方が理解しやすいだろうと思われる。

この一連の地図群は軍事秘密文書に属するものであり、戦後になっても、関係者を除けば日本国民の大部分はその存在を知らなかった。それにはいろいろな原因があろうが、戦後の日本は厭戦気分が先に立って、戦争期の事柄を検討したり、掘り起こしていくような作業をほとんど行なってこなかったことが考えられる。本書の著者（大阪大学人文地理学教授）の場合、「外邦図」の存在を偶然知ったのは、１９９９年だったという。所蔵については知られていても、地理学の関係者でさえも誰もその中身を調べた者がいなかった。

私も１９９１年に、日本山岳会の図書室に収蔵されたまま誰も調べた者がいないらしい、入手経路が不明の３０００枚に及ぶ地図の山を調べたことがある。これらの地図の中には「外邦図」に当たる樺太、千島の５万分の１地形図や、朝鮮国境地帯の特殊図、１００万分の１「東亜輿地図」などが含まれており、前記『測量・地図百年史』を参照して確認した。地図の研究家たちはこれらの地図をかなり早い段階から調べ、位置づけを与えていたが、全容を解明する機運はまだ生じなかったようだ。

この間にも、陸地測量部の成果である旧植民地の地形図『朝鮮五万分の一地図集成』（学生社・１９８１年）『台湾五万分の一地図集成』（学生社・１９８２年）『旧満州五万分の一地図集成』（科学書院・１９８５年）『中国大陸五万分の一地図集成』（科学書院・１９８６～88年）などが学術参考用に相次いで出版された。また、１９６０年代にヒマラヤを目指した登山者であれば知っていようが、詳細なヒマラヤの「デグリーマップ」の海賊版地形図が巷間に出回ったことがあった。この貴重な地図はその後、ヒマラヤとカラコラムのカムカルテに構成し直されて『岳人』に連載され、日本のヒマラヤ登山の発展・充実に大いに貢献した。

国立国会図書館の地図室には「外国地図の部」Ⅰ～Ⅲという分類でまとめられた一連の地図が所蔵され、閲覧や複写の利用ができる。この地図のⅠは前記の日本旧植民地地図で、ⅡとⅢのほとんどはイギリス、フランス、オランダ、アメリカの旧植民地政府が製作していた地形図を、戦争の進行途上で占領した英領マラヤ、仏領インドシナ、蘭領東インド、フィリッピンにおいて地図原版を接収し、図副部分はそのままに、周りの凡例

などを日本語に直して印刷発行した多色刷りの地図である。アジアの国々では現在でも地図を完成していない所もあり、依然として入手は困難なので、これら日本製の複製地図が現地調査などに役立っている。前記のヒマラヤ地図も、この英領インド地形図の一部であったことが分かる（なお、国会図書館もその後の研究に加わり、現在では外国地図一般とは別個に「外邦図」を分類している）。

8月15日の敗戦を期して軍事機密文書は焼却処分されることになり、地図類も同様に処分されたが、「終戦直後の一九四五年九月から一〇月にかけて、市ヶ谷の参謀本部にあった大量の外邦図の一部が、東京大学や東北大学の関係者によって密かに運びだされた。」「外邦図」として現存する地図は、すべてこのときに運び出された地図に淵源を持つ。東北大学に運んだ分は鉄道貨車1両を使って仙台に送ったといい、東京の分は保管場所を転々としたあと、最終的に御茶の水女子大学、京都大学文学部、東京大学、立教大学、広島大学、大阪大学などに配付された。東北大学の分も、ある程度整理された段階で改めて京都大学や国土地理院に分与された。この中で東北大学と御茶の水女子大学の所蔵分が最も完全なコレクションである。ちなみに国会図書館所蔵のものは、複数の出所から集められたものであるらしい。このほかにも、一括収蔵した状態で長い時間未整理状態に置かれていたことから、個人的にも一部を抜き出したことがあったと考えられる。

著者は大阪大学の所蔵「外邦図」の整理を始めるとともに「外邦図」を所蔵する各大学に共同研究を呼びかけて科学研究費も得て、総合的な研究を始めることになった。２００２年のことである。手始めに全容を知るためにも目録作りを始め、東北大学は２００３年、京都大学は２００５年、御茶の水女子大学は２００７年にそれぞれが完成した。数量の最も多い御茶の水女子大学には1万２８４５種が収蔵されていることが分かった。研究に際しては「外邦図研究会」を作って広く研究者を集め、成果をニューズレターに逐次報告した。この過程で地図製作に直接関わった関係者、参謀本部で企画に関わった関係者などからも直接話を聞くことができ、地図の域を超えて日本軍の一つの実態解明に及ぶところまでいっている。これらの成果をまとめて『近代日本の地図製作とアジア太平洋地域――「外邦図」へのアプローチ』（小林茂編・２００９年）が、大阪大学出版会から刊行された。

もう一つこの研究の目的とされたのは、地図の公開である。ビジュアルな資料である外邦図は、戦争や植民地統治の実情を示す資料としてばかりでなく、歴史や環境の変化を知る確実な資料である。広くこの貴重な地図類を活用するため、これらの地図をデジタル化してインターネットで公開することが考えられ、まず東北大学が２００５年から作業を始めた。現在は東北

大学付属図書館、お茶の水女子大学付属図書館、京都大学東南アジア研究所地図室のサイトで地図の閲覧ができる。東北大学のものが分量も多く全体的、一般向けであるが、地図の解像度がやや低いのが残念である。御茶の水女子大学で公開されているものは「兵要地誌図」と呼ばれる、作戦ないし作戦計画用に作製された純軍事地図で、例えば、岡部隊写真測量班が昭和18年にニューブリテン島で行なった偵察成果が、50万分の1の地図に赤字で細かく記入されており、臨場感がある。日本軍の作戦思想を検証する、またとない材料となるであろう。

敗戦時に運び出された地図については、以上の経過を経て今では一般の利用に供されるところまできたが、「もう一つの外邦図コレクション」が存在することが分かっている。地図製作過程では初刷りを一部保管する規定があり、この初刷り地図や初期の地図類が参謀本部ではない別の場所に保管されており、米軍による接収も免れて存在することが分かった。戦後に目録作りが行なわれ、総数で2万3000種に及ぶとされる。このもう一つのコレクションが合わさって初めて、「外邦図」の全容が明らかにされる訳で、ゆくゆくは公開されることと思われる。

（児玉　茂）

ロビン・ハンベリ＝テニソン　編
植松靖夫　訳

『世界探検家列伝
――海・河川・砂漠・そして宇宙へ』

悠書館　2011年9月刊
B5判　306ページ　9500円＋税

英国王立地理学協会　編
荒俣宏　日本語監修

『ビジュアル版　世界の探検大百科』

東洋書林　2011年11月刊
26×30㎝　360ページ　1500円＋税

『世界探検家列伝』の英文題名は「ザ・グレイト・エクスプローラーズ」である。山仲間に探検家や探検について興味があるか尋ねてみた。興味はあるが、具体的に深くは知らないと言う。知っている探検家のたどったルートについても、漠然としか知らないという大方の答えであった。登山と探検は似ているとこ

ろも多いが、やはり別物であると思われる。本書を読んだ仲間の間では、本書には地図がないので、未知の土地に迷い込んでどこにいるか分からないような状態になった、とも言っていた。

私はたまたま本書に記述された多くの探検家の紀行文や伝記を読んでいたし、幸いなことに格好な案内書になる『絵でみる世界探険地図』（同朋社出版）を持っていた。だから、これを見ながら探検家の歩いたルートや航行した海や島嶼をトレースできたので、大変興味を持って読み進んだ。特に挿入されている多数の色鮮やかな色彩図版や臨場感あふれる写真、精密なスケッチは見ているだけで探検家と一体になることができた。そこで本書を読むには、ぜひ地図を横に置いて読んでいただきたいと思う。

本書は40人の探検家を選び、7つの項目を立て、32人の執筆者が本文を書いている。編者は英国王立地理学協会（以下、地理学協会）の副会長ハンベリ＝テニソンである。本書の項目は大海原、陸地、河川、極地、砂漠、大地の生命、新次元の世界となっているが、ほぼ年代順に記述されている。しかし、残念ながら本書では山岳は対象外である。

最初に登場するのは、「大海原」の項目に出てくるコロンブスである。彼はヨーロッパ世界から新大陸を見つけ、世界の形を変えたのである。この項目にはガマ、マゼラン、ブーガンヴィル、ジェイムズ・クックなど錚々たる大航海者が出てくる。これらの探検家はほかの探検家と比しても、世界の地図を塗り替えたという点で特筆すべき人たちであろう。

「陸地の探険」では北アメリカの南部に分け入ったエルナンデ・ド・ソトや西部を踏査したルイスとクラーク、中央アジアに足跡を残したナイン・シン、プルジェヴァリスキー、スタインなどが記述されているが、スエン・ヘディンはどうしてか1行触れられているだけだ。なお、プルジェヴァリスキーは第5回中央アジア探検の出発点となったキルギスのイシィク・クリ湖畔の町カラコルで亡くなる。そこに彼の立派な記念碑と記念館があるので、私も昨年訪れてきた。プルジェヴァリスキーの執筆者は彼が動物に対して冷酷無比な人と決めつけ、毀誉褒貶が大変厳しいが、異論がある。もっとも、彼は狩猟が大変好きであったのだが……。

「河川」では北米の東海岸よりセントローレンス河、ヒューロン湖、オンタリオ湖を踏査したフランス人のシャンプラン、カナダのマッケンジー河のマッケンジー、ナイル水源を見つけたスピーク（スピークとナイルの源流について論争したリチャード・バートンは前項に入っている）。ザンベジ河とヴィクトリア大瀑布のリヴィングストン、コンゴ河のスタンリーは多くの部族と闘いながらなんとか大西洋にたどり着く。

「極地」はナンセンやアムンセンら。

「砂漠」はサハラ砂漠を踏査したハインリヒ・バルト。彼は中

央アフリカを幅広く探険し、チャド湖や危険なティンプクトゥまでの探検を行なった。そして、地理学協会の金メダルを受賞した。チャールズ・スタートはオーストラリアの中央部を探険し、そこは砂漠ばかりであることを証明した。実際、シドニーからシンガポールに向かうフライトは、まさにこの砂漠の上空を飛ぶのであるが、延々と続く無人の大砂漠に私も圧倒された。

それにアラビア学者であり探検家、登山家、考古学者、詩人の女性、ガートルード・ベルは「砂漠の女王」とも呼ばれる。イギリスの探検家フィルビーはアラブの支持者で、イブン・サウド王の友でもあった。彼はルブ・アル・ハリー、別名エンプティ・クォーターと呼ばれるアラビア半島砂漠中央部を横断した。

「大地の生命」では学術探検家が出てくる。最初に登場するのは学術探検の第一人者・アレクサンダー・フォン・フンボルトである。私たちにもなじみのあるチンボラソ山（６２７１ｍ）の山頂まで４００ｍの高度に到達し、フンボルト海流やフンボルト・ペンギンにその名を残している。偉大な博物学者で、天文学、気象学、地理学、気象学に貢献した万能の人である。中南米を探査し、ロシアを横断し、アルタイまで足を延ばした。

アルフレッド・ラッセル・ウォレスは博物学者であり人類学者で、アマゾンの熱帯雨林で探査したが、イギリスへの帰途、船が沈没し４年間採集した標本がすべて失われた。しかし、ダーウィンとは別に適者生存の考えに到達した。彼の名を冠してよく知られているウォレス線は、アジアとオーストラリアの間にある生物学的区分線である。

フランク・キングトン＝ウォードは東アジアで広く植物採集を行ない、その名は特に「青色のケシ」と結びついている。

「新次元の世界」には、人類が初めて地球から離れて宇宙に飛び出したことが書かれている。宇宙船ヴォストーク１号に乗り込んだのはユーリイ・ガガーリン。彼は「地球は青かった」という言葉とともに歴史に残った。今まで探検というと、地球上のことだけであったが、これからは人類の前に際限なき宇宙の空間が広げられたのである。宇宙の中で探険という行為がどのように行なわれるのか、考えるだけでも気が遠くなる。

海も探険の場である。潜水のパイオニアであるジャック＝イヴ・クストーはアクアラングを開発し、海中の世界を紹介してきたが、どのくらい深く潜れるかという点で問題がありそうだ。

最後に、洞窟の探検家アンドルー・ジェイムズ・イーヴィスが自分自身で洞窟探検について書いているが、世界中の洞窟の内、これまでに探検されたのは10％に過ぎないという。これからの探検の分野である。

巻末には、執筆者一覧として、執筆者の紹介がある。参考文献には各項目別に、洋書と邦訳書が多数記載されている。もっと詳しく知ろうと思う人には貴重な資料である。引用出典一

覧、図版出典一覧、索引も付けられていて親切である。

『ビジュアル版世界の探険大百科』（以下『大百科』）は、前掲書『探検家列伝』（以下『列伝』）に次いでの探検本の翻訳出版である。『大百科』の原書の題名は「エクスプローラーズ」である。同じような本が２０１０年に同時にロンドンで出版され、その翻訳本が２０１１年に、若干『列伝』の方が早いが、東京で出版されたのである。つまり、ほぼ同時に両著作の執筆と翻訳が進行していたらしい。しかも『列伝』の編者が地理学協会の副会長、本書の編者が地理学協会なのである。『大百科』も探検家の列伝が主要部分を占めているが、もちろんのこと探険百科にも目配りがある。

そんな訳で、両書とも似通ってはいるが、それぞれ独自の特色を出している。レイアウトも違うし、取り上げている図版も似て非なるものがある。本書はほぼ年代順に大項目が配列されていて、探検の歴史書としても読める。巻末に索引があるので、百科事典的にも利用できる。本書では『列伝』の約2倍の87人の探検家が紹介され、さらに小見出しでも約20人が紹介されている。

本書を通しで読んでみて感じるのは、有史以前に出アフリカを果たし、世界の隅々まで到達した人類は、一体どのような大移動をしたのかということである。磁石もなければ地図もない、ゴアテックスなどの近代的衣服もない。立派な船も車もない。だが、本書に出てくる探検家が訪れるどこにでも、すでに原住民が暮らしているのである。アフリカから先へ先へと進んでいったのは、食糧を求めてか、戦いに敗れてか、大いなる好奇心があったからなのか。本書の冒頭に出てくる古代エジプトの探検家・ハルクフは前２３００年ごろの人であるが、この人を除けば、前５００年ごろのカルタゴの航海者・ハンノから、１９６９年に月面に着陸したアームストロングまでの約２５００年の間に活躍した探検家のことが記載されている。有史前の幾世紀にわたる大移動も不可思議なものがあるが、今後１００年、２００年後の探検の場がどうなっているかも予測不可能なものがある。多分、宇宙が探険の場になっているのであろうが、そのときまで「探険」という言葉が残っているのだろうか。そんな妄想を抱かせる大百科でもある。

大項目の冒頭にはそれぞれの項目に合った年表と概要が付けられているし、すべての探検家の伝記にはその足跡を示す概略ルート図が付けられていて、分かりやすい。探検家の伝記のほか、「冒険の心得」として、砂漠地帯のサバイバル、船上での生活、ステップ気候帯とツンドラ気候帯の探険、熱帯雨林帯と密林、極地での探検に必要なこと、高高度における挑戦、水の中を行く、などの説明が関係項目のページに付記されている。

また、探検に使われた輸送手段として、9世紀のバイキング

のロングシップ、新世界への歴史的船舶サンタ・マリア号、西部開拓者を運ぶ幌馬車、英雄的探検家が乗った伝説の船エンデュアランス号、人類を月に運んだカプセルーアポロの指令船なども関係項目に挿入されている。

そこで探検家の列伝であるが、大項目の「第Ⅰ章・初期の探検家達」では、先に述べたバルクフ、アレクサンドロス大王、法顕、玄奘などが記述されている。

「第Ⅱ章・貿易と発見」では、マルコ・ポーロ、鄭和（ていわ）、モロッコのイブン・バットゥータ、ヴァスコ・ダ・ガマ、コロンブス、アメリゴ・ヴェスプッチなどの大探検家たち。

「第Ⅲ章・征服と植民地建設」では残酷なコンキスタドールたち、スペインのコルテス、ピサロ、ソト、バルボアらが、残酷な戦いの図版とともに描かれている。初期のカナダ探険では、フランスのシャンプランやカルティエ、ラ・サールが活躍した。

世界を周航する先鞭をつけたのはマゼランである。マゼラン海峡やマゼラン・ペンギンにその名を残している。私もパイネとフィッツ・ロイのトレッキングに行ったとき、プンタ・アレナスの南に灰色の雲が立ち込め洋々と広がるマゼラン海峡や、海岸の穴の中から出てくるマゼラン・ペンギンを見て感動したものだ。彼はグアム島に達し、太平洋の初横断を成し遂げる。私も、島の南端のウマタック湾の上陸地点に4mほどの白い石の記念碑が建っているのを見に行ったことがある。マゼランはセブ島の東にあるマクタン島の住民との小競り合いで命を落とすが、生き残った船員が初めての世界一周を達成した。海賊で探検家のドレイクやダンピア、数学者でもあったフランスのブーゲンヴィルらも世界周航を果たす。

南太平洋を探険し、ベーリング海峡まで到達した偉大な航海者ジェームズ・クック。彼がオーストラリア上陸の第一歩を印した場所は、シドニー南端のカーネル半島の先端にある。出張のとき見に行ったが、上陸地点の北側はボタニー湾と名付けられ、海岸の美しい公園の中に彼の記念碑と博物館があった。彼もまたハワイ島の住民に殺害される。そのほか、タスマンやラ・ペルーズも太平洋で活躍する。

「第Ⅳ章・未知の世界との邂逅」ここにはアジアと北米の間の海峡にその名を残したベーリングが登場する。しかし、彼はカムチャツカ半島の東にある、のちにコマンドール（司令官）島と命名される島で病のため命を落とす。アメリカの西部を開拓したルイスとクラーク。アフリカの踏査をしたマンゴ・パーク、バートンとスピーク、リヴィングストンとスタンリー。中央アジアで特に目覚ましい活躍をした3人の探検家、プルジェワリスキー、ヘディンとスタイン。だが、なぜかプルジェワリスキーは小見出しだ。

ところで、探検の対象となる地で最もなじみのないのは、アラビア半島であろう。アラビア半島を探検した人として6人の

イギリス人が登場する。フィルビー、ダウティ、バートラム・トマス、セシジャー、女性のガートルード・ベルとフレイア・スタークである。

「第Ⅴ章・極限への挑戦」では学術探検家のフンボルト、ウォレス、ダーヴィンなど。両極地探検家はバレンツ、ノルデンショルド、フランクリン、ナンセン、アムンセン、ピアリー、スコットなど我々にもなじみの人だ。

そして、やっとヒラリーとテンジンが出てきた。だが、この2人の登山家については、ほかのほとんどの探険家がその伝記を語られているのに、エヴェレストの登頂のみが強調して語られている。確かに探険家はほとんどの人が生涯を探検に捧げているが、登山家はそうはいかない。登山家のフィールドは急峻な岩壁や氷壁、高高度にあり、危険に満ち満ちているからである。

最後の太陽系への飛翔では、ソ連のユーリイ・ガガーリンと米国のニール・アームストロングが登場する。ガガーリンは『列伝』で述べたので、アームストロングに触れておこう。彼がアポロ11号の機長として1969年7月20日、人類で初めて月面に降り立った。当時の私はモスクワに駐在していたので、ホテルのテレビに釘付けになり、アームストロングが砂埃を上げて月面を歩くのを見た。そして彼は言った。「これはひとりの人間にとっては小さい一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍だ」。ソ連はそれまでスプートニク2号でライカ犬を宇宙に送り出し、ガガーリンを乗せたヴォストーク1号が地球を一周し、宇宙レースでは米国を完全に出し抜きトップを走っていた。しかし、米国を賞讃はしたが、ソ連は愕然とした。

探検の場は、これからは地球上から宇宙へ広がるだろうと短絡的に思った。ちなみに、米国が1958年に最初に打ち上げた人工衛星は「エクスプローラー（本書の原題名参照）1号」と命名されている。冒頭でも少し触れたが、今のところ、国家事業であり莫大な資金を必要とする宇宙探検はそう簡単にはいかないだろうが、その日がいつか来るのは間違いないだろう。

本書は「ビジュアル版」と題されているとおり、地理学協会所蔵の膨大な資料――大小さまざまな写真、色彩画、スケッチ、地図、日誌などがふんだんに盛り込まれていて、これらを見ているだけでも時間を忘れる。なかでも、ペインズが描いた見開きページにまたがる色彩画ヴィクトリア湖は、昨年、リヴィングストンの足跡を追って見てきたこともあり、物凄い迫力である。縦30㎝の大冊であるが、座右に置きたい大百科である。

（田村　俊介）

飯田年穂 著

『語りかける山』

駿河台出版社　２０１１年11月刊
四六判　３１６ページ　２３００円＋税

誰もが知っている言葉のひとつに「自然に帰れ」がある。18世紀フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソーが言ったという。しかし、この本の著者によると、ルソーの作品にこの言葉は見当たらないので、事実は、ルソーの思想をかいつまんで、それを分かりやすく、というよりも手っ取り早くまとめて言い表わしたのがこの言葉なのだそうだ。明治時代の日本産という。面白い。ひとつ利口になった。この種の言葉はほかに幾つもある。「富士には、月見草がよく似合ふ」というのもそのたぐいで、太宰治『富嶽百景』にあるものだが、こういう言葉はそれだけを単独に取り出したのでは、真実が伝わらない。太宰治がその言葉を吐いたのが、どんな状況・どんな心理にあったときなのかが分からなければ、その言葉の持つ意味は理解できない。

ルソーのその言葉も同様。それはフランス大革命をひかえて、近代思想が人々の自然を、山を見る目を変えていくその過程を期せずして表わすことになったのだが、こういう山を巡る思想の変遷、つまり人間が山にどのように接近し、どのように登山という遊びが普遍化してきたのかが本書ではやわらかく、解きほぐすようにして解説されている。フランスを中心とする西欧との比較文化を専攻する著者が、自分のフィールドを気ままに歩きまわるような語り口は楽しい。類書にはすでに、フランスではジュール・ミシュレ（１７９８～１８７４年）の『山』があり（『山岳』第92年・１９９７年「図書紹介」欄参照）、こちら側では桑原武夫『登山の文化史』ほかがあるのだが、本書では、それらよりもずっと山、登山に密着している。

著者の論理の基礎は確かで、ユマニスム（人文主義）に裏打ちされた人間への温かい理解がある。先ほどのルソーの言葉をどう理解するか、また環境問題や自然との付き合い方、クライミングの世界のことも、話は極端には振れない。話題がどこに踏み込んでも、底を流れているのは、穏やかでまっとうな考え方である。そうした著者のスタンスは「一つの型にはめ込んで、自分の考え方とは違ったやり方を否定する」のは「虚しい」というところにある。しかも著者はいま、明治大学教授で同大山岳部の部長として現役部員はもちろんＯＢとも親しい関係にあり、毎年夏、シャモニに滞在、現地ガイドとアルプスの岩峰でクライミングを楽しむという山登りの実践派・現役であって、なかば山を引退した年寄が昔の権威によりかかって物を言うの

とは立場が違っている。論説に力があるのは、そうした背景があるからであろう。

団塊の世代のひとりとして著者が求めているのは、高度成長のなかで「どこかに置き忘れてしまった心の価値を大切にする生き方」であって、それがあるのが山なのだと言う。そして、その山を発見するのは体を通してなので、バーチャルな世界ではそれは味わえない、肝心なのは生身の人間の触覚であり、「岩壁に指先をかけ、一歩一歩足を上に運んでいく動作」や「岩肌をつたう雪解け水の微かなぬくもり、木肌の下で脈打つ樹木の密やかな鼓動」を自分の手足で触ってみなければ自然の営みは理解できないという主張が生まれる。それは「手をのばした時のホールドのつかみ具合、その感触、その冷たさや暖かさ、さらに言えば、スタンスが見つからなくて切なく虚空を蹴る足の、あの何とも言えない浮遊感」を知っていなければ生まれてこない説明である。そしてまた、戦前のドイツ・アルピニスムにその例が見られるが、行く先に死が待ち受けているような精神主義的な山登りとは違う、明朗なフランス的アルピニスムの香りに誘われた論説が楽しい。

本書は12の章から成っていて、1786年のモン・ブラン初登頂からの登山の流れが、先述のルソーやドイツ流精神主義的単独登山―オイゲン・ギド・ランマーやヘルマン・フォン・バルトー、日本の開拓期登山や女人禁制、日の出・日没と山の花などに見る自然観照と山岳美の変遷、クライミング、山のガイドやガイドブックと山の登り方、環境・自然破壊、そして最後の『日本百名山』まで、ずいぶん欲張った内容でたどられ、話題は古今東西に及ぶ。ややこしい内容かと受け取る向きがあるかもしれないが、先ほどから言っているように、題材は重くても語り口は簡潔・平易。山を相手に文化を語る見本になっている。主要テーマとなっているアルプス、山と本、日本百名山など、いずれの分野も先行図書があるが、こうした世界を明晰に解説して、いまの山の世界が抱えている問題の多くを、明日の展望につなげている。特徴的なのは、12の章のいずれも、締め（末尾）の数行が見事にその章全体をくくっていること。内容豊富だから、本文を一気に読むと消化不良を起こす。一度に1章か2章どまり、読んだ内容が熟成してからまた次へ、というのをお勧めする。

［お断り］この寄稿の骨子は『山と渓谷』誌2012年1月号「BOOK」欄掲載の書評である。当初『山岳』編集担当から、前記書評をそのまま転載したいという希望が寄せられたが、当会会員用に補足・再構成した。

（大森　久雄）

柴野邦彦 編

『ひとり歩けば　辻まことアンソロジー』

未知谷　２０１１年12月刊
四六版上製　１９２ページ　２２００円＋税

「オトカム」こと辻まことが亡くなってから37年も経つ。辻まことの良き友人で、後援者でもあった矢内原伊作、宇佐美英治、草野心平や串田孫一も逝ってしまったが、アンソロジーや画文集の復刻が内容や形を変えながら刊行され続けている。『辻まこと　山とスキーの広告画文集』（山と溪谷社）が一昨年、未知谷社からは、本書のほか『遊ぼうよ』『すぎゆくアダモ』『辻まことマジック』（いずれも琴海倫編・著）が昨年、相次いで刊行されている。

ユーモラスなフレーズと線画が散りばめられた秀山荘の雑誌広告や、最晩年まで『岳人』に連載された登山者のさまざまな姿の表紙画と、それに添えられた文章で辻まことを知った人は多いことだろう。その年代の山好きも70～80代になっている。

こうしたアンソロジーや復刻版が刊行され続けるのは、山やスキー好き、昨今流行りの「アウトドア」愛好派の新しい辻ファンがいるからだろうか？

友人の古書店主によれば、山の本は時期をおいて繰り返し読み継がれていて、最近では深田久弥は読まれない、と。また、ある編集者は、若い世代に辻まことの愛読者が増えてきているという。

辻まことの父はダダイスト・辻潤、母は大杉栄とともに甘粕憲兵大尉に殺された伊藤野枝、一緒に殺された少年が長らく辻まことと間違われていたという。幼少のころから転々と居候、食客生活をして育った。精神に異常をきたして放浪を繰り返した辻潤を看取るなど、複雑な生い立ちや、その後の辻まこと自身の定職を持たない放浪的生活など多くのストーリーが伝えられてきた。ともすれば、読者はこうした生い立ちや背景の上に画かれた文章や絵として辻の作品群を評価してきたのかもしれない。そういう先入観なしにこのアンソロジーを読み返してみたい。

本書を編集した柴野さんは、生前の辻まことを知る数少ない人だ。若かった柴野さんはスキー行をともにし、山小屋の火の前で辻のギターを聴き、話を聞いたという〈巻末・辻まことの山〉。

辻の人生観や心をよく知る編者が選んだ20編のアンソロジーは、紀行風、エッセイ風、あるいは聞き書き調など自在に語られていて、舗装道路が山奥まで入り込み、モダンな山小屋に建て替えられる以前の山旅や山人の暮らしの世界に私たちを連れ

戻してくれる。

ときに意表を衝く奇抜さと諧謔に満ちた文章からは、辻が山に分け入り、山人と交わりながら山や自然の懐に深入りしていく様子が伝わってくる。近代文明批判とも思える風刺性に掌を打ち、共感を覚える読者も多いだろう。

本書に所載のすべてが、あるいは辻作品のほとんどが登山、旅やスキー自体よりも人＝登山者をはじめ、世俗に疎い山里の住人、猟師や木樵り＝との出会いとその姿を書いているというのは考え過ぎかもしれないが、辻は人（ときに犬やけもの）を画く達人だ。

「一人歩けば」の6編は辻自身の体験や、山で遭遇した男女をユーモアと怪奇趣味も交えて画いていて、おそらく創作部分もあるだろうけれど、辻ワールドの真骨頂だ。

「横手山越え」は辻のいう〈ウラヤマ〉のようになじんだスキールートだから、躍動感にあふれたスキーツアーの経過が6編に分けて詳しく書かれているが「芳ヶ平の小屋」の夫婦と犬のことが一番書きたかった一編ではなかったか？

また、辻の登山観、自然観を語るエッセイも収録されている。「山の景観」は、少年時代の初登山・甲斐駒ヶ岳を土台に登山の興奮と感動を語り〈健康が生む機嫌のよさ。この実感を生きようとする私にとって、山と孤独とはいつまでも心をささえる大切な二要素だ〉と結んでいる。

「わが未開の山」では、辻の形而上の山が語られる。〈精神の健康法は、自然の中に自分を置いて、すべてを新しく確かめ、そこから出直すという体操だ〉と。

カバー（油彩、雪の荒野をひたすら進むスキーヤー）をはじめ、50点余りの挿絵は辻ワールドの味わいに欠かせない。本文中にカラー刷りがないのが惜しまれるが、それぞれのイラスト自体が物を語る雰囲気に満ちている。

辻の絵画表現と技法は多種多様だ。たくさんの作品が残されているようだが、油彩、水彩、木版画、ドローイング、独自のドライ・ポイントの技法（ガラスかセルロイドに墨を塗ってスクラッチしたものだろう）など多才だ。「けもの捕獲法」の〈佐内十藏先生熊取之姿〉は勇壮で気迫にあふれ、次ページの囲炉裏端でドブロクの茶碗を前に置いて語る猟師の姿と傍らに座る猫の眼は鬼気迫る。

カリカチュア風で皮肉交じりのユーモアあふれた辻のイラストやスケッチは、フランスのサミヴェル（Samivel　1907～1992年、登山とスキーを得意としたイラストレーター、多くの画文集を残し、映画製作、小説を書くなど多才な活動をした）の影響を受けていたと私は思えてならない。サミヴェルは、イタリア、スイスやフランスではいまだに復刻され、作品展が開かれていて人気がある。辻は1964年に三浦健二朗氏夫妻（秀山荘店主）とともにフランス、イタリア、スイスを巡ってい

て（年譜・矢内原伊作編『山からの言葉』〈平凡社〉所載）、サミヴェルの作品に触れていたのではないか？

辻まことの山登りは、切り立つ岩壁や氷壁を攀じてはいない。ヒマラヤならぬウラヤマの自然や山里の人たちに深く浸透していき、文明批判を交えながら、自らを世俗から解放し、健康を謳歌した山登りの人だ。

都会の喧騒と塵埃から我が身を遠ざけて、静かな山で過ごす時間と山人との交わりに私たちは憧れを持つ（今や〈田舎暮らし〉は流行語的だ）。辻が生み出したユーモアとエスプリに満ちた多くの文章と絵画は、半世紀以上経ったいま、色あせるどころか、輝きを増しているのではないだろうか？

本書をきっかけに辻ワールドと出会うことで、旧世代のみならず、若くて新しい辻ファンが生まれることを期待したい。

（松澤　節夫）

上田　豊　著

『未踏の南極ドームを探る ――内陸雪原の13ヶ月』

成山堂　２０１２年３月刊

全集・双書　２３８ページ　２２００円＋税

これは、著者・上田（あげた）　豊（ゆたか）氏にとって２度目の南極、１９８４年から86年にかけての、第26次日本南極地域観測隊（越冬隊）での活動記録である。本書を読む前に、まずは南極観測について少し紹介しておきたい。

日本の南極観測は、１９５６年11月に第１次日本南極地域観測隊（以下、第１次隊）が東京港を出港したところから始まった。第１次隊はオングル島に昭和基地を建設、11人による初めての越冬観測も行なった。初代南極観測船「宗谷」の老朽化により第６次隊で中断したが、新観測船「ふじ」の建造がなって、第７次隊（１９６５年出発）で再開後はとぎれることなく続き、第25次隊からは３代目観測船「しらせ」が就航、第50次隊ではオーストラリアの船をチャーターしたが、第51次隊からは４代目の新しい「しらせ」に替わった。２０１２年２月からは第53次隊が昭和基地で越冬中である。

この間変わらないのは輸送の方式で、基本は年1回の観測船往復によって、人員も物資も輸送している。日本を11月に出て、12月下旬、南極の夏に現地に着き、物資の輸送と建設、夏の観測調査を行ない、夏隊は翌年2月前半に帰途につく。越冬隊は2月から1年間、昭和基地の維持管理と観測調査を行ない、翌々年2月に次の隊に仕事を引き継いで南極を離れ、3月に帰国する。越冬隊はどれくらい（の期間）南極にいるのですか、という質問をよく受けるが、南極には1年と1ヶ月、出発から帰国までは1年と4ヶ月と答えると、たいていは驚かれる。日本の冬を越す感覚で、越冬は5ヶ月程度と思う方が多いようだ。

越冬隊の大半は昭和基地で1年を過ごすのだが、本書副題に「内陸雪原の13ヶ月」とあるように、著者はその期間を内陸雪原で過ごした。南極大陸氷床の深奥部、氷雪・強風・寒冷の環境は、雪氷の研究者にとっては念願のフィールドでもある。そして南極に広がる未踏の地、大陸の奥へ向かう調査旅行は、探検的精神には極めて魅力的である。日本隊は徐々に行動範囲を広げ、第9次隊で、村山雅美隊長（本会名誉会員）率いる旅行隊が昭和基地から南極点往復に成功し、それ以降は内陸の調査が本格化していく。第10次隊では著者も参加して内陸の雪氷調査が広範囲に行なわれ、第11次隊では昭和基地から３００㎞内陸にみずほ基地が建設された。「しらせ」では以前より輸送力が倍増し、観測・設営とも規模拡大が可能になった。第26次隊は、そのような背景の下で、昭和基地西南西６５０㎞のセール・ロンダーネ山地近くに新しい基地（あすか基地）を建設するとともに、内陸でも広範囲に調査旅行を展開する計画であった。

さて、表題にある「南極ドーム」とは何か。南極大陸は、岩盤の上に巨大な鏡餅のような氷が載っている。その頂部を「ドーム」と言う。ただし、鏡餅にはでこぼこがあるので、頂部と言える所は複数ある。標高３７００ｍを超えるその一つが、昭和基地の南方約１０００㎞付近にあるはず、とまで分かっていたが、その正確な位置と高さは不明だった。鏡餅といっても、差し渡し数千㎞に対し高さ約４㎞という超・平べったい形から最高点を見つけるのは難しい。著者は第26次越冬隊で、仮に「ふじドーム」と呼んだこの地点を探す内陸調査旅行に出る。もともとは第25次隊の計画だったが、事故により果たせず、第26次隊が急遽担当することになった。貴重な、地理学上の探検のチャンスである。ヒマラヤ、南極という未踏の地にあこがれて京大山岳部に入り、大学院からは南極とヒマラヤ・中央アジアを舞台に雪氷学、特に氷河・氷床の研究を続けてきた著者に、否のあるはずがない。周到な計画とできる限りの準備を整え、著者率いる5人の旅行隊は3台の雪上車を駆って雪原を南へ進む。

それにどのような価値があるのか。南極氷床は、氷河と同じように流動している。流動の方向は表面の傾斜方向である。し

たがって、ドームはそこから氷の流れが始まる所、つまり最源流の地点である。これが分かると、氷の流域が決まる。それは、南極の氷が増えるか減るか、といった問題を考える上で基本かつ不可欠の情報である。もう一つは、ドームにある氷は、そこでできたと考えられる点が重要である。南極の氷は、降り積もった雪が長い時間かかって圧密され氷になったものである。中には当時の空気が泡になって取り込まれる。これが順に積み重なっているので、掘って取り出せば、長期間の地球環境の歴史が分かる。しかし、ドーム以外の場所で掘った氷は、上流から、しかも深さによって異なる場所から流れてきたものなので、結果の解釈が難しい。これに対してドームの氷は、そこでできたものであり、標準的なサンプルとなる。また、ドームでは一般に氷は厚いことに加えて、内陸ほど降水量が少なく、1年当たりの氷は薄いため、より長い時間を遡ることができる。ドーム探しは、氷床深層掘削の候補地点を決めることでもある。本書では、さまざまな困難のなかで、工夫をしながら最高地点を見つけ出していく過程が書かれている。こうして確定されたドーム地点（現在は「ドームふじ」と呼ぶ）では、のちに新たに内陸基地が建設され、氷の掘削が始まった。採取された深さ2503m（1996年）と3035m（2007年）までの氷の柱状サンプルからは、過去72万年にも及ぶ地球環境の歴史が解明されつつあり、南極観測の代表的な成果の一つとなっている。

著者は1964年、京大山岳部3年生のときに、現役学生4人を主体としたアンナプルナ南峰登山隊に参加し、初登頂を果たす。その記録は、梅棹忠夫氏（本会名誉会員）の指導を受け、学生4人の共著『ガネッシュの蒼い氷』（朝日新聞社、1966年）として出版され、大好評を博した。さらに著者は1973年、ヤルン・カン（カンチェンジュンガ西峰）に京大学士山岳会隊の一員として初登頂するものの遭難、8000m以上で2日間の彷徨ののち、パートナー松田隆雄さんを失いながら生還する。その記録『残照のヤルン・カン』（中公新書、1979年）は、名著の評判高い。

ヤルン・カン登山隊の隊長は西堀栄三郎さん、本会の元会長であり、第1次南極越冬隊隊長である。その西堀さんの著として知られるのが、『南極越冬記』（岩波新書、1958年）である。第1次越冬の成功、帰還は大変なことで、単行本が待ち望まれていた。梅棹さんは「わたしは極地探検家」（千里眼　第10号、1985年）で以下のように書く。「そのとき、わたしの敬愛する桑原武夫大先輩から指令が来た。西堀栄三郎著『南極越冬記』という本を、おまえが作れ。出版社は岩波書店、岩波新書の一冊である。話はもうできている。まったく殺生というものだ。問題は材料がどれだけあるかだ。素材なしでは何もつくれない。西堀隊長のもって帰ってこられた『素材』をみて、お

どろいた。山のようにある。（数ヶ所中略）」ものすごい分量（原稿用紙数千枚に相当）で、どう削って所定の分量に縮めるかに苦労されたそうである。

本書は初めて著された、研究者による内陸の越冬記として、ドーム探査行をハイライトとする調査旅行や内陸基地滞在の13ヶ月を、ときに科学的な説明も交えながら、「そんな厳しい場所で『人間』が何をどんな気持ちで為しているか」（「あとがき」より）を描写する。当時から二十数年が経っている。名古屋大学を定年退職（現在は名誉教授）してようやく書く時間を得たという著者が、いつか本に、と克明に書きとめた大学ノート7冊、５００ページの日記と、持ち続けた強い意志には、敬服のほかはない。西堀さんにも並ぶ観察者・記録者としての成果を、梅棹さんを継ぐ整理力・文章力をもって形にしたものが本書である、とも言えそうである。その筆は科学者としての正確さだけでなく、人柄のにじむ温かみを加え、読む者を惹きつける。

本書の紹介は、舞台が南極という特殊な場所なので、著者とは近い関係だが、経験者の私に依頼された。上田さんから5年遅れて京大山岳部に入った私が雪氷研究の道に進んだのは、上田さんらを見て、それが南極・ヒマラヤへの近道と思ったからだ。私は第14次越冬隊に参加し、第10次隊の上田さんたちが氷床上に設置した三角鎖を再測した。1年当たり数ｍから十数ｍという、氷床の表面流速が得られた。ドームふじの氷床掘削では、私は第35次越冬隊長として、輸送とドームふじ基地建設の任に当たった。今年と同じく「しらせ」が昭和基地に接岸できず、計画は大幅に狂ったが、皆の努力で１９９５年1月末には新しい基地がほぼ完成した。上田さんは、第36次観測隊長（兼夏隊長）として、9年ぶりのドームふじへ赴き、基地完成、越冬開始を宣言した。帰りの「しらせ」では、ずっと並んで食事をした。両隊長は指定席なのだ。そんな次第で、私にとってはある程度知っていることも多いのだが、いったん読み始めれば、著者の筆に引き込まれていく。南極経験のない読者にはなおさらのこと、南極内陸の13ヶ月とその感動を、生き生きと伝えてくれるはずである。

内容の紹介はほとんどできなかったので、本書の雰囲気を伝えるため、「晴海立ち」と題された冒頭の一文を紹介しておこう。

晴天の東京・晴海埠頭。１９８４年11月14日、午前11時。第26次南極観測隊を乗せた「しらせ」のスクリューが回りはじめる。船がゆっくりと動き出した。甲板から見下ろす見送りの群れの中、老いた両親は悲壮な顔。小学1年の娘は最前列で泣いている。「しらせ」と岸壁の間を黒く汚れた水面が分け、みるみる残酷に開いていく。これから1年と4ヶ月、遠く離れて暮らすのだ。紙テープは散って流れ、人々の表情や、誰がどこにいるのかも、すぐに分からなく

なった。（中略）人垣の長い帯は、黒く広がる水面のむこうに遠ざかっていった。

（横山　宏太郎）

薬師義美　編
（新選）『ヒマラヤ文献目録』

増・改訂第4版　2011年刊
企画・発行　PLANNING　ROOM リモ
A4変型判　1275ページ　2万8000円

本書の原型となった最初の「ヒマラヤ文献目録」が上梓されたころ（昭和47年・1972年）のことを、よく覚えている。この本は著（編）者自身が自らタイプを打って作成した、いかにも手造りという感じで、親しみ深いもの。正確な書名は『ヒマラヤ関係図書目録』（500部）であった。

その翌年（昭和48年）の2月4日に東京の世田谷（松原）の九山山房――もちろんこの山房の名は故・深田久弥の書斎名であるが――で、ある会が催された。ヒマラヤ本の宝庫と謳われた深田久弥蒐集のコレクションが散逸することなく、国会図書館へ収蔵されることになっていたので、多くの稀覯本と対面する最後の夜となった訳である。

同時に参会者の一人である薬師氏が、深田さんへ捧げた「ヒマラヤ文献目録」の出版を祝う会でもあったのだ。そのときに皆で署名した色紙のコピーが残されている。皆がみなヒマラヤと縁の深い登山家、著（訳）者、編集者、研究家である。その人々の名を録す。小林義正、望月達夫、諏訪多栄蔵、高橋照、山崎安治、近藤信行、藤原一晃、中馬敏隆、横山厚夫、薬師義美、雁部貞夫、それに深田家を代表して志げ子夫人が加わった。かの有名な「九山山房訪客簿」も右の11名の連署によって閉じられたのだった。

ここで、この書目の規模がどれほどのものであったのか、版ごとに収録点数が加速されてゆくさまを具体的に記してみよう。

初版（1972年刊）では欧文図書は1916点、邦文図書は256点、計2172点。

増訂第2版（白水社、1984年刊）では欧文図書3752点、邦文図書855点、計4607点と、初版刊行時に比べて2倍以上の点数が収録されている。特に邦文図書の刊行が10年間で3倍以上に増加したのは、我が国のヒマラヤ登山（広義の）が最盛期を迎え、登山報告書や中央アジアやヒマラヤ登山の図書が、翻訳を含めて多数出版された事実を物語っている。

ちなみに右の第2版の総ページ数を、この書目の該当ページによって確かめてみると、

× 144　Yakushi, Y.　1984, ----759P.　と記載されている。そして、この版から堅牢なクロース装となり、薬師氏自身も、面目を一新したと記している。

次いで、これはほとんど決定版ともいうべき、増訂第3版（白水社、１９９４年刊）では、欧文図書７６０１点、邦文図書１７９７点、計９３９８点。第2版の刊行から10年を経てさらに倍増され、1万点近くの「書目」となり、ページ数も1320ページに達し、1冊の書物としては、厚さもほとんど限界に達した。

ヒマラヤ関係（中央アジアを含めて）の本は、新刊でもない限り、和洋どちらの本も大抵はこの書目に記載されているので、欧米で刊行されている古書目録やオークションのカタログにはYakushiナンバーが付されることが定着していく。そして、邦文図書には英文による解説が記載されているので、欧米の登山家やヒマラヤ研究者がここに注目して、ヒマラヤ登山の報告書を収集することも多くなった。なかにはジョン・ボイルやドイツのW・ハイシェルのように、来日して多数の日本人の刊行したヒマラヤ本や報告書を根こそぎ集めていく（私はその相手を何日もしたことがある）研究家もいた。彼らは、いつもこの書目のヤクシ・ナンバーをノートして、狙いを定めて多くの古書店を「はしご」して歩いたものであった。

そして、いよいよ第3版出版から17年後の２０１１年に第4版ともいうべき、今回は簡明に『ヒマラヤ文献目録』（プランニング・ルーム・リモ、２０１１年刊）と題して、第3版と同様の体裁の大冊が生まれた。所収点数は、欧文図書７７２７点、邦文図書２３８５点、計1万１１２点という大冊で、総ページ数は１２７５ページ。

薬師氏は、前回以上にページ数が増えるのを恐れて、次のように工夫をした。

(1)　邦文図書の英訳を削除した。
(2)　ロシア語文献も削除。
(3)　前著にあった邦文と英文の図書一覧も省略。

以上のようなスペース削減を工夫して、この17年間に新たに刊行され続けているヒマラヤ本を収載したのである。邦文図書の英訳をやめたのは、ちょっと残念（これを頼りにしていた欧米人も多いので）な気もするが、それは第3版を参照することでなんとかカバーできるように思う。

さて、今年の3月、京都で「国際稀覯本フェア」が開かれた。私はほかの用事があって実際に見ることはできなかったが、そのリストの目玉の一つとして、写真版に載っていたのが、中央アジア最大の探検家Ｍ・Ａ・スタインの長文の自筆書簡72通。さすがに1千万円近い値段が付いていた。宛名はすべて、イタリアのカラコルムへの登山・探検隊を指揮したフィリッポ・デ・フィリッピ。私はこの二人が永年の親友で、このようにおびただしい書簡を取り交わしていたとは、初めて知ったのであった。

カラコラムの近・現代の初期の大遠征の記録を知るためには、フィリッピの大冊を参照する必要があるが、それを参考のため、薬師目録の記載によって記してみよう。一般的なもの（といっても大冊で、今は入手至難）は次のもの。

F77 Filippi, Filippo de (ed.) 1912, La Spedizione nel Karakorum e nell Imalaia Occidentale.（本文471P＋217P）そして、この本には英語訳と日本語の抄訳があることを併記している。こういうところが、この書目の一つの良さでもあろうか。その邦訳は次のようなものである。『カラコルム紀行』（抄訳）盛岡英治郎・宮崎武夫共訳。『山岳』第32年第2号（1937）。

これによって、このときのアブルッチ公の探検隊の記録（K2登山隊を含む1909年のカラコルム行）が部分的ではあるが、日本語によって読むことができる。

別にフィリッピ編のカラコルム探検報告（1913～14年）は15巻の大冊があり、それも本書に出ているが、その別冊にリモ氷河周辺の大地図があり、カラコルム探検史上の大きな成果となっている。

現在の日本では、パソコンによる情報収集が主流を占めていて、「実物」に触れる気風が随分希薄になっているようである。「実物」のうち筆頭にあげられるのは「書物」であろう。これは知的生産につながる最大の存在であり、「ヒマラヤ登山、踏査」はその肉体的表現であろう。

日本山岳会には後世に引き継ぐべき文化遺産たり得るものがたくさん存在する。先般の本会会報「山」に松田雄一氏により、本会所蔵、加賀正太郎刊行の『蘭花譜』の優品が公開されるという記事が載っていたが、ほかにも貴重な文献、図書、書簡など数多くの資料が眠っている。

最近の新聞によれば、これまでは東洋学の専門家が利用していただけの「東洋文庫」の一部に一般公開用のミュージアムがあり、貴重（国宝を含む）な文化財（モリソン文庫2万4000点を含む）を展覧している由（入場料880円）。

我が日本山岳会も、かつて100周年展で貴重本の展覧を丸善のギャラリーで行なったが、そうした展示を年に一度くらいは定期的に行なって、公益法人としての役割を果たすべきではないだろうか。さしずめ本書などは、最新の貴重な成果として世人に示したい一冊である。

（雁部　貞夫）

Richard Salisbury, Elizabeth Hawley
The Himalaya by the Numbers
A Statistical Analysis of Mountaineering in the Nepal Himalaya

Vajra Publications　2011
224 pp.　23.6 × 17.5cm　$32.95

ネパールの高峰登山に出かけた人は、カトマンズでホテル入り直後にインタビューを受ける。おなじみの Hawley さんは、雑誌『Time』の政治情勢レポーターとして１９６０年、ネパールに着任した。そのころ、ヒマラヤでは８０００m峰の初登頂時代は終わっていたが、63年、アメリカ隊のエベレスト西稜初登攀の情報をスクープし、ヒマラヤ登山情報に感心を持った。爾来、収集した登山情報はアメリカ山岳会が『The Himalayan Database』として２００５年に発行した。その後、収集した高所登山情報は毎年更新され、ｗｅｂサイトで閲覧可能だ。

これらネパール国内と国境線上にある高峰へ出向いた７００0隊、5万余人、60年間の登山情報をデータベースに、ヒマラヤ登山暦25年の登山家であり、ミシガン大を定年退職した統計専門家が分析した。一覧表と棒線、折れ線、傾向曲線などカラー付きでグラフ化し、それぞれについて解説がある。

分析の前提として「１９００～49年：探検踏査時代」は高峰への登山が英国のエベレスト、ドイツのカンチェンジュンガなどに限られるので、この時代は省略し、ここでは便宜上、登山期を次の3期間に区別している。

１９５０～69年：遠征隊時代　この時代は１９５０年、ネパールが外国の遠征隊に登山を解禁したときから始まる。8人前後の比較的多人数の登山隊がポーターにたくさんの荷物を運ばせ、シェルパが高所キャンプに食糧などを運び上げる、いわゆる「極地法登山」であり、多くの８０００m峰ではシェルパも隊員とともに登頂した。これは米国隊やインド隊が60人以上、イタリア隊が１５０名とヘリコプターの動員、日本の日・中・ネパール3国友好登山隊が２００人以上など、その後に続く大遠征時代の始まりでもあった。

１９７０～89年：過渡期　アルパイン・スタイルが極地法登山に取って替わり始めた。高度の登攀技術を有したメスナーやククチカが軽量化の上、途中のキャンプを減らし、現地人の支援を受けず、速攻スタイルで一気呵成に登頂した。78年にメスナーとハーベラーが無酸素でエベレストを登頂し、エリート・クライマーの間では無酸素登頂が究極の目標となった。

その後もエベレストでは日本、ユーゴ、カナダ、ソ連、チェコなど大型の遠征隊が入り、より困難な北壁や岩壁のバリエーション・ルートからの登攀を目指した。80年代のハイライトとして、メスナーによる８０００ｍ峰14座の登頂を挙げている。

１９９０～２００９年：商業登山（日本では公募隊と呼ばれることが多い）時代　80年代にドイツ山岳会が始めたが、90年代になって大盛況となった。

商業登山で人気の高いアマ・ダブラム、チョー・オユー、エベレストの3峰を総称してここでは「ＡＣＥピーク」と呼んでいる。アマ・ダブラムはクーンブ谷を見下ろす荘厳な輝き、チョー・オユーは８０００ｍ峰の中で最も登頂しやすい山、エベレストは多くのヒマラヤ登山者にとって究極の目標である、とＡＣＥピーク人気の秘密を解説している。ちなみに06年春、エベレストに登山者とシェルパを合わせて４８０人が登頂し、07年春にも６００人が登頂している。

この時代に7大陸最高峰登山、最高齢や最若年登山、高峰からのスキーやスノー・ボード滑降、パラパントでの下山、早登り、エベレスト頂上での露営など「初」づくしの行動が実行された。１９９６年から２００８年の間は、マオイストの活動が脅威となって登山隊に敬遠された地域も多い。

以上のようにネパール・ヒマラヤ60年間を捉えて、この書物は4章と附表から成り立つ。

１章、登山活動：１９５０年から２００９年まで、年ごとにネパール・ヒマラヤ全域、そして６０００ｍ、７０００ｍ、８０００ｍ峰、ＡＣＥピークについて登山隊や登山者数をグラフ化した。登山者数は、ＢＣまで達しなかった登山者や、隊構成がネパール人または中国人のみの場合は除いている。そして地域、季節、年齢と性別、国別、遠征結果、個人記録などの一覧表とグラフが続く。

性別では１９７０年には全体の４％程度だった女性が、２００８年には14％ほどに伸びていることがグラフから分かる。アマ・ダブラムやチョー・オユーでも同じような傾向が見られる。また、国別では日本人男子は１９５０～89年間は全体の22・6％とダントツのトップだったが、90～２００９年にかけては米国、フランス、英国に次いで4番手となり7・3％を占めるに過ぎなくなった。全女性に占める日本女性の割合も17・8％から9・0％になった。女性登山者の伸び率は全体で3・9倍に対し、日本女性の伸び率は2・0倍と低い。国力や経済状況を反映していることが窺がえる。

２章、登山分析：６０００ｍ以上の高峰を５００ｍごとに区切って、登頂と登頂率をグラフ化した。続いて主なピークごとの登頂と登頂率、登山季節、年、月日、登頂時間、高齢者、性

別、国別、平均的な登頂隊の遠征期間などの表とグラフがある。

登頂率は、登山に参加しながらBCに達しなかった人たちを除外し、登頂目的でBC以上に上がった隊員を母数に登頂者との割合で見ている。50～89年、全ピークの登頂率は20・5％であったが、90～2009年では35％に伸びている。また、国際公募などで人気を集めるACEピークでは50～89年と90～2009年における商業登山隊の登頂率（カッコ内は一般登山隊）はアマ・ダブラム49・3％（37・5）→54・4％（45・5）、チョー・オユーはそれぞれ39・9（18・7）→40・2（34・2）、エベレストは10・5（6・7）→38・7（12・4）であり、商業登山隊の登頂率が一般登山隊を上回っていることが分かる。また、この間にBC入りした人数はアマ・ダブラムで217人（200）→3379人（167）、チョー・オユーは263人（203）→5020（152）、エベレストでは1253人（1307）→5742人（829）と、商業登山隊での参加者が桁違いに急増していることが読める。

その他、各月の登頂日のグラフでプレ・モンスーンとポスト・モンスーンに集中していることが分かるが、後者の方が少し期間は長い。年齢別登頂者表は10歳から79歳まで5歳刻みに全ピーク、ACEピーク、そしてACEを除いたピークの数値を示している。65歳以上の商業登山隊員の登頂率はACEピークでは30％、一般登山隊でも30％前後であり、3割がヒマラヤ登頂の願望を果たしている。女性の登頂率は全ピークで15・8％（登頂者数112人）→34・6（952人）になり、なかでも90～2009年のACEピークでは42・3％（667人）と、4割を超す登頂成功だ。国別では60年間を通して日本人は最多の4806人が参加し、登頂率は30・3％だが、この登頂率を基準に見ると26番目だ。旧ソ連圏諸国の登頂率は断然高い。

3章、死亡分析：登山隊員と現地人のこの60年間に起きた死亡事故について500mごとに分類し、高峰ごとの実態、現地人の死亡率の高い峰、登山季節、高所での死亡と雪崩・滑落・体調不良によるもの、また、年、性、年齢、国別、大きな遭難事故など死亡関連を表化した。死亡率はBCより上部に上がった隊員数と死亡者数を対比している。

全ピークの死亡者数一覧表では50～89年の間、一般登山者2・54％（327人）、90～2009年は1・07％（281人）と死亡者数、死亡率ともに低下している。母数が12853人から26273人と倍増しているなかで、死亡者が減っていることが分かる。現地人についても同じような傾向がある。滑落死は高所ほど多い。標高から見ると絶対数では6500m台の死亡が最多であり、雪崩による遭難死は6500mを中心に幅広く見られる。その他の遭難原因としてAMS（急性高山病）、疲労、凍傷、クレバス転落、氷瀑崩壊、落石、行方不明、AM

S以外の病気など詳細がある。60年間の登頂活動中における登りと下りでの事故分析では、登頂活動を終えてから下山途中の死亡が断然多く、登りに比べて3倍近い危険性を含んでいることを物語っている。なかでも滑落がダントツに多く、次いで多いのが行方不明だ。

4章、酸素と8000m峰：登山隊員と現地人の酸素使用の比較、酸素を使用しなかった人たちの死亡率など、グラフで読むことが可能だ。商業登山隊に参加する人たちは、自分たちの技量不足を多額の参加費として支払い、登山形式やルートなどには関心がなく、ひたすら登頂を目指す。そんなことで商業登山隊では酸素を多用するが、一方近年は、8000m峰でも一般登山隊隊員とシェルパたち現地人の無酸素傾向が強い。

附表：60年間のネパール国内、6000m以上の3百余の高峰ついて、1山1行で8ページにわたる膨大なデータの一覧表である。例えば、エベレストは遠征隊数＝1274隊、BCより上部に上がった男子隊員＝9131人、女子＝774名、現地人＝7303人、登頂した男子隊員＝2544人、女子隊員＝250人、死亡した男子登山者＝139人、女子＝7、現地人＝71、男女それぞれの死亡率＝1・52％と0・90％、そして現地人0・97％など簡単に読み取ることができる。一方、マナスルは275隊、BC入りした隊員が1624人、登頂隊員は323人ながら死亡者は49人、現地人を加えると63人が亡くなり、エベレスト、ダウラギリに次いで多い。筆者がマナスルに出かけたとき、シェルパたちがマナスルを「キラー・マウンテン」と呼んでいた理由が分かった。

また、21ヶ所に挿入されたホーリーさんの囲み記事（長いものでは2ページ半ほどのものもある）が目を引く。JACによる日・中・ネパール三国友好登山の紹介やヒラリー卿の辛口コメント、他人の助けを一切借りずに、テントや食糧などを自分自身で背負い、無酸素でエベレストに登頂した英人女性、エベレストで他人のテントに無断で寝泊りする登山者、マナスルで雷の一撃に倒れた仲間の目撃談、ナンパ・ラでの銃撃射殺事件、チョー・オユーでフィックス・ロープの無断使用が原因で執拗に繰り返された流血騒ぎ、同じくチョー・オユーでネパール政府許可の2隊と中国政府の許可を取った隊が出くわした稜線上の3者紛争、足跡がなくローツェの登頂を3日後の後続隊に否定され、3年後に登り直した14座を狙うイタリア人、同じロシア隊ながら物量作戦を展開した89年カンチェンジュンガ大部隊と、対照的な94年アマ・ダブラムの典型的アルパイン・スタイル登攀など、登山現場を知る上で参考になる。

60年間にわたるネパール・ヒマラヤ登山情報が統計的手段によって凝縮された分析結果だ。統計表など味気ないものと思われがちだが、眺めれば眺めるほど情報が引き出せ、興味は尽きない。高峰登山を計画するにあたり、入山季節、登頂工作期間、登頂日の決定などを示唆する情報の宝庫だ。ネパールの登山計画にはぜひ活かして欲しい。

（南井　英弘）

Tim Hannigan
Murder in the Hindu Kush
George Hayward and the Great Game

The History Press　2011
254 pp.　£18.99

本書は2011年のボードマン・タスカー賞の候補に挙げられたが、受賞には至らなかった。受賞の栄誉を得たのは『山岳』102年の本欄でも紹介したBrotherhood of the Ropeを書いたB・マクドナルドの作品Freedom Climbersで、輝かしいヒマラヤ登山に至るポーランド人たちの登山を綿密な取材を基にまとめた。

本書の著者ハンニガンは、旅行好きの若手フリーランスの作家で、1999年にヒンズー・クシュを初めて訪れて、ジョージ・ヘイワードに興味を抱き、改めて本書執筆のためにスリナガール、ギルギット、ヤシン、レー、パンゴン湖、カシュガール、ヤルカンドなどを訪れて取材した。本書が第一作であるが、1年の半分をインドネシアで過ごし、各地方の英文の旅行記を現地紙などに発表している。

ジョージ・ヘイワードの名は、その印象的な写真―ターバンを巻き、ごつい太刀を差し、右手に槍、左手に盾を持って、太いプラタナスを背に仁王立ちして、アイベックス、マルコールのトロフィーを自慢げに並べた―とともに、中央アジア探検史に興味を持つ者ならば、一度ならず聞いたことがあるはずである。

19世紀の中央アジアを舞台としたイギリスとロシアの角逐は、現在の大国間の政治的駆け引きにも通じ興味が尽きない。その舞台が知られざるテンシャン、パミール、クンルン、カラコラムという、中央アジアの山岳地帯やヒマラヤとチベットで繰り広げられたことから、未知にあこがれる登山者にとっても当然関心が高いところである。

英露の角逐、すなわちGreat Gameについて書かれた本は数多く、書き尽くされることがないかのようである。J・ケイのWhen Men & Mountain Meet (1977)とThe Gilgit Game (1979)、G・モーガンのAnglo-Russian Rivalry in Central Asia

1810–1895（1981）、P・ホプカークの The Great Game（1990）、この本は『山岳』86年の本欄で紹介された。さらにK・メイヤー、B・ブリザックの The Tournament of Shadows（2001）やR・ジョンソンの Spying for Empire（2006）がある。また、個人の伝記の形で情況と時代を扱ったものも多く、ヤングハズバンドは金子民雄さんの『ヤングハズバンド伝』（『山岳』１０４年）を含めて4冊、F・M・ベイリーとN・イライアスは翻訳が出ていて、それぞれ『国境のかなた』『幻の探検家ネイ・イライアス』がある。さらにW・ムアークロフトにもG・アルダーの Beyond Bokhara（1985）がある。本書はこれらの系列に新たに加えられたヘイワードの伝記である。

前記のほとんどの本の中にもヘイワードのことが書かれているが、特に The Gilgit Game と The Great Game ではそれぞれに2章をあてて詳しく書いてある。それはヘイワードが志し半ばで殺害されたことや、その背後にあると思われる政策的背景が大いに興味を惹き、かつ象徴的なエピソードでもあるからであろう。そして、このことはさまざまな角度からほぼ書き尽くされているようである。本書は伝記ということからヘイワードの生い立ちから書かれているが、もともと資料が少なく、不明の時代も長く、若くして両親を失ったことや、ロンドンで一時、パブリック・スクールに通ったことがあったという経歴が新らしいくらいである。

アイルランドの歩兵連隊に入隊し、そこからインドのパンジャブ南部に赴任した。インドでの兵士としての生活は何も分かっていないが、休暇には避暑に行き、ヒマラヤを遠くに眺めただろうことや、アフガン国境地帯の民族的な複雑性を知ったであろうと、のちの行動につながる要素を書いている。話は少し飛躍するが、R・キプリングの小説 Kim（1901）は、欧米ではいまも読み継がれている。19世紀インドの多様な社会と日常、時代情況、そして在インド・イギリス人の行動もリアルに描かれ、主人公 Kim を通して密偵の具体的な活動が見えてくる。the Game という言葉もしばしば登場する。したがって、前記したすべての本でも、Kim について触れているのは偶然ではない。ホプカークなどは Quest for Kim という本を書いたくらいである。本書にも Kim への言及や引用がある。ヘイワードの軍隊生活は長く続かず、インドで退役してカシミールなどで趣味の狩猟をしていたとされる。その後ロンドンへ戻り、H・ローリンソンに出会ったところから探検家としての活動が始まる。

H・ローリンソンは楔形文字の研究者、オリエント考古学の最高権威であると同時に政治家、インド統治の当事者の一人でもあり、ロシアの中央アジア進出に強い警戒感を抱いている。１８６８年当時は地理学協会（ＲＧＳ）の副会長にも就いていて、若いヘイワードを使って、南下してくるロシアが目指すで

あろうパミールへの派遣を決めた。RGSとしては異例のことだが、個人に資金を与え、測量具を貸与している。

この時代は、インド測量局（SI）の大三角測量事業もヒマラヤ、カラコラムに延び、H・ゴッドウィンオースチンによるバルトロ氷河の測量も行なわれ、1862年にはカシミール藩王国の外周（西端部を除く）にまで達した。さらにマハラジャの勢力圏より北のクンルンの山群の位置確定と、その山群の向こう側にあるシナ・トルキスタンにもその測量網を延ばそうとさまざまな手段を試み、1863年からは現地人に測量術の訓練を施し（パンディット）、英領インド外の地理情報を得るという秘密の工作をT・モンゴメリーらが試みていた。SIの測量官であったW・ジョンソンも、1865年にカラコラム峠を越えて北へ進んでクンルン山脈に達し、さらにホータンまで入って位置測定を行なった。今回、ヘイワードにRGSから与えられた使命は、カラコラムからクンルン山脈を越えてカシュガールを目指し、さらに未知のパミールを探って地図化することであった。

1868年という年は、目的を異にし母体を異にした3人―ヘイワード、ショウ、ミルザ―が、別々にカシュガールを目指すという偶然の重なった年であった。R・ショウは冒険商人として自らの茶園の茶の販路をシナ・トルキスタンに開拓するという目的を持って、従者を伴い商品とともにカシュガールを目指した。この冒険行は結果として当時のシナ・トルキスタンの支配者ヤークブ・ベクの信任を得ることになり、翌1870年にはパンジャブ自治州弁務官であったD・フォーサイスの第1回通商使節の先導を果たすことにつながった。ショウの冒険行は Visits to High Tartary, Yarkand and Kashgar（1871）にまとめられている。

SIは1863～64年の、ハミッドによるヤルカンドの位置確定のあとを受け、今度はカシュガールに向けてパンディットを送った。商人に扮したミルザは、カーブルからオクサス河源流部のワハンを通ってカシュガールに達した。目的地カシュガールに最初に到達したのはショウで、1869年1月4日。次がミルザで2月3日、そしてヘイワードが3月5日だった。ショウとヘイワードは、クンルン山脈の手前のシャイドゥラで会ってお互いの持ち場を確認し、ヤルカンドでは同期間に別の場所に滞在させられていた。この3人はカシュガールにおいて手紙のやり取りで存在を確認し合っている。

ヘイワードは、ヤルカンドからカシュガールまでのタリム盆地西端部の測量成果を、3年前のジョンソンの測量成果につなげた。最終目的地のパミールには入れずミルザに先を越されたが、未知のヤルカンド河源流域を測量して広大な地域を地図化した。Journal of RGS vol. XL（1870）に、133ページに及ぶ長文の報告とともに Sketch Map of Eastern Turkestan を掲載

した。この地図を見ると、カシュガールの北のコクシャール山地の裏側にロシアの砦の印があり、３５０名の歩兵が駐屯すると記されている。また、パミールにはまだ Unexplored の文字が読める。

ミルザの測量データは、モンゴメリーによってその翌年の J. RGS vol. XLI（1871）に報告とともに発表された。地図にはオクサス河源流部が詳細に描かれ、パミール・ワハンは未知ではなくなった。また、報告の中でヘイワードのカシュガールの位置を新市の位置とし、ミルザの位置を旧市の位置であると正している。

翌１８７０年7月、レーを出発した第1次フォーサイス使節は、ヤルカンドまでのルートを前年のヘイワードの成果によって変更している。位置観測はショウが担当し、そのデータは同じく J. RGS vol. XLI に載せられた。フォーサイス自身の報告は年報 Journal ではなく、より早い Proceedings of RGS vol. XV (1870-71) に現地からの手紙という形で載せている。詳しい報告は、医者兼標本採集を担当したG・ヘンダーソンによって Lahore to Yarkand (1873) がまとめられた。また、この使節にはギルギットからヤシンを通ってワハンを抜け、カシュガールで合流する別動隊があり、パンジャブの警察官イブラヒム・カーンがそれを果たした。行程と距離を示したその成果は、同じ Proceedings of RGS vol. XV に載っている。

１８６９年夏、レーに帰着したヘイワードは、ローリンソンとの手紙のやりとりを経て再びパミールを目指すことになった。パミールにカシュガール側からは近づけないことが明らかになり、アフガニスタンからのルートも、異教徒の場合はともミルザのようにはいかない。ギルギット川の上流のヒンズー・クシュの山々に囲まれた地域（ダルディスタンと呼ばれた）は半独立の国をなし、インダス流域とは民族も宗派も異なり、お互い同士が勢力争いの渦中にあり、さらにカシミール藩王国とも敵対しており便宜を得られる状態ではないが、ほかに選択の余地はなかった。

JRGS に報告を急いでまとめるとともに、ダルディスタンを良く知る退役軍人A・ガードナーや言語学者のG・ライトナーから情報を得て、その年の暮れから行動を起こし、ギルギットに入った。そして、ヤシンの土侯ミール・ワリからの招待を得て１８７０年2月にギルギットを発った。積雪のため峠越えは不可能だが、周辺の測量と情報集めに努めた。ミール・ワリには大いに歓迎され懇意になった。ヤシンからＲＧＳ会長Ｆ・マーチソンに宛て出した手紙は、ミールの協力が得られた旨が記され、先の希望に満ちていた。しかし、このことが災いとなった可能性もある。ミール・ワリから聞き及んだカシミール兵による虐殺事件を新聞に発表したことで、カシミール藩王とその管轄者であるインド政庁には良い印象を残さなかっただろう。

ちなみに、5月23日に開かれたRGSの総会で、ヘイワードとショウの活動が高く評価されて、ヘイワードにファウンダーズ・メダルが授与され、今後の活動に期待が込められた。

6月のスリナガールでは、出発準備中のフォーサイスとヘンダーソンに会っており、別動隊のことも聞いていたはずである。5月のRGS総会に出席していたショウは、7月にレーで隊に合流した。ヘイワードは7月9日に、期待に胸を膨らませ再びギルギットを発った。ダルコット峠からパミールに入り、北上してキルギスを通りロシアの勢力圏に至るか、または往路を戻ってチトラルを抜け、インドへ帰着することを考えていた。13日にヤシンに至ったが、なぜか以前とは違って歓迎されることもなかった。歩を進めて、峠の手前のダルコットの外れに泊まった。7月17日の午後のことである。そしてその夜、ここで事件が起きるが、ここから先の真実はもはや誰にも分からない。

1870年11月15日のロンドンのRGSでは、病気で退任するマーチソン会長の最後のアドレスがあり、「非常に残念なことに、勇敢かつ困苦を乗り越えた旅行家が殺害されてしまったことをお伝えしなければならない」とヘイワードの消息が伝えられた（これもProceedings of RGS vol. XV にある）。そして、パミールを目指して準備する、ヘイワードから届いた最後の5通の手紙が読み上げられた。別の席でローリンソンが述べた長い追悼の言葉もここに載せられた。

翌年2月の集会では、12月にF・ドリューから届けられた、謎の多いヘイワードの殺害に至る経緯とその後の顛末を具体的に記した手紙が紹介された。遺体が運び出され、ギルギットに埋葬されたのが10月26日ということだ。ドリューはカシミール藩王マハラジャに仕える顧問で、Jumoo & Kashmir Territories (1875) のダルディスタンの章で、再びヘイワードのこの事件に触れている。

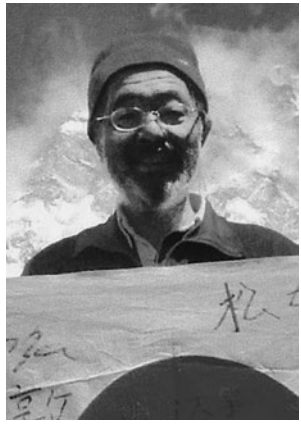
後日談もある。この事件から60年以上たった夏に、R・ショーンバーグがヤシンを訪れた。その名もBetween the Oxus and the Indus（1935）には、ヘイワードの事件について新しい話が書かれている。英領インドの属領に変わった当時もまだあの事件は風化していないようで、さまざまな話が村人の中に残っていた。

ヘイワードの死から数年にしてロシア軍のパミールへの接近があり、ヒンズー・クシュを越え、背後からやって来る可能性が現実味を帯びてきた。藩王領の辺境・ギルギットの位置づけはにわかに高まり、ダルディスタンの土侯国をインド政庁の管理下に置くべく支配力が強められる。いよいよGreat Gameも佳境に入っていく。

（児玉　茂）

追悼

平野　眞市さん



ひらの　しんいち
（1938〜2011）
会員番号 5750

平野眞市君は２０１１年5月25日、脳梗塞のため73歳で逝った。平均年齢を超えてまだ無為徒食の私から見れば、「登りたいだけ登り、飲みたいだけ飲んだ」彼の人生は少し早かったな、もう少しとの想いと、羨ましい充実した人生だったな、との気持ちが交錯する。

彼は１９５７年、明治大学付属明治高校山岳部から明治大学体育会山岳部に入ってきた。その年の明治大学山岳部は、春に白馬岳・杓子尾根で起きた雪崩による二重遭難事故からの再起のため努力中だったが、日本山岳会のマナスル初登頂に刺激された折からの登山ブームも加わって、一緒に入部した新人は40人を超えていた。

伝統の厳しい訓練で自発的な退部者を求めても、夏山合宿など総勢40人を超えた。「炊事」から「キジ撃ち」まで、登山技術以前の規範が求められる訓練の４年間だったが、同期卒業の10人のうちの1人として彼は残った。鍛えられただけでなく、鍛えた後輩の中に植村直己もいた。山岳部での生活は山登りだけでなく、新人歓迎会で初めて飲まされた一杯のビールが彼の「山と酒」の二人三脚のスタートだった。

卒業して４年後の１９６５年、明治大学山岳部初のヒマラヤ遠征、ゴジュンバ・カン（７６４６m、高橋進隊長）登山隊に選ばれ、参加した。そのときの高橋隊長の報告書に、隊員を紹介した一文がある。少々長いが平野君の人柄、生き様を伝えているので再録しておく。

いい点も、悪い点も現在の明治大学山岳部のカラーを身につけている第一人者である。学生時代の彼には到底、ヒマラヤへ行こうなどというような野心もなく、ただリーダーのあとについて四年間の部員生活をなんとなしに過し

てしまったという感じの男だったが、いつの間にかヒマラヤへの夢を育てていた。

酒を飲み出すと、とどまるところを知らず、しまいにはお得意のストリップを演ずるのが特技で、そのためか〝ダラ眞〟と呼ばれていた。彼ほどカトマンズからベースキャンプまでの道程にあって、私を心配させた者はいなかった。彼だけは連日、要所要所の茶店で、ネパールの地酒、チャンやロキシーをおごったり、おごられたり、シェルパやポーターたちと一緒にひっかけては半パンにゴム草履という格好でキャラバンを楽しんでいた。毎日、腹いっぱい酒をガブ飲みして、しかもその健脚は全く変わらず、キャンプ地には、いつも真っ先に着いてしまい、荷物の整理なども、何となくいい加減にやっているうちに、いつの間にか、大体において片付いてしまっている、といった調子のよさだった。しかしこうした彼の表面的な生活態度の内側にかくされていたものが、登攀にかかって起きた入沢の負傷と、シェルパ・ドルジェの怪我によって、初めて表に出てきて彼の性格を大きく変えさせる結果になった。なかでもドルジェの怪我は、ロープを結び合っている間に起こしたものであっただけに、あれほど楽天家であった彼の心に深い痛手となって、はからずもその後、彼のすぐれた真価をみせる原因となった。そして彼ならばシェルパや若い隊員をまかせて、登頂隊のリーダーとしても大丈夫、働けると思った。……

ゴジュンバ・カンより5年後、１９７０年の日本山岳会のエヴェレスト登山隊本隊に参加。ゴジュンバ・カンとエヴェレスト、２つの初登頂者（エヴェレストは日本人初）となった後輩、植村直己とチームを組んだのもひとつのつながりであった。以後、酒と将棋を相手に炉辺会（明治大学山岳部ＯＢ会）の海外担当理事など務め、明治の海外遠征、チューレン・ヒマール、ヒマルチュリ、エヴェレスト西稜、アンナプルナ南峰などのほか、会員の海外遠征の支援、裏方に尽くした。雌伏十余年、１９８８年に大塚博美・炉辺会会長の下で理事長に就任するや、ヒマラヤへの憧憬やまず、自ら隊長として１９８９年にチョモランマ東壁のカンシュン・リッジを偵察、翌々年、本隊を率いて挑んだが志を果たせず、１９８４年のエヴェレスト西稜と併せて、明治大学山岳部としては宿題となった。

１９９７年から２期４年、日本山岳会の常任評議員を務め、98年には炉辺会９代目の会長に選ばれた。会長に就任するや生来の実行力を伴う名プランナーとしての力量を発揮、早世した藤田佳宏君が首唱していた「３Ｍ作戦」（Mountain, Man, Money）の遺志を継いで、明治大学山岳部による８０００ｍ峰14座登頂を目指す「ドリーム・プロジェクト」をスタートさせ

た。残された4座に取り組み、２００１年には高橋和弘を隊長にガッシャーブルムⅠ峰（ジャパニーズ・クーロワール）とⅡ峰（南西稜、南東稜）を、翌2年は三谷統一郎隊長でローツェ西壁を成功させた。残る1座のアンナプルナⅠ峰は最後の８０００m。3年連続しての海外遠征となったが、最後は平野君自身が総隊長として指揮を執り、最難関といわれる南壁ルートを克服、２００３年5月16日、明治大学山岳部のプロジェクトは完了、最後を飾った。植村直己が１９７０年、エヴェレストの頂上を踏んでから33年目のことであった。

最後に彼を病床に見舞ったとき、交した言葉は「酒はそろそろ卒業、山はまだまだだな」だった。

（中尾　正武）

加藤　幸彦さん



かとう　ゆきひこ
（1933～2011）
会員番号 5181

突然の訃報だった。驚き、耳を疑い、そして悲しみが押し寄せた。加藤幸彦さんは、私の登山人生に大きな影響を与えてくれた人だからである。

山仲間は加藤さんを〝ドンちゃん〟と呼ぶ。〝ドン〟なる謂われは、陶器の産地、愛知県瀬戸市に生まれたことに由来する。現今の人たちはボスを表す「ドン」からきていると思っているらしいが、実は陶器（せともの）のドンブリから付けられた渾名で、名古屋山岳会の彼の先輩たちは、いまでもドンブリと呼

ぶ。本人も、"Just call me Don"などと言うところをみると、本人はお気に入りだったように思える。

しかし、加藤さんは日本の社会人登山界のドンであった。また、登山以上に仕事もできた。

名古屋山岳会での活動を中心として、国の内外に多くの友人を持ち、昭和30年代から日本の登山界をリードした本物の山男である。登山・登攀歴は輝かしい。穂高岳周辺での積雪期初登攀はもとより、社会人のヒマラヤ挑戦においてもリード・オフ・マンであった。

私と加藤さんの出会いは１９６４年であった。長野県山岳連盟（当時）が結成されて3年目にして挑んだネパール・ヒマラヤの難峰ギャチュン・カン遠征隊で、隊長の古原和美氏は「長野県の力だけではこの峰は落ちない。外部からの経験者が必要だ」と、加藤幸彦氏、安久一成氏を補強隊員として迎えたのであった。

このときの私は、山岳会グループ・ド・モレーヌ（ＧＤＭ）の新人会員として、ヒマラヤに挑む人たちは雲の上の存在であった。赤い絨毯を踏んで羽田空港を飛び立つ先輩たちの姿には、後光が射しているようにも思え、ヒマラヤへの憧れは現実的なものではなかった。

ギャチュン・カンは隊員一人の尊い犠牲があったが、初登頂に成功した。実行委員会の使い走りをしていた私にとって、ヒマラヤが「夢」という形になった瞬間でもあり、私の登山人生の転機となった。

ギャチュン・カンは、初登頂という輝かしい記録とともに、長野県の岳人に多くの夢と勇気を与えたことに最大の意義があると私は思う。夢を見ること、夢を持ち続けること、そして、夢を実現する勇気という方程式が確立されたのである。仲間たちは堰を切った水の流れのように次々と海を渡り、私自身も１９７１年、西アジア登山探険隊でトルコやイランの未踏の山を登った。

加藤さんとのつながりは、このギャチュン・カンを契機として、彼が所属する名古屋山岳会と私が所属するＧＤＭの交流を生み出した。あるときは御在所岳・一ノ壁で一緒に岩を攀じり、またあるときは、戸隠山で合同合宿を行なった。

加藤さんは、困難な登山になるほど意欲的になる人だ。積雪期の戸隠山では、キノコ雪で行く手を阻まれると、「どうした。俺に任せろ」と先頭に躍り出るのである。意欲と技術は圧倒的だった。

また、西アジア登山探険隊に始まったイラン山岳協会との交流が生み出した日本・イラン合同マナスル登山計画では、テヘランに飛んで交渉の先頭に立ったのが加藤さんであった。ドラフトの作成は、長野市の私の家で行なうのが常だった。土曜日

の夜に名古屋から長野に来て、夜を徹しての作業だったが、加藤さんは、マネージメントや装備や食糧の計算の基本は、基礎数値に徹底的にこだわった。１９７６年秋、私たちは秋季マナスルの登頂に成功した。

私が加藤さんから学び、今日に至るまで大切にしている基本である。

加藤さんは、「俺の登山人生は、生まれ、育ちは名古屋だけど、よく考えてみると長野の人たちとのつながりが一番濃い」という。

ギャチュン・カンに始まり、日本・イラン合同マナスルへの協力、アラスカ・アリューシャン列島登山隊（１９９９年、長野県山岳協会隊）では隊長を務め、中国・チベット側からの日・中合同チョモラリ峰登山隊での登頂など、長野との関係は深い。なかでも、加藤さんが63歳にして頂上に立った１９９６年の日・中合同チョモラリ登山隊での思い出は、今でも忘れられない。

私はこの計画の実行委員長としてベース・キャンプにいた。２人１組のテントでは、加藤さんと一緒だった。

彼は無類の愛煙家であるが、登頂を期して禁煙を誓って中国に渡った。しかし、ラサに着いての一夜のパーティの折、中国側隊員が「加藤さん、禁煙しても登れない人がいるが、喫煙しながら登った人はいます」のひと言で、気が付いたらタバコを咥えていた、と笑った。また、彼は甘いものが好きだ。テントではホットケーキを焼くのを楽しんでいた。

しかし、登頂ではやはりかなり辛い状況であった。第１次登頂では、７０００ｍを超えた所で、ひとり遅れて時間切れとなり、「俺はここでビバークして、明日、頂上を目指す」と言い出したのである。正直なところ危険である。ベース・キャンプからの大本営指令は「加藤隊員は第３キャンプに戻れ」で、私が引導を渡す役目をした。「了解」。指令には素直に従った。

後日、本人は「我が登山人生の最大の屈辱である」と述べるが、それは執念と現実の狭間での自分への〝評価〟であったのであろうと私は思う。そして、翌々日、第２次登頂隊員としてチョモラリの頂上に立った。

加藤さんはそれから数年後、チョー・オユーに挑んだ。激烈なる挑戦の精神に敬服する。そして、私の加藤さんに対しての感謝と畏敬の念は尽きない。

天国というシャングリラにもし山があるのなら、加藤さんはきっと今日もまた、高みを目指して一歩を踏み出していることだろう。合掌。

（田村　宣紀）

〈主たる登山歴〉
前穂高岳・北尾根４峰正面冬季初登攀（１９５７年）、穂高岳・

屏風岩中央カンテ積雪期初登（１９５８年）、全日本山岳連盟ジュガール・ヒマール遠征隊（１９６２年）でビック・ホワイト・ピーク初登頂、ギャチュン・カン初登頂（１９６４年、長野県山岳連盟隊）、ペルー・アンデス、サルカンタイ南稜初登攀（１９６８年）、三浦雄一郎氏によるエベレスト・スキー滑降（１９７０年）、アリューシャン列島（１９９３年、長野県山岳協会隊）、チョモラリ峰登頂（１９９９年、長野県山岳協会・中国登山協会合同隊）、チョー・オユー峰登頂（２００２年）
名古屋山岳会、日本山岳会、カナダ山岳会各会員。
１９９２年から19年間、カナダ・ケローナ市に在住。２０１１年７月17日逝去。享年78。

池田　昭二さん



いけだ　しょうじ
（1927～2011）
会員番号 4507

山仲間のみならず、多くの教え子たちからも、尊敬と親しみを込めて「イケショー」と呼ばれたひとりの岳人が、２０１１年８月２日、満84歳の生涯を閉じた。池田昭二さんは、昭和２年２月22日生まれ、それで昭二と命名された。不思議なことに数字の２に縁の深い方だった。池田昭二さんは38年間にわたって山形県庄内地区の小学校、中学校、高校の教壇に立たれた。専門教科は理科（高校では地学）だが、実は小学校で子供たちに音楽を教えたかったらしい。現にピアノの練習をしていた時期もあった。疾風のごとく山を駆け巡った男の、知られざる一

面である。

池田さんは、1927年、旧満州の撫順に7人兄弟の長男として生まれた。父忠蔵氏（鮑海郡八幡町＝現酒田市出身、南満州鉄道勤務）は、子供たちによくクラシック音楽のレコードを聞かせてくれた。また、忠蔵氏は登山やスキーを趣味とし、息子にその手ほどきをし、少年は父の山歩きのあとを追った。少年時代の音楽とスキーと登山という原体験が、池田さんの人間形成の土台となったことは間違いない。撫順の小・中学校を卒業したのち、京城（現ソウル）鉱山専門学校冶金科に入学。1945年8月15日敗戦当日、ひとつかみの塩をポケットに、勤労動員先から学友とともに夜間の逃避行を決行、同年12月、日本に帰還した。18歳の少年たちの4ヶ月にわたる決死の逃避行だった。その途中、亡くなったひとりの学友を密かに荼毘に付し、遺骨を持ち帰り、その家族に届けた。しかし、その逃避行については玲子夫人にさえ多くを語ろうとはしなかった。というより、語れなかったのだと思う。池田昭二さんは、その人生の初めに、言葉では到底表現できない悲惨を見てしまったのではないかと思う。

翌46年、中国人の助けがあって、母愛子さんと子供たちがそろって帰国できた。しかし、父忠蔵氏は残務整理のため家族と離れ、大同炭田に残り、現地で病死した。その葬儀には、忠蔵氏を慕う多くの中国人が長い列を作って故人を見送ったと伝えられている。池田さんは帰国後の1946年、秋田鉱山専門学校冶金学科に転入学し、48年に卒業、同年4月、酒田市内の中学校で教職に就いた。

池田昭二さんの生涯は、戦争という不条理とそれを仕組む暗い権力との戦いであった。言うまでもなくそれは、敬愛する父と生活のすべてを奪われたこと、死の危険に向き合いながらの逃避行、そのなかでの友人の死という極限状況から生まれた思想である。しかし、それは単なる反戦・厭戦思想ではない。池田さんの中には、植民地支配者としての贖罪意識と同時に、中国人への同胞愛が共存していた。その証拠に、池田さんは旧満州時代に交流した中国人家族を何度も訪問し、その家族を自宅に招いている。そのために中国語の勉強もした。民族や国家の垣根を越えた、もっと普遍的な友愛こそ、池田さんの寄って立つところであったと思う。

池田さんは、登山を通して、多くの人と交流し、人間的絆を結んだ。ヒマラヤ登山で雇ったポーターやシェルパも、池田さんにとっては単なる使用人ではなかった。最初のヒマラヤ登山で出会ったシェルパ、パサン・ソナム氏（故人）を日本に招き、一緒に国内を旅した。植民地時代の中国人にさえ慕われた父親忠蔵氏の懐の深さを、息子の池田さんはそのまま受け継いでいる。東京都出身の母愛子さんは、戦後の困窮のなかにあっても、凛として気品と誇りを失わず、忍耐強く家族の生活を支えた。

愛子さんは、なぜか庄内弁に染まらなかった。池田さんも庄内弁を使わなかった。生徒が使う庄内弁を使わないということは、教師にとって、ある意味では損失だったと思う。しかし、生徒たちは標準語で語りかける池田先生に、何か別の世界を感じたのかも知れない。そして池田さん自身、そういう仕掛けを十分に自覚していたに違いない。

１９５０年、池田さんは、酒田市亀ヶ崎小学校に勤務して間もなく、肺結核のため酒田市立豊里病院に入院、２年６ヶ月の療養生活を余儀なくされた。２度目の「死の淵」であった。安静を要するのに病院の屋根に登った。目の前に鳥海山があった。やがて、密かに山に登るようになった。「病院で死ぬのも、山で死ぬのも同じ」と思ったからだ。ところが、山歩きが功を奏したのだろうか、結核は完全に癒えた。

１９５２年、池田さんは結核療養中の人々に呼びかけ、同人詩誌『岔』（こだま）を発刊し、その編集責任者になった。ガリ版刷りのこの小さな詩誌の創刊号表紙は、池田さんの幻想的な風景画で飾られている。池田さんは谷間五郎のペンネームで作品を発表した。戦争への呪い、国家の欺瞞への怒り、そして静かな思索、それが池田さんの詩の主旋律である。『岔』第７号からは、同郷の詩人・吉野弘が加わった。号が進むにつれて、政治か文学かという議論が深まり、同人の間に溝が生まれた。そのころから、谷間五郎の作品は極端に少なくなる。池田さんは政治に大きく舵を切ったのである。『岔』は１９５９年の52号まで続いた。

池田編集長時代の『岔』には、フランスの抵抗詩人ポール・エリュアールの詩がたびたび登場する。玲子夫人との結婚記念パーティへの案内状にも、エリュアールの詩「法則」が引用されている。池田さんは、ファシズムと戦い、愛を謳ったこのフランスの詩人に傾倒し、その詩の中に自身の姿と思想を見出したようだ。「法則」の第１連、「葡萄から葡萄酒をつくる／石炭から火をつくる／くちづけから人間をつくる／それが人間の温かい法則だ」エリュアールらしい愛の詩だ。第２連は、「戦争と悲惨に抗して／死の危険にもめげず／ひたすら自分を守る／それが人間の厳しい法則だ」と続く。これは池田さんの体験そのものである。そして第３連、「水を光に変える／夢を現実に変える／敵を兄弟に変える／それが人間の優しい法則だ」池田さんはこの４行に未来を託し、生きる希望を見出したのかも知れない。

若き日の玲子夫人は、池田さんを、「山を下りたとき、荷の軽さにとまどって、身体のバランスを失うらしい」と、生活者としては決して器用とはいえない池田さんを、うまく表現している。その池田さんは自分のことを「詩を書かない詩人、絵筆をとらない画家、楽譜の読めない作曲家」と卑下した。しかし、池田さんは作曲こそしなかったが、センスのある詩も書いたし、

絵も描いた。何よりも池田さんの登山は、それ自体が叙事詩でもあった。中学や高校の生徒たちは池田さんの山の話に魅せられ、山に憧れ、山に向かった。巷に「イケショー・ラッパ」という言葉がある。池田さんが生徒たちを山に向かわせるために駆使した詩的レトリックのことである。例えばこうだ。「君たち、岩魚を捕るにはね、竿も釣針もいらない。スリコギ棒1本で十分だ。驚いて飛び跳ねる岩魚を、コツンとやればいいんだ」山で拾った棒切れでなく、スリコギ棒でなければならない、というところがミソだ。無垢な生徒たちは先生の言葉を信じる。酒田駅に集まった生徒たちのリュックから、スリコギの頭が覗いているのを見て、してやったりと、いたずら先生は、ほくそ笑んだのである。当時の山岳部員が、懐かしそうに、このスリコギ譚を語ってくれた。

１９５３年、病が癒えて、酒田市立第2中学校の教職に復帰した。当時１０００名を超える学校だったが、池田さんが山岳部を創設すると、なんと１３８名もの生徒が入部してきたのである。部員は1日4回、鳥海山の雲をスケッチした。さらに定点観測を行ない、鳥海山の気象を記録した。その成果が評価され、１９５３年、山岳部の研究は読売科学賞を受賞した。

１９５４年に池田さんは日本山岳会に入会した。１９５９年にはヒマラヤを目指す仲間を集めて「山岳会・シリウス」を結成。日本山岳会のマナスル登頂や京大のチョゴリザ登頂が大きな刺激となり、ヒマラヤが夢物語ではなくなったころである。しかし、池田さんがヒマラヤに出かけるには、あと10年を待たなければならなかった。このころ、登山基地となる山小屋のなかった西鳥海に本格的な山小屋を建設しようと、池田さんは期成同盟会を立ち上げ、奔走した。運動が実って、１９６１年に酒田市営「万助小舎」が落成した。池田さんは行動の人だった。昨年はその「万助小舎」の50周年を祝った。

池田さんは、１９７１年、ネパールのランタン・ヒマールを踏査し、翌72年、酒田ヒマラヤ研究会を設立。その後ネパール、ムクチナート・ヒマール（１９７３）、ラダック（１９７５）、チベット・チャンタン高原（１９８６）と、ヒマラヤの各地に足跡を残した。また、１９８４年に「鳥海山の自然を守る会」の代表となり、大手開発企業による鳥海山スキー場計画の阻止運動に立ち上がり、スキー場計画撤回まで、足掛け14年間の長い闘争を戦い抜いた。池田さんは戦う人だった。

１９９２年、南・北アメリカ徒歩縦横断の快挙を成し遂げた長男・拓君の事故死という悲劇が池田さんを襲った。拓君が残した膨大な旅の記録は、拓君の姉・岩本ゆきさんの手でまとめられ、『南北アメリカ徒歩縦横断日記』（１９９６・無明舎）として出版された。拓君が鳥海山の自然を守るために書いた手紙がＴＶで全国放映され、拓君の彫像とともに彼の足跡を刻んだ記念碑が建てられた。池田さんは、玲子夫人、お嬢さんのゆき

さんとともに、拓君の旅の終点、南米最南端の町ウシュアイアを3度も訪れた。そこで、拓君が南米1万㎞を曳いて歩いた錆びたリヤカーを何度も撫でた。しかし、それらは池田さんの悲しみを甦らせこそすれ、慰めにはならなかった。巨大資本と戦った池田さんだったが、息子の死からは立ち直れなかった。愛する息子の死という、深い悲しみを癒すものは何もなかった。旅立たれた池田さんは、ビーグル海峡を見下ろす、ルピナスの咲くウシュアイアの丘の上で、先立った拓君を抱きしめたことだろう。

今、私たちの前に、池田さんが残した膨大かつ綿密な、２２３５回の登山記録がある。池田さんは、山から帰ると、どんなに疲れていても、野帳からＡ４の記録用紙に清書することを怠らなかった。記録は年ごとに整理され、段ボール箱に収められている。山頂の小石のコレクションとともに、登山記録は、南向きの大きな書斎で、繙（ひもと）かれる日までの静かな時を刻んでいる。最晩年に出版した『忘れがたい山』（２００９・無明舎）は、玲子夫人へのオマージュであるが、その表紙になった、鬼気迫るイケショーの写真は、玲子夫人の撮影であることを付記しておきたい。

私は、池田さんと一緒に登ったヒマラヤや鳥海山での日々を思い出すたびに、豊かな、幸せな気分になり、また山に帰りたくなる。合掌。

（粕谷　俊矩）

牧　潤一さん



まき　じゅんいち
（1928～2011）
会員番号 8880

山岳画家として知られる牧潤一さんは、病気療養中のところ肺炎を併発、平成23年10月3日に亡くなられた。享年83だった。

日本山岳会には昭和55（１９８０）年12月に入会。紹介者は西堀栄三郎、折井健一の両氏。昨年は入会30年を経たところであった。年次晩餐会には欠かさず出席されていたが、ここ2年ほど来られなくなり、心配していた矢先の訃音となった。

牧さんとの交友は、ふた昔になる。きっかけは日本山岳画協会展で作品「明けゆくマナスル」を見たときに始まる。キャプション・カードには（ネパール・バグルンパニの丘にて）とあっ

て、これに私は惹き込まれた。

バグルンパニはポカラ空港から3日行程、マルシャンディの峡谷に入っていく所で、バルブル（泡）の泉が近くにある山村。絵は右岸の高みに登って描いている。6号の油彩。

昭和40（１９６５）年5月23日、私は東ドルポのムクットのBCを撤収してポカラに向け、アンナプルナを一周する帰途のキャラバンについた。記録を調べると、22日目に牧さんがマナスルを描いたバグルンパニに着いている。牧さんはポカラからマルシャンディの谷に入り、西側、裏側からのマナスルを描いた。東面から描けなかったのは、例のサマ集落の住民が妨害運動を起こして集落に入れず、仕方なくマルシャンディ側に回って描いたのだ。

私のマルシャンディはモンスーン期に入り、毎日、雨中のキャラバンになった。それでもバグルンパニの近くでは雨がやみ、雲間にマナスルを見つけて皆で欣喜雀躍した。そんな昔の旅を思い出しながら「明けゆくマナスル」を見ていたら、トッピーを被った大男が「牧です」と名刺を出された。

山を描く人に私は「あなたは山が先か、絵が先か」を質問してみる。山との取り組み程度が分かるからだ。しかし、牧さんには質問する機会を失した。悔やんでいる。履歴から推考すると、どうやら、山より先に絵がありき、となろうか。

牧さんは昭和3（１９２８）年、宮崎市に生まれ、幼少のころより岳父から油絵の手ほどきを受けた（履歴書より）。4、5歳から「ゑのぐ」を触っていたか。

牧さんは昭和18（１９４３）年、15歳で太平洋美術展に入選。日展入選は昭和22（１９４７）年。早熟であったか。入選作品「裸婦」は味わい深い。山の絵よりも佳いと見た。一水会入選（１９５０年）も文化学院（美術科）卒業以前の学生時代のことであった。

では、何がきっかけで山好きになったのだろう。穂高に魅了されたか。昭和27（１９５２）年から29年まで毎夏、北穂高小屋で過ごし、小山義治氏から直々に岩登りを伝授され、山好きが加速していった。

牧さんの就職は遅く、文化学院を出てから4年目に、初めて米国大使館に就職した。居心地が良かったか、昭和56（１９８１）年に退職するまで、広報、文化交流局にずっと勤務した。サラリーは円換算すると十分使いでがあった。加えて長期間のバカンス休暇がとれて山行計画が立てられた、と聞かされた。しかし晩年はドル安で、３６０円から80円にまで下落、年金が減って、苦情を漏らすようになった。

１９６０年代の日本は、まだ発展途上にあったから、一般市民の海外旅行はできない時代であった。その時代に牧さんはドルを使えて、1年おきとはいえ3ヶ月のバカンス休暇をもらえて、職業柄、長期間のパスポートを取得できたのだから、海外

に出ていって好きなスケッチを楽しむことができた。これは、この時代の山仲間や北穂会の連中に大変羨ましがられた。北穂のグループには当時、ナイロンザイル事件に関わる石岡繁雄さんや、井上靖の小説『氷壁』のモデルとなった石原国利さんがおられた。

今日では、K2を描きにコンコルディアに入るにも、エヴェレストを描きにゴーキョ・ピークに登るにも、旅行会社のパックで簡単に行ける。しかし、山の絵描きはパック・ツアーを好まない。佳いスケッチを描くには日程に十分な余裕が必要で、1泊するところ牧さんは必ず連泊する。それも一人旅が牧流であった。

世界百名山を描くという牧さんの大望を聞いて、私はアルマンの百山も参考になろうかと進言したが、そのとき、すでに牧さんの世界百名山計画は大分進捗していた。取材はアルプス、ヒマラヤ、カラコルム、チベット、南・北アメリカはマッキンリーからパタゴニアまで及んだ。アルプス、ヒマラヤには2度、3度と脚を運び、狙いを定めた山のスケッチを描き貯めていた。その締め括りに昭和47（1972）年、79日間の世界一周をやった。牧さんは締め括りではない、仮締めだと言っていた。その時点でキリマンジャロとカイラスが描けてなかったので、仮締めを強調するのだった。

登山家は8000m14座の踏破を念願とするが、牧さんもいち早く14峰を描くべく、1970年ごろから取り組んでおられた。現場のスケッチは大きく油彩画に仕上げられ、1990年に長野県立科町の白樺高原美術館に収蔵された。同時に、その8000mのジャイアンツ作品を中心にパノラマ絵を加えて、『牧潤一・山岳画集』が初めて刊行された。

山のスケッチャーは、よくブックを見開きにして山を写す。それでも収まらないと何枚でも続けて描いて、パノラマ絵を作る。牧さんは、初めてグランド・キャニオンのパノラマ絵を作った。そして、その延長で「世界三大山岳風景360度パノラマ」に挑戦された。これが牧さんの残された画業の中で、最大の傑作となった。①は北穂高岳から明けゆく日本の中部の山々をぐるりと描いた大パノラマ。②はアルプスのゴルナーグラートからの大観。これもヴァリスの黎明。③はネパール・ヒマラヤのゴーキョ・ピークからのもので、これだけは真昼間のスケッチになった。しかし、よほどの上天気に恵まれたのだろう、視界が利いて、意中のピークは全部書き込めた。高度の苦しみも忘れ、夢中で描いたと聞かされた。

油彩仕上げになった3組の大パノラマは、まさしく「The Great Mountain Landscapes in The World」に相応しいでき上がりで、牧さんの最大傑作になった。できれば大町市の山岳博物館か、どこか信州の美術館に収めたかったが、まとまらなかっ

た。1組で8mから10m、3組も常設すると30mの壁面を占領する。そんな余裕は既設のミュージアムにはない。といって、掛け替えをやられては絵が傷む。常設展示の条件は外せない。そのうち、マッターホルンの所だけ欲しい、ギャチュン・カンの描かれている所だけ欲しい、となると散逸してしまう。

危うく寸断されるところまで来たとき、私は北安曇郡白馬村のホテル・五龍館のギャラリーを思い出した。先代からの山岳美術館構想を引き継ぐ三代目社長に話したらOKが出て、とりあえず玄関ホール、サロンなどに収容できた。牧さんにもホテルのギャラリーを見てもらった。三大パノラマ絵が、収まりどころを得た。

この話を日本山岳画協会の武井清会長さんにお話したら大変喜ばれ、それは良かった、私も協力しようと、60号の大作「槍ヶ岳」(常念岳より)を寄贈され、会員にも新しい山岳美術館構想に協力を呼びかけようとおっしゃられた。牧さんは昭和57(1982)年、足立真一郎氏、江村真一両氏の推薦で日本山岳画協会に入会された。出そうと思えば出せた『牧潤一・世界百名山画集』を残念に思いながら筆を擱く。合掌。　**(杉田　博)**

片岡　博さん



かたおか　ひろし
(1914〜2011)
会員番号 7497

「片岡さん……」　そっと口にすると、懐かしさが込み上げてくる。数えてみれば50年余りの長期にわたり、公私ともにお付き合いいただいた、私にとってはお父様のような存在だった。

非常に広範囲で活躍された方で、私が触れていたのはほんの一面に過ぎない。追悼の文を書くにも、より適任の方がまだまだおいでのはずだが、ご依頼ゆえ知っている範囲で思い出を書かせていただこう。

初めてお目にかかったのは、国鉄主催の記者招待だった。完全に男社会の鉄道マンと旅行記者たちの間で、唯一オンナの駆

け出し記者は、恐る恐るついて歩いたものだ。

新潟鉄道管理局管内の、春先は雪深い十和田路線のバスの運行開始、夏は蓼科高原のキャンプ場オープンと国鉄関連の施設を視察して回る。新潟鉄道管理局のトップであられた片岡さんはピカピカの壮年期、とにかく偉いのだ。御巡幸さながらに、鉄道関係や町村の役員たちが付き従い、歓迎のバトンガールまで現われる。先頭の露払いは引き込み線や踏切を渡る際、ヤッとばかりに「指さし確認」をやる。格好つけて……。

「国鉄で何やってらしたの？」と問うと、「尾久の機関区でＳＬのカマ炊きやってたこともあるよ。弁当を載せておくと、温まるんだ」と。

そこからトップまで叩き上げたとは考えにくい。幹部候補生のための体験実習でもあったのだろうか。でも、青い作業服姿で帽子のあご紐を掛けた凛々しい姿も、ワルくなかったろうな、と思う。

夜は懇親の宴だ。雪国の人たちは酒豪が多い。底抜けに盛り上がるなかで、上座についている管理局長は少しも崩れずニコニコと、まるで暴れ盛りの学生たちを前にした大学教授の雰囲気だった。なんのゲームだったのだろう。差しで勝負し、私が勝った。罰ゲームは相手の顔に墨を塗ること。観念した艶の良いあのお顔が間近にある。おかしくて手が震える。思い切って鼻の下にチャップリンのようなチョビ髭を描いた。思いのほかよく似合った。

この一件は結構根に持っていたらしく、後年、日本山岳会でご一緒するようになってからも、ことあるごとに「あなたは僕の顔中に真っ黒に墨を塗った」と、からかい半分で恨んでおられた。

それから著者と編集者の関係で、付かず離れずに30年近い年月が流れた。その間に片岡さんは日本山岳会に入会（１９７３年１月31日付）される。紹介者は渡辺公平さんと成瀬岩雄さん。会員番号は７４９７。山岳会での役職は１９７８～79年監事、１９８１～84年評議員を務められた。

新潟鉄道管理局時代には、仕事の合間に越後の山を総なめにしておられたとか。入会後は三水会に所属。高田真哉、木村俊介、斎藤健二などの方々と巻機山を登ったり、金峰山を登って、翌日は木暮理太郎碑の前で開かれる山梨支部主催の「碑前懇親会」で盛り上がったり、愉快に過ごされていたようだ。

また「温泉おじさん」として知られる故・美坂哲男さん（日本山岳会会員）を戴く美山会の山旅には、創立からほとんど欠かさず参加されていた。この会は１９８６年６月、美坂さんが三水会で温泉談義をされたのがきっかけで誕生した同好会で、後年の片岡さんの山と温泉は、美山会とともにあったといえる。その足跡は、北は北海道から南のトカラ列島まで全国規模で広がっている。

海外ならカナディアン・ロッキーやニュージーランドのトレッキング、そして中国・四川省の四姑娘山麓など。運良く出会えたブルー・ポピー、しかも新雪を被った美しい写真を見せていただいたっけ。お酒には目がなく、日本酒、ワイン、いずれも通の域。山行ではいつも愛用の銀のスキットルで、楽しそうにチビチビやっておられたそうな。飲んでおられるときの笑顔は、天下一品だった。「JACきっての本物の紳士であり、話せる人だった」と、美山会事務局長の大野盛彦さんはその面影を偲んでおられる。

会社を定年退職した私が、エーデルワイス・クラブのお尻にくっついて巻機山麓・清水の民宿で遊んでいたら、片岡さんをはじめ高田さん、坂倉さんなど三水会の方々がおられ、「良かったらお入り」と引っ張り込んで下さった（エーデルワイスは60歳以上は入れないそうで、宙ぶらりんだったのだ）。で、改めて楽しいお付き合いが始まった。

片岡さんは植物、特に山菜に造詣が深い。上下2冊の山菜の本も出しておられる（猪熊弦一郎画伯の手になる装幀も見事だった）。真っ赤なユキツバキや白いタムシバの花、若緑の葉に黄色の花を盛り上げたイタヤカエデ……。早春の越後の山は美しい。愛用の小さな鎌を手に、山菜採りの先頭に立たれる。花好きでは人後に落ちない私だが、花や実が付いていないと分からないというのが弱みだ。おまけに生まれが東京で、育ちが信州なので、深い残雪の解けるそばから顔を出す幼い芽の状態が分からない。山菜として採取されるそれは、信州で見たものとはまるで違う豊潤な姿をしていた。トリアシショウマなど、花の咲いているときからは想像もできない。赤くて鉤のように曲がって、鳩の脚のようだ。あの命名は芽立ちのときの形からだったのだ。いろいろと教えていただき、食べ方も学んだ。

三水会の山行でご一緒しても、もっぱら植物談義。奥多摩や奥武蔵の山の林床を埋め尽くしている、あの小さな葉の蔓はテイカカズラだと聞いたが、本当に全部そうなのか。余りに量が多過ぎ、その割には花が咲いていないじゃないか（本当はあらかたテイカカズラなのだが）。で、目を凝らして歩き、ツルマサキに行き当たったり、花穂を塩漬けにして食べるウワミズザクラ（アンニンゴ）とシウリザクラの違いについて論じたり、小さなエンゴサクの名前が同定できなくて悔しがったり（ミチノクエンゴサクだった）……、花で遊んでいるときりがない。

晩年、耳が遠くなられた。「僕、シーメンス」「あたし、リオネット」と補聴器の情報交換。補聴器を着けて大勢の中にいると、ワヤワヤと音が重なって何も分からなくなる。顔を見合わせて、ただニコニコと「孤独だねぇ」

特に大病をされたとも聞かないが、脚が弱くなられた。「気を付けてゆっくり歩けばまだ大丈夫、と思っていたのだが……。90歳を過ぎるとガクッとくるぞ。本当にいきなりだよ。覚悟し

とけ」とのご託宣。終いには、北鎌倉の浄智寺から葛原ヶ岡への上りも、休み休みの痛々しい状態だった。それでも山頂でのお昼には、お手製の蕗味噌の瓶が回ってくる。その内に、記念パーティなどにも全く出て来られなくなった。迷惑かけるからと……。

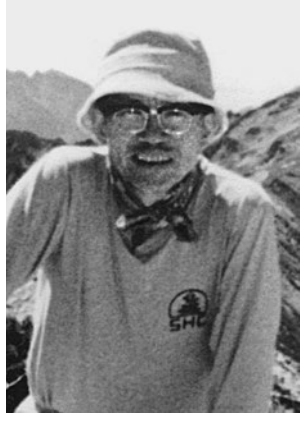
平成23年11月5日、97歳で逝ってしまわれた。もうひと息でサミットを制覇されるところだったのに……惜しい。そして、とてもとても寂しい。

今ごろは取り戻した健脚で、天国の野山を闊歩しておられることだろう。いずれまたお供して、楽しい植物談義をしたいものである。

本稿の執筆にあたって、山での足跡など、先輩方のアドバイスをたくさんいただきました。末尾ながら御礼申し上げます。

（石井　由紀）

鴨下　重彦さん



かもした　しげひこ
（1934〜2011）
会員番号 11767

２０１１年８月末、深田クラブという山の会の例会に、札幌から高澤光雄氏を招いてミニ講演をしてもらった。遠路お越しのゲストのために、翌日は長野にある会員所有の山荘で、当クラブ会長である鴨下重彦氏を含む数名で、飲みかつ食べながら大いに歓談をした。鴨下氏もゲストと同じ道内出身ということで、前からたいそう楽しみにしていて、それだけに話も弾んでいた。翌日は、少しお疲れになったか、近くの山に向かったゲストたちと別れて帰京した。「ありがとう、楽しかったよ」の言葉を残して……。

思えば、これが鴨下氏の温顔に接した最後の機会となってしまった。3ヶ月後の11月3日に南原繁研究会の催しで、「内村、南原、矢内原――その思想の現代的意義」と題した1時間の講演を無事終了した、ちょうど1週間後の11月10日、かねて闘病中だった前立腺ガンにより急逝された。享年77だった。

鴨下重彦氏は戦前、室蘭に生まれ、中学時代までは、北大山岳部OBである父上のお供をして道南の山と自然に親しみ、その記憶がのちの「山漬け」とも言える人生に影響を及ぼしたようだ。その後、高校、大学から医師となるまで専門の学問が多忙で、山からは遠ざかっていたが、40代にお子様の心身の鍛錬などのために家族登山を始め、50代で東大教授に就任してからは、自らのストレス解消などのために急激に山登りに回帰する。

登り始めて最初にこだわったのが、全国各県の最高峰だった。またその後、医学部の同級生が夫婦で百名山に登ったことを聞き、これを目標にするようになり、そのさなか深田クラブにも入会する（1991年）。

深田クラブという会は、深田久弥の人と作品を通して山を愛する者の集まりだが、山行自体は百名山を含め、会員各自が勝手に企画し実行している。そうしたなかでも、氏の登山はかなり徹底して単独行であったようだ。ただし、そのことは氏も「時間との競争で、結果として誰かと一緒に登ってもらえるような計画登山はできなかった」と書いているが、案外ほかと迎合するより、単独で自由自在に行動することに積極的な愉しみを見出していたのではないかと、私は密かに推測している。

私が初めてお会いしたのは、氏が当クラブに入会後初めて忘年会に出席したときで、この場面は今でも鮮やかに思い出せる。なんとなく地味なオジサンがぽつねんとしていたので私が、今度の山の計画はどこですか、と話しかけた。すると、「正月に塩見岳を予定している」とのこと。ちょっと心配になり、「何かのパーティで行くのですか?」と問うと、その人は「独りで登る」とのこと。独りでラッセルは大丈夫ですか、としつこく聞くと、「正月なら結構入っているはずだから、大丈夫でしょう」と淡々と答えた。そこには気負いは一切なく、さらに当時の氏は東大医学部の教授だったはずだが、そういう一般的権威も全く感じさせない雰囲気で、静かな自信だけが感じられた。

その後、1994年に奥穂高岳で日本百名山と各県最高峰を同時完登する。さらに興味は日本三百名山に広がり、これを選定した日本山岳会にも入会する（1994年6月。会員番号1767）。

深田クラブ会員としては、会の命脈である会報にユニークな投稿を次々と寄稿していただいた。第1号の「山と酒」は、登山における飲酒の功罪を医師としての観点で書いた。次には「四十七都道府県の最高峰に登る」と題して、溢蓄と苦労話を披露。特に医学界の重鎮という超多忙な仕事の隙間で、日本中を

駆け巡るやりくりの記述は、下手な推理小説より手に汗握らされるものがある。「三星岳と三星山」の三部作は、三百名山のうち毛勝やカムエクなど登頂の困難な16座への想いとその登頂記録。以下、「日本双耳峰10名山」「深田久弥と稲坂謙三」「日本百名山人名録」「喫煙と登山」などなど。

もちろん「書くこと」以上に「歩くこと」は旺盛で、２０００年1月1日には、日本山岳会の三百名山踏破を七面山をもって達成した。その後の目標は「3県境の山」であったり、日本百名山2回りであったり、悠々自適の感があるが、その実態は極めて過激であった。

あるときは、南ア・アサヨ峰から北沢峠に下山したところ、悪天でバスが運休となるも、翌朝は国際医療センター総長としての仕事があり、夜を徹して芦安まで歩き、一睡もせずタクシーと一番の特急で職場に駆けつけたりもした。このように、氏の社会的な地位からくる多忙さに比べ、目指す山行の水準は多様でかつ高く、結果的に氏の登山は、極めてタイトな時間的制約の中でぎりぎりの調整をしながらハードな山に登る、という特質を持つようになる。日高の難峰「１８３９峰」の単独登頂なども、時間に余裕があったとしても困難な優れた記録である。

しかし、かくも頑健で医学の専門家であった氏も、自らの病魔は律することができなかったのだろうか。２００９年2月に前立腺ガンの診断を受け、以来、抗ガン剤を服用しながらの苦しい登山となる。

単独行主体の氏と、私は一度だけご一緒する機会に恵まれた。奥様も含めた4人で、折立から黒部に入り、雲ノ平から水晶岳に登って新穂高温泉に降りたのだが、途中、豪雨にも遭ってきつい山行だった。帰途、岩苔乗越から直接、三俣山荘に向かおうとしたメンバーたちに対し、自分は百名山2回りのために鷲羽岳を回って三俣山荘に降りる、と言い出した。結局は天候が良くなかったことや、氏の体調を心配する奥様の説得などで断念したのだが、私はそのとき、実社会での権威を脇に置いて奥様と駄々っ子のようなやり取りをしている氏の意外な面に親しみを感じると同時に、目標に対する執念のすごさを垣間見た思いがした。

２０１０年4月には深田クラブ会長に就任。すでに体調万全でなかったのは承知していたが、皆でサポートするから、と説得して、半ば無理やりの就任だった。ただ私としては、氏が会長として会の催しに無理して参加する姿を見て、内心忸怩たる思いも抱いた。

２０１０年10月に乗鞍岳で、奥様の百名山踏破と自らの百名山2度目の踏破を同時に達成した。はじめ氏の百名山登山を揶揄していた奥様と同時のメモリアル登山となって、さぞ感慨深かったことと思われる。

山の世界では、往々にしていわゆるピーク・ハンターは顰蹙

を買うことがある。しかし、氏の登山はそんな言葉をはるかに突き抜けてしまっていることを感じる。もし優れた登山家の資質を、優れた企画力・判断力・身体力と、何にも増して強固な意志力とするなら、鴨下重彦氏は間違いなく、そう呼ばれるに相応しい人だったといえるだろう。

登山の実績のみならず、そのお人柄が会員皆から慕われた会長を失って、会の損失は計り知れないものがある。

死の翌月、敬虔なクリスチャンでもあった氏を偲んで、国際基督教大学内の教会で「お別れの会」が行なわれた。この会の参列者は約1000人。教会の大きな礼拝堂に入りきれず、別室までお別れを悲しむ人で溢れていた。

〈略歴〉

1934年9月：北海道室蘭市で生まれる
1959年3月：東京大学医学部卒業、大学院へ進む
1964～68年：博士号取得ののち、米国留学
1974～85年：自治医科大学教授
1985～94年：東京大学医学部教授。うち2年間医学部長
1994～00年：国立国際医療センター病院長・総長
2000～06年：賛育会病院院長
2002～11年：東京都公安委員・委員長
2008～11年：小児医学研究振興財団理事長

（小林　晃＝深田クラブ理事）

会務報告

2011年（平成23年）4月～2012年（平成24年）3月
（◎総会　□理事会　◇人事　☆事業）

◇2011年度役員・評議員・支部長

会　　長　尾上　昇
副 会 長　吉永英明　西村政晃
常務理事　高原三平　森　武昭　小林義亮
理　　事　野澤誠司、中山茂樹、永田弘太郎、萩原浩司、節田重節、志賀尚子、古野　淳、川瀬恵一
監　　事　平井拓雄、浜崎一成
（6月18日の23年度第1回総会以降の人事）

委員会の担当理事
【財務】西村、小林
【総務、インターネット】西村、高原、永田
【山岳編集、会報編集、英文ジャーナル】節田、萩原
【図書、図書管理】節田、中山
【学生部指導、青年部、指導】古野、野澤、中山
【医療・科学・自然保護】森、志賀
【資料映像、海外】吉永、川瀬
【山岳研究、集会】森、中山
評 議 員　＊宮崎紘一、＊橋本　清、堂本暁子、羽田栄治、箕岡三穂、塩澤　厚、渡邉玉枝、成川隆顕、神崎忠男、小川武、贄田統亜、中世古直子、今村千秋、内田　博、重廣恒夫、大谷　亮、南井英弘　　＊印は常任評議員
支 部 長　（北海道）滝本幸夫・（青森）大久保勉・（岩手）内山達雄・（秋田）佐々木民秀・（山形）渡辺　誠・（宮城）高橋二義・（福島）大谷　司・（栃木）山野井武夫・（茨城）星埜由尚・（東京多摩）竹中　彰・（埼玉）石橋正美・（千葉）篠崎仁・（越後）山崎幸和・（信濃）飯村富彦・（山梨）遠藤靖彦・（静岡）久保田保雄・（東海）小川　務・（岐阜）早田道治、（京都）田中昌二郎・（富山）山田信明・（石川）中川博人・（福井）宮本数男・（関西）重廣恒夫・（山陰）白根　一・（広島）杉村　功・（福岡）副島勝人・（北九州）伊藤久次郎・（東九州）加藤英彦・（熊本）工藤文昭・（宮崎）末永軍朗

□平成23年度第1回（4月度）理事会　4月13日　会議室

出席者　尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野澤・中山・永田各理事、

会務報告

深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員
委　任　谷川・萩原各理事

審議に先立ち尾上会長から、「東日本大震災・罹災地における各支部の報告では人的被害はなかったものの、罹災された会員の方々へ衷心からのお見舞いを申し上げる」とのことばがあった。また義援金を寄せられた多くの会員に謝意を述べられた。つづいて6月の総会に向け、本日も慎重な審議を切望するとの挨拶があった。

【審議事項】

1. 新法人への定款改正（案）（藤本）

新法人移行検討プロジェクト・チームの吉永英明リーダーから定款改定（案）の包括的な説明があり、定款ならびに定款施行細則について改定案、現行規定の改定・変更箇所に関して逐条説明とそれに対する質疑、検討が行なわれた。改定案について若干の意見等があり、5月度理事会で成案を得ることが確認された。（継続審議）

2. 特定資産である基金・積立金の整理等（岡部）

（1）「基金および積立金等に関する細則」の設定と適用

当会の特定資産である預金に関する「基金および積立金等に関する規程」は昨年5月に制定したが、その積み立ておよび取り崩し等の運用細則としてあらためて「基金および積立金等に関する細則」を制定するもの。細則の制定について、一部文言の追加を条件に承認されたが、各基金の積み立てと取り崩しを、細則どおり平成22年度決算に適用するか等も含めて、5月理事会で再審議することとなった。（継続審議）

（2）「特定資産（各種基金、準備金等）の預金の振替」について

「基金および積立金等に関する細則」を定めることに伴い、各基金の整理を行なうこととし、秩父宮記念基金のうち、平成18年以降に一般預金から振り替えられた金額を、長期計画準備金と一般預金への振替を行なうことにした。金額については精査の上、5月理事会で再審議することとなった。（継続審議）

（3）「終身会費積立金」の整理について

平成22年度決算において、公益法人会計基準（平成16年度）に従った処理に正すため同積立金預金は取り崩し、一般会計に繰り入れることとする。また、当年度以降においては、収受した終身会費の金額は、負債（預かり金）として計上して、その後10年間に取り崩し、その金額を終身会費収入に計上する、本来の会計処理を行なうことにした。（承認）

（4）「永年会員への寄付依頼」について

永年会員の増加しつつある現状に鑑み、今年度より、永年会員に会費助成のための任意の寄付をお願いする。（承認）

3. 「ふるさととやまの人物ものがたり」への写真掲載許可願い（宮崎）

昨年11月度の理事会にて承認済みだが、富山県教育委員会から前述刊行物を有償販売（実費相当額）するに当たり、改めて許可願いがあった。（承認）

4. 新法人移行プロジェクト・チームの設置（宮崎）
先の総会において公益法人移行が決定したことで、従来の「新法人移行検討ＰＴ」を解散、新たに「新法人移行ＰＴ」を設置する。チームリーダー＝吉永英明（７０４５）、メンバー＝高原三平（７９４９）、佐野忠則（１２８８７）、吉川正幸（７３４５）、直江俊弐（１４７７５）。（承認）

5. 『山岳』の記事転載願い（成川）
高澤光雄会員（５３０８　北海道支部）から本人執筆の『山岳』第97号収載の「北海道から最初に入会した河合篤叙と蝦夷富士登山会」を自著『北海道の登山史探究』（仮題）に転載したいとの願いがあった。（承認）

6. 写真・図表の転載許可願い（宮崎）
大町市教育委員会から平成23年度企画展（信州大学山岳科学総合研究所と大町山岳博物館の連携企画）の解説書（有償分譲@３００円）に『山岳』第４年第２号（１９０９年）２１３ｼﾞﾍﾞｰ掲載の「上條嘉門次と猟小屋」写真について転載したいとの願いがあった。（承認）

7. 山梨支部「総会報告」（宮崎）
４月９日開催の総会報告があり、支部長の交代が承認された。
新支部長　遠藤靖彦（６６５３）、退任　古屋学而（５４９９）
（承認）

【報告事項】

1. 平成22年度第２回通常総会の委任状（宮崎）
前回の総会案内発信総数への回答状況は「委任」41％、出席３％、無回答56％。無回答の傾向は概ね全国共通の状況にあるが、６月総会に必要な４分の３以上の回答（委任状）を集めるために、無回答者を圧縮していくことが必須である。総務委員会で種々検討しているが、協力をお願いしたい。また、各委員会、同好会、支部などを通じて回答を寄せるよう、働きかけた。

2. 秋田支部「総会報告」（宮崎）
４月２日開催したとの報告があった。

3. 富山支部「総会報告」（宮崎）
４月８日開催したとの報告があった。

4. 九州５支部集会の講師派遣依頼（宮崎）
熊本支部から九州５支部集会が６月４、５日阿蘇市で開催するが、本部役員挨拶と講演講師派遣依頼が４月８日付であった。

5. 役員名簿、連絡担当者、移行調査に関する調査（宮崎）
文部科学省競技スポーツ課から例年通り報告・連絡依頼があった。

6. 法人実地検査の実施（宮崎）
文部科学省競技スポーツ課から平成22年度実施予定の法人実地検査を近々実施する旨の連絡とアンケート回答依頼が３月28日付であった。

7. 震災支援「子どもの学び支援ポータルサイト」開設（宮崎）
文部科学省競技スポーツ課から、被災地域の児童・生徒等が必要とする支援をより受けやすくなるように「東北地方太平洋沖地震・子どもの学び支援ポータルサイト」を開設したので積極的な被災地域への支援と、当サイトの利用・活用の依頼が4月1日付であった。

8. 「友の会」入会案内（宮崎）
信州大学から「信州大学山岳科学総合研究所友の会」を設立した。入会案内があった。

9. 一般財団法人への認可決定報告（宮崎）
財団法人自然公園財団から3月29日付で一般財団法人への移行が認可された旨の連絡が3月29日付であった。

10. 山の日制定推進パンフレット第3弾の発行（成川）
第3弾「安全編」を作成中、4月中に印刷を完了する見込みである。

11. 震災義援金状況（成川）
3月22日～4月13日現在、205名の方々から319万円の義援金が寄せられている。この運動は6月10日まで継続実施する。

12. 会報『山』4月号編集報告（神長）

□平成23年度第2回（5月度）理事会　5月11日　会議室

出席者　尾上会長、神﨑・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野澤・中山・谷川・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

開会にあたり尾上会長から、昨年度の厳しい決算結果にかんがみ、本年度以降の財務運営について抜本的対策を考えたい、との発言があった。また東日本大震災の義援金募金について、会員の皆様から多くのご厚志が寄せられていることに謝意を述べられた。

【審議事項】

1. 新法人への定款変更案（継続審議）（宮崎）
4月度の理事会で、改定案について再検討し成案を得ていくことになっていたが、それらについてプロジェクト・チームでの再検討結果が説明され、了承された。（承認）

2. 平成22年度事業報告（宮崎）
平成22年度事業報告（案）および会員動向についての説明があり、一部修正・追加された。（承認）

3. 特定資産である基金・積立金の整理（岡部）
（1）「基金および積立金等に関する細則」に関して、4月度の理事会案の一部訂正した内容の説明がされた。
（2）「特定資産の積立金の振替」に関して、特定資産である積立金に対し、細則・決算のとおり整理する基本的な考え方につ

いて説明が行なわれた。（承認）

4. 平成22年度収支決算書（案）（岡部）
平成22年度収支決算（案）について、厳しい決算になったとの説明があった。（承認）

5. 平成23年度会費滞納除籍対象者（宮崎）
4月現在の2年間会費未納者のリストが示され、今年度中に会費の納入がない場合は除籍とする旨の報告があった。（承認）

6. 平成23・24年度理事、監事、評議員候補について（会長）
理事、監事、評議員候補者についての常務理事会で整理した案が提示された。なお、会長および副会長については、会長経験者・前副会長の意見を聞いた上、理事候補者から評議員会が推薦し、監事については評議員会が推薦する。（承認）

7. 支部長交代、支部規約変更（宮崎）
（1）富山支部：支部規約変更（支部会費）
（2）山梨支部：支部規約変更（支部会費）なお支部長交代（新支部長・遠藤靖彦　No.6653、前支部長・古屋学而）は4月度理事会で承認済み。
（3）広島支部：支部規約変更（支部会費）
（4）山形支部：支部長交代（新支部長・渡辺　誠　No.1219、前支部長・佐藤淳志）
（5）東九州支部：支部長交代（新支部長・加藤英彦　No.876、前支部長・梅木秀徳）
（6）京都支部：支部長交代（新支部長・田中昌二郎　No.128、前支部長・塚本珪一）
（7）北九州支部：支部長交代（新支部長・伊藤久次郎　No.13、前支部長・大庭常生）（承認）

8. 「安全のための知識と技術」後援と協力依頼（宮崎）
社団法人日本山岳ガイド協会から、6～11月にかけて全国8都市で開催する公開講座「安全のための知識と技術」（聴講無料）への後援協力依頼があった。（承認）

9. ロゴマーク使用許可願い（宮崎）
福島支部から、新たに発行する支部報へのロゴマーク使用願いが5月10日付であった。（承認）

10. 三国学生交流登山招請（宮崎）
韓国山岳会から、4月28日付で三国（日中韓）学生交流登山に関する招請があった。（承認）

【報告事項】

1. 支部総会報告
支部長交代・規約変更の報告のあった支部の他、宮崎支部、関西支部、岐阜支部それぞれ総会報告があった。

2. ピオレドールの審査報告（萩原）
ジュリーとして審査にあたった萩原理事より審査経過の報告があった。当会が海外登山基金助成をした「ローガン南壁隊」（横山勝丘・岡田康隊員、昨年年次晩餐会で登山隊報告を横山氏が

実施）が、ジュリー6人の満場一致で受賞した。

3. 第6回通常総会開催案内（宮崎）

NPO法人富士山測候所を活用する会から、5月15日開催の通常総会案内が4月22日付であった。

4. 安全登山普及指導者中央研修会の開催案内（宮崎）

独立行政法人日本スポーツ振興センターから、同センター主催で7月1～3日の間、国立登山研修所、周辺山域および雑穀谷岩場で実施する旨の開催案内があった。

5. 震災義援金募金中間報告（成川）

東日本大震災の義援金募金は募金開始から約2月が経過した（募金活動は6月10日まで実施する）が、この間270の会員とグループから約435万円の募金が寄せられた。当募金の使途については今後各方面の考え等を勘案して決めていきたい。

6. 登山者のための天気予報実施報告（野沢）

予定どおりゴールデン・ウィークに実施した。利用者は増加しており現在2215名となっている。担当の猪熊気象予報士より、山研に観測機器を設置できれば予報の精度が向上するとの提案があり検討したい。

7. 会報『山』5月号編集報告（神長）

□平成23年度第3回（6月度）理事会　6月8日　会議室

出席者　尾上会長、神﨑・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野澤・中山・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

委　任　谷川理事

開会にあたり尾上会長から、18日の総会で全員が任期満了、2年間の協力・支援に対して謝意が述べられた。また、メンバーと真摯な討議・審議をなしえたこと、立ち上げた各プロジェクトのチームリーダーおよびチームのメンバーの熱心な取り組みに対し感謝の挨拶があった。東日本大震災の義援金募金については、会員の皆様から多くのご厚志が寄せられ感謝しているとの発言があった。

引き続いて、各プロジェクト・チームから現況報告・説明が行なわれた。支部活性化プロジェクトから、四国支部の発足見通しについて報告があった。

【審議事項】

1. 公益法人会計基準」に適応する会計処理の実施（岡部）

新法人認可申請に、「一般社団・財団法人法」「公益法人会計基準」に対応した会計処理が必要なため、経理規定の変更前であるが、本年度4月1日以降の会計処理を準用する。（承認）

2. 東日本大震災救援募金の取り扱い（成川）

6月7日現在296件（各会員およびグループから）466万円の救援募金があった。この取り扱いについてさまざまな意見が出されたが、次期執行部に申し送ることとなった。（継続審議）

3. 上高地山岳研究所従業員の雇用契約の文書化（太田、山川）
山研の諸規程との整合性を図ることに留意し文書化の方向で今後検討する。（継続審議）

【報告事項】

1. 夏期電力需給対策（宮崎）
文部科学省（大臣政務官）から5月16日付で節電協力要請があった。適切に対応をしていく。

2. ㈳東京都山岳連盟総会報告（藤本）
平成22年度の事業報告、決算報告、23年度役員人事について、出席した藤本副会長から報告があった。

3. ウェストン祭報告（会長）
6月5日、恒例のウェストン祭が開催された。今年の講演は田部井淳子会員であった。

4. 九州5支部集会報告（宮崎）
九州5支部から約65名が参加して開催された。会長代理として宮崎副会長が出席し、「JACが目指してきたもの」との演題で講演を行なった。

5. 第1回総会準備状況（宮崎）
6月18日開催の平成23年度第1回総会出欠・委任状について、6月8日現在の状況・報告があった。

6. 役員就任状（宮崎、神崎）
㈳日本山岳協会の平成23年度役員就任挨拶状が披露された。第5代会長としてJAC神﨑副会長が就任した。なお、常務理事として堀井昌子理事が留任した。

7. 平成23年度山小屋等関係者打ち合わせ（宮崎・太田）
中信森林管理署から4月28日付の案内があり、5月23日に中信森林管理署会議室（長野県松本市）で打ち合わせ会議が開催され、会長代理として太田理事が出席した。主な議題は山研敷地内の危険立木の撤去などであった。

8. 自然保護指導員新規募集案内（宮崎）
㈳日本山岳協会から案内があった。実地講習は7月3日あきる野市で開催される。

9. 山岳講習会案内（宮崎）
㈳東京都山岳連盟から案内があった。7月13日国立オリンピック記念青少年総合センターで開催される。

10. 『山岳』及び『山』6月号編集報告（成川）

◎平成23年度第1回通常総会

6月18日（土）午後2時～
東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」
出席者 190名、委任状出席3976名（会員数5109名）
議 案 1. 新法人移行にともなう定款・定款施行細則の変更
2. 平成22年度事業報告
3. 平成22年度収支決算、財産目録

4. 平成23年度除籍予定者

5. 平成23・24年度理事・監事・評議員の承認について

定款変更のポイントを吉永英明・新法人移行プロジェクト・チームリーダーが「これまでの経緯」、「今後のスケジュール」とともに説明した。この変更案をめぐり議論は沸騰し、質疑・意見表明を行なった会員は30人に及んだ。とくに、「理事の任期」、「自然保護の表現」、「審議されている定款案の可否」が焦点となった。午後5時半過ぎにやっと定款変更の議決がなされ、賛成４０１７（出席１４７、会長委任３６０９、その他委任２６１）、反対１３６（出席37、その他委任99）で可決された。また、他の議案も順次原案通り可決承認されたが、5時間を超える長丁場であった。総会終了後、懇親会を予定通り開いた（詳細は会報『山』7月号で）。

□平成23年度臨時理事会　6月22日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、節田・野澤・中山・志賀・古野・永田・萩原・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、宮崎・橋本各常任評議員

6月18日開催の平成23年度第1回通常総会において選出された役員及び評議員による最初の理事会。尾上会長から冒頭次のような挨拶があった。

「去る18日の総会で、長時間の討議を経て議案の承認をいただけたことに感謝します。厳しい情勢下ですが、平成24年4月1日付公益法人化を目指し、認定申請に向けた実務諸作業を強力に推進していきたい。2年間取り組んできた「公益法人への移行」に加え、「若年層を中心とした会員増の取り組み」、「支部の活性化」、「山の日制定」のためにそれぞれ4つのプロジェクトを立ち上げて、強力に推進してきました。公益法人化は会としての意思統一がなされましたが、他の3課題はいまだ道半ばです。これらについても向こう2年間、理事会出席者の皆さんならびに会員の皆さんのご協力のもと頑張っていく所存です。一丸となって持てる力を結集し、よりよい日本山岳会を創っていくために、ご協力ご支援をいただきたいと思います」

次に、出席者全員が自己紹介をした。

審議に先立ち、会長から会務運営にあたり基本方針・指針についての以下の説示があった。

・基本方針について

①益法人認定申請に向けて粛々と取り組み推進する。

②ＪＡＣ改革を推進する。

改革については過去10年間ほとんど手つかずの状況にある。膿（うみ）、綻びが生じて課題が山積している。財政の問題、委員会運営のマンネリ化・硬直化、事務局の運営体制と就業規則の整備・適正化等々、いずれの改革も内容のあるものにしていくことが求められている。改革の推進と並行して若年齢層会員の増獲による会員増強も推進していきたい。

・具体的対応について

従来の4プロジェクトに新たにふたつのプロジェクトを設置したい。ひとつは「ルーム検討PT」（第5番目のPT）、もうひとつは「震災復興支援PT」（第6番目のPT）で、これは現在の災害救援募金委員会を発展的に改編するものだが、これらふたつのPTを加えて、6つのPT体制で運営し、各チームリーダーのもと、参加する者全員が真摯に取り組んでほしい。

公益法人認定申請作業については、申請作業とともに諸規定の変更、整備に取り組んでいただきたい。震災復興支援PTについては、7月中には何とか方向性を見出していけたらと考える。さらに、重要なことだが、第7のPT、つまり、「組織運営と財務の適正化」をその対象に捉えたPTである。このPTは、理事全員がメンバーとして参画する形で強力に推進したい。

各委員会に対する担当理事については、本日の審議事項議案のとおり。また、各プロジェクトチームの担当理事とリーダーも別紙の議案のとおりである。メンバーについては広く会員から適任者を選定していただきたい。

【審議事項】

1. 副会長の序列（会長）

会長不在等の場合における会務の円滑な執行を図るため、副会長の序列を吉永、西村の順番とする。（承認）

2. 常務理事の選任（会長）

互選の結果、高原理事、森理事および小林理事を選任した。（承認）

3. 理事の委員会担当務（高原）

①委員会担当理事

委員会名	担当理事
財務委員会	西村、小林
総務委員会	西村、高原、永田
インターネット小委員会	（同右）
山岳編集委員会	節田、萩原
会報編集委員会	（同右）
英文ジャーナル委員会	（同右）
図書委員会	節田、中山
図書管理委員会	（同右）
学生部指導委員会	古野、野澤、中山
青年部委員会	（同右）
指導委員会	（同右）
医療委員会	森、志賀
科学委員会	（同右）
自然保護委員会	（同右）
資料映像委員会	吉永、川瀬
海外委員会	（同右）
山岳研究所運営委員会	森、中山
集会委員会	（同右）

②ＰＴ担当理事とリーダー

プロジェクト名	担当理事	リーダー
山の日制定ＰＴ	西村	成川
ＪＡＣユースＰＴ	森	野澤
支部活性化ＰＴ	高原	宮崎
新法人移行ＰＴ	吉永	佐野忠則
ルーム検討ＰＴ	森	山本良三
復興支援事業ＰＴ	高原	宮崎

（①、②ともに承認）

4. 事務委嘱（高原）

小林常務理事に日本山岳会本部所在の千代田区四番町5番4号の「サンビューハイツ四番町」の管理組合の理事を向こう1年間委嘱すること。（承認）

5. 理事会の付託事項（高原）

常務理事会（構成員＝会長、吉永・西村各副会長、および高原・森・小林各常務理事）に次の事項について専決承認し、理事会に報告をする。

①援依頼・名義使用依頼
②ＪＡＣロゴマーク使用許可　③図書の引用、貸出許可
④関係団体、支部等の開催行事への派遣役員の選任（承認）

6. 支部会費徴収（高原）

越後支部から支部会則第7条を改正し、支部年会費１０００円を徴収する（ただし記述は、内規にて定めることになった）。（承認）

7. 魏事録署名人（高原）

理事会議事録署名人を出席理事1名に依頼し、今回は永田理事に。（承認）

8. 理事会書記（高原）

総務委員、北原孝浩会員（№１４０６５）に依頼する（従前も同人担当）。（承認）

【報告事項】

1. ウェストン祭協力への礼状（高原）

信濃支部から6月9日付でウェストン祭への協力に対する礼状があった。

2. 九州5支部合同集会への講師派遣礼状（高原）

同集会幹事支部の熊本支部から6月11日付で講師派遣（宮崎副会長）に対する礼状があった。

3. 東日本大震災への募金報告（高原）

中華民國山岳協会から6月10日付で募金ＮＴ＄40万４０００集まり、日本交流協會台北事務所経由、日本赤十字會へ贈呈した旨の連絡があった。

4. 大台ヶ原・大峰の自然を守る会からの「尾瀬東電所有地国有化」要望依頼（高原）

同会（会長＝田村義彦№５５１０）から6月4日付で「尾瀬東

電所有地国有化」要望書を総理大臣および環境大臣あてに出した、との連絡があった（ＪＡＣも同様の要望書を出してはいかがかとのことであろう）。

5. 雁部貞夫会員「第13回島木赤彦文学賞」受賞報告（高原）
島木赤彦研究会（会長＝小口明氏）から6月11日付で雁部貞夫会員（№６１８８）が受賞した旨の連絡があった。

6. 転載許可願（高原）
大町山岳博物館から6月12日付で・山岳・第36年第2号掲載の図版「飛騨新道概念図」を同博物館発行・山と博物館・第56巻第6号に転載許可願があった。常務理事会で許可済み。

7. 委員長会議（高原）
7月29日（金）ルームで開催する。

8. 山岳4団体役員懇談会（高原）
日本勤労者山岳連盟から7月12日開催する旨の案内があった。

9. 「安全のための知識と技術」講座案内（高原）
日本山岳ガイド協会から6月17日付で講座開催の案内があった（開催は6月24日18時30分～20時30分、東京新宿区四谷区民ホールにて）。

10. 「携帯トイレ使ってみでけＤＡＹ」案内（高原）
岩手県環境生活部自然保護課から6月10日付で早池峰国定公園において携帯トイレ普及推進の案内があった。

議事終了後、理事会開催時刻を30分繰り下げる提案があり、7月度理事会から開催を午後7時からにすることを申し合わせた。

□平成23年度第4回（7月度）理事会　7月13日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・志賀・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、宮崎・橋本各常任評議員

議事に先立ち尾上会長から以下の通り発言があった。

「先の平成23年度第1回通常総会における定款の審議に関して、原案にこだわったことにつき一部の会員および理事の方からなぜか?とのご意見・ご批判をいただいているので、ここであらためてその意とするところを申し上げたい。

今回の定款案は主務省（公益認定等委員会）から示されたモデル定款に準拠して作成し、事前にチェック、指導を受け、いわば「お墨付き」のものであった。「て、に、を、は」等の修正すら難しい状況にあった。これは役所として全国の多数の法人を管理監督する上での基準としていることに起因しているからであろうかと考えている。つまりわれわれ日本山岳会もその埒外ではなく、モデル定款から逸脱することが一切できないことである。加えて、理事会、評議員会において全会一致で承認をいただいて総会議案として諮った経緯がある。また総会では動議が認められないことでもあった。役員の任期等についていろいろご意見を頂戴したが、それらは細則で規

定して柔軟に対応していきたいとの考えだ。今後の新法人認可申請等の手続きを考えた場合、平成24年4月1日付公益法人化はぎりぎりのタイムリミットである。どうかご理解をいただきたい」

続いて西村副会長（総務・財務担当副会長）から常務理事会において会長が会務執行するにあたり喫緊の課題としている戦略的課題に関して、すべての理事が参画する下で「組織運営の改善」と「財務の健全適正化」の2点について具体的に問題点を指摘し、その改善・対応策の提案等の説明があった。とくに23年度の事業計画および予算については先の総会で決定をみてはいるものの、その執行推進に際しては総務担当・高原常務理事および財務担当・小林常務理事との緊密な連携・協議のもと各理事とも問題点を共有して一丸となって見直しを図っていきたいとの決意表明があった。

また、吉永副会長（新法人移行ＰＴリーダー）から、公益法人認定申請を10月に行なう方針で諸作業の準備に着手した。諸規程(案)を各委員会に示すので8月末までに検討願いたい。規程の形式については法律に準拠した形式に合わせ、各規程の整合性を図るのでＰＴに任せてほしいが、その具体的内容については委員会で鋭意検討をしてほしい。最終的には規程集を作っていくことになる。定款、定款施行細則および支部に関する規程は総会で決定するが、その他の新法人に対応する規程および要領はすべて理事会決定事項になり、内規とか覚書は一切廃止することになるとの説明があった。

【審議事項】

1. 海外登山基金審査（萩原）

平成23年度海外登山基金審査委員会（前期募集分）は7月8日に開き、助成先を次の2隊に決定した。

①ＪＡＰＡＮ納木那尼峰 Expedition ２０１１

ナムナニ峰７６９４㍍（中国チベット自治区）、未踏の南東壁からの登頂。平出和也、谷口けい（2名）、30万円

②チームあべこべ Patagonia Expedition ２０１２

フィッツ・ロイ山群（パタゴニア）、フィッツ・ロイ南東壁正面新ルート開拓、既成ルートのフリー化。横山勝丘、馬目弘仁、岡田康（3名）、25万円（承認）

2. 定款、細則の見直し（総会での提案に対して）（高原）

先の総会で提案のあった①役員の任期（新定款第30条）②役員年齢（新細則第9条）③「山岳環境」の用語（新定款第4条第1項）④会員資格復活（新細則第5条）⑤終身会員（新細則第2条）⑥その他については、今後慎重に審議する。（継続審議）

3. 清里北沢美術館利用について（高原）

秋山泉会員（№１１８２３ 山梨県山岳連盟会長）から山梨県北杜市高根町にある「北沢美術館の建物（約１００坪、鉄筋コンクリート2階建て、借地）を日本山岳会で利用できないかとの照会、情報提供があった。調査、検討する。（継続審議）

4. 義援金利用提案（高原）

大谷司福島支部長から震災義援金利用方法について7月4日付で提案があった。提案内容は、福島県内の山地（高地）の放射線量の計測を支部員で行ないたい。測定機器（線量計）5台を購入貸与してもらいたい。（復興支援プロジェクトで検討）

5. 公益法人申請支援業務費の計上（高原、吉永）

当該監査法人については公益法人申請支援業務に加え、区分経理関係等の指導も含めた支援業務費である。見積金額は100万円（値引き20万円、消費税別途）である。委託先は太陽ASG有限責任監査法人（総括代表社員　吉川正幸＝公認会計士、当会会員№7345）である。7月19日付にて委託契約を締結する。（承認）

6. 会員名簿（高原）

現在の会員名簿は2008年9月に発刊したものであり、3年が経過しようとしている。発刊後の新入会員（2010年10月入会者まで）分を別冊子（補追版）にして会員に配布した。改訂版発刊には多大な経費が必要となる。広告掲載による発刊コスト圧縮の考え方もあるが、個人情報流失の問題が懸念される。また電子データ化してはどうか等の考え方もある。（継続審議）

7. NHKグローバルメディアサービスからの気象予報案内のHP掲載（高原）

当会が独自に実施している春山・冬山天気予報等との兼ね合いもありHPに常設として掲載せずに、こういった情報案内（会員サービス、有料）があることを何らかの手段で知らせる。（一部承認）

【報告事項】

1. 文科省競技スポーツ課に総会報告（宮崎、高原）

6月29日に総会報告を行なった。

2. 遠藤靖彦山梨支部長の意見（高原）

6月21日付で、総会付議事項についての手続きのあり方、支部長会議のあり方、重要案件に関する地方会員（支部員）の意見集約のあり方等々についての意見書が届いた。今後の会務運営、支部および支部会員について検討する際に参考になると考えられ原文のまま披露した。

3. 秋田支部平成22年度事業報告および平成23年度事業計画の冊子欠落（高原・永田）

先の支部長会議資料で標記資料に欠落があった。次回の事務局担当者会議で追補を行なう予定。秋田支部に謝罪した。

4. 大台ヶ原におけるニホンジカ捕獲実施通知（高原）

近畿地方環境事務所から6月21日付で、「わな」による捕獲を実施するが、わな周辺には注意標識を設置するので注意願いたいとの連絡があった。

5. 新制度移行に関する説明会案内（高原）

文科省競技スポーツ課からあずさ監査法人主催で7月28日に実施する掲記の説明会案内が送付された。当会から出席予定。

6. 「スポーツ基本法」成立案内（高原）
文科省競技スポーツ課から昭和36年制定のスポーツ振興法が50年ぶりに全部改正し、スポーツ基本法が成立、6月24日に公布されたとの連絡があった。

7. 節電協力依頼（高原）
文科省競技スポーツ課経由で経産省資源エネルギー庁からの節電協力依頼要請状が送付された。

8. 映画・ヒマラヤ　運命の山・の案内（高原）
標記があった。

9. 田淵行男記念館企画展等の案内（高原）
田淵行男写真展（7月6日～10月23日）ほかの企画展の案内があった。

10. 同好会・同期会連絡会議の本年度開催中止（高原）
今期の同好会・同期会連絡会議の開催は、諸般の事情で中止する。必要事項の連絡等はメールで連絡する（代表、連絡先変更等）。

11. 日本登山医学会学術集会抄録集（高原）
6月11～12日開催の日本登山医学会学術集会抄録集が届いた。

12. エベレスト映像使用許可願（高原）
㈱ＮＨＫエンタープライズから「The Epic of EVEREST」（英国登山家マロリーのエベレスト登山、大正13年）の使用許可願があり、資料映像委員会にて了承済み。

13. 委員長会議の開催（高原）
7月29日18時30分からルーム１０４会議室にて開催する。

14. 臨時支部事務局担当者（会計担当）会議の開催（高原）
9月10日（土）11時～16時、本会で標記を開催する。

15. 年次晩餐会の開催（高原）
本年度の年次晩餐会は12月3日（土）、品川プリンスホテルで開催する。

16. 会報『山』7月号編集報告（神長）

□平成23年度第5回（8月度）理事会　8月10日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・節田・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、宮崎・橋本各常任評議員

委　任　萩原・志賀理事

オブザーバー　藤本前副会長

議事に先立ち各プロジェクト・チーム担当理事から現況と今後の対応、課題等について説明、報告が行なわれた。

【審議事項】

1. 東日本大震災　救援募金の使途について（宮崎復興支援事業ＰＴリーダー）
別添資料により検討内容（①被害集中の3支部への見舞金　②大きな被災会員への見舞金　③原発放射線漏れによる強制移住

適用された会員への見舞金　④その他付随事項について）の説明、提案が行なわれた。また被害判明に伴う詳細金額等の割り振り変更等はＰＴに一任する提案がなされた。（承認）

2. １０２号室書架増設について（節田）
図書関連資料および資料映像関連資料は年々増加しつつあり、その整理、保管について合理化を図るために書架増設と、それに伴う購入費用９万円強の臨時出費についての説明が行なわれた。（資料整理、保管等の改善計画書を提出することを条件に承認）

3. 日中韓学生交流登山団長等派遣について（吉永）
第５回を迎える日中韓３国学生交流登山は韓国の大屯で８月12日～18日開催される。ＪＡＣが派遣する団長および役員の往復旅費（航空券）はその半額を負担する。（承認）
なお、日中韓学生交流登山についてはそのあり方、効果等を総合的に勘案して再考する時期ではないかとの意見が出された。

【協議事項】

1. 高尾の森づくりの会」について（藤本前副会長・吉永副会長）
「高尾の森づくりの会」について、別添資料により、今までの経緯、現状のほか問題点ならびに今後の課題が報告された。類似活動は14支部にわたる。ＪＡＣとしてどう捉え、扱うのかを早急に整理し基本方針をまとめていくことが必要である。公益法人化との関係もある。今後、吉永副会長を窓口として対応を図る。

2. 編集（山岳、山、ジャパニーズ・アルパイン・ニュース）業務委託について（小林、節田）
上記編集は、業務委託について機関決定して委嘱状を出す等、業務のルール化を図りたい。なお、役員および評議員の報酬は細則に基づき原則無報酬とする。具体案は次回報告する。

3. 定款施行細則について（高原）
総会での意見を踏まえ、細則に関わる重点事項は①会員復活　②終身会員会費　③役員定年　④役員任期の４点とすることに意見集約された。なお、定款については、変更はしない。

【報告事項】

1. 中華民国山岳協会新理事長当会訪問について（高原）
８月23日、同協会何中達新理事長他の当会への訪問予定があり、尾上会長、吉永副会長、高原常務理事で対応予定。

2. ＨＡＴ　Ｊ創立20周年式典・祝賀会について（高原）
９月３日（土）正午より開催され、当会として会長代理で、西村副会長が出席する。

3. 臨時事務局担当者会議開催について（高原）
９月10日（土）11時より当会にて開催する。主な議題は「公益法人化に伴う会計処理について」「支部規程」。関係する役員は出席してもらいたい。

4. 上高地土地利用許可の更新依頼（高原・森）

松本自然環境事務所から8月1日付で上高地山岳研究所の土地利用許可期間が平成24年3月末で期限を迎えるにつき、利用許可期間を更新する場合は11月中に行なうよう更新依頼があった。山岳研究所運営委員会で更新書類の作成をする。

5. 四国支部立ち上げに伴う設立委員会講師派遣依頼（高原）
重廣関西支部長より、四国支部設立について、9月10日開催予定の第2回設立委員会に講師派遣依頼があった。派遣する方向で人選等、支部活性化ＰＴと検討する。

6. 現時点における予算見通しと予算達成の努力（西村、小林）
先の総会で承認を得ているが、予算収支上の赤字幅の圧縮、健全財政の確立に向け予算執行の段階で関係者と緊密に連携していきたい。併せて会員増による会費収入増を図ることと、事業収入増にも鋭意取り組む検討を行なっている。

7. 会員データ管理システム経過報告（永田）
システム合理化・効率化に着手して約2年が経過しているが、対応する作業要員、予算等の問題もあって未だ完全稼働に至っていないとの経過説明があった。
これに対し、今後短期間に完成させるため期限を切って作業を推進する必要性がある。そのために要員・予算などについて関係者との協議が望ましい、との意見が出された。

8. 屋久島町長他への要望書について（高原）
屋久島町議会で、縄文杉の入山規制などの諸事項に係る条例案が否決されたことに伴い、自然保護委員会世界自然遺産プロジェクトから、屋久島町長あてに条例案採択等についての要望書が出された。

9. みどりの学術賞の候補者の推薦（高原）
内閣府みどりの学術賞選考委員会から7月29日付で候補者推薦依頼があった。推薦は文科省研究振興局あてに8月31日までに行なう。

10. 所蔵写真データ使用許可願（高原）
講談社から7月29日付でウェストン卿の写真を同社が刊行計画の『マンガ偉人伝 かるたコレクション』冒険王編での使用許可願があった。資料映像委員会で検討了解し、通知済み。

11. 全国支部懇談会の開催（高原）
10月15～16日、宮城支部担当で、栗駒山界隈にて開催される。尾上会長ほか4名が理事会より参加予定。

12. 文科省の立ち入り検査（高原）
おおむね3年に1度の割合で実施される立ち入り検査は、9月実施を目途に日程調整中。

13. 新入会員オリエンテーションの開催（高原）
今年度の新入会員オリエンテーションは10月1日に総務委員会担当で開催する。

14. 山研利用者数について（森）
上高地山岳研究所の利用状況について別添資料で報告があっ

た。7月末現在だと例年に比べかなりの利用者減となっている（土砂崩れなどで道路の一時不通も影響）。挽回を図りたい。

15. 会報『山』8月号編集報告（節田）

□平成23年度第6回（9月度）理事会　9月14日　会議室

出席者　尾上会長、西村副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・志賀・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、宮崎・橋本各常任評議員

委　任　吉永副会長、節田理事

【審議事項】

1. 秩父宮記念山岳賞審査委員の委嘱の件（西村）

次表の委員の提案があった。期委嘱間は23・24年度。（承認）

役　割	会員番号	氏　名	備　考
委員長	9776	竹内哲夫	
委　員	4440	平山善吉	
〃	5751	宮崎紘一	新
〃	5863	河野長	
〃	7641	池田常道	新
〃	10214	山口峯生	
〃	13057	萩原浩司	新
〃	7468	西村政晃	

現在2件の応募があり、10月21日に審査委員会を開催する。なお、来年度以降会員外からの応募ができるよう規程を変更する予定である旨の説明があった。

2. 支部活性化PTメンバー委嘱の件（宮崎）

次表のメンバーの提案があった。（承認）

役　割	会員番号	氏　名	備　考
担当理事	7949	高原三平	新
リーダー	5751	宮崎紘一	新
メンバー	6002	神崎忠男	
〃	6372	石田要久	
〃	7249	大久保春美	
〃	8091	石橋正美	
〃	11808	高橋重之	新
〃	12125	今田明子	
〃	12391	山本憲一	
〃	13888	豊倉さと子	新
〃	14951	谷内剛	新

3. 編集（山岳、山、ジャパニーズ・アルパイン・ニュース）業務委託の件（高原・小林）

先月の理事会において協議した『山岳』等の編集業務委託は、今後別添に示す稟議書、委嘱状で行なう。（承認）

4. 入会希望者の件

14名の入会希望者があった。（承認）

【報告事項】

1. 各ＰＴの現況報告

各プロジェクト・チームから現況と今後の対応、課題等について報告があった。

①新法人移行ＰＴ（高原）

10月末申請に向け申請書類作成中。9月10日開催の臨時全国支部事務局担当者会議で新法人における会計処理方法等を説明し理解の徹底を図った。

③復興支援事業ＰＴ（宮崎）

救援募金の使途は、骨格について成案を得たが、対象支部に住所はあるが支部に所属していない会員の被災状況調査・把握中である。9月中には送金を完了できるよう努めている。なお、被災状況調査は期限つきで対応する。

④支部活性化ＰＴ（高原・宮崎）

新メンバーを迎え9月18日に会議を開催する。

④山の日制定ＰＴ（西村）

新メンバーを迎え活動を開始した。パンフレット第4号（労山担当）発行を目指す。

⑤ルーム検討ＰＴ（森）

9月2日に初打ち合わせを開催した。具体的検討は今後鋭意行なう。

2. 予算管理状況（西村・小林）

4～7月の概況について資料により説明があった。入会金および年会費の入金が例年に比しておおむね好調である。理事各位が収支状況を共有して予算執行に努めることが肝要である。

3. 海外登山基金審査保留分　1隊の扱い（萩原）

23年度海外登山基金前期募集分で書類不備で保留となっていた「ＪＡＣシングーチュリ登山隊２０１１」を助成対象外とした。

4. 全国支部事務局担当者会議（高原）

新法人移行に伴う支部会計処理の取り扱い、その他について臨時支部事務局担当者会議を9月10日に開催した。山岳研究所運営委員会および高尾の森づくりの会からも会計担当者が参加した。

5. 日中韓学生交流登山（古野）

第5回を迎えた日中韓3国学生交流登山は、韓国の大屯で8月12～18日開催され、無事に終了した。次回は中国が担当で開催するが、実施時期、参加者（人員増やその他諸々等）について再考する必要を感じた。

6. 中華民国山岳協会の新理事長訪問（高原）

8月23日に中華民国山岳協会の新理事長 何中達氏ほか5名が来日し、当会と日山協が合同で新任歓迎会を催した。

7. ＨＡＴ-Ｊ創立20周年式典・祝賀会（西村）

ＨＡＴ-Ｊ創立20周年式典・祝賀会が9月3日開催され、会長

代理として西村副会長が出席した。

8. 第14回こども登山教室の実施（高原）
宮崎支部恒例のこども登山教室が1泊2日で開催（7月31日～8月1日）され、小学1年生から中学2年生までの29名が参加した（支部からは23名参加）。

9. 「テンジン・ヌルブ絵画展」後援依頼（高原）
NPO法人EARTH WORKS SOCIETY（理事長　大谷映芳氏）から名義後援依頼があり、了承した。

10. 1970年エベレスト登頂 放送許可願い（高原）
㈱テレビ東京制作PROTXから「日本山岳会登山隊エベレスト登頂」（1970年6月11日NHK放送）の放送許可願いがあり許可した（資料映像委員会で検討了解済）。

11. 全国支部懇談会（高原）
宮城支部担当で10月15～16日、栗駒山で開催。理事会から5名参加予定。

12. 評議員会の開催日程（高原）
10月25日13時から開催する。

13. 神奈川大学クライミングウォールお披露目会（西村）
9月24日に開催予定で、会長代理として西村副会長が出席する。

14. 新入会員オリエンテーションの開催（高原）
10月1日にルームで開催する（総務委員会担当）。今年度の対象者は180名。

15. 23年度安全登山普及指導者中央研修会の案内（高原）
独立行政法人日本スポーツ振興センター主催の安全登山普及指導者中央研修会が、11月11～13日、国立登山研修所で実施する旨の案内があった。

16. 事務局職員退職について（高原）
9月30日付で荒井久仁子職員が退職予定。事務局体制について検討している。

17. 会報『山』9月号編集報告（神長）

□平成23年度第7回（10月度）理事会　10月12日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・志賀・古野・川瀬各理事、平井監事、宮崎・橋本各常任評議員

欠　席　浜崎監事

審議に先立ち、会長から、「いよいよ10月24日に公益法人化の申請手続きに必要な書類を提出することになった。申請作業関係者（新法人移行PT等）の日頃の真摯な取り組みに対してあらためて謝意を表したい」とのあいさつがあった。

【審議事項】

1. 公益法人認定移行申請の件（吉永、小林）
①行認定申請書　②収支予算書（損益ベースの補正予算）　③事業会計別内訳書　④海外登山基金特定費用準備金の取り崩し

計画（案）　⑤公益認定委員会の定款チェック　⑥組織図及び事業体系図　⑦理事及び監事に対する報酬　について説明があり、審議の結果承認された。（承認）

なお、特記事項は次の通り。

a・移行認定申請は10月24日に内閣府に提出し、来年3月20日前後に認定書類を交付され、4月1日以降公益法人発足を目指す。

b・収支予算書（損益ベースの補正予算）公益認定申請書においては現預金の収支予算ではなく、正味財産増減計算による（損益ベースの）予算書を作成する必要があるので、減価償却費等を加えた所定の修正をおこなったものである。公益認定申請以降、つまり、平成24年度以降の予算は、公益会計基準（平成20年基準）を採用して損益ベースによる予算書を作成することになる。

2. 補正予算の総会追認の件（高原）

前記1の②に関しては公益法人移行認定申請書類であり、公益認定等委員会に申請する時期との兼ね合いから、去る3月12日の総会で承認を得た23年度予算書を修・補正し今回の理事会承認を経て申請をするが、これを来年　3月に開催される総会に付議して総会の承認を得ることとする。（承認）

3. 「山の日」制定プロジェクト・メンバー委嘱の件（西村）

「山の日」制定プロジェクト・メンバー表の発表があった。（承認）

役　割	会員番号	氏　名	備　考
担当	7468	西村政晃副会長	新
リーダー	5839	成川隆顕	
メンバー	12660	藤本慶光	
〃	8637	江本嘉伸	
〃	5814	佐藤辰雄	新
〃	12319	永田弘太郎	
〃	8852	堀井昌子	
〃	11314	渡辺悌二	
〃	10636	染谷美佐子	新
〃	12946	山川陽一	
〃	13057	萩原浩司	
〃	14775	直江俊弐	新
〃	14966	藤山雄一郎	新

4. 岳都・松本「山岳フォーラム」実行委員会参加の件（西村、萩原）

標記実行委員会事務局長より、11月20日、松本市で開催の同フォーラム実行委員会への参加要請があった。現在山岳5団体で推進中の「山の日」の機運を高める効果が期待できる。（承認）

5. 實川欣伸会員（14228　静岡支部）の会長特別表彰の件（高原）

同会員が昨年10月に富士山登頂1000回、そして今年9月に1111回を達成したことに対して会長特別表彰をする。（承

認）

6. 入会希望者の件（高原）
　4名の入会希望者があった。（承認）

7. 11月度理事会において「定款施行細則」の内、役員任期、役員年齢および終身会員について集中審議をすることが確認された。

【報告事項】

1.「高尾の森づくりの会」の位置づけ（吉永）
　JACの傘下の一つの組織体として位置づけ（当面は常務理事会直属）が合意・確認され、高尾の森づくりの会が受領する寄付金等の会計についてはJACと一体化した処理を行なう。

2. 東日本大震災義援金使途（宮崎）
　被災状況の調査が終了し、救援募金総額474万1162円についての取り扱いは以下の通りとなり、順次送金手配を実施している。
　なお、9月30日をもって被災届けを締め切った。
　①日本赤十字社寄託31件　190万円
　②被災会員見舞金
　・全壊3件、60万円
　・半壊　10件、100万円
　・その他19件、38万円
　（小計198万円）
　③支部見舞金
　・岩手支部81件、32万4000円
　・宮城支部52件、20万8000円
　・福島支部71件、28万4000円
　（小計81万6000円）
　④通信事務費　3万円
　⑤備費　1万5162円
　（合計474万1162円）

3. 職員1名退職にともなう事務局体制（高原）
　事務局職員の荒井さんの退職（9月30日付）に伴い、後任を検討していたが、3名（石光久仁子、今田明子、染谷美佐子）の会員を事務局支援員（交代勤務で有償）として、当面の間採用した。
　3人体制は今まで通りだが、皆さんの協力をお願いしたい。

4. 平成24年度全国支部懇談会開催（高原）
　第28回全国支部懇談会は千葉支部主催で行なう。今後の開催支部は2、3年先まで決定しておいた方が良いのではないかとの意見が出された。前向きに検討する。

5. 福井支部創立20周年記念行事への出席（高原）
　11月12日～13日、福井市で開催される。会長が出席する。

6. 新入会員オリエンテーション報告（高原）
　去る10月1日にルームで開催した。対象会員は181名で、内36名が参加し盛会であった。

7. 谷川岳山岳資料館への図書寄贈（高原）

図書管理委員会から「山と高原地図」計67巻　昭文社（１９９９年版）他の寄贈予定本の報告があった。

8. 神奈川大学クライミング・ウォールお披露目会（西村）
9月24日にお披露目会があり会長代理として西村副会長が出席した。

9. 長谷川恒男カップ名義後援依頼（高原）
東京都山岳連盟および日本山岳耐久レース長谷川ＣＵＰ実行委員会から名義後援依頼があった。昨年通り後援する。

10. 「第2回日本山岳遺産サミット」後援依頼（高原）
山と溪谷社・日本山岳遺産基金から11月3日開催の第2回日本山岳遺産サミットの後援依頼があった。後援をする。

11. 尾瀬国立公園内の東京電力所有地の国有化実現要望書（高原）
7月度に引き続き同様の要望書がきた。ＪＡＣとして主旨は理解するものの、今後の推移を見守っていく。

12. 英文ジャーナル（ＪＡＮ）発刊（高原）
8月下旬に『ＪＡＮ Vol.12』が発刊された。

13. 評議員会の開催（高原）
10月25日13時から開催する。

14. 年次晩餐会の開催（高原）
12月3日、東京品川プリンスホテル・アネックスタワー5階で開催する。

15. ルーム内保管書類等の整備推進（高原）
書棚、書庫・ロッカー、部屋などに書類等が溜まり狭隘、見苦しい状況にある。書類等保存年数の策定・見直し、適正保存部数等合理的な基準作りと書類の整理等を担当の委員会に働きかけていただきたい。来年2月を目途に総棚浚えをしたいのでご協力をお願いしたい。

16. 会報『山』10月号編集報告（神長）

□平成23年度第8回（11月度）理事会　11月9日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・節田・志賀・古野各理事、浜崎監事、宮崎・橋本各常任評議員

欠　席　萩原・川瀬理事、平井監事

【審議事項】

1. 定款施行細則について（高原）
役員および評議員の任期、役員の定年制、終身会員制度について鋭意審議した。次回理事会でも審議することとなった。（継続審議）

2. 上高地山岳研究所における冬山遭難防止対策について（古野）
上高地における気象観測およびアマチュア無線による山岳遭難防止の一助とするため学術研究を含めた気象観測をする。山研建物（ベランダ、屋根等）に無線アンテナ、気象観測機器、カメラ等を設置するほか山研内部のパソコンを通してインター

ネット、アマチュア無線機に接続して情報提供をする。当該地域は国立公園の特別地区でもあり、極力景観を損なわないよう配色、配線等について相応の配慮をする。今後関係先（環境省、文化庁等）へ許可申請手続きをする。（承認）

3. 平成23年度（第13回）秩父宮記念山岳賞について（西村）
今年度は2件の候補推薦があった。10月21日開催の秩父宮記念山岳賞審査委員会における慎重な審査の結果、受賞該当なし。（承認）

4. 『百年史』、『JAN』等の在庫処分方法について（高原）
JAC『百年史』および『Japanese Alpine News』等の刊行物の在庫処分については、総務担当理事が当該刊行物統括委員会等に連絡をとって在庫の圧縮・処分を図る。その分譲価格、広報、手続き等詳細は常務理事会に一任する。（承認）

5. 入会希望者について（高原）
11名の入会希望者があった（承認）

【報告事項】

1. 各プロジェクト報告
各プロジェクトについての報告があり、とくに①震災復興支援事業PT（宮崎プロジェクト・リーダー）は見舞金支給等の作業はほぼ終了であるが、若干の残務がある。端数残金については日赤に追加送金をして「ゼロ」とする。②新法人移行PT（吉永）は10月24日に内閣府に公益法人申請書類を提出した。これからが承認関係折衝の本番である。これに並行してPTとしては諸規程の見直しや新規作成等に鋭意取り組む。

2. 公益法人移行申請（吉永）
10月24日に内閣府に申請書類を提出した。来年4月1日付でJACが公益法人として発足すべく折衝の本番を迎えた。追加の資料を求められることもあるだろう。万全を期して行くが支部を含めご支援、ご協力をあらためてお願いしたい。

3. 平成23年度名誉会員の推薦（高原）
室賀輝男会員（№3925、推薦者＝山崎幸和会員）および平井一正会員（№4639、推薦者＝贄田統亜会員）の2名が名誉会員に推薦され、10月25日開催の評議員会で決定された。

4. 平成23年度予算上期実績および期中見通し（小林）
収入＝当初予算　6万486
3千円　期中見通し　6万279
4千円。入会金収入は上期で前期中合計を上回った。引き続き会員増に期待したい。山研収入は夏場の天候、自然災害等の影響で低調であった。支出＝当初予算6万5
363千円　期中見通し　6万3
225千円。支出面では予算計上分についてもその執行にあたって効率的支出に引き続き務め、赤字圧縮・改善に繋げたい。

5. 山研利用状況および今期年末年始の取り扱い（森）
今年度の収支状況の中での説明のあった通り、天候や自然災害

（上高地への道路状況等）の影響もあって山研利用は低調であった。昨年は７２０名の利用であったが今年は４９６名（いずれも宿泊者数）と２２４名の減である。なお、過去数年実施の年末年始の山研利用は諸般の事情を勘案してオープンしないこととする。

6. 日本登山医学会からの名義後援依頼受諾（高原）
来年2月20日に開催する招待教育講演「山岳救助―世界の最前線」に対しての名義後援依頼が11月2日付であり、依頼を受諾した。

7. 第27回支部懇談会（高原）
10月15～16日、宮城支部担当で開催され、大変盛り上がった集会であった。理事会構成メンバーから5名参加した。東北大学教授による「２００８年の地震の栗駒山地の地滑り」についての2時間に及ぶ記念講演のほか、記念山行などが盛大に行なわれた。

8. 東海支部50周年記念式典（吉永）
11月5日に記念式典が開催され、マスコミ、県政関係者等２００名ほどの来客があり盛会であった。翌日記念山行があった。

9. 年次晩餐会（高原）
出席者は現在３００名ほどであり、今後各委員会、同好会に出席勧誘をお願いしたい。講演会は予定通り3隊（東海支部の11隊14座登頂、ダットメイン東壁初登攀、ナムナニ南峰南壁初登攀）にお願いしてある。

10. 第6回ピオレドール・アジア賞（高原）
今年はカザフスタン隊による「ポベーダ北壁新ルート」による登攀に対して授与された。日本のダッドメイン東壁初登攀についてはゴールデン・クライミングブーツ賞を受賞。

11. 中国登山協会来日懇親会（高原）
11月10日18時に当会を訪問される。吉永副会長、川瀬理事が応対する。その後日本山岳協会が加わっての懇親会の予定。

12. 山岳団体との懇親会（高原）
日本勤労者山岳連盟から12月2日の「望年会」開催の案内、日本ヒマラヤ協会から12月10日の「華甲望年会」開催案内があった。

13. 年末年始のルームの閉室（高原）
12月29日（木）～1月5日（木）の間、ルームを閉室する。

14. 会報「山」11月号編集報告（節田）

□平成23年度第9回（12月度）理事会　12月14日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・永田・萩原・節田・志賀・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、宮崎・橋本各常任評議員

委　任　中山理事

審議に先立ち尾上会長から、先の年次晩餐会が盛会に開催できたことについて関係者に対する労りの言葉と東宮にお礼に伺った際、

皇太子殿下の謝意が侍従から伝えられた。また、間もなく迎える平成24年もわれわれが抱える諸問題に引き続き粛々と取り組んでいきたい。皆のご支援、ご協力をお願いしたいとのあいさつがあった。

【審議事項】

1. 定款施行細則について（高原）
役員および評議員の任期、役員の定年制、終身会員制度、会員資格復活について審議が行なわれた。タイムリミットもあり、次回理事会で結論を出すこととなった。（継続審議）

2. 首都近郊支部の支部運営交付金について（小林・高原）
12月3日開催の支部長会議での問題提起を受け鋭意検討の結果、首都近郊支部以外の支部と同様に来年度から取り扱う。（承認）

3. 四国支部設立について（高原）
関西支部との調整を完了させた旨、及び設立以後1年以上の事業計画及び予算書を理事会へ報告することを条件に承認する。（条件付承認）

4. 「理事および監事の報酬に関する規程」（案）について（高原）
原案通り承認。ただし、来年3月開催（予定）の総会に付議し承認を得ることを要する。（承認）

5. JAC-YOUTHの今後について（森・野澤・古野）
21年以降JAC-YOUTH PT発足後の活動の結果、65名（40歳未満）の入　会者があり一定の成果をあげて、その活動体制も整備・構築されてきた。今後この活動を安定的かつ恒久的なものとして強力に推進するため、「指導委員会」、「青年部委員会」、「学生部指導委員会」を統合し、委員会と同等の組織位置づけに編成（組織名YOUTH CLUB仮称）して、既存の3委員会との連携、協調体制を敷いて活動し、JACの活性化を図る。なお、予算関係は一本化する。本取り扱いは平成24年度からとする。（承認）

6. 入会希望者について（高原）
11名の入会希望者があった。（承認）

【報告事項】

1. 各プロジェクト報告
①山の日制定PT（西村・萩原）
11月20日、岳都松本市で「山岳フォーラム」が、1000人を超える聴衆の中開催された（松本市など11団体主催）。種々のイベントの他、パネル・ディスカッションのなかで、PTの成川リーダーが「山の日制定」について強くアピールした。
②法人移行PT（吉永）
新法人移行申請後の公益認定委員会の定款専門官からの指摘事項（8項目）は　文言、字句等の軽微な瑕疵として対処した。これによる新定款の手直し箇所は来る3月の総会で報告、承認を得る。なお、移行後には臨時理事会を4月1日に開催する。
③災復興支援事業PT（宮崎）

見舞金支給作業は終了した。端数残金の2万3243円は日赤に追加寄付をした。また、日赤からの受領書は関係者に発送した。すべての事務処理が終わる12月16日をもって当PTは解散する。

2. 清里北沢美術館の利用（森・高原）

調査結果は、建物の維持管理に相当な経費を要し、かつ構造上利用困難であることが判明した。広く事業の可能性も含め「ルーム検討PT」が検討をすることとなった。建物持ち主への回答期限は3月31日。

3. 年次晩餐会（高原）

品川プリンスホテルにおいて、425名の参加者のもと、整然かつ盛大に開催された。

4. 「河童橋上のウェストン一行」写真掲載願（高原）

山と渓谷社から『山と渓谷』2月号に掲載するための許可願があり承諾した。

5. 全国支部事務局担当者会議（高原）

1月21～22日開催する。

6. 学生部の海外登山遠征（古野）

来年度の学生部海外登山計画がまとまった。インド、ザンスカールの未踏峰（無名峰6165メートル）で、8月15日～9月28日の予定、6名の学生隊員で行なう。申請はこれから。

7. 学生部皇居周回マラソン（古野・野澤）

11月12日、第48回目の皇居マラソンを実施した。1位は早稲田大学であった。2年後は50回という節目を迎えるので、何か記念することを考えてみたい。

8. ルームギャラリー等における残置物整理（高原）

片づけ期限はすでに連絡の通り12月15日である。以降は総務担当理事の判断で順次整理していくので、未処理の物は早急に片づけてほしい。

9. 刊行物の適正在庫部数（高原）

『ジャパニーズ・アルパイン・ニュース』、『山岳』、『山』および『百年史』について、1月11日までに担当理事に検討していただきたい。

10. 委員会予算（小林）

来年度の各委員会予算については12月26日必着でお願いしたい。1月に入ってからの査定日程は別途連絡する。

11. 会報『山』12月号編集報告（萩原）

東日本大震災義捐金・見舞金精算書

収入の部

項　目	人数	金　額
復興支援義援金		4、741、153
受取利子		540
合計		4、741、693

支出の部

項　目	人数	金額／1名	金　額	
日赤寄託受領証発行者	34		1、900、000	
日赤寄託残金追加			23、243	
小計			1、923、243	
被災会員見舞金全壊	3	200、000	600、000	
被災会員見舞金半壊	10	100、000	1、000、000	
被災会員見舞金一部損壊等	19	20、000	380、000	
小計			1、980、000	
岩手支部見舞金	81	4、000	324、000	
宮城支部見舞金	52	4、000	208、000	
福島支部見舞金	71	4、000	284、000	
小計			816、000	
通信等事務費	1式		22、450	
小計			22、450	
合計			4、741、693	復興支援PT

☆平成23年度年次晩餐会

12月3日(土)　東京・品川プリンスホテル=アネックスタワー

出席者　425名

本年も425人が出席してなごやかに開催された。午後6時開宴、尾上会長は挨拶で、東日本大震災、公益法人移行と、日本山岳会の内・外ともに大変な1年であったこと、被災者への義援金に対する会員の協力に感謝、また内閣府への移行認定も申請し、来年4月1日から新しい公益法人として生まれ変わることを報告した。

次いで、新名誉会員の紹介、新永年会員の挨拶が行われた。また、富士山1000回登山を達成した實川欣伸会員が会長特別表彰受賞者として紹介され、新人会員の紹介では日本山岳会最年少、13歳の三上マリモ会員が代表挨拶をした。ほか、支部紹介や恒例のイベントも行われ、皇太子さまも4年連続でご出席されたなか、盛況のうちにお開きとなった。

□平成23年度第10回（1月度）理事会　1月11日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・志賀・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、宮崎・橋本各常任評議員

審議に先立ち尾上会長から、年頭の挨拶があり、平成24年も課題山積であり、これに会員及び理事会メンバーの皆さんと一丸となって取り組んでいく決意表明がなされた。

【審議事項】

1．定款施行細則について（会長）

役員の選任（任期、定年）、終身会費、会員資格復活について次のように審議された。来る3月開催の総会に付議したい。

（1）役員の選出

役員は連続して2任期を超えて選任することはできない。理事は選任期において満70歳を超えないものとする。

（2）終身会費

入会後10年以上在籍する者の終身会費　39万円
入会後20年以上在籍する者の終身会費　31万円
入会後30年以上在籍する者の終身会費　22万円
入会後40年以上在籍する者の終身会費　11万円

（3）会員資格復活

終身会員及び永年会員の在籍年数の計算は、旧会員であった在籍年数を算入するものとする。

2. 海外登山基金取り崩しについて（会長）

今後、会員獲得、会員若返りに貢献の大きい「JACユースクラブ」の活動を重点項目としたい。そのためには、人材と相応の資金を必要とする。ついては平成24年度に500万円、25年度に500万円の合計1000万円を、将来への投資として予算計上をしたい。財源は海外登山基金に求めたい。
なお、その活動の一層の強化のためのグランドデザインを作成することを条件とする。（承認）

3. 東海支部・猿投の森隣地寄付申し入れについて（吉永）

東海支部・猿投の森に隣接する瀬戸市上山路町の山林1万5416平方メートル（約4663坪・傾斜地・相続財産）を寄贈したいとの申し出が相続人からあり、これを受贈し活用する。（承認）

4. 規程類の制定について（高原）

規程類管理規程、経理規程、支部に関する規程（支部規約の必要的記載事項含む）の原案説明があった。（承認）
なお、その他の諸規程は新法人移行PTに委ねることとする。

5. 外登山基金委員会委員の委嘱について（高原・萩原）

海外登山基金委員会委員は次の通り。なお、任期は平成23年6月18日から平成25年総会日まで。

委員長・吉永英明（7045）新任
委員・小川武（6305）再任
池田常道（7641）再任
永田秀樹（8020）再任
相馬勉（9362）再任
貫田宗男（10106）再任
松原尚之（10507）再任
谷川太郎（11705）再任
古野淳（12194）再任
事務局・萩原浩司（13057）再任（承認）

6. 入会希望者について（高原）

9名（内、1名は復活会員）の入会希望者があった。（承認）

【協議事項】

1. 平成24年度予算について（小林）

平成24年度予算編成方法、予算書形式等の素案（タタキ台）に

ついての説明、質疑応答が行なわれた。

【報告事項】

1. 新法人移行ＰＴ（吉永）
3月の総会頃までには公益法人認可が得られるよう鋭意取り組む。

2. 文科省平成23年度特例民法法人概況調査（高原）
例年通り所定用紙に記入し、1月6日付にて文科省競技スポーツ課宛に提出した。

3. ヤマ・ネット・ジャパン運営委員会からの協力願い（高原）
12月26日付で「国際山岳年＋10の行事」への協力願いがあった。
実行委員に尾上会長、窓口を高原常務理事とする。

4. 所蔵写真等の雑誌掲載許可願（高原）
㈱新潮社から12月27日付にて当会所蔵4枚（加賀正太郎とヘスラー、武田久吉、上高地河童橋上のウェストン夫妻、マナスル初登頂の際のギャルツェン）を雑誌『考える人』２０１２冬号に、（株）地球丸から『山岳』創刊号の表紙写真を、『ＴＲＡＭＰＩＮ』2月号に掲載許可願があり、承認した。

5. 四国支部設立（高原）
先月の理事会決定の条件が満たされ、設立が承認された。

6. 事務局体制（高原）
現在の体制（昨年10月以降と同様の職員2名の他支援員1名〈3名のシフト交替〉による）を3月末まで継続する。

7. 都岳連からセルフレスキュー講座等の案内（高原）
㈳東京都山岳連盟・遭難対策委員会から冬山セルフレスキューと雪上搬送法の講座の案内があった。

8. 富士山国有林における新たな捕獲手法によるニホンジカ捕獲実施（高原）
富士宮市鳥獣被害防止対策協議会、静岡森林管理署等から1月及び2月の10日間ニホンジカ捕獲実施についての周知徹底連絡があった。

9. 支部事務局担当者会議（高原）
1月21日～22日（日）開催する。

10. 日本山岳協会新年会（高原）
1月14日に開催される。会長、西村副会長が出席する。

11. 会報『山』1月号編集報告（神長）

□平成23年度第11回（2月度）理事会　2月8日　会議室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・節田・古野・川瀬各理事、平井監事、宮崎常任評議員
委　任　萩原・志賀各理事、浜崎監事
欠　席　橋本常任評議員

【審議事項】

1. 平成24年度事業計画（案）について（高原）

各委員会および各支部の事業計画から主な事業計画について前年度に準じ公益目的事業、共益目的事業に分けてまとめた。なお、ユースクラブ発足に伴い公益事業計画の第7項目に「ユースクラブの発足と事業」としてその目指すところ、事業実施概要を掲載した。（承認）

2. 平成24年度予算（案）について（小林）

公益社団法人として出発する最初の予算（案）として策定した。すなわち公益法人会計基準によるもので、支部事業を組み込み前年度に比べ複雑なものとなった。

本部部門では９４０万円の収支マイナス。従来基準である減価償却費等控除前では３４１万円のマイナスとなるが、新年度は若手会員獲得を目指すユースクラブ充実のための特別予算を組み込んでいるため、これを除外した一般部門では１５８万円の収支プラスを見込む。会員減少傾向のなかでの黒字化を図るには、きめ細かな支出削減が必要である。

支部部門では内外からの寄付金等の繰越などがあり、１１５０万円の収支黒字を見込む。この結果、会全体としては２１０万円の収支プラスの予算である。

若返りなくしては会の未来は語れないのではないか。支出を抑えながらかつ前向きに進むという両構えの策であり、会員諸氏の理解と協力をお願いしたい（承認）

3. 海外登山基金の整理について（小林）

特定資産としての「海外登山基金」５８８０万円は公益法人認定申請手続きを進めるなかで当局から法令に反して過大に保有しているとの指摘を受け、折衝の結果、登山計画のある４２５０万円は海外登山基金として認められるとの見解を得た。残る１６３０万円は平成23年度決算で取り崩し一般預金に振り替える。本件は来たる3月の総会議案として付議する。（承認）

4. ＪＡＣユースクラブの「グランドデザイン」について（野澤）

グランドデザイン（案）につき、関連するほかの担当理事からも補足説明がなされた。ユースクラブ設立の背景、これまでの活動推移・実績等を追加することを条件とした。（承認）

5. 平成23年度（後期）海外登山基金の助成について（古野）

2月3日開催の海外登山基金審査委員会での審査の結果、信州大学学士山岳会オーガ登山隊２０１２（隊長＝花谷康広）に助成金30万円支給することとした。本隊は、カラコルム・ヒマラヤ北部、ビアフォ氷河流域のオーガ峰（７２８５メートル）南東ピラーのアルパイン・スタイルによる初登攀を目指す。（承認）

6.「支部に関する規程」の一部追加について（高原）

支部に関する規程の第10条（経費）第1項の運営交付金の支給対象基準等について表現文言を一部追加する。（承認）

7. 入会希望者について（高原）

9名の入会希望者があった（承認）

なお、入会申し込み用紙につき、ＪＡＣホームページからのダ

ウンロード対応について意見交換が行なわれ、今後、総務委員会（インターネット小委員会）で検討する。

【報告事項】

1. 各プロジェクト報告

・「山の日制定ＰＴ」（西村）

第５回目のＰＴ会議を行ない、メンバーの役割、予算、支部との連携等について討議した。

また、「山の日」制定ＰＴから、成川隆顕制定協議会の代表幹事について、平成24・25年度の留任推挙につき報告があり了承。

・「新法人移行ＰＴ」（吉永）

1月24日に公益認定委員会専門官と質疑応答を行なった。3月の総会前日までには公益法人認定が得られるよう引き続き取り組む。

なお、4月以降、「法人運営適正化ＰＴ」と改称する。

・「会員メリット検討ＰＴ（仮称）」（会長）

来年度、新たに立ち上げる。

2. 志賀理事の辞任について（高原）

志賀理事より、海外勤務となるため辞任の意向があった（3月31日付）。辞任を受理する予定である。来年度以降、理事13名体制となる。

3. 国際山岳年プラス10事業第1回実行委員会（森）

1月24日に実行委員会を開催した。6月23・24日に日本大学文理学部講堂で「氷河地形」に関する講演会（シンポジウム）が開催される予定。

4. 支部事務局担当者会議（高原）

1月21日～22日開催した。本部より会計処理方法の説明、支部より24年度支部予算、活動計画についての報告があった。各支部に支部規約案の作成を依頼。新年度は、本会議を年2回実施する予定。

5. 「基金および積立金等に関する規程」の登録規程類への追加（高原）

「基金および積立金等に関する規程」を登録規程類へ追加した。

6. 深田久弥山の文化館からの「日本１００名山」写真コンテストの後援依頼（高原）

1月23日付にて後援依頼があり承認した。

7. 本会発刊在庫図書の整理（高原）

会員サービスとルーム整理のため、必要保管部数以外の『日本山岳会百年史』、『山岳』（在庫号）、『ジャパニーズ・アルパイン・ニューズ』（在庫号）を一律1部１０００円（送料込）で希望者（会員限定）に販売する。期間は1年を予定。

8. 来年度以降の事務局体制（高原）

現在の職員2名プラス支援員1名（3名の交代制）は3月末までとし、以降は職員1名を採用して3名体制を予定。どなたか適任者がいたら2月20日までに紹介してもらいたい。

9. 平成23年度第2回通常総会（高原）

3月17日（土）14時開催する。

10. 平成23年度第3回評議員会（高原）
2月14日(火)13時開催する。主な議題は、24年度事業計画(案)、予算（案）。

11. 日本山岳文化学会創立10周年講演会祝賀会（高原）
3月11日（日）開催案内があり、森常務理事が出席する。

12. 日本勤労者山岳連盟第29回総会への来賓挨拶（メッセージについて）依頼（高原）
2月18~19日に開催される。18日、西村副会長出席予定。

13. 日本登山医学会東京講演会および懇親会（高原）
2月20日（月）開催の案内があった。講演者は国際山岳救助協会のDr.Jhon Ellerton氏。高原、川瀬、古野各理事、平井監事出席する。

14. 2011「植村直己冒険賞」受賞者の発表（高原）
2月16日（木）に明治大学紫紺館で発表が行なわれる。

15. 会報『山』2月号編集報告（節田）

◎平成23年度第2回通常総会

3月17日（土）午後2時
東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」
出席者 127名
議 案 1. 平成23年度補正予算案承認の件
2. 平成24年度事業計画案承認の件
3. 平成24年度予算案承認の件
4. 海外登山基金一部取り崩し承認の件
5. 定款施行細則変更案承認の件
6. 理事及び監事の報酬に関する細則案承認の件

開会に先立ち、尾上会長より「3月31日をもって社団法人日本山岳会は解散し、4月1日より公益社団法人として新たに発足する。社団法人として71年続いたが、会の劣勢をとめるため、とくに若い会員を呼び戻したいと努力してきた。その結果JAC-YOUTHに若い人が入り、反転攻勢への橋頭堡を築くことができた。これを機に数年で1000万円の資金を投資することにした。具体的にはJAC-YOUTHに学生部、青年部、指導委員会を統合したYOUTH-CLUBを立ち上げる。」、との表明があった。

補正予算案は、公益認定を申請するに際して予算書を作成しなければならないための措置で、原案通り承認。事業計画案、予算案、海外登山基金一部取り崩しも一括審議され承認。定款施行細則変更は①終身会費の引き上げ ②離籍していた会員が復活した場合、終身・永年会員の在籍年数計算に旧会員時の在籍年数を算入 ③役員は2任期連続して選任できない ④理事は選任時に満70歳を超えないものとする年齢制限、理事及び監事の報酬に関する細則案は、週3日以上会務に専念する常勤理事の報酬を定める（現段階では常勤理事を設置する予定はない）、とする各議案も原案通り承認された。

支部の活動報告

北海道支部

２０１１年度(平成23年度)の北海道支部の活動は、１９７７年の雪崩事故以降本格再開となった「オホーツク分水嶺踏査」の完遂を目指したほか、定例山行、自然保護関係などの公益事業関係、全国支部との交流会、道民カレッジ講座など積極的に事業を展開した。分水嶺踏査については、全長３５０kmに及ぶコースの3分の2の２３０kmを踏査し、支部創設50周年に当たる２０１５年までに完遂できる見込みがたった。とりわけ、10月には4kmのコースに、会員・会友34名が参加し、分水嶺特有のヤブこぎに汗を掻き支部全員の事業として一体感を強めることができた。

定例山行は、天候に恵まれず中止となった山行が多かったものの、積丹の山、日高の沢、函館周辺の山々を楽しんだ。また、雪崩事故以来強化してきた雪崩講習の成果として、指導者資格を取得した3名の会員を中心に、昨年に引き続き札幌以外の道東、道南に地域・対象者を広げ実施した。

自然保護関係では、北海道庁から委託を受けた高山植物盗掘防止パトロールを大雪山系・十勝岳連峰で参加者32名、延べ１４０回のパトロールを実施。日高山脈ファンクラブ主催の幌尻山荘排泄物搬出事業にも参加した。

公益事業として北海道支部が大事に育ててきた自然児学校は、昨年の反省(場所選定、カリキュラムなど)を踏まえ、日高町沙流川オートキャンプ場に場所を移し、第12回目を開校した。支部からはサポート隊として25名参加のもと、小中学生16名がテント設営、食事づくり、登山を体験するなど有意義な時間を過ごした。次年度以降も引き続き課題の場所選定の検討とともに多くの参加者を募り、カリキュラムの充実と安全対策に万全を尽くし継続したい。

ほかには、平成18年から参加の「支笏湖周辺台風災害復興植樹事業」に引き続き参加し、春の観察、補植と植樹、下草刈り、生育調査､秋の観察など、1年を通じて調査観察し生育を見守った。3年目を迎えた道民カレッジ講座は、支部の絆の拠点である自前の「ルーム白石」を活用した「北の山を想う」をテーマとして2月のイグルーづくりを含め9回の講座を持ち、支部会員・会友ら延べ１５０名が参加した。集会では、10月に4回目

を迎えた北海道山岳5団体交流会を共催し、登山道整備をテーマに充実した情報交換を行った。支部活動の効率的運営とともに迅速な情報交換のため支部通信のメール発信も軌道に乗り、本部のホームページとの連携にも力を注ぎたい。今後、公益社団法人として本部との一体化を図り充実したクラブ・ライフの運営に知恵を絞っていきたい。

（西山　泰正）

■青森支部

2011年度(平成23年度)の青森支部は、支部会員の山行とともに、地域社会に貢献できる活動として、白神山地ブナ林再生事業を始めた。八甲田山スキーコース・ポール立てなどにも参加し、大きな事故もなく無事終了できたことを関係各位に感謝したい。

1. 支部春山山行（酸ヶ湯駐車場上テント設営）4月30日（土）～5月3日（火）10名
2. 支部総会（青森市アラスカ会館）　5月14日(土）16名
3. 白神山地ブナ林再生事業　6月24日（金）～26日（日）12名
4. 青森ウエストン祭（新郷村）　7月3日（日）約100名（支部会員3名）
5. 高山植物盗掘防止パトロール　7月3日（日）約30名（支部会員3名）
6. 少年少女登山教室NO1（未定）　7月23日（土）、24日（日）実施せず
7. 支部夏山山行（鳥海山）　7月29日（金）～31日（日）5名
8. 少年少女登山教室NO2（未定）　9月10日（土）実施せず
9. 支部初秋山行（下北半島朝比奈岳）　10月22日（土）、23日（日）14名
10. 青森支部年次晩餐会（青森市）　11月12日（土）10名
11. 支部晩秋山行（北八甲田仙人岱小屋）　11月19日（土）～20日（日）悪天候により中止
12. 山岳スキー研修会（竹越会員山荘）　1月15日（土）、16日（日）17名
13. 八甲田山スキーコース・ポール立て　2月21日（火）、22日（水）支部会員7名
14. 八甲田山スキーコース・ポール立て　3月27日（火）、28日（水）支部会員6名

平成24年度は支部会員の拡大を図りつつ、来年の支部創立20周年に向けて、より一層支部活動の活性化に力を入れるとともに、引き続き地域社会に貢献できる活動にも取り組んでいきたい。

（須々田　秀美）

岩手支部

２０１１年（平成23年）３月の東日本大震災に際しまして、全国の皆さまから多くのお見舞い、激励、および義援金を頂きました。誠に有難うございました。

会員に死傷者はありませんでしたが、家族、親戚および友人知人が犠牲になったという会員が多数おります。

こういう大変な時ではありましたが、岩手支部の活動としては、ほぼ例年どおり、毎月の岩手県とその周辺の例会山行や、公益事業、夏の遠征等を行ない、会員間の交流を深め、また会員外の人たちも山行に誘い、山岳活動の充実発展に貢献することができました。

大地震、大津波は大きな被害を及ぼしましたが、例年通り岩手山のコマクサの大群落も見事に咲き誇りました。東北は負けません。岩手は負けません。

また、岩手支部に限らず、岩手県内の各山岳会では復興祈願登山などが行なわれました。このような中、日本山岳会の公益法人化を迎え、今後、岩手支部としてどのように公益事業に取り組んでいくか、岳人として初心に帰りながら支部の今後の活動と発展について語り合った1年でした。

＊岩手支部総会　4月3日（日）16名出席

＊4月例会山行「空雲山、送仙山」4月23日（土）雨天のため中止

＊5月例会山行「大森山、徳千丈山」5月28日（土）4名

＊6月例会山行「黒森（西和賀）」6月18日（土）13名

＊7月例会山行「岩手山（馬返し～焼走り）」7月16日（土）～17日（日）7名　公益事業・清掃登山

＊岩手山八合目避難小屋管理当番　8月6日（土）～7日（日）3名

＊夏の例会山行「剣山、石鎚山（四国）」8月24日（水）～27日（土）6名

＊岩手県山岳協会加盟団体交流会（鞍掛山キャンプ場）9月3日（土）1名

＊鞍掛山トレイル・ランニング（岩手県山岳協会主催）9月4日（日）1名

＊9月例会山行「三ツ石山」9月23日（金）悪天候のため中止

＊9月30日（金）「日本山岳会岩手支部通信」第34号発行

＊10月例会山行「白地山」10月1日（土）6名

＊11月例会山行「鷲ケ森」11月6日（日）悪天候のため中止

＊岩手支部晩餐会（矢巾温泉）12月10日（土）、11日（日）16名

＊忘年山行「南昌山」11日（日）8名

＊1月例会山行「赤林山」1月24日（土）11名

＊2月例会山行「下倉ゲレンデスキー」2月11日（土）5名

＊「七滝」（県民の森）12日（日）4名

＊3月例会山行「丸森」3月11日（日）4名
＊3月21日（水）「日本山岳会岩手支部通信」第35号発行

（阿部　裕二）

秋田支部

2011年度（平成23年度）定例総会を4月4日に開催。委任会員を含め53名出席。10年度の決算及び事業報告承認。11年度予算案、事業案を審議。
＊4月21日、第1回役員会を開催。役務分担や山行等を協議。
＊5月14日、里山山行として神宮寺岳・伊豆山を縦走、春の山菜採りを楽しんだ。会員外を含む16名参加。
＊6月12日、太平山県立自然公園整備促進地域協議会の主催する「太平山山開き清掃登山」にサポートとして16名協力。一般参加者70名ほど。
＊9月10～15日、朝鮮半島最高峰・長白山山行を実施。中国と北朝鮮の国境、神秘の湖「天地」を観光。
＊10月29日、秋田ソウル間定期便就航10周年記念セレモニーに、秋田支部と韓国慶南支部との交流登山の写真が展示された。また、秋田県ホームページにも掲載されている。
＊10月22日、秋の里山山行として、高山と高岩山で実施。白神山地の一角にある高山と、歴史ある高岩神社を楽しんだ。12名参加。
＊11月6日、太平山・前岳に案内板設置と周辺歩道刈り払いを公益的事業として実施。14名参加。
＊12月5日、年次晩餐会に3名出席。翌日の懇親山行・箱根駒ヶ岳・神山へ3名参加。
＊2月22日、第2回役員会を開催。公益法人に移行するための支部規約を審議及び24年度総会について打ち合わせを行なう。
＊支部会報「秋田山岳」の発行。3回、通算86号となった。
＊支部保存文書を製本。設立当時から今日までの書類、資料を年代順に整理して製本。支部関係10巻、本会関係6巻にまとめた。ルームのない当支部は、その保管場所に苦慮している。現在は、佐々木支部長宅にその他の資料（各支部の周年記念誌など）とともに保管をお願いしている。秋田県立図書館、秋田市明徳館などへ支部発行書籍を寄贈。支部設立周年記念誌、秋田山岳合本、訪台登山報告書、訪韓登山報告書及び会員発行の私家本など延べ100冊。
新年度（2012年）からは、公益社団法人日本山岳会秋田支部として公益事業を行なうことになる。高齢化の進む秋田支部としては、これまで通りの活動の範囲内で、楽しみながら登山道の整備等を行なっていきたい。

（鈴木　裕子）

山形支部

平成23年4月16日の支部総会で役員改選があり、支部長に渡辺誠氏が選出された。渡辺氏は山形支部の分水嶺踏査の中心となり、『山形支部創立60周年記念誌』の編集委員長として会員をリードした。

山形支部は会友をふくめて現在67名。久しぶりに3名の若い新入会員を迎えたことは支部の明るいニュースであった。支部活動としての山行は以下のとおりである。

＊6月25・26日　月山旧六十里街道の最終回。湯殿山から志津までを走破した。旧街道の最高地点である大岫峠（おおぐき）１１４０ｍを越える六十里街道の核心部である。山形支部では旧街道を3回に分けて歩いた。今回はまだ残雪があった。庄内と山形盆地を結ぶこの街道を行き来する古の旅人、商人、月山湯殿山参詣の巡礼たちが遭遇した困難をしのんだ。

＊7月3日　一般公募登山・月山。姥沢コースから山頂を往復。支部会員9名、一般参加13名。短い夏を生きる花たちに囲まれた山旅。

＊10月9日　一般公募登山・蔵王。ライザスキー場集合。刈田岳から熊野岳を経て中丸山。蔵王のインストラクターでもある会員の案内。終わりかけたナナカマドの紅葉とリンドウの青紫が印象的だった。支部会員10名、一般15名の参加。

＊11月5日　高舘山登山と支部晩餐会。支部会員26名の参加。庄内平野と日本海の間に延びる低い山並みが最近注目されている。高舘山の標高はわずか２７３ｍ。低い標高にもかかわらず、ブナ、ケヤキなどの巨木があり、林床にはユキツバキの群生。庄内藩が守った自然が手つかずのまま今に伝えられている。鶴岡市大山から日本海の由良海岸までの約11㎞の山並にはヤマザクラやエゴノキの巨木があり、シラネアオイやルリソウなどの群生もあり、地元ＪＡＣ会員が縦走路の整備とともに貴重な植生の保護に努めている。この自然林があるため、下池、上池がラムサール条約に登録され、多くの水鳥が翼を休めている。

＊24年1月21、22日　蔵王樹氷原を滑る会。支部会員9名、越後支部から3名参加。ここ数年、樹氷の発達が貧弱だったが今年は見事な樹氷が見られた。スキー技術の向上と懇親を図る。原発事故の影響で蔵王を訪れるスキーヤー、ボーダーが激減。特に海外からの客が減った。

＊3月17～19日　鳥海山スキー登山。支部会員6名、越後、宮城支部から各1名参加。18日は滝の小屋まで上がったが、天気が悪かったので上部をあきらめ山雪荘に2泊。スキー技術論を語り合い、支部間交流を深めた。

今年度は支部会員山行4回、一般公募登山2回を実施したが、参加者が固定してきている。24年度は支部山行回数を6回に増

やし、会員が参加する機会を増やすとともに、各山行を「健脚組」「のんびり組または温泉組」の2本立てにして各年齢層が参加できるようにする。支部としては「調査研究」「環境保全」にも手を伸ばしたいものだが、なかなか困難な情況である。ただし、個人レベルでは古道の発掘やイヌワシの観察、山岳写真や絵画等で精力的に活動し、高い評価を受けている支部会員がいることを付け加えておきたい。

（粕谷　俊矩）

■宮城支部

1. 役員会関係
＊4月8日　総会対応と今年の計画　11名出席
＊5月30日　震災会員の確認・全国支部懇対応と活動の準備・記念品作成状況・春の公募登山中止について　10名出席
＊6月21日　公募登山の進め方、ほか　10名出席
＊7月8日　全国支部懇事前調査・夏季公募登山計画について　9名出席
＊8月23日　全国支部懇の募集人員変更・具体的準備について　15名出席
＊9月6日　全国支部懇準備と課題・秋季公募登山について　14名出席
＊10月5日　全国支部懇最終打ち合わせ・役割と準備について　18名出席
＊11月21日　全国支部懇反省会・秋季公募登山報告　13名出席
＊1月12日　次年度事業企画について・冬季公募登山について　16名出席
＊2月15日　スキー山行と・公募登山について　12名出席
2. 総会
＊4月28日　前年事業会計の報告・新年度の計画と予算・全国支部懇計画　15名参加
3. 山行関係
＊5月15日　春山山行（大土ヶ森）　2名（ほか会友2名）
＊6月25、26日　地筍山行（股窪沢）　3名（ほか会友3名）
＊7月24日　夏季公募登山（雁戸山）　12名（ほか公募参加者8名）
＊8月31日　沢登り（笹谷むじな森の沢）　3名
＊10月1日　栗駒山（支部懇準備山行）　15名
＊10月15、16日　栗駒山（全国支部懇談会）　21名、宮城支部会員を含めて総員173名参加、25支部と本部・首都圏の方々が参加
＊11月13日　秋季公募登山（糸岳）　6名（他公募参加者9名）

＊1月1日　元旦登山（泉ヶ岳）8名（他会友4名）
＊1月29日　厳冬期山行（北泉ヶ岳）7名
＊2月19日　冬季公募登山（南面白山中腹まで）7名（他公募者5名）
＊2月25、26日　スキー山行（山形蔵王スキー場）5名

4. 会員懇親企画
＊7月28日　支部ビールパーティ　14名参加
＊12月15日　支部年次晩餐会　15名参加

5. 広報記録
＊11月～3月　宮城山岳編集活動
通年通して支部ホームページへの山行報告掲載と更新活動の展開。

6. その他
各季節ごとの公募登山実施の前に、参加申込者を招集して、計画の説明と準備に必要な山の勉強会を実施した。
＊7月19日　地図の話・夏でも発生する低体温症の話。
＊11月7日　装備の話・パッキングの話。
＊2月19日　テントの張り方・積雪の観察・カンジキとスノーシューについて。

（高橋　二義）

■福島支部

2011年度（平成23年度）は、3・11東日本大震災と巨大津波、さらに未曾有の被害をもたらした原発事故に翻弄され続けた1年であった。3月12日、東京電力福島第一原子力発電所1号機（炉）が、さらに14日に3号機が水素爆発したことにより、周辺住民はパニック状態に陥って逃げ惑い、以後『原発流民』となって全国放浪の生活を強いられることとなる。この史上まれにみるトリプル事故により、県内は生活物資の流通が途絶え、支援の手は届かず、日を追うごとにその被害は深刻さを増し、放射線被ばく問題は生活に深く入り込み、気の遠くなる将来にまで禍根を残すこととなった。

現在も進行する若者の県外流出。それとともに、幼児や小中学生の転出（家族逃避行）は止まることを知らない。原発から20㎞圏内の復旧・復興は遅々として進まず、長いトンネルから抜け出る光すら見えてこない。

このような中、福島支部は年度当初に予定していた支部総会の開催を見送ることとなる。とても山どころではなかった。支部員それぞれが被災者でもあり、身辺に降り注がれた問題解決に奔走せざるをえない状態が現出されていた。加えて長年支部の支柱であった事務局長の突然の訃報に接し、活動停滞を余儀なくされた。

このような中、夏山シーズンを迎えるころから放射線被ばく問題にも冷静に対処できる空気が生まれ、徐々にではあるが年間活動計画(案)にも取り組めるようになった。吾妻連峰姥平の高山植物植生復元作業（6月）の支援から始まり、東吾妻登山道整備事業（7月）や倒木の撤去作業にも取り組んだ。恒例となった9月初旬の納涼登山。10月には飯豊連峰疣岩山登山と下旬に宮城支部が主催した全国懇談会への参加。初冬の合戦小屋経由燕岳往復登山を3年連続で実施した。この間JAC本部からは多大なる震災義援金をいただき、さらに全国各支部から届けられた激励の数々。衷心から感謝申し上げます。

わが福島支部は、平成24年に支部創立65周年を迎えるが、この夏、その記念事業としてカラコルム未踏峰（6000m級）へ挑戦する。大谷支部長以下会員が一丸となって郷土の復旧・復興を願い、「がんばろう福島」を合言葉に初登頂成功に向け着実に歩を進めたいと思う。

（渡部　展雄）

■栃木支部

栃木支部は設立して5年目を迎えた。設立当時34名で始まった本支部の会員は本年で52名になり、公益事業・共益事業とも参加者が増え、クラブライフを楽しみながら、ますます充実した活動を行なえるようになった。以下は平成23年度の本支部の主な事業報告である。

＊4月10日（日）春山山行を桜の名所である太平山県立自然公園の桜峠・晃石山で実施した。東日本大震災からちょうど1ヶ月の月日が過ぎ国内が大変な状況であったが、元気を取り戻すべくお花見を兼ねての山行であった。また、会員夫妻がアメリカへ転勤することになったため、下山後はおふたりの門出を祝し、かかしの里バーベキュー広場で激励会を開催した。（参加者20名）

＊7月3日（日）日光山系清掃登山を県山岳連盟との共催で、奥日光周辺で実施した。本支部はこの事業を、「山の日プロジェクト」社会貢献事業として位置付け、前日には「日光の自然を考える集い」を開催し、日光自然博物館の鈴木文益氏の講演会「奥日光の自然観察」を催した。講演の内容は、奥日光の自然の素晴らしさを実感でき、翌日の清掃登山活動に結びつく有意義なものであった。本支部の清掃活動は、切込湖・刈込湖をハイキングしながら行なった。参加者は総勢約200名余、本支部関係者(参加者12名)。また、9月4日(日)には、那須岳クリーン・キャンペーンを実施予定だったが、台風のため中止となった。《公益的事業》

＊7月9日（土）第4回山岳映画の夕べ。羽田栄治氏を講師に迎え、「山の記録映画に見るカメラワーク」と題した講演と「白

き氷河の果てに」１９７７年Ｋ２登山隊の記録映画を鑑賞した。映画を通して人間を見てほしい、という講師の説明が説得力を持った素晴らしい作品であった。《公益的事業》（参加者60名）

＊8月27日（土）～28日（日）恒例の奥鬼怒での夏山山行と懇親会。奥日光の隠れた名滝「赤岩滝」探勝コースから11名、女夫淵からのハイキングコースから6名の、計17名が奥鬼怒温泉郷の加仁湯に集合、名湯で疲れを癒し、懇親会では登山談義に花が咲いた。翌日は鬼怒沼山へのハイキング組と、湯沢噴泉塔探索組に分かれてそれぞれを楽しい山行を行った。（参加者17名）

＊10月10日（月・祝）秋山山行として、日光連山の展望台である前日光高原の古峰ヶ原へ出掛けた。好天に恵まれ紅葉には少し早かったが絶好のハイキング日和であった。所々にある勝道上人の修行の遺蹟を巡りながら方塞山で昼食をとり、往路を戻った。（参加者15名）

＊10月29日（日）第３回「ヒマラヤの集い」講演会。ネパールでボランティア活動をしている半田好男氏による「社会貢献の基礎は山にあり～岳人教師のネパール支援」と題した講演会を開催した。教師であり登山家でもあった氏は、ネパールでの海外青年協力隊に参加、このことがその後20年に及ぶ識字教育ボランティアのきっかけとなっている。ボランティア団体の方がネパール衣装を着てお手伝いしていただいたり、ネパールコーヒーの試飲をしたりして楽しい会を開催できた。《公益的事業》（参加者50名）

＊11月13日（日）秋季講演会。本支部の会員でもある蓮實淳夫氏を講師に迎え、「おくのほそ道の山」と題して講演をいただいた。芭蕉の歩いた「おくのほそ道」全行程を10年の歳月を費やして徒歩で歩き通し、この旅を通して「おくのほそ道」に登場する山を全部登山するというテーマであった。芭蕉の詠んだ俳句の解説やエピソードを交えた登山報告は、格調の高いものであった。《公益的事業》（参加者41名）

＊1月28日（土）、29日（日）冬山山行・新年会を群馬県の草木湖のほとり、「サンレイク草木」を会場に開催した。初日は富弘美術館の見学、学芸員から館内の展示について説明を受けた後に星野富弘氏の水彩画を鑑賞した。事故による後遺障害で不自由な体になった氏が、口に筆をくわえ、文字と絵を描いた作品の数々は、私たちに生きる素晴らしさと勇気を与えてくれるものであった。その後宿舎に移動し、新年会を開催、2次会も大いに盛り上がった。

翌日は、全員で熊鷹山登山に向かった。晴天ではあったが時折雪が舞い強い風が吹くという寒い一日であった。登山口への林道も一部の車が積雪によりスリップして上ることができなかったりしたため、不死熊橋の登山口発は9時50分と遅

れての出発となってしまった。中尾根を登り雪の登山道を十二山根本山神社へ参拝し午後1時50分に熊鷹山到着した。頂上には展望台の櫓があるが残念ながら日光連山方面は眺望がきかない。帰りは石鴨林道をひたすら下り不死熊橋の登山口に3時20分に戻った。標高の低い山であったが、積雪、風雪などに見舞われ冬山らしい山行ができた。（参加者19名）

本支部も少しずつだが所帯が大きくなりつつある。本年度も会員の期待にそえるよう、アルパインクラブとしての登山活動、会員相互の親睦を図る行事、そして地域に貢献する公益的事業の3本柱で充実した活動を活発に進めていく予定である。特に次年度は、子供たちに登山の素晴らしさや楽しさを感じてもらう「親子登山教室」を開催する予定である。地域に根付いた山の会として後進の育成にも尽力したいと考えている。

また、「山の日」制定に向けても、清掃登山などの行事や講演会の開催などの公益的事業を通して、積極的に取り組んで行くつもりである。

（渡邉　雄二）

■茨城支部

（はじめに）

当支部は2007年（平成19年）6月に全国で27番目の支部として、21人の会員で発足したが、現在33人となりほぼ隔月の講演会および山行を中心に意欲的にクラブライフを盛り上げてきている。すなわち今年度は創立四周年を迎え6回の講演会および4回の野外研修会と10回の支部山行および第3回の海外山行を実施した。また特別山行として第5～8回の自閉症者協会への登山支援を行った。

（講演会）

1. 第20回「山つくりから始まる水質浄化」奥井登美子会員
長年の霞ヶ浦浄化への取り組みの歴史について熱意のあるご講演をいただき聴衆に深い感銘を与えた。（11年4月）
2. 特別セミナー「登山と地図の見方」星埜由尚会員〈支部長〉
「今西錦司さんのカラコルム探検の頃」長岡正利会員（4月）
3. 第21回「間宮林蔵の生涯と業績」間宮正孝氏〈第8代当主〉（6月）
4. 第22回「インド北部のチベット文化圏」長岡正利会員（9月）
5. 第23回「ナノテクノロジーの科学と技術について」奥井清会員〈支部長代行〉（11月）
6. 第24回「全てがスムーズに行かなかったボリビア紀行」川久保利通会員（12年1月）

（野外研修会）

1. 第7回「茨城県民の森・春の植物観察」（8人参加　11年

5月）
2. 第8回「国営ひたち海浜公園・海浜植物と海岸林観察」（3人参加　9月）
3. 第9回「南会津・大嵐山登山とキノコ狩り体験教室」（10人参加10月）
4. 第10回「茨城県北部・陰陽山の自然観察会」（6人参加　11月）

（支部山行）
1. 第22回　茨城県北部・熊野山～高塚山縦走（3人参加　4月）
2. 第23回　山梨・権現山～甲東不老山縦走（6人参加　4月）
3. 第24回　茨城県中部・きのこ山・足尾山・丸山（2人参加　4月）
4. 第25回　アルプス・剱岳（6人参加　8月）
5. 第26回　南アルプス前衛・七面山（3人参加　10月）
6. 第27回　十和田山、焼山～八幡平～茶臼山縦走（8人参加　10月）
7. 第28回　大源太山（2人参加　11月）
8. 第29回　古瀬富士、小瀬富士、小舟富士、雷神山（4人参加　11月）
9. 第30回　茨城・赤澤富士～金幣山（4人参加　12月）
10. 第31回　新田山（3人参加　12年1月）

（第3回海外山行）
11年6月24日～7月18日にわたる南米ボリビアのサハマ峰・イリマニ峰への埼玉・茨城合同登山隊に川久忠通会員が参加し無事帰還した。

（第5～8回特別山行）
茨城県自閉症協会への協力支援として、次の4回にわたる特別山行を実施した。
1. 第5回　筑波山登山（6月4日）23人の参加者に4人の会員で協力。
2. 第6回　筑波山登山（6月19日）12人に対し5人の会員で協力。
3. 第7回　三国山下見登山（7月2～3日）5人の会員が参加。
4. 第8回　茨城県自閉症協会協力登山（7月31日、8月1日）。46人の参加者に対し9人の会員で協力

（第6回、3支部〈千葉、栃木、茨城〉合同懇親山行）
12年2月11、12日に千葉支部主催により、南房総市富浦町の「大房岬少年の家」において講演会および懇親の集いがあり、およそ50人の仲間とともに盛り上がりをみせた。翌日は「千葉県立館山野鳥の森」を約2時間にわたり散策し、富士山および東京湾を眺望しながら相互の交流を深めることができた。当支部より10人が参加した。

（浅野　勝已）

東京多摩支部

実質2年目となる2011年度（平成23年度）は、組織を充実し将来への展望を開く1年と位置づけてスタート。1月に支部活性化プロジェクトを立ち上げた。新入会員の増加、多摩地区在住会員の支部加入、会員の行事参加促進などを課題とした。6月には財務委員会、安全委員会を設置した。財務委は予算と決算の一体化を図る。安全委は緊急時の連絡網の構築、山岳保険加入状況の確認、救援基金・積立金の設置、安全啓蒙活動などを目的とする。

11月、新入会員オリエンテーションを開催、行事への参加と委員会活動への参画を図った。また支部活性化プロジェクトから「東京多摩支部活性化への提言」が出され、各委員会の活動に反映するとともに、この提案を受け、「初心者登山教室プロジェクト」を発足させることとした。

【現況】

会員数　24年2月末日現在239人（前年比14名増）、新規入会者24名、退会者10名（物故者2名を含む）、会員平均年齢69・4歳

【主な活動】

1. 東京都県分境嶺踏査山行（3カ年計画の第2年度）　4回、延べ参加者165名

＊第6回　5月14日（浅間峠～笛吹峠）参加46名（会員27名、一般19名）

＊第7回　6月19日（深山橋～三頭山）参加38名（会員24名、一般14名）

＊第8回10月1日（槇寄山～三頭山）参加41名（会員28名、一般13名）

＊第9回　11月26日（笛吹峠～槇寄山）参加40名（会員29名、一般11名）

2. 山行　4回　延べ参加者42名

＊7月30、31日　日光白根山　参加12名

＊12月17日　高川山　参加14名

＊1月28日　宝登山　参加10名

＊2月18日　入笠山　参加6名

3. 自然観察会　5回　延べ106名参加

＊4月12日　小河内峠越え&ノラボウ菜摘み　参加19名

＊5月7日　国立市立第四小学校高尾山ハイキング引率　参加37名（小学生12名、育成会・父兄12名、会員13名）

＊6月16、17日　三ツ峠山アツモリソウ観察と保護活動　参加11名

＊8月9日　御岳山レンゲショウマ観察　参加21名

＊1月10日　高尾山シモバシラ観察　参加18名

4. 総会・評議員会

＊4月22日　評議員会　出席16名
＊5月28日　通常総会　出席168名（当日出席51名、委任状117名）

5. 幹事会、委員会、プロジェクト活動
＊幹事会　10回開催
＊総務委員会、IT委員会、広報委員会、集会委員会、山行委員会、自然保護委員会、安全委員会、財務委員会の八委員会で延べ57回開催。
＊支部活性化プロジェクト、規約改正プロジェクト、初心者登山教室プロジェクトの3プロジェクトで延べ6回開催。

6. 講演会　2回　延べ225名参加
＊10月17日　「山を眺める楽しみ」参加127名（一般84名、会員43名）
＊1月29日　「極北・未知への挑戦」参加98名（一般29名、会員69名）

7. 懇親会　4回　延べ162名参加
＊5月28日　総会後懇親会　参加45名
＊8月27日　納涼ビアパーティ　参加26名
＊1月29日　年始晩餐会　参加75名
＊3月3、4日　スキー&スノーシュー　参加16名

8. 新入会員オリエンテーション
＊11月1日　41名出席（新入会員21名、会員外1名、主催者側19名）

9. サテライト・サロン
＊立川、町田、吉祥寺、花小金井、八王子・日野の5か所で延べ22回開催。参加者総数386名

10. 広報
＊会報誌「たま通信」4～7号　4回発行
＊アニュアルレポート2011　7月作成
＊ホームページ　月4～5回更新
＊メールマガジン　52回発行　登録者125名

（山本　憲一）

■埼玉支部

2011年度（平成23年度）通常総会を4月2日（土）、埼玉会館（浦和）3C会議室（けやき）集会室で開催。埼玉支部会員34名出席（委任状59名）。石橋支部長を議長に選出し、22年度事業報告及び決算報告、23年度事業計画及び予算案の承認を得る。

＊4月14日（水）支部委員会　10名出席
障害者登山を4月17日、日和田山で実施。障害者19名を含む63名参加。総会記念山行の両神山は26名の参加があり、白井差口から全員登頂できた。支部会友制度を導入の検討。埼玉

支部内にアルパインスケッチクラブを設立する。

＊5月12日（水）支部委員会　11名出席
森つくりプロジェクト、埼玉県森林サポートクラブに埼玉支部が団体会員制度で入会し、活動を強化する。
埼玉支部の会友制度導入について検討を開始。

＊6月9日（水）支部委員会　11名出席
埼玉支部報第3号を発行。
四季の山　6月11、12日　安達太良山福島支部との合同登山で埼玉支部従七名、福島支部10名が参加。
6月15日　第3回安全登山講習会は城所邦夫さん講演　「夏山登山の山岳気象」を開催　91名参加。

＊7月14日（水）支部委員会9名出席
四季の山　7月30、31日　山研泊で焼岳登山

＊8月11日（水）支部委員会8名出席

＊9月8日（水）支部委員会10名出席
9月14日　シンポジウムを開催。内容は「埼玉の自然を知ろう！」　26名参加
9月9日～18日　ジャワ島スメル山登山　9名参加

＊10月13日（木）支部委員会12名出席
10月19日　第4回安全登山講習会を惠　秀彦さんの講演で「山のファースト・エイド」を開催し、44名参加
四季の山　10月29、30日　秋の会津田代山・荒海山登山の参加者は16名。

＊11月10日（木）支部委員会9名出席
新埼玉支部リーフレットを作成した。支部報第4号に同封して全会員に郵送する。
9月25日　第2回埼玉支部森つくり活動に6名が参加し、埼玉森林サポータークラブと連携して実施。
埼玉支部の会友制度について規約文章を作成した。正式には4月の総会で決定。

＊12月8日（木）支部委員会11名出席
本部より埼玉支部のＨＰを本部ＨＰとのリンクの相談があり堀川さん経由で了解した。
12月10、11日　忘年山行は参加者28名で清掃登山を実施した。講演は大山氏、松本敏夫氏、田尻氏。

＊1月12日（木）支部委員会13名出席
1月28日　第5回安全登山講演会を埼玉県山岳救助隊・飯田副隊長を講師に迎えて開催　参加者65名。
1月14日　新年支部懇談会を開催。参加者は31名で会員の懇親と各委員会の年間計画案を説明する。

＊2月9日（木）支部委員会13名出席
四季の山　冬山は担当田尻さんで嬬恋山荘／湯ノ丸山で18、19日に実施。8名参加
2月12日　第1回安全登山講習会「ＡＥＤを用いた心肺蘇生

術」渡邊浩講師で開催。14名参加
＊2月23日（木）臨時部委員会12名出席
日本山岳会の公益社団法人への移行に伴う各支部の規約の変更を検討し、埼玉支部規約案を作成した。
支部報第五号を発行

（富樫　信樹）

■千葉支部

2011年（平成23年）5月22日、千葉市において定例総会を開催し、10年度の事業報告及び決算報告、11年度の事業計画案及び予算案が提案通り承認された。今年度も支部の基盤作りを最優先と考え会員・会友同士の親睦を第一義とした諸山行や懇親会、来年度に迫った新公益法人化に向けた公益事業活動としての小笠原自然観察会及び継続事業である房総半島分水嶺踏査等を実施した。年度末会員数は132名（含会友33名）で主な活動は次のとおりである。

1. 山行
＊5月21日（総会記念山行）笠森グリーンルート
＊6月11日（新緑山行）岩殿山
＊9月17、18日（夏山山行）日光高山
＊10月23日（秋山山行）大菩薩峠
＊11月1～6日（5周年記念自然観察会）小笠原諸島
＊11月26日　石尊山
＊12月11日（忘年山行）丹沢・大山
＊12年1月14日（新年山行）布良大山
＊3月3日（春山山行）安房高山

2. 房総半島分水嶺踏査
2009年10月第1回長柄町六地蔵をスタートに、今まで計21回の活動を実施、延べ参加人数は260名、踏査予定コース全体の約3分の2を踏査した。このうち2回は一般県民にも参加を呼びかけ公益活動の一端を担った。引き続き来年も継続実施する。

3. 懇親会、講演会
＊5月22日総会記念講演会「アルバータのピッケル」、芳賀孝郎氏
＊8月11日　夏期ビールパーティ　船橋ビール園
＊12年2月11、12日　千葉・栃木・茨城3支部合同懇談会。千葉支部担当で南房総・大房岬少年自然の家で開催。

5. 支部だより　年4回発行

6. 会議等
通常総会5月22日、支部役員会11回開催。

7. 本部および他支部行事参加
自然保護全国集会、支部長会議、事務局担当者会議、年次晩餐会。宮城支部担当の全国支部懇談会において12年度は千

葉支部担当を発表。

8. 山の日イベント

講演会、分水嶺踏破参加の一般県民、会員に対しパンフレットを配布、広報活動を行なった。

（諏訪　吉春）

■越後支部

1. 2011年度（平成23年度）行事報告

＊4月6日　関川村で「藤島玄山岳文庫」の写真地図資料の区分け整理実施。（図書委員会）

＊4月9日　長岡市で新潟県山岳協会の23年度評議員会（総会）に参加。（県山協委員会）

＊4月17日　新潟市で支部機関紙「越後山岳№12」の企画会議開催。（越後山岳編集委員会）

＊4月23日　長岡市で委員長会議開催。（総務委員会）

＊5月22日　糸魚川市での「第23回海のウェストン祭」を後援。（事業委員会）

新潟市で新潟県山岳協会の「自然保護研修会」に参加。（県山協員会、自然保護委員会）

＊5月28日　十日町市大巌寺高原で支部役員会を開催、23年度支部総会を開催。（総務委員会）

出席者数38名、委任者数133名、合計171名（支部会員総数226名、有効出席率76％で成立）　①22年度事業報告・会計報告　②23年度事業計画・予算案　③支部会則改正（支部会費徴収開始）　④役員改選（退任4名、新任4名）等について審議承認された。

＊5月29日　親睦登山・天水山（1088m）（上越地区委員。事業委員会）

雨天のため山行を中止し、上越地区の七澤恭四郎委員により山麓史跡巡りを行なう。

＊6月1日　新潟市で支部報3号の発行企画会議。（広報委員会）

＊6月11、12日　福岡市での日本山岳会23年度自然保護全国集会に参加（自然保護委員会）

支部自然保護委員会として櫻井昭吉委員長と吉田理一委員の2名参加。

＊6月12日　長岡市で第1回委員長会議開催。（総務委員会）

＊7月20日　「越後支部報（第2号）」を発行。（広報委員会）

＊7月23、24日　津南町にて「第1回中部ブロック4支部交流会」を開催。（事業委員会）

越後支部主催により「ニューグリーンピア津南」を会場にして、総勢48名（信濃支部12名、山梨支部11名、静岡支部10名、越後支部13名）の参加者があった。16時より山崎支部長の歓迎の挨拶後、合同会議で「今後の支部交流のあり

方」を主題に審議に入り、今後は越後→信濃→山梨→静岡の輪番制で毎年継続開催することで合意した。18時30分より懇親会が始まり、各支部持ち寄りの地酒で交流を深めることができた。翌日苗場山小松原湿原への親睦山行を行なったが、小松原湿原は新潟県でも自然保護が徹底された特別区域であり、天候にも恵まれ素晴らしい湿原や池塘に十分満足していただき成功裏に終了した。（会報「山」２０１１年９月号　№７９６に掲載）

＊7月25日　弥彦村にて第54回高頭祭を開催。（事業委員会）来賓及び講師として平山善吉名誉会員（第21代会長）にご来山いただき、支部参加者約60名が弥彦山大平園地の高頭仁兵衛翁寿像碑前に集い開催された。祝詞、玉ぐし奉典、ご献酒の儀式後、平山元会長の「高頭仁兵衛と日本山岳会」と題して講演をしていただいた。その後、弥彦山山頂へ移動し奥の院にて新潟県登山祭、弥彦松明登山祭も例年通り併催実施された。山頂18時20分松明点火・下山開始。20時弥彦神社到着、神事の後弥彦駅前まで行進、体育館にて懇親会で幕を閉じた。また、同日自然保護委員会主導による弥彦山登山道清掃登山を実施した。（会報「山」２０１１年９月号　№７９６に掲載）

＊10月2日　長岡市にて第2回委員長会議開催。（総務委員会）

＊10月23日　新潟市にて総務委員会開催。（総務委員会）

＊11月27日　新潟市にて総務委員会開催。（総務委員会）

＊12月10日　新潟市にて第2回役員会を開催、及び平成23年度越後支部年次晩餐会開催。（総務委員会）

会場は新潟東映ホテル、支部会員88名が参加。開会宣言の後、3名の物故会員への黙祷をささげた。支部会務報告で12月3日の本部年次晩餐会で室賀輝男会員が新しく名誉会員に推薦されたこと、また永年会員として三留仁、高橋庄一、上野康二の3氏が新しく永年会員になったことが報告された。

第1部は記念講演会で、日本山岳会会員の鹿野勝彦氏による「ヒマラヤ縦走～私たちが目指したチームとしての登山～」と題して講演をしていただく。

第2部の晩餐会では、山崎幸和支部長の藍綬褒章受章と遠山実会員の環境大臣表彰受章の紹介があり、今年の越後支部としてはうれしいニュースが続いた。この支部晩餐会は越後岳人のサロンとしての機能を遺憾なく発揮し大変盛会であった。

＊1月20日　「越後支部報（第3号）」を発行。（広報委員会）

＊3月11日　長岡市にて第3回委員長会議開催。

＊3月25日　弥彦山での雪割草パトロールを実施。（自然保護委員会）

2. 11年度支部会員動向報告

新入会員5名、物故会員3名、退会会員7名、会友→支部会員編入者3名。

現支部会員224名、会友2名。

支部役員20名（支部長1名、副支部長2名、事務局長1名、委員14名、監事2名）　**（桐生　恒治）**

■信濃支部

1. 山行報告

＊4月24日　妙高山　中止

＊4月30日、5月1日　火打山

参加者＝原謙一、福井芳隆、東英樹

《行動概要》

4月30日＝7：45笹ヶ峰駐車場発―8：40黒沢着―9：55富士見平前着―10：55高谷池ヒュッテ着―昼食後12：00発―12：20火打山に向かうも雷雨のため進行中止し、高谷池ヒュッテに戻る　5月1日＝7：15高谷池ヒュッテ発―8：45笹ヶ峰駐車場着

・天候不良のなか実施したが、計画を遂行できなかった。

＊7月16～18日　槍ヶ岳

参加者＝二木裕子、原謙一、飯村富彦、鳥橋祥子、飯村悦子

《行動概要》

A隊（二木裕子、飯村悦子）　16日＝6：00中房温泉発―9：35合戦小屋着―11：30燕山荘着―16：00大天荘着　17日＝5：50大天荘発―9：00西岳着―10：45水俣乗越着―14：00ヒュッテ大槍着―15：00槍ヶ岳山荘着（B隊と合流）

18日＝4：00～6：00槍ヶ岳往復―6：30槍ヶ岳山荘発―9：00槍沢ロッジ着―11：00横尾着―14：30上高地着

B隊（飯村富彦）　16日＝14：20上高地発―16：30横尾着―18：30涸沢ヒュッテ着　17日＝5：20涸沢ヒュッテ発―7：20北穂高岳着―10：00南岳着―11：00中岳着―11：30大喰岳着―12：00槍ヶ岳山荘着

C隊（原謙一、鳥橋祥子）　16日＝上高地―槍沢ロッジ―槍ヶ岳山荘　17日＝鳥橋は槍沢ロッジから上高地へ下山。原は南岳を経て北穂高岳へ。

＊8月13～15日　穂高岳　中止

＊9月10、11日　白山

参加者＝金井伸、斉藤（金井氏の職場友人）、二木裕子、関（二木氏　友人）、東英樹

《行動概要》

10日　5：25安曇野支所発＝8：30白水湖畔ロッジ着―8：53登山口の小屋着―11：55 1810m着―13：40室堂セン

ター着　11日＝5：00室堂センター発―6：15御前峰着―6：49大汝峰着―7：30前室堂着―8：15室堂センター着―11：24白水湖畔ロッジ着

＊10月15、16日　鳳凰三山

参加者＝原謙一、飯村富彦、東英樹

《行動概要》

15日＝6：30渚ライフサイト発―8：40夜叉神峠登山口着―9：42夜叉神峠着―11：50苺平着―12：40南御室小屋着―13：00薬師岳小屋着　16日＝6：38薬師岳小屋発―6：48薬師岳着―7：10観音岳―8：00賽ノ河原着―8：25地蔵岳着―10：00白鳳峠着―11：30白鳳峠入り口着―11：42広河原バス停着―夜叉神峠登山口

・15日は雨中の行動。16日は朝まで雨が降るが、のち移動性高気圧により晴天となる。紅葉はいまひとつであった。

＊11月6日　宝剣岳、木曽駒ヶ岳　中止

＊2月4～11日　パプアニューギニア・ウィルヘルム山

参加者＝原謙一、福井芳隆、穂刈康治、奥原宰、植松晃岳、東英樹、百瀬尚幸

《行動概要》

4日＝成田発　5日＝ポートモレスビー―ゴロカ（ゴロカマーケット、JKマッカーシー博物館見学。バードオブ・パラダイス・ホテル泊）6日＝ゴロカ―ケグスグル（ベティーズ・ロッジ泊）　7日＝8：30ロッジ発―12：05Aフレーム着（＝約3600m地点の小屋。ここまで決められた場所で5回休憩。昼食後、順化を兼ねアウンデ湖畔まで散歩）8日＝1：00Aフレーム発―7：45ウィルヘルム山頂着―15：24Aフレーム着。雨をついて真っ暗闇のなかを出発。東が明るくなる頃、雨はやみ視界が開ける。頂上からは、はるかパプアニューギニアの山々が見渡せた。下りは上々の天気で、血の池、アウンデ、ピウンデ湖がよく見渡せた。4000mのトラバースには少しこたえる。9日＝Aフレーム―ベティーズ・ロッジ―ゴロカ（長丁場の1日）　10日＝ゴロカ―ポートモレスビー―ロロアタ島（日中シュノーケル、ディナーでシンシンダンスを見る）　11日＝ロロアタ島―ポートモレスビー―成田

＊3月3、4日　スキー山行（妙高高原・杉野原スキー場石田館、妙高ホテル）

参加者＝平林節生、飯村富彦、宮川良雄、奥原宰、植松晃岳

2. その他の活動

＊4月17日　通常総会（松本市内ホテル）

参加者＝104名（委任状含む）

議事提案どおり可決、懇親会は例年同様盛大に行われた。

＊6月4、5日　ウェストン祭

参加者＝本部会長ほか本部関係者の方々多数、信濃支部関係者51名。
田部井淳子氏を迎え「世界の山々をめざして」の記念講演をいただく。
＊7月23、24日　中部ブロック四支部交流会（新潟県津南町）
参加者＝13名　23日＝交流会　24日＝苗場山・小松原湿原へ
＊11月20日　山岳フォーラム2011　支部長ほか多数出席
＊1月15日　新年例会（松本市内ホテル）49名出席

（垣内　雄治）

■山梨支部

山梨支部（支部長＝遠藤靖彦、会員79名）は、主な事業として、①山梨二百山の踏査、②第30回深田祭、③第7回山の博覧会―山を知ろう 山へ行こう―の開催、④第52回木暮祭、⑤第1回中部ブロック交流会のほか、機関誌『甲斐山岳』第4号の発刊、定例支部山行などを行った。
①山梨県は、平成9年「山梨百名山」を制定したが、すでに10年以上経過している。登山者の要望などもあり、さらに百山を選定すべく引き続き実施踏査行っていく。
②深田祭は、本年は第30回記念として4月22日前夜祭を韮崎市で、23日碑前祭を深田氏終焉の地「茅ヶ岳」山麓の深田記念公園で行った。多くの登山者が茅ヶ岳記念登山をすませてから碑前に参集し、遺徳を偲んだ。
③山の博覧会は7回目となり、7月9日に実施した。県内外から四百名が参加し、会場の山梨学院メモリアルホールはほぼ満席だった。本年のテーマは「南アルプス特集」。山梨県の「やまなし山の日」および日本山岳会「山の日」関連プロジェクトの一環である。講演は3つ。静岡大学増沢武弘教授の「南アルプスの成り立ちと世界遺産」、国立環境研究所名取俊樹主任研究員の「キタダケソウの生態と未来」、山梨県早川町辻一幸町長の「南アルプスと生きる」。最後に山岳映像「雪の赤石岳」「雲表の山々　南アルプス」を上映した。入場者には「山の日」制定協議会のパンフレットを配布し、「山の日」をPRした。毎回山梨学院大学の絶大な支援と協力をいただいている。また、山梨・長野・静岡の関係市町村は連絡協議会を設立して南アルプスを世界自然遺産に登録しようと運動を始めた。来年度も「南アルプス特集」第2弾として7月7日（土）に開催する予定である。
④10月16日には第52回木暮祭を北杜市須玉町金山平で開催した。木暮理太郎生誕地の群馬県太田市から「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の会員20名余も参加した。碑前祭では、川辺柳一氏が「木暮理太郎と金峰山・富士山山岳信仰」と題

して講演した。その後地元増富ラジウム峡観光協会の用意した秋の味覚「きのこほうとう」いただきながら交流を深めた。

⑤7月23、24日第1回中部ブロック交流会（越後・信濃・山梨・静岡支部）が越後支部主管により新潟県津南町および苗場山小松原湿原で開催された。総勢46名が参加した。来年度は信濃支部が担当し、上高地・焼岳で開催する予定。

なお、東京多摩・埼玉支部との3支部交流会は2度雨天順延になったため、24年4月に雲取山で実施予定である。

（古屋　寿隆）

■静岡支部

2011年度（平成23年度）の活動

4月13日（水）18時30分から静岡労政会館視聴覚室にて静岡支部通常総会を出席42名、他委任状出席を含め過半数以上の参加で開催した。長田支部長代行の開会の辞で始まり、久保田支部長の挨拶。議長に支部長を選んで議事運営を行った。

22年度事業報告、会計報告並び監査報告が承認され、23年度事業計画案、予算案が承認された。当年度では公益法人化を目指して公益事業としてハイキング・セミナー（実技）を実行することが承認された。終了後が静岡駅近くの居酒屋「根菜舌」で多くが参加して懇親を深めた。

【公益】

ハイキング・セミナー5回を実施した。一昨年とその前年に座学の登山教室を実施したことはあったが実技を行なったのは今年度が初めてであった。

＊第1回は5月15日（日）静岡市民にとってはなじみの山である竜爪山の少し長いコースを歩いてもらうことにして行なった。セミナー生19名に対して指導者側の会員は支部長以下8名が担当した。幸い好天に恵まれて、静岡駅―（バス）―俵沢―俵峰―竜爪山（薬師岳1051m、文殊岳1041m）―若山―牛妻―（バス）―静岡駅コースで予定通り実施できた。

＊第2回は6月12日（日）に入山者が少なく支部で整備したルートを歩くということで竜爪山の北の富士見岳（1078m）登山を行なった。曇りがちであったが降られることなくセミナー生8名と支部長以下7名で担当して実施した。

＊第3回は2000m級の山を登るということで安倍奥の第三峰・八紘嶺（1917・9m）登山を行った。マイクロバスを借りたが人が充分集まらず経済的には大変であった。山頂の手前から降られて濡れ、下りではやや強い雨に遭い今回は大変な山行であった。セミナー生10名と6名の担当で実施した。

＊第４回は11月27日（日）、安倍奥の山で遭難の多い山、見月山（１０４５・９ｍ）で遭難しないように歩くというテーマで実施した。快晴の中、廣澤会員の適切なリードで登頂後、目的地に正確に下山した。セミナー生は最多の25名で３班に分けて、支部長以下11名の会員が担当した。

＊第５回は干支の山、バリエーション・ルートを歩くというテーマで２月19日（日）に実施した。28名の申込みがあったがキャンセルが相次ぎ結局18名となり、セミナー生を３班に分けて12名で担当した。バリエーション・ルートに入る前、スタート地点から読図、地図で現在地を確かめながら進んでいった。第４回、第５回では富士山登頂超１２００登の實川欣伸会員も参加して昼食後は實川会員の講話なども行い。終了後は参加者から良い感想が述べられた。

【共益】

＊山行など

①定例の懇親山行を11月12日（土）、13日（日）に行なった。西部地区支部会員担当ということで１日目、浜松市の奥・山王峡温泉「しらかば荘」に集合し、懇親会を行なった。２日目は、常光寺山（１４３８・５ｍ）に登った。幸い好天に恵まれ真っ盛りの紅葉を充分に楽しむことができた。参加人員は13名であった。

②みかん狩りを12月11日（日）に、由比・豊島農園で実施した。会員26名、他５名の参加で、細田会員のキムチうどん、水野会員と豊島会員の令嬢によるオカリナの演奏などもあり大盛況、大好評のうちに終了した。

③次年度から会員山行を増やそうという声がありその魁として、３月23日（金）夜～25日（日）に有元会員の故郷・日本三百名山の那岐山登山を３名の参加で行なった。24日朝方まで降っていた雨も弱くなり、登山の前に登山口近くにある法然上人が幼少期に修業した菩提寺を訪れ天然記念物の大銀杏と本堂を見た。Ｃコース登山口から登り標高１０００ｍの大神岩の下から雪に降られながら登り約２時間で１２５５ｍの山頂に立った。当日は「那岐山麓山の駅」のコテージに宿泊。翌日は津山洋学資料館、津山城址・鶴山公園を見て帰静した。

＊新年会

12年（平成24）年１月15日、静岡駅南の静岡市駿河区南町「東海軒会館」で正午から開催した。久保田支部長の挨拶で久しぶりの海外登山でモンゴル・アルタンウルギー山登頂、ハイキング・セミナーで見月山登山で正確にピンポイントに下山に導いた廣澤会員の話、富士山１１１１回登頂實川欣伸会員の年次晩餐会での会長特別表彰の話があった。新入会員の紹介と挨拶、入会希望者の紹介と挨拶があり、その後乾杯となった。宴会の初めに会友紹介で里見清

子会員、篠原豊会員の挨拶を受けた。また實川欣伸会員の富士山1225回登頂の支部長特別表彰を行ない、記念品を贈った。長田支部長代行の絶妙の司会進行で参加者全員がひと言話す機会を得、和気あいあいのうちに閉会の3時となった。これまで最多49名の参加であった。本来の予定では3月に98歳を迎えられた荻野恭一会員も参加の予定であったが当日朝体調を崩され欠席となったのが残念であった。前々年36名、前年の39名よりまた多くなった。

解散後、多くの会員が静岡駅ビル内の「銀座ライオン」で2次会をもった。

＊会報

23年5月『不盡』69号発行

11月『不盡』70号発行　モンゴル・ウルタンアルギー山登山特集号

＊定例会

5月11日（水）13名、6月8日（水）15名、7月13日（水）14名、9月14日（水）11名、10月13日（水）24名、12月14日（水）12名、2月8日（水）10名、3月14日（水）11名

＊ビア懇親会　8月10日（水）静岡駅ビル「パルシェ」屋上11名

（有元　利通）

■東海支部

東海支部は2011年度（平成23年度）支部設立50周年を迎える年でもありボランティア活動や登山教室の充実など通常の活動を続ける中で若い世代への対応、公益法人改革など新しい流れへの対応なども積極的に進められた。一方、冬期ローツェ南壁完登など数々の業績のあった田辺治支部員や東海支部設立に携わった支部常任評議員中世古隆司氏などが前年までに亡くなられた。これに続き当年は支部設立時から支部活動に貢献のあった加藤幸彦氏も亡くなり、東海支部はここ数年貴重な人材を失なっている。

【支部創立50周年事業】

平成23年が支部設立50周年になるため数年前から記念行事を進めていたが、本年は締めくくりである記念式典を始めいくつかの行事を盛大に開催することができた。

1．式典

11年11月5日（土）に今池ガスビルにおいて実施。

吉永英明日本山岳会副会長をはじめ多数の来賓のご祝辞、支部設立功労者として石原國利さんへの感謝状贈呈に続き、記念講演として山岳ガイドであり、日本のビッグマウンテン・スキーヤーの第1人者である佐々木大輔氏の映像を交えた講演を行なった。氏の素晴らしいス

キー技術による映像は参加者に大きな感銘を与えた。第2部アトラクションでは、大桑村アルプホルン・グループの演奏に続き、スイスアンサンブル・エンツィアンの素晴らしい歌声に会場は山の雰囲気に包まれた。

2. 海外登山隊の派遣

①学生によるルンポ・カンリ登山隊の派遣を決定していたが隊長が負傷したためやむなく中止とした。いずれ同種の登山隊を派遣する。

②第11次インド・ヒマラヤ登山隊。内容については別に記載。

3. 海外トレッキング

支部員・支部友が参加できる海外トレッキングで6コースを実施した。

【第11次インド・ヒマラヤ登山隊派遣】

1988年にヤン峰に派遣して以来10次14隊をインド・ヒマラヤの6000m峰に派遣してきた。第11次隊は11年7月に派遣した。今回はラホール地区カルチャ・ナラ川流域上部の600m級未踏峰・無名峰に登頂し、チェマ峰と命名した。

【50山ラリーの展開】

支部創立50周年の記念事業の一環として50山ラリーを実施した。内容は日本100高山の内50高山や東海支部選定の花の山から50山を登るなど、指定された9コースでそれぞれ50山を登ることを目標とするラリーだ。期間は09年1月から11年9月までで登録者153人のうち50山のいずれかのコース達成者は65名となった。このなかで栗木洋明支部員は9コースすべて達成し、この期間に登った山は481座61万377mとなった。

【第2回いきものにぎわい企業活動コンテスト市民活動大賞受賞】

地球環境行動会議（GEA）などが主催する表記の賞を猿投の森づくりの会が受賞した。表彰はGEA2011の席上で皇太子殿下、野田総理大臣以下関係閣僚も出席する中で行なわれた。

【ボランティア活動の拡大】

従来から知的発達障害児の集まりであるスペシャル・オリンピックス（SO）愛知の支援登山を行なってきたが本年も鈴鹿・朝明渓谷にて1泊登山を行なった。また、幼稚園児を対象とした親と子のふれあい登山を実施した。さらに視覚障害者支援登山にも取り組んだ。視覚障害者との登山により健常者自身も登山の意義を再認識することができ、継続的に取り組んでいくこととなっている。

（佐野　忠則）

岐阜支部

2011年度（平成23年度）

＊4月23日、奥美濃の石徹白高原「カルヴィラいとしろ」で総会を開催。総会に先立ち、日本山岳会監修の「マナスルに登る」というＤＶＤを鑑賞。50数年前のマナスル初登頂の様子が克明に記録されていて固唾を飲んで見入った。隊員の装備などを見ても隔世の感があった。総会は事業報告・決算、事業計画・予算が承認された。岐阜今西錦司賞は長年の功績が評価されて白木貞次氏が表彰された。

翌日の山行は毘沙門岳に2手に分かれ、「チャレンジコース」は石徹白下在所から5分程で峠川を渡り土場に駐車。林道が途切れた所で右側の尾根に取付いて尾根上に出る。予想以上に早く進み、待ち合わせの峠に1時間前に着く。急斜面は夏道が顔を出してこともなく頂上に着いた。「桧峠コース」はスキー場手前から左手の林道に入り尾根を回り込んだ所が登山口。急斜面を苦労して登ると平坦な杉林に変わる。尾根沿いに登りスキー場リフト降り場からは夏道が半分以上顔を出し快調に歩を進め、そして頂上。

＊5月8日、春期現地小集会は瓢ヶ岳～片知山へ縦走。市境に駐車してミツバツツジが咲く早春の中へ入る。瓢ヶ岳から南下して南岳へ。縦走する人が少ないのか背丈ほどの笹もしばらくすると膝くらいの高さに変わってきた。岩屋観音で手を合わせてから下る路傍の石仏達の表情を一体一体眺めていると疲れも和らぎ無事に口板神社に着いた。

＊6月5日、第4回今西錦司記念山行は西台山、タンポへ。樽見鉄道高尾駅先から水鳥横蔵林道に入り、のりこし峠に駐車。石灰岩が露出した急登の潅木地帯を抜けると展望のない西台山に着く。サラサドウダンの花の中を前山からひと登りすると目指すタンポ頂上へ。

＊6月11、12日に大町市にある陀羅拂小屋に泊まり白沢天狗山へ。下方から轟くモトクロス・レースの爆音を聞きながらアカヤシオが咲く痩尾根から天狗尾根に出ると眼前に爺ヶ岳が聳えていた。頂上の隅に「頂上標柱」を建植。

＊7月20日から27日にカナディアン・ロッキーの旅へ。ユネスコ世界遺産登録の4つの国立公園に毎日ハインキングに出掛け至福の時を過ごす。

＊7月27日、例会は野谷荘司山、三方岩岳へ。（Aコース）スーパー林道三方岩岳駐車場から遊歩道で三方岩岳に登り、稜線漫歩で野谷荘司山頂上。（Bコース）標高差１０００ｍの鶴平新道はハードでしかも風が無い稜線は暑い。野谷荘司山頂上から分岐に戻り三方岩岳向かう。

＊8月28日から30日に、夏期山行を総勢20名で奥穂高岳へ。山岳医療研究に協力して採血、酸素飽和度等の検査を上高地、穂高岳山荘、新穂高温泉で行った。

＊9月11日、例会で夕森山へ。最初の尾根に取り付いた辺りからヒルの洗礼を受ける。急な階段状の道を上り詰めると鉄製

の櫓が建つ頂上へ。

＊11月11日に山岳講演会を、「阿曽原から見た黒部渓谷」の演題で黒部渓谷「阿曽原小屋」経営者の佐々木泉氏を迎え開催。石が斜面を落ちた時は、葉っぱの潰れた匂いや石がぶつかったキナ臭い匂いがします。「なんでこんなキナ臭い匂いするんやろ」「なんでこの道できたんやろ」とか思ってください。「ワーきれい」と言うだけでなく、歴史とか地図とか勉強してから入って来れば本当の山の醍醐味を味わえるのではないか、と結ばれた。

＊11月19、20日に5支部山行。岐阜医療科学大学の加藤義博教授による「安全に登山する為に」講演会後、懇親会。翌日、紅葉の中を横蔵寺から華厳寺まで東海自然歩道を歩く。

＊12月11日に岩岳へ。雨が上がって山を見ると上の方はうっすらと雪が着いていた。山頂手前辺りの潅木の切り株が雪に隠れていたが、頂上では小春日和であった。

＊1月22日に相戸岳へ。頂上は高賀山、舟伏山、伊吹山そして奥美濃の山々が白銀を纏って迎えてくれた。

＊2月5日に烏帽子岳へ。日本海側の大雪に影響を受けたのか第4見晴らし台から胸高のラッセルを強いられて頂上へ。

＊2月25、26日に5支部スキー山行で猪臥山へ。前日に班編成、コース、工程を説明し万全を期した。当日は、南面の彦谷を班ごとにシール歩行。頂上からは北西尾根を滑降し小鳥峠で昼食。県道を畦畑集落まで再び滑降した。

＊3月11日に雪山訓練で大日ヶ岳へ。15人乗のゴンドラで一気に標高1550mへ。頂上で雪崩の危険、ビーコンの説明を受けた後、滑落停止、アイゼン歩行、トラバース歩行の訓練を行なった。

「権現の森林づくり」では、5月14日に「植樹祭」として県関係者、支援会社、岐阜薬大、一般参加を含め総勢80余名で権現の森林に登り、250本の植樹を行う。登山口にミズナラ、コナラ、ドングリ、ブナなどを750ポットに種蒔をし、来春の芽吹きに胸踊らせる。4月3日から12月4日までに、作業回数20回、延べ参加者数は240名を数えた。

そのほか、支部会報「岐阜山岳」を3回発行。自然保護全国集会、県内外山岳団体の事業に積極的に参加し、交流を深めた。

（今峰　正利）

京都支部

2011年度（平成23年度）の活動を報告する。

4月20日の総会で田中昌二郎新支部長を選任し、11年度の活動をスタートした。新支部長のリーダーシップの下、支部のさらなる活性化を目指し、多彩な事業計画に加え青年部の立ち上げ等新しい試みも始められた。また、今西錦司賞が、同志社大

学西北ネパール登山隊としてチャンラ峰に初登頂した小林博史ほか4名の会員に授与された。

今年度もシリーズ山行として、京都北山を中心とした「平日例会山行」、奥深い鈴鹿の山々の魅力を引き出す「鈴鹿の静かな山歩き」が行われ，延べ82名が参加して京都・滋賀の山々を歩いた。

5月は、春のスケッチ山行で頸城山地を訪れ、また、北山の今西錦司レリーフ前で先生を偲ぶ会を開催した。

7月には、19名の会員が参加する海外登山として、故梅棹忠雄名誉会員等による探検登山が行われた中国・北朝鮮の国境、長白山（白頭山）に行った。また、夏山山行として金峰山に行き、恒例の大文字山での納涼山行では他支部からの参加者もあり京都の夏を楽しんだ。

9月は、地元での中秋の名月山行に加え、遠く山形・祝瓶山に出かけお月見山行を行なった。また、広島支部との合同山行を滋賀の比良山で行い、旧交を温め、交流を深めた。

10月には、塚本珪一顧問による講演会「山の『自然学』、今西先生の『自然学』再考の時」を開催した。一般の「自然学」ではなく、自然を広く見、類型でない本物の自然を探し見よとされた今西先生の〈山と探検〉を基調とした未来志向について、再考し、伝承することが熱く語られた。

11月に能田成会員を講師として迎え、３５０年前に花折断層に起因する大地震で起こった大崩落の後を実地で観察する会を行ったのも新しい試みであった。

２０１２年1月には奈良・三輪山への初詣山行や京都での新年会を行い新年のスタートをきった。

2月、3月は、野麦峠スキー場でのスキー例会、猪臥山での岐阜支部主催による五支部スキー山行への参加、猿ヶ山でのスキー山行と雪を楽しむ活動を行なった。

例会山行に加え、自然保護部会が自然保護全国集会、全国森づくり協議会、森の勉強会への参加、京都北山でのヤマシャクヤクの保護、観察活動を行なった。

（中川　寛）

■富山支部

富山支部の２０１１度（平成23年度）総会は、4月8日富山電気ビルで21名が出席して開催、最初に東日本大震災の犠牲者と2月15日に急逝した高柳会員（前事務局長）の冥福を祈って黙祷した。今年度から事業の充実を図るため支部費の徴収を決定。総会の議事終了後富山県制作のＤＶＤ「未来に引き継ぐ立山の貴重な自然」を鑑賞、引続き懇親会に移った。会場で震災義援金を募り本部に送金した。

＊播隆上人ゆかりの地探訪（2年目）

一昨年から集中的に始めた播隆上人ゆかりの地を訪ねる企

画。まず7月初め修行の山・伊吹山登山にあわせて揖斐川町の歴史民俗資料館・一心寺（播隆開山寺院）、米原市の伊吹山文化資料館を訪問。7月20日には松本市の玄向寺と法蔵寺を訪ねて住職から直接お話を伺う。雨の山研に宿泊、翌日槍沢をつめて「坊主の岩屋」を経て槍ヶ岳山荘へ。翌朝ブロッケン現象に迎えられて開山の山・槍ヶ岳山頂へ。11月の5支部合同懇親山行参加の前には、美濃加茂市の祐泉寺、終焉の地の林家住宅を雨の中見学、帰途には岐阜市内の播隆開山寺院正道院を訪問。これら探訪記は支部会報に詳しく報告された。

＊第4回山岳講演会

公益事業として始めた支部会員による県民向け講演会。2月17日富山県民会館で、立山カルデラ砂防博物館学芸課長の飯田肇会員による「立山の雪、ヒマラヤの雪―雪の壁から氷河まで―」を開催。大雪で市街地の交通機関が混乱する中約五十名が参加。ヒマラヤ遠征での経験と対比した立山・剱の雪の降り方や気候変動のこと、さらに最近話題となっている日本初の生きた氷河認定に向けた雪渓調査等の研究成果に熱心に耳を傾けた。

＊平成23年度の例会山行や行事

5月14日　立山室堂からスキー滑降　2名
5月28日　高頭山登山道整備　5名
5月29日　第26回播隆祭（播隆上人顕頌碑前）支部会員9名と生家の会の方々等計25名。雨のため高頭山記念登山は中止。
7月2、3日　伊吹山　6名
7月19～21日　槍ヶ岳　山研～槍沢～槍ヶ岳山荘　5名
8月3日　例会（とやま市民交流館）11名　道正会員が講演「学校登山引率者研修について」、リコ・モンテで懇親会
10月23日　寺地山　五名　谷村副支部長復帰山行
12月9日　支部忘年会（とやま市民交流館）15名　石浦会員の播隆上人についての講演の後リコ・モンテで懇親会
1月22日　大品山　6名、前日立山国際Hで親睦会総会13名
3月3日　大乗悟山・笹津山　6名

＊本部及び他支部行事参加そのほか

自然保護全国集会、全国支部懇談会（栗駒山）2名、福井支部創立20周年記念祝賀会2名、5支部合同懇親山行（岐阜支部）6名、年次晩餐会4名、5支部スキー山行（岐阜・猪臥山）7名、物故会員は仲俣新一、退会2名、役員会5回、支部会報発行4回　**（山田　信明）**

■石川支部

石川支部は4月23日（土）、２０１１年度（平成23年度）定期総会を前年同様、白山市瀬波の「白山里」で開催し、前年度の

事業報告、会計報告の後、今年度の事業計画案、予算案等を承認した。なお、役員改選は、本年度はその時期ではないため実施しなかった。

本年度の事業計画では、中川支部長から「山岳会らしい公益事業」として昨年度発足した「ふるさと登山道整備事業」の継続発展と、魅力ある山岳会づくりに向けたヤング層の入会勧奨やクライミング山行等が本年度の重要事項として提案された。

また、このあと先の東日本大震災の被災地へボランティア支援へ向かう田中康典会員へ一同から被災地への支援金が寄せられた。

主な事業内容については以下のとおりである。

＊11年4月23日　２０１１年度支部定期総会　出席者22名（委任状20名）

＊5月21日　（公）ふるさと登山道整備兼新緑山行（順尾山～奥高尾山）　参加者7名

＊6月4日　（公）ふるさと登山道踏査権新緑山行（中宮山～大瓢箪山）　参加者11名
ロングコースにもめげず一同、安田二三男会員を中心に頑張る。

＊6月11日　自然保護全国集会　参加者1名

＊6月18日　（公）ふるさと登山道整備　（杉峠道保全）　参加者8名

＊7月28、29日　「軽登山靴倶楽部」との合同白山登山　生憎の雨天であったが高田和彦会員の案内で一同、満開の黒百合を楽しむ。参加者43名

＊8月6、7日　島々谷から徳本峠越え、山研集会　参加者20名

＊8月19～22日　夏山合宿（剱沢ベースキャンプ）　雨天のため源次郎尾根を諦め「熊の岩」手前で研修　参加者10名

＊10月1、2日　登山技術講習会（立山町・国立登山研修所）
木原清会員の指導により　ロープワーク、懸垂下降等を実地研修　参加者7名

＊10月15、16日　第27回全国支部懇談会（宮城支部）　参加者4名

＊10月30日　（公）自然観察会（小原峠～赤兎山）　一般参加者を含め埴崎滋会員を中心に秋の小原峠道を満喫する。参加者20名

＊11月12日　（公）ふるさと登山道整備（富士写ケ岳～火燈山）
大庭保夫会員を中心に紅葉の「不惑新道」を刈り払う。参加者10名

＊11月12日　福井支部創立20周年記念式典　参加者3名

＊11月15、16日　第11回5支部合同懇親山行（岐阜支部・谷汲山）　参加者3名

＊11月26、27日　山祭り　織田伸治会員により旧白峰村の馴染

みの民宿で今年1年を締めくくる　参加者11名
＊12月3日　年次晩餐会　東京品川プリンスホテル　参加者5名
＊12年1月14、15日　新春登山兼新年会（高倉山・吉野谷セミナーハウス）　関本邦晴会員企画により大いに盛り上がる　参加者25名
＊2月26日　（公）講演会「お天気の話」（深田久弥山の文化館）　元気象庁予報官多野正一会員が天気予報をわかりやすく解説　参加者50名
＊3月24日　カンジキ・雪洞山行（取立山）　参加者12名（金沢大学学生5名）
荒天で登山口手前で中止、会員の山小屋で地図と写真で机上研修
支部会報「峰」発行　「平成23年度第1～4号」

（前川　陽）

福井支部

2011年度（平成23年度）福井支部活動報告
＊4月12日、支部例会場にて役員会。
＊4月29日、葵会館にて出席者及び委任状を含め55名の参加で始まる。22年度事業報告・23年度の事業計画案・決算報告・予算案が提案され、全議案、原案通り承認された。
　その後、会員でもあり、平成17年に福井市自然博物館館長に就任した吉澤康暢氏に「白山について」の講演をしていただいた。氏のご専門は地質学で、環境省の自然公園指導員として活躍、著書に『日本の名峰24　白山・奥美濃・伊吹』（山と溪谷社）ほか。また35年前から白山や自然風景の写真を撮り続けていらっしゃる。
＊5月28～29日　前日は、泰澄ミニシンポが行われ、ビデオ上映や「今甦る伝説の僧・泰澄」と題してのコラム発表、翌日は一般の方も参加して泰澄が歩いた道をたどり、室堂にて泰澄祭。その後、野外コンサートが行われ、泰澄汁も振舞われた。
＊6月19日　森づくり及び散策路の整備。
＊7月23、24日　上高地（前穂高岳岩稜〈奥又白谷〉で死亡された、田辺健夫氏の追悼
＊8月5、6日　白山登山
＊9月23～25日　東北の山「岩手山」「早池峰山」
＊10月15、16日　全国支部懇談会が宮城支部主管のもとで行われそれに参加する。
＊11月12、13日　福井支部創立20周年記念式典が福井パレスホテルで。本部より尾上会長、支部活性化プロジェクト・チームの宮崎氏、岳連関係、各山岳会関係、5支部の支部長、各支部会員等53名の参加を得て盛大に行われた。

また、講師として松田雄一氏が「ヒマラヤを越える　アネハツル」と題して講演をお願いした。

＊11月19～25日　支部合同懇親山行が岐阜支部主管にて行われ参加する。

＊11月23～25日　立山山スキー（初滑り）みくりが池温泉泊まりで行う。

＊12月3、4日　日本山岳会年次晩餐会（東京）に参加する。

＊2月17～21日　北海道スキー研修

＊2月25、26日　5支部合同スキー山行（岐阜支部主管）猪臥山にて行われ参加する。

＊3月30日～4月1日　岩手山スキーに参加

（舩田　洋子）

関西支部

2011年度（平成23年度）は、活気に溢れた関西支部を目指してこれまでの共益事業に加え、公益事業を積極的に推進した。

支部山行の主軸である「近畿分水嶺踏査」は09年（平成21年）4月より友ヶ島から出発して毎月1回の実施で11年（平成23年）11月20日に滋賀・岐阜・福井3県境に到達した。鈴鹿山脈までの標高の低い分水嶺では暑さに苦しめられ、10年（平成22年）12月から3月までの冬のシーズンはちょうど鈴鹿山脈の稜線縦走と重なったため深いラッセルや天候の急変に苦しめられたが、思わぬ晴天に光り輝く霧氷の林を縦走できた幸運もあった。11年（平成23年）5月伊吹山を通過してからは深い藪に難渋したが、400kmを踏破して予定通り最終目的地三国岳に到達した。踏査中は多くの困難に遭遇したが、3年間を通じてひとつの事故もなかったことがいちばんの喜びである。12月からは紀ノ川南側の分水嶺を高見山までの200kmをたどり始めている。

各委員会が実施した主な活動は以下の通りである。

総務委員会

＊総会　2011年（平成23年）4月20日18：30　大阪セルロイド会館　39名

＊夏期懇談会　平成23年8月25日　『ヒマラヤ登山から得たもの』講師＝松浦輝夫会員53名

＊藤木祭　平成23年9月25日芦屋高座の滝前　100名（大阪府、兵庫県山岳連盟共催）

＊新年会　平成24年1月25日梅田大東洋　54名

図書委員会

＊著者と語る会　『おおさか山の日』に連動して開催　11月12日（土）大阪府立中央図書館2F会議室　『医者と登山、二足の草鞋の人生』　講師：斉藤惇生会員（日本山岳会名誉会員・京都大学学士山岳会会員）62名（会員外20名）

山行委員会

＊４０００山グランプリ　14回（日帰り・テント泊）　延べ参加人数１６３名（会員外38名）
＊近畿分水嶺踏査　8回（日帰り・1泊2日）延べ参加人数１２７名（会員外22名）
＊（続）近畿分水嶺踏査偵察山行　4回（日帰り・1泊2日）延べ参加人数42名（会員外4名）
＊ゆるやか山行【北摂・京都西山を歩く】10回　参加延べ人数１７３名（会員外38名）
＊登山教室（会員外向け）　4月～3月の12回実施　延べ参加人数１００名
＊自然観察山行　10月15日東お多福山植物観察会　3名
＊沢登り7月30、31日　四国大剣沢13名（会員外6名）一ノ森～次郎笈　7名（会員外1名）
＊レスキュー　10月2日「悪場通過とロープワークとレスキュー」蓬莱峡　11名（会員外　2）、1月22日「雪上研修会」琵琶湖バレイ　7名（会員外1名）
＊おおさか「山の日」関連行事　11月16日「孫と一緒にハイキング」　むろいけ園地　12名（子供3名・大人8名）
そのほか宍栗の山登り、播磨の山登り、5支部合同スキーなどを実施した。
自然保護委員会
＊自然観察会（支部独自事業　山行委員会と共同）2回　7名
＊森の勉強会（京都・東海・関西支部自然保護委員会共催）　3名
＊やまみち巡視保全活動　茨木市選定自然歩道　2回　6名
＊森林づくり事業（本山寺森林づくり）10回　延べ参加人数50名
＊東お多福山草原保全・再生活動　12回　延べ参加人員34名
そのほか西大台地区利用適正化計画検討協議・自然保護全国集会・第6回日本山岳会森づくり協議会などに6名が参加した。

（重廣　恒夫）

■山陰支部

２０１１年度（平成23年度）の活動
＊4月23日　通常総会（米子市公会堂）　25名
＊5月26日　5月例会（米子市公会堂）　10名
＊6月11～12日　全国自然保護委員会（博多）　1名
＊6月15日「きゃらぼく10号」発行
＊6月18～19日　支部長会、総会　1名
＊6月26日　六月例会（米子市公会堂）　8名
＊7月17日　定期山行（美保関・馬着山）　4名
＊7月18日　魔天崖調査総括（大山）　9名
＊7月30日　七月例会（米子市公会堂）　8名

＊8月27日　八月移動例会（白根支部長宅）　12名
＊9月10日　臨時支部事務局担当者会議　（東京）　1名
＊9月24日　九月例会（米子市公会堂）　7名
＊10月15、16日　全国支部懇談会（宮城）　3名
＊10月15、16日　日本山岳協会自然保護委員会総会（大山）　2名
＊10月30日　「大山横手道上ブナを育成する会」植樹参加（大山）　5名
＊10月30日　10月例会（米子市公会堂）　11名
＊11月5、6日　東海支部50周年記念式典（名古屋）　1名
＊11月26日　11月例会（米子市公会堂）　10名
＊12月12日　支部年次晩餐会（米子ワシントンホテル、ゲスト　西村政晃氏）　22名
＊1月21、22日　全国事務局会議（東京）　1名
＊1月28日　1月例会（米子市公会堂）　13名
＊2月11、12日　大山冬山パトロール　3名
＊2月25日　二月例会（米子市公会堂）　13名
＊3月20日　大山冬山パトロール　3名
＊3月31日　3月例会（米子市公会堂）　10名

11年度に「大山概念図」第4版第1回印刷限定200部（非売品）したが、このことが地元新聞に載り大きな反響となる。購入希望者・書店から問い合わせが多いことから、地図用紙の印刷を検討中である。

改訂は13年ぶり、改訂版発行の要望があったことから、大山遭難防止協会、地元大山町、伯耆町の協力により大改訂を行った。現地調査や名称変更には岳獅会の絶大な協力なくしては成し得なかった点が多い。更に、高田前支部長を中心に山陰支部の総力をあげて第5、6版を加筆中である。

今後の長期ビジョンとして海外登山だけでなく、身近な伯耆・出雲の山々について古事記、出雲たたら製鉄などの歴史的探訪を絡め、創立70周年には「雲伯百山」（仮称）として発行できるような記録法と楽しみ方を工夫し、新会員募集の手段にもなるような多目的登山に向けて努力する覚悟である。

（伊澤　寿高）

■広島支部

広島支部は2012年（平成24年）11月3日に創立15周年を迎える。ここでは平成23年度の支部活動を次の6項目にまとめてみた。

1．支部ルームの購入に向けて

創立15周年記念に支部ルームを持ちたいと、平成21年秋に支部ルーム検討委員会を立ち上げた。平成22年度はその基本計画づくり、平成23年度は支部ルーム委員会に変えて実施計画を構築した。毎月の会議内容を会員に知らせて意識の高揚

を図るとともに、候補物件の調査やＪＡＣ本部の協力を得て登記・決済の協定書の制定などを計り、熱を帯びた活動になってきた。平成24年に入ると会員から募金を開始、現在その機運を盛り上げつつ、工程表に沿った活動を進捗させている。

2. 支部組織の改革

杉村功支部長のもと1副支部長体制であったが、長谷川忠彦副支部長の死去にともない、2副支部長体制に変更、兼森志郎総務委員長・山田雅昭会員（県岳連理事長）が就任した。役員会は4回開催。総務委員会は今後拡充する事業に備えて委員会内に9部会を設けた。この1年間に入会した20名の新入会員へのオリエンテーションや顧問会議の開催は初めての事業だった。

3. 活性化する例会山行

日帰りが主体だった第1山行委員会はテント泊主体に切り替えた。年間の参加者は延べ３２７名、新設の例会皆勤賞を3名が受賞した。

テント泊の第2山行委員会の年間参加者は延べ２００名。4～5月の立山に25名、7月の剱岳に47名、8月の薬師岳に11名、9月の槍ヶ岳に21名と、合計１００名を超える北アルプス参加者となった。

ＨＡＴ（広島支部アルパインチーム）は2年がかりのハイレベル技術研修で第1期生の2年目が終わった。8月に前穂高北尾根・北穂高東稜に9名、10月に宮崎の比叡山・大分の八面山に9名と遠征先でもロッククライミングの腕を磨いた。縦走訓練では比婆山で1日33㎞踏破や瀬戸内海沿岸から内陸部の三倉岳へ徒歩移動をおこなったりした。冬季は12月から3月まで連続して雪の大山北壁に踏み入れた。

スキー部は県内スキー場での例会のほか白馬八方尾根スキー場へ遠征した。

4. 8年目の登山講座

中国新聞文化センターから受託している登山講座は8年目を迎えた。広島・呉・福山地区で里山ハイキング、初級講座、中級講座、ジュニア自然学校、新たに加わったユース登山講座の5講座12クラスを運営した。年間を通じての受講生は延べ１５２４名・講師は延べ３３２名の参加となった。地域貢献につながり、担当する講師・スタッフの勉強にもなっている。

5. 本部・支部との交流

4月の総会は尾上昇会長に講演をしていただいた。東海支部創立50周年記念式典に広島支部から2名が出席、隣県といえる四国支部設立式典には代表して支部長が参列した。年度晩餐会には支部から4名が出席した。

恒例の北九州支部との交流会は5月に比婆山で開催し広島支部から14名、北九州支部から15名が参加した。京都支部との交流会は9月に比良山系堂満山で開催、広島支部から11名、

京都支部から17名が参加した。

第27回全国支部懇談会（宮城支部主管）には12名が参加し栗駒山登山をおこなった。そのあと青森、岩手、宮城支部および首都圏のスキー親睦会有志の皆さんのお世話で交流会の場を持ち蔵王山登山や大震災被災地を視察した。

6月、東海支部を訪問し、広島支部の新たな方向づけのための勉強会を設けた。

6. 山の日

第10回ひろしま「山の日」県民の集いが6月に開かれ、初日は〝4000万本の木を植えた男〟宮脇昭さん（横浜国立大学名誉教授）、堂本暁子さん（前・千葉県知事）、神崎忠男さん（日本山岳協会会長）などをお招きして基調講演や記念シンポジウムが行なわれた。翌日は会場を東広島市西条町・竜王山に移し、堂本さんによる「里山と生物多様性」の講演が行なわれた。このあと、出席していた西条農業高校の全校生徒500人の竜王山登山を広島支部会員が引率した。

（国枝　忠幹）

■福岡支部

2011年度（平成23年度）の主な事業

＊「2011年度（平成23年度）通常総会」を11年5月15日（日）に福岡市中央区の「中央市民センター」にて開催した。支部会員数96名、出席28名、委任状33名　計61名。副島勝人支部長挨拶につづき、平成22年度事業報告、平成22年度会計報告、平成23年度事業計画、平成23年度会計予算等が審議され承認された。総会後、記念講演として上岡謙一氏の「90歳・私の歩んできた道～戦地ニューギニアから北アルプスの山々へ～」が行われた。高木荘輔副支部長のインタビューを交え上岡氏の稀有な体験が語られ貴重なお話であった。懇親会は会場を赤坂の「みくに」に移して開催され30名が出席した。

＊「パハルフェスタin九重」を4月29日（金）～30日（土）、九重法華院温泉山荘にて岩崎元郎氏をゲストに迎え開催した。主催：パハルフェスタ実行委員会、後援：日本山岳会福岡支部、東九州支部他参加者＝80名（福岡支部会員10名）。

＊自然保護全国集会（日本山岳会自然保護委員会との共催）を開催した。6月11日（土）～12日（日）、会場：西鉄イン福岡、テーマ「エコツーリズムと屋久島」、パネリスト＝伊藤秀三、広瀬敏通、井上晋、太田五雄、山川陽一、進行＝山本博。参加者＝90名（福岡支部会員15名）。

＊山のトイレ、環境を考える福岡協議会（総会）が6月26日（日）太宰府館にて行われた。太田五雄氏が「世界遺産と屋久島の環境について」を講演し、副島勝人支部長、中馬董人副支部長、山本博、酒匂輝昌が参加した。

＊松本徰夫先生（元支部長）追悼会（偲ぶ会）を7月23日（土）福岡国際ホールにて開催した。発起人＝深田泰三、船津武士、太田五雄、副島勝人、世話人＝渡部秀樹、倉智清司。出席＝113名。

＊「岳人のつどい」を12年1月21日（土）に開催した。映画「エベレスト征服（THE CONQUEST OF EVEREST）」（1953年英国）を上映。映画解説と講演を植松満男氏にお願いした。参加者80名（会場＝太宰府館まほろばホール。また同会場にて懇親会を開催した。参加者40名。

＊支部報№25を3月15日に発行した。主な内容＝1．福岡支部状況報告「支部長4年間を振り返って（支部長・副島勝人）」、2．元福岡支部長 松本徰夫氏のご逝去を悼む「特別寄稿 松本徰夫を偲ぶ『まさに兄貴だった』（梅木秀徳）」「ロマンと酒の師匠・松本徰夫さん（深田泰三）」、3．世界自然遺産「屋久島」をめぐって、「自然保護集会とその後の屋久島（山本博）」「屋久島その後（太田五雄）」「世界自然遺産・屋久島の将来（井上晋）」「『コモンズの悲劇』から『屋久島』を考える（辻和毅）」、4．海外トレッキング報告「マカルー・ベースキャンプへの旅（太田五雄）」「ミャンマー・ヒマラヤ視察とミャンマー周遊の旅（渡部秀樹）」、5．会員の活動「90歳・私の歩んできた道～戦地ニューギニアから北アルプスの山々へ～（上岡謙一）」「23年秋の発心山と冬の皿倉山の山行の記録（副島勝人）」「書籍紹介・太田五雄山岳記録写真集『ヒマラヤの氷峰－ヒマラヤ50年の追想－』太田五雄著（書評・渡部秀樹）」「事務局報告」ほか。

＊山行、自然観察会など

10月1日（土）「秋の支部山行・発心山」を開催。参加者15名。
12月10日（土）「忘年登山・皿倉山」を開催した。参加者19名。
2月25日（土）「春の支部山行・三池山」を開催。参加者9名。

＊その他

6月4、5日　九州5支部集会（熊本支部）に出席（副島、高木）
6月18日　支部長会議及び本部総会に出席（副島）
7月15日　英彦山のトイレ問題の意見交換会に出席（五十嵐）
9月10日　全国事務局会議に出席（中馬）
10月22日　太田五雄氏出版記念パーティを開催（発起人＝副島、浦、部）
11月5日　宮崎ウェストン祭に参加（中馬夫妻、井上）
11月20日　山の図書館　山岳映画の集い（太宰府館）を共催
12月3日　支部長会議に出席（副島）、
12月3日　本部年次晩餐会に出席（副島、酒匂、森山、水野、中村、江崎）
3月24、25日　横断山脈研究会に参加（辻、佐々木、渡部）

（渡部　秀樹）

北九州支部

2011年度（平成23年度）支部活動報告

1. 通常総会開催　4月23日（土）
①第12回通常総会をブルーウェブイン小倉で開催。出席者44人、委任状提出者52人。大庭支部長の挨拶に続き、平成22年度の事業報告、収支決算報告、監査報告が承認され、引き続き平成23年度の役員改選（案）、事業計画（案）収支予算（案）が審議され承認可決された。
②記念講演会
講師＝栗秋正寿氏　演題＝「アラスカの垂直と水平の旅」

2. 委員会開催
定例委員会、5月11日、7月6日、9月14日、11月2日、12年1月11日、3月7日　臨時委員会、4月6日、12月22日、12年2月7日

3. 行事
11年5月28、29日　広島支部との交流事業の一環として広島県の「吾妻山」、「比婆山に登山。（参加者）広島支部＝兼森副支部長以下14人、北九州支部＝関口副支部長以下15人
5月28、29日　英彦山山開き、5人が出席
6月4、5日、九州五支部集会（熊本支部主管）、伊藤支部長以下10人が出席
6月11、12日　自然保護全国集会（福岡）、伊藤支部長以下7人が出席
6月18日　平成23年度第1回日本山岳会通常総会（東京）、伊藤支部長が出席
9月10日　臨時支部事務局担当者会議（東京）、山田事務局長出席
10月15、16日　全国支部懇談会（宮城支部主管）、伊藤支部長以下8人が出席
11月5、6日　東海支部五十周年記念行事、関口副支部長以下2人が出席
11月5、6日　宮崎ウェストン祭（宮崎支部）、伊藤支部長以下3人が出席
12月3日　支部長会議（東京）、伊藤支部長が出席　同日年次晩餐会（東京）、伊藤部長以下14人が出席
12月10日　支部忘年パーティ、出席者　伊藤支部長以下33人
12年1月21、22日、支部事務局担当者会議（東京）、山田事務局長、馬場財務委が出席

4. 山行
11年4月17日、陶ケ岳（山口県）、参加者11人
5月14～16日、韓国・智異山　故室津健次会員の一周忌追

悼登山、参加者12人（御子息2人も参加）
6月5日　杵島岳、往生岳（九州五支部集会）、参加者10人
7月23日　犬ケ岳～求菩提山　参加者9人
8月1～4日　富士山（須山古道一合目より）　参加者7人
9月17、18日　森林巡視活動、「山の日」制定運動のため一斉登山
長者原及び牧ノ戸より法華院温泉、参加者24人
10月25日　金山（花乱の滝～坊主ガ滝）、参加者5人
12月10日、皿倉山　忘年登山とする　参加者19人
12年1月24日、鶴見岳　参加者22人
2月17、18日、大佐山スキー場　参加者9人
3月25日、竜ガ鼻　参加者23人

5. 自然環境保全事業
九州森林管理局より委嘱されている森林保全巡視活動を日常の登山を通じて随時行う
と共に、本年9月17、18日には九重山系にて一斉登山を行なった。活動結果は3ケ月毎に福岡森林管理署に報告書を提出している。

6. 広報活動
会員相互の情報伝達メデイアとして支部報を活用するため年4回「JAC北九だより」を発行した。

7. 地域貢献事業
初心者を対象に市民センター、公民館等の公共の場を通じて登山の案内、登山知識・技術の講習を行った。

8. サロンルームの開催
・小倉サロンは毎月第四水曜日に小倉京町の「コール天」で18～20時に開催
最初の1時間は映画又は講演会、その後懇親会。
・博多サロンは3ケ月毎（2月、5月、8月、11月）、第2火曜日に福岡市内の「どんたく」で18時半より開催、懇親を図る。

（伊藤　久次郎）

■東九州支部

平成23年4月16日（土）大分市コンパルホールにて支部定期総会を開催。本支部は22年11月に支部創立50周年の記念行事等を実施し、半世紀にわたる支部の歴史の節目をつけたばかりで、この総会は新たな半世紀へのスタートを切る場となった。役員も長い間支部活動をリードしてきた梅木秀徳（5908）支部長と西孝子（8325）事務局長が辞任し、加藤英彦（8765）支部長、飯田勝之（10912）事務局長の新体制で出発することとなった。

本会の24年度からの公益法人化に向けて取り組む、最初の公益事業として実施したのが「第15回植村直己冒険賞受賞記念講演会」である。この賞を受賞した栗秋正寿氏を講師に迎えて、登山愛好家はもとより、広く一般の参加を呼びかけて、登山の楽しみや、登山文化の広がり、アウトドアの中にある夢やロマンなどについて語るこの講演会は、４００人を上回る参加者で大盛会であった。また、２００２年の国際山岳年の記念行事として実施して以来、毎年続けている青少年体験登山大会は今年で10周年という、記念の大会とあって、青少年はもとより、中高年の初心者など参加者は例年の倍ちかい71名を数え、夏山の天候の急変を体験するなど、意義ある登山教室となった。なお、公益事業として実施する予定であった視覚障害者支援登山は、当日荒天のため中止のやむなきにいたった。

共益事業としては、まず月例山行があげられる。今年のテーマは「県内と九州の島の山に登ろう」で、県内の有人島はもちろん、三角点のある無人島や、県外では天草、対馬、五島、屋久島、奄美大島、平戸などの島々の山を尋ね歩いた。屋久島を除き島の山はほとんど低山であるが、それぞれに個性を持ち、参加者にとっては面白く、また意義ある山行となった。

韓国山岳会蔚山支部との交流は7年目を迎え、最初の交流会で取り決めた相互交流登山の実施は、6回目となる今回は当方が韓国を訪問する順番であった。支部より12名が参加し、5月に韓国本土最高峰の智異山に登り、そのあと、場所を慶州の南山に移した。この山は今回3度目であったが、山中いたるところにある遺跡を見ながら、無数にある登山道の中の新ルートで登った。また韓国との交流に関しては、智異山のガイドをつとめた韓国山岳会慶南支部の支部長との親交がきっかけとなり、10月に九重山を訪れた慶南支部との交流登山も記録に残る。

新規事業で実施した支部合宿登山は11月に屋久島・宮之浦岳で行なったが、あいにくの荒天で淀川小屋で1日停滞を余儀なくされるなどのアクシデントもあり、1日遅れで下山したが合宿山行の目的を果たした。またそのために、九重の坊がつるにある「あせび小屋」で行った事前合宿も有意義であった。

支部報の発行は今年度も春（4月）夏（7月）秋（10月）冬（1月）の季刊発行に加えて、号外、と増刊号を発行した。

今年度から新規にはじめたものに支部協賛事業という位置づけの活動がある。個人が企画し、支部に申請した事業を支部の協賛を得て、支部員の参加を募って行う登山活動等で、今年度は1月にキリマンジャロ登山に6名が参加し、クレーターキャンプと登頂の目的を果たした。

このほか、県山岳連盟の行う清掃登山への参加をはじめ、他団体との交流や個々人の意欲的な登山活動も報告があげられており、支部の行う公益事業や共益事業と、これら、支部の枠を越えた活動を通じて一層幅の広い登山活動を進める中で、会員

の拡大や、「山の日」制定運動の拡大など、今後の活動につなげていきたいものである。

（飯田　勝之）

■熊本支部

昨年3月に東日本大震災が発生し、地震、津波、原発事故まで起こり、未曾有の大被害をもたらした。熊本からは遠隔地でもあり、ボランティアとして現地に駆けつけることもできず、支部員に義援金の協力依頼をしたところ、約17万円が集まった。そうして始まった23年度だったが、当初予定した事業は何とかやり遂げることができた。

さて、日本山岳会ではこの3年来新公益法人への移行問題が検討されて来たが、熊本支部もそのころから、それまでの共益事業から、公益的事業導入に取り組んできた。もちろん、公益法人移行への50％条項を意識したところもあったが、当地における日本山岳会の知名度は低く、支部活動を通して支部の存在を認識してもらうことが目的だった。今年度の支部活動の中で、登山教室、登山研修会、例会登山などの入山活動は15回になった。以前の会員だけの登山ではなく、今では、山を愛し、登山する者に門戸を広げているが、一般参加者も多く、その中から会友、正会員となってくれることを期待している。しかし、入会しても会友までで、正会員まで繋る人は少ない。地方経済の疲弊もあるが、高額な入会金、年会費の問題が障害となっている。支部登山の中味は、安全登山、登山の楽しさ、登山技術、知識、判断力などの指導を中心に修練を積んでいるが、今年度から沢登りや、雪山登山も取り入れ、初めての体験者も多く、参加者の満足感は大きかったようだ。

また、森林保全巡視登山は2回実施した。それまでの森林の見回り，塵拾いから、荒れた登山ルートの整備や、山小屋近くの水場の整備なども行い、ただ山を登るだけでなく，山にお返しをする活動にも取り組んだ。地元の山を守る活動は今後も続けなければならない。

6月には熊本支部が担当して、1泊2日で「九州5支部集会」を開催した。61名の参加を得て，「日本山岳会の再生と復権」について日本山岳会が今、なぜ取り組まねばならないのかについて考えたが，問題解決の結論にはたどりつけなかった。しかし、5支部間の連携は深まった。毎年出掛けているヒマラヤでの活動に4人が出掛けた。その内1人が重度の高山病にかかったが，無事帰国できて，自分の体験談を細かく発表してくれて、高所登山の問題点を支部員と共有できたのはよかった。そのほかにも海外遠征者がいて、海外遠征報告会、山の写真展を開催し、来場者の夢とロマンを掻き立てた。支部としての活性化は確かに前進した1年だった。

（工藤　文昭）

宮崎支部

２０１１年（平成23年）は、東日本大震災の発生をはじめ全国的に自然災害にひどく痛めつけられた年であった。

宮崎県においても宮崎と鹿児島の県境にある霧島山系の新燃岳が噴火し、降灰により大きな災害を受けたが、火山活動はいまだ終息の気配はなく、現在も入山規制が続いており、本年も登山はもとより美しく全山を彩るミヤマキリシマやアケボノツツジなどの花々が見られないのは残念なことである。

紆余曲折をたどった日本山岳会の法人化問題は、本年4月1日から、「公益社団法人　日本山岳会」として新しく発足することとなったが、もともと日本山岳会の事業そのものが、公益性の高い活動とみられているので改まって身構える必要はなく、支部としてもこれまでどおりのスタンスで活動を続けていけばよいと考えている。

それにしても山登りを楽しみながら社会に貢献できることはすばらしいことで、支部としても平成23年度の新しい試みとして「ときめき宮崎の山歩き in 双石山」と称して、市民との交流登山の実施を企画した。これに一般参加者を公募したところ、1日で予定した人員をはるかにオーバーする応募があり断るのに大変であったが、市民の中には、誰かが声をかけてくれれば、山に登りたいという隠れた登山家が多くいることを心強く思い、今後も続けていくことを誓いあった。また、第14回目を迎えた子供登山教室は、今回は福岡県に足を延ばし、夜須高原国立青少年自然の家を拠点に、信仰の山「古処山」登山のほか、きもだめし、フィールド・ビンゴなどの団体活動を体験させた。

最近は思い切り野外で体を動かす機会が少なくなったせいか、この時だけは解放感にあふれ生き生きと元気に飛び回る子供たちの姿が印象的であった。

次に宮崎市では、毎年3月に市民プラザで「地域と市民活動の博覧会」、11月には支部が毎月ルーム代わりに利用している宮崎中央公民館で「中央公民館まつり」を開催している。多くの市民が集まるこのような機会に支部の概要や活動状況の写真などのパネルを展示して、支部の存在と活動をアピールすることにより、支部入会の動機付けになればという狙いをこめて参加しているが、今回は特に「山の日」制定に関するキャンペーンにも力を入れた。

このようにして、平成23年度は、いくつかの公益的活動を取り入れながら山行も楽しみ、おおむね年間計画通りに事業を遂行することができた。ただ家庭裁判所短期補導委託登山は、11月と本年3月の2回委託があったにもかかわらず、いずれも悪天候のため実施できなかったことは心残りであった。

このほか平成23年度における宮崎支部の主な行事、活動は以下の通りである。

《会議。研修会など》
＊4月9日　第28回通常総会（出席者56人）
＊定例登山研修会　（毎月、第1木曜日、12回開催、延べ38人出席）
＊定例役員・委員長等会議（毎月、第1木曜日、12回開催、延べ101人出席、臨時役員会4回開催、延べ36人出席）
＊各事業準備委員会（ときめき登山準備会議など、9回開催、延べ104人出席）
＊各種研修会（遭難事故防止対策研修会等　5回開催、延べ88人参加）
《定例山行》
＊平成23年度の定例山行計画に基づき、樋口山（1434・6m）ほか12回実施、延べ333人参加
《他支部との交流及び登山》
＊6月4、5日　九州5支部集会（阿蘇市憩いの村、杵島岳登山、22人参加）
＊10月25日　第27回全国支部懇談会（宮城県主管栗駒高原、16人参加）
《行事・研修会等》
＊4月23日　新会員歓迎登山（大分県久住山系、三俣山ほか、27人参加）
＊5月15日　第1回「ときめき宮崎の山歩きin双石山」（一般40人、会員29人参加）
＊8月28日、9月25日、2月28日、宮崎支部水源の森育林作業（下払作業等3回実施、延べ46人参加）
7月31日、8月1日　第14回子ども登山教室（福岡県　夜須高原国立青少年の家、古処山登山、野外活動など、子ども23人、会員22人参加）
＊9月1日　山岳救助救命法講習会（日本赤十字社講師2人、会員37人参加）
＊11月5日　第27回宮崎ウェストン祭（高千穂五ヶ所高原、会員参加41人、一般参加100人）
＊12月10日　双石山、登山道点検・清掃登山（会員27人参加）
＊1月5日　冬山遭難事故防止研修会（会員29人参加）
《山岳活動写真パネル展》
＊11月26、27日　第17回宮崎中央公民館祭り山岳活動作品展示（宮崎中央公民館　一般参加者1100人）
＊3月10日　第2回地域と市民活動の博覧会パネル作品展示（宮崎市民プラザ　一般参加者1600人）
《宮崎支部部報の発行》
＊4月1日（第36号）、7月1日（第37号）、10月1日（第38号）、1月1日（第39号）、（年4回発行、各A4版8ページ、200部作成）

（末永　軍朗）

山の帰り道	沢野ひとし	本の雑誌社	1800	四六判	245p
山登りはじめました2	鈴木ともこ	メディアファクトリー	1100	A5	207p
山ふたり―北アルプス編	三輪敏広・三輪和恵	春風社	2381	A5	328p
山ふたり―北海道・東北・九州編	三輪敏広・三輪和恵	春風社	2381	A5	373p
山へいくつもりじゃなかった	落合　恵	mille books　サンクチュアリ・パブリッシング/発売	800	四六判	111p
山を忘れた日本人	石川徹也	彩流社	2800	四六判	296p
悠久の屋久島　※写真集	太田五雄	南方新社	3800	210 × 300	162p
雪男は向こうからやって来た	角幡唯介	集英社	1600	四六判	344p
【ら】					
らくらく日帰り山さんぽ	交通新聞社/編	交通新聞社	838	A4	128p
レスキュー最前線	長野県警察山岳遭難救助隊/編	山と溪谷社	1600	四六判	286p
ロープとひもの結び方	小暮幹雄	西東社	850	新書判	191p
ロープワークの基本	善養寺ススム	枻出版社	950	四六判	125p
六甲山ショートハイキング77コース	根岸真理	神戸新聞総合出版センター	1500	A5	131p
ロングトレイルという冒険	加藤則芳	技術評論社	1580	四六判	231p
【わ】					
私の山道具	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1500	A5	127p
我、日本のマルコポーロとならん	景山　淳	東京新聞	1905	A5	383p
ワンゲルガイドブックス01北アルプス南部	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2000	A5	225p
ワンゲルガイドブックス02北アルプス北部	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2000	A5	225p

ぼくの仕事場は富士山です	近藤光一	講談社	1200	四六判	170p
北海道 安全な登山	日下　哉	北海道新聞社	1800	A5	182p
北海道の登山史探究	高澤光雄	北海道出版企画センター	1200	新書判	252p
北海道雪山ガイド　※増補新版	北海道の山メーリングリスト/編	北海道新聞社	2200	四六判	395p
【ま】					
三浦雄一郎の「歩く技術」	三浦雄一郎・三浦豪太	講談社	1400	四六判	219p
妙高火山の考古学	小島正巳	岩田書院	6600	A5	285p
みんなの山道具	枻出版社/編	枻出版社	933	A4	141p
「無酸素」社会を生き抜く	小西浩文	日本経済新聞出版社	1400	四六判	197p
森の白神　※写真集	志水哲也	平凡社	3800	A4	111p
【や】					
山歩きイラストブック	羽田野由紀子	ネコ・パブリッシング	1143	A5	133p
山あるき12カ月　関東周辺	中田真二	JTB パブリッシング	1600	A5	159p
山歩きのオキテ	工藤隆雄	新潮社	476	文庫判	315p
山門水源の森	山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会/編	サンライズ出版	1900	A5	230p
山靴の足あと	御沓知克	GCNS　出版共同販売/発売	1600	四六判	309p
ヤマケイ文庫　生還―山岳捜査官・釜谷亮二　※小説	大倉崇裕	山と溪谷社	880	文庫判	349p
ヤマケイ文庫　空飛ぶ山岳救助隊	羽根田治	山と溪谷社	880	文庫判	302p
ヤマケイ文庫　日本の分水嶺	堀　公俊	山と溪谷社	900	文庫判	381p
ヤマケイ文庫　〈復刻〉山と溪谷　1・2・3選集	山と溪谷社/編	山と溪谷社	940	文庫判	381p
ヤマケイ文庫　星と嵐―6つの北壁登行	ガストン・レビュファ/著　近藤　等/訳	山と溪谷社	900	文庫判	253p
ヤマケイ文庫　山と溪谷　田部重治選集	田部重治/著　近藤信行/編	山と溪谷社	940	文庫判	382p
ヤマケイ文庫　わが愛する山々	深田久弥	山と溪谷社	1000	文庫判	381p
ヤマケイ文庫　私の南アルプス	不破哲三	山と溪谷社	880	文庫判	270p
山小屋で、会いましょう！	鈴木みき	講談社	1200	A5	142p
山女子必携 失敗しない山登り	小林千穂	講談社	1200	四六判	175p
山スタイル手帖	KIKI	講談社	1300	四六判	143p
山で失敗しない10の鉄則	岩崎元郎	文藝春秋	780	新書判	220p
山で死んではいけない。遭難防止マニュアル	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1200	280	114p
山で出会った花2	矢加部和幸	熊本日日新聞社	1400	A5	223p
山と人を想い	空　昌昭	随想舎	1600	A5	270p
山と森の環境史	湯本貴和/編　池谷和信・白水　智/責任編集	文一総合出版	4000	A5	381p

日本百名山登山ガイド　下	山と渓谷社/編	山と渓谷社	1800	A5	159p
日本マルチビッチフリークライミングルート図集	菊池敏之	山と渓谷社	2000	A5	159p
のんびり行こう！東海山歩きガイド	愛知山歩きの会	メイツ出版	1600	A5	128p
【は】					
函館山 自然ガイド	木村マサ子	北海道新聞社	1400	A5	111p
八甲田・十和田 森の輪廻　※写真集	菊池　敏	企画集団プリズム	2500	210 × 295	67p
花と葉で見わける「山歩き」の草花図鑑	木下武司/監	メイツ出版	1600	A5	176p
はるかなるヒマラヤ―自伝と紀行	坂本直行/著　高澤光雄/編	北海道出版企画センター	2400	四六判	324p
ひとり歩けば―辻まことアンソロジー	辻　まこと/著　柴野邦彦/編	未知谷	2000	四六判	191p
ひとり登山へ、ようこそ！	鈴木みき	平凡社	1200	A5	159p
秘瀑―台高山脈珠玉の渓	川崎　実	山と渓谷社	2500	A5	287p
ヒマラヤトレッキング紀行	中川　豊	牧歌社　星雲社/発売	1200	四六判	175p
ヒマラヤの氷峰	太田五雄	南方新社	5000	A4 横	171p
百名山登頂記	中田典昭	東京図書出版リフレ出版/発売	1000	四六判	190p
氷河地形学	岩田修二	東京大学出版会	8200	B5	387p
琵琶湖の北に連なる山	草川啓三	ナカニシヤ出版	1800	A5	163p
ブータンの花　※新版	中尾佐助　西岡京治	北海道大学出版会	4500	B5	162p
For Everest―ちょっと世界のてっぺんまで	石川直樹	リトルモア	1200	四六判	139p
深田久彌 その山と文学	近藤信行	平凡社	2800	四六判	268p
富士幻景―近代日本と富士の病	小原真史/監・著	IZU PHOTO MUSEUM NOHARA/発売	3600	250	243p
富士五湖周辺の山あるき	平田謙一	JTB パブリッシング	1300	A5	143p
富士山 雲の変幻Ⅱ　※写真集	竹内トキ子	文一総合出版	2800	260 × 270	95p
富士山と女人禁制	竹内靭負	岩田書院	2600	A5	193p
富士山に千回登りました	實川欣伸	日本経済新聞出版社	850	新書判	233p
富士山の四季―英文版※写真集	大山行男・山下茂樹/撮影	講談社インターナショナル	1600	B5	95p
富士山の四季―簡体字版　※写真集	大山行男・山下茂樹/撮影	講談社インターナショナル	1600	B5	95p
富士山の見える山ベストコース45	佐古清隆	山と渓谷社	1800	A5	143p
古びた登山日記	市川五十二	風詠社　星雲社/発売	1500	四六判	237p
辺境の風景	木崎甲子郎/画	出版舎 Mugen	2800	217 × 265	73p
豊穣の山―北アルプス北辺の低山紀行	佐伯邦夫	白山書房	1800	四六判	266p
房総分水嶺	忍足利彦	崙書房出版	1500	新書判	242p

高尾山・景信山・陣馬山登山詳細図	守屋益男/監	吉備人出版	700	230 × 110	1p
だって楽しい山あるき	山中美子・関根茂子	新ハイキング社	1700	A5	292p
田部井淳子の人生は8合目からがおもしろい	田部井淳子	主婦と生活社	1200	四六判	159p
田部井淳子の楽しい！山登り入門	田部井淳子/監	PHP研究所	1300	240	173p
ダライ・ラマ こころの自伝	ダライ・ラマ14世テンジン・ギャツォ/著　ルトランジェ治美/訳	春秋社	2500	四六判	344p
地形図の楽しい読み方	今尾恵介	山と溪谷社	952	新書判	206p
鳥海山 縁起の世界	神宮　滋	無明舎出版	2500	四六判	213p
鳥瞰図で楽しむ日本百名山	成美堂出版編集部/編	成美堂出版	1900	A4	221p
ツキノワグマの生態学	信州大学山岳科学総合研究所	信州大学山岳科学総合研究所オフィスEMU/発売	933	A5	82p
筑波山 目的別ガイド	野末たく二/編	結エディット	1200	240	95p
燕岳―四季へのいざない　※写真集	岩橋崇至	毎日新聞社	3200	262 × 212	112p
テーチス海に漂う青い雲	テーチス紀行集編集委員会/編	いりす　同時代社/発行	4762	A5	570p
天上を翔る川―大雪山・石狩川幻の源流　※写真集	松本　司	渡辺出版	2000	228 × 240	59p
天地聖彩―湯布院・九重・阿蘇　※写真集	高見　剛	花乱社	3800	215 × 305	111p
東京近郊の山ハイク	JTBパブリッシング/編	JTBパブリッシング	980	A5	127p
峠と杉と地蔵さん―随想京都北山・丹波高原	塩見　昇	教育資料出版会	1700	A5	198p
東北の山	東北山岳写真家集団・高橋金雄	山と溪谷社	3000	A5	256p
登山口がわかる！九州の名山115	上島昭宣	海鳥社	2000	A5	320p
登歩悠遊―山の歓び里の愉しみ	筑木　力	ほおずき書籍星雲社/発売	1500	四六判	271p
【な】					
懐かしき南会津	佐藤　勉	歴史春秋社	1500	A5	95p
70歳！マナスル〈8163m〉登頂！	古川太亮/編	本の泉社	1700	A5	173p
南極大陸に立つ	白瀬　矗	毎日ワンズ	1500	四六判	297p
日本山名事典　※改定版	徳久球雄	三省堂	6000	A5	1216p
日本の火山を科学する	神沼克伊・小山悦郎	ソフトバンククリエイティブ	952	新書判	238p
日本のクマ	坪田敏男・山崎晃司/編	東京大学出版会	5800	A5	370p
日本100岩場5　※増補改定版	北山　真	山と溪谷社	2200	A5	207p
日本百名山登山ガイド　上	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1800	A5	159p
日本百名山登山ガイド　中	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1800	A5	159p

山岳縦走ギアガイド	枻出版社/編	枻出版社	1200	A4	144p
山岳修験への招待	宮家　準/編	新人物往来社	1400	四六判	223p
山岳島 屋久島　※写真集	秦　達夫	日本写真企画	3333	B5	144p
山岳読図大全	村越　真	山と溪谷社	1880	A5	258p
山岳ナビゲーション	村越　真	枻出版社	950	四六判	127p
山岳マンガ・小説・映画の系譜	GAMO	山と溪谷社	1500	A5	237p
山行記	南木佳士	山と溪谷社	1500	四六判	219p
実用登山用語データブック	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1980	A5	288p
週末ごほうびハイク	小林千穂	山と溪谷社	1400	A5	126p
週末トレッキングガイド　関東編	枻出版社/編	枻出版社	1200	B5	144p
狩猟文学マスターピース	服部文祥	みすず書房	2600	四六判	281p
旬と季節を楽しむ日帰りの山 関東周辺	中村成勝	実業之日本社	1400	A5	159p
生涯学生・一生青春	岡部牧夫/著　塩谷マキ/編	アテネ社	1200	A5	191p
湘南・三浦半島　山から海へ半日ハイク	樋口一郎	東京新聞	1333	A5	159p
女子のための！週末登山	西野淑子	大和書房	1200	四六判	125p
白神学　第1巻	山下祐介	企画集団プリズム	1500	A5	232p
白神学　第2巻	山下祐介	企画集団プリズム	1500	A5	275p
白神自然観察園の動物（1）概要編	弘前大学白神自然環境研究所	弘前大学出版会	500	四六判	22p
白神自然観察園の動物（2）林床植物編	弘前大学白神自然環境研究所	弘前大学出版会	500	四六判	22p
知床半島の湖沼	伊藤正博	共同文化社	2000	A5	181p
白馬岳―自然の息吹き※写真集	菊池哲男	山と溪谷社	3600	260 × 310	111p
信州とその周辺ベストトレッキング	日野　東	信濃毎日新聞社	1600	A5	207p
信州の希少植物と森林づくり	土田勝義/監　星山耕一/写真	オフィスEMU	2000	A5	225p
信州の草原	湯本貴和・須賀　丈	ほおずき書籍 星雲社/発売	1700	A5	175p
信州ふるさと120山	栗田貞多男/著　長野県山岳協会/監	信濃毎日新聞社	1800	A5	255p
世界遺産白神山地	根深　誠	七つ森書館	1400	A5	167p
世界探検家列伝	ロビン・ハンベリーテニソン/編・著　植松靖夫/訳	悠書館	9500	B5	303p
世界の探検大百科　ビジュアル版	英国王立地理学協会/編　荒俣宏/日本版監修	東洋書林	15000	A4	360p
セガンティーニ　※画集	ベアト・シュトゥッツアー/監　末吉雄二/訳	西村書店	3800	A4	246p
遭難のしかた教えます	丸山晴弘	山と溪谷社	952	新書判	221p
【た】					
大地の富士山　※写真集	大山行男	山と溪谷社	3600	336 × 256	88p

大台ヶ原山 知られざる謎	大川吉崇	新人物往来社	1800	四六判	237p
大谷光瑞と国際政治社会	白須浄眞/編	勉誠出版	5000	A5	390p
大峰を巡る	熊谷　樫	白山書房	1900	四六判	197p
奥多摩東部登山詳細図	守屋益男・守屋二郎/編	吉備人出版	800	230 × 115	1p
奥秩父 山、谷、峠 そして人	山田哲也	東京新聞	1800	四六判	343p
大人の悠々登山―田部井淳子楽しい山歩きをナビゲート	三才ブックス/編	三才ブックス	1300	A4	130p
お山は晴天ロッコンショウジョウ	尾河玉江	光陽出版社	1500	四六判	270p
【か】					
風の瞑想ヒマラヤ　※改定版	根深　誠	中央公論新社	667	文庫判	226p
語りかける山	飯田年穂	駿河台出版社	2300	四六判	316p
神々の森―熊野・沖縄・北海道　※写真集	岡田　満	東方出版	4000	277 × 210	151p
上高地自然観察ガイド※改定版	中村至伸/著　自然公園財団上高地支部/監	山と溪谷社	1143	新書判	111p
関西起点沢登りルート100	吉岡　章	山と溪谷社	2000	A5	255p
関西周辺登山口ガイド　上	全国登山口調査会	神戸新聞総合出版センター	1800	A5	293p
還暦のエベレスト	宮原　巍	中央公論新社	629	文庫判	246p
九州の山歩き	九州の山研究会/編	海鳥社	1800	A5	215p
九州百名山地図帳	山と溪谷社/編	山と溪谷社	3200	A4	215p
今日から始める山歩き	ブルーガイド/編	有楽出版社　実業之日本社/発売	1500	A5	182p
霧ヶ峰の自然	土田勝義/監　諏訪の自然を学ぶ会/編	ほおずき書籍　星雲社/発売	1200	A5	149p
クライミング用具大全	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1800	A5	240p
グリーン・ツーリズム―北海道からの発信	長尾正克	筑波書房	1800	A5	186p
クルマで行く山　関東周辺ベストコース50	佐々木亨	山と溪谷社	1800	A5	127p
考古学が語るシルクロード史	エドヴァルド・ルトヴェラゼ/著　加藤九祚/訳	平凡社	4200	B5	287p
これで身につく 山歩きステップアップ登山術	森田秀巳・松倉一夫	JTB パブリッシング	1300	A5	207p
これで身につく 山歩き誰でもわかる地図の読み方	千秋社/編	JTB パブリッシング	1200	A5	159p
【さ】					
相模・武蔵の大山信仰	関東民具研究会/編	岩田書院	2200	A5	155p
SAPPORO 山ガール	バビシェ・マウンテン・クラブ	北海道新聞社	1400	A5	143p
里山・山地の身近な山野草	菱山忠三郎	主婦の友社	900	新書判	223p
山岳気象大全	猪熊隆之	山と溪谷社	2200	A5	320p
山岳考古学―考古調査ハンドブック6	時枝　務	ニューサイエンス社	3700	A5	372p
山岳写真大全	中西俊明	山と溪谷社	2200	A5	272p

山岳図書目録（2011 年）

日本山岳会図書委員会

本目録は、店頭で見つけにくい地方出版社の本を、幅広く紹介することを心がけています。また、「登山」と密接に関わる「環境問題」「里山」「冒険・探検」「宗教」などの分野の本も、一部取り上げています。どうか有効にご活用ください。

＊判型が数字で表示されているものの単位は mm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

山岳図書目録

書　名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
アウトドア・ロープテクニック	羽根田治	山と溪谷社	952	新書判	189p
あこがれの名山はじめての山あるき	中田真二	学研	1700	B5	159p
浅間山 168 景　※写真集	須藤敏幸	上毛新聞社	2800	240 × 260	140p
あなたもこれから山ガール	橋谷　晃	ＮＨＫ出版	1000	B5	125p
歩くこと、登山は賢者のスポーツ	大森薫雄	パレード	800	四六判	122p
歩こう 神秘の森 戸隠	中村浩志	信濃毎日新聞社	1400	A5	143p
安全登山ハンドブック	森下敏雄	羽衣出版	1238	四六判	187p
生きるために登ってきた	志水哲也	みすず書房	2500	四六判	248p
頂に夢を求めて	吉村克夫臣	幻冬舎ルネッサンス	1300	四六判	142p
一等三角点全国ガイド	一等三角點研究會	ナカニシヤ出版	2000	A5	259p
いのち五分五分―息子・山野井泰史と向き合って	山野井孝有	山と溪谷社	1800	四六判	270p
祈りの山 宝満山	栗原隆司/写真　森弘子/文	海鳥社	1500	A5	157p
岩手の山 150	阿部陽子	ツーワンライフ	1500	A5	333p
美ヶ原の花と実	角間積善/編	ほおずき書籍星雲社/発売	1500	新書判	218p
梅棹忠夫、世界のあるきかた	梅棹忠夫/著　小長谷有紀・佐藤吉文/編	勉誠出版	2200	A5	171p
梅棹忠夫 知的先駆者の軌跡	特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会/編	千里文化財団	1800	A4	144p
梅棹忠夫 未知への限りない情熱	藍野裕之	山と溪谷社	3200	四六判	509p
ウルトラライトハイキング	土屋智哉	山と溪谷社	1500	A5	158p
エベレスト登頂請負い業	村口徳行	山と溪谷社	1600	四六判	254p
オオカミの護符	小倉美恵子	新潮社	1500	四六判	204p

― 掲載広告一覧 ―

カモシカスポーツ（表２）
山と渓谷社
㈱モンベル
アルパインツアーサービス㈱
アライテント
雷鳥沢ヒュッテ・ロッジ立山連峰
早月小屋
立山室堂山荘
槍ヶ岳山荘ほか
東京新聞出版部
㈱好日山荘
カシオ＜ PRO TREK ＞
江崎グリコ＜パワープロダクション＞
㈱アトラストレック（表３）

ヤマケイ文庫 ラインナップ

おかげさまで初刊行から一年半。山の名著が揃っています！

新編　単独行
加藤 文太郎／本体価格 940 円＋税

新編　風雪のビヴァーク
松濤 明／本体価格 1000 円＋税

垂直の記憶　岩と雪の７章
山野井 泰史著／本体価格 880 円＋税

残された山靴
佐瀬 稔／本体価格 880 円＋税

ミニヤコンカ奇跡の生還
松田 宏也／本体価格 920 円＋税

梅里雪山　十七人の友を探して
小林 尚礼／本体価格 1100 円＋税

山でクマに会う方法
米田 一彦／本体価格 860 円＋税

父への恋文
藤原 咲子／本体価格 880 円＋税

ナンガ・パルバート単独行
ラインホルト・メスナー／本体価格 1000 円＋税

空飛ぶ山岳救助隊
羽根田 治／本体価格 880 円＋税

覆刻　山と溪谷 1・2・3 撰集
山と溪谷社／本体価格 940 円＋税

星と嵐
ガストン・レビュファ／本体価格 900 円＋税

生還　山岳捜査官・釜谷亮二
大倉 崇裕／本体価格 880 円＋税

日本の分水嶺
堀 公俊／本体価格 900 円＋税

山と溪谷　田部重治選集
田部 重治／本体価格 940 円＋税

私の南アルプス
不破 哲三／本体価格 880 円＋税

ドキュメント 生還 山岳遭難からの救出
羽根田 治／本体価格 880 円＋税

山なんて嫌いだった
市毛 良枝／本体価格 880 円＋税

わが愛する山々
深田 久弥／本体価格 1000 円＋税

タベイさん、頂上だよ
田部井 淳子／本体価格 880 円＋税

日本人の冒険と「創造的な登山」
本多勝一ベストセレクション
本多 勝一／本体価格 880 円＋税

森の聖者 自然保護の父ジョン・ミューア
加藤 則芳／本体価格 880 円＋税

処女峰アンナプルナ
モーリス・エルゾーグ／本体価格 1000 円＋税

新田次郎　山の歳時記
新田 次郎／本体価格 880 円＋税

ソロ　単独登攀者　山野井泰史
丸山 直樹 ／本体価格 950 円＋税

トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか
羽根田治、飯田肇、金田正樹、山本正嘉／本体価格 950 円＋税

凍る体　停体温症の恐怖
船木 上総／本体価格 800 円＋税

山と溪谷社

●お近くの書店にご希望の本がないときは、山と溪谷社のカスタマーセンター（読者専用注文ダイヤル）にお申し込みください
●カスタマーセンター　TEL03-5275-9064（土・日・祝日を除くAM10:00～PM5:30、但しAM12:00～PM1:00は昼休みです）
●小社の販売専門サイトYAMAKEI　SQUAREからもご注文いただけます。http://direct.ips.co.jp/book/yamakei.cfm

SINCE 1975

mont·bell









#1128277 トレントフライヤージャケット ¥19,000（税込） 平均重量：205g／収納サイズ：7×7×14cm（Mサイズ）／サイズ：XS・S・M・L・XL（男女兼用）

終わりなき進化
「トレントフライヤージャケット」

GUARANTEED TO KEEP YOU DRY
GORE-TEX PRODUCTS

軽量化と快適性の追求。

多雨多湿で寒暖差が激しい日本の山岳地帯で、それは不可避の課題。

新素材の登場とアウトドアフィールドにおける経験があってこそ、

オールウエザー・クロージングは著しい進化を遂げてきた。

軽量化は自由とゆとりを、快適性は高い集中力と持久力を私たちにもたらしてくれる。

もっと高く、もっと遠く。限界は超えていける。

株式会社 モンベル 【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス ☎0088-22-0031／TEL.06-6536-5740
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。
www.montbell.jp







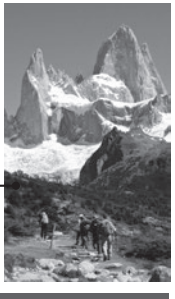


登頂ツアー

日本の山から世界各地の高峰、氷河の山まで。

オーバーランド

遥かなる大地を長距離にわたって走破する、壮大な旅。



日帰りハイキング

ホテルやロッジをベースにして、周辺の高原や湖、小ピークへ。

トレッキング

数日間にわたり、テントやロッジに泊まりながら歩く山旅。



スケッチ・写真教室・花の観察

講師が同行し、ていねいに指導します。

オリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキングクラブ、山のお仲間で企画するオーダーメイド・プラン。

出張説明会 山の仲間がお集まりのときに、当社スタッフが資料やスライドでご説明します。お気軽にお問合せください。

ツアーカタログをご請求ください

世界の山旅・辺境の旅を手がけて43年の実績

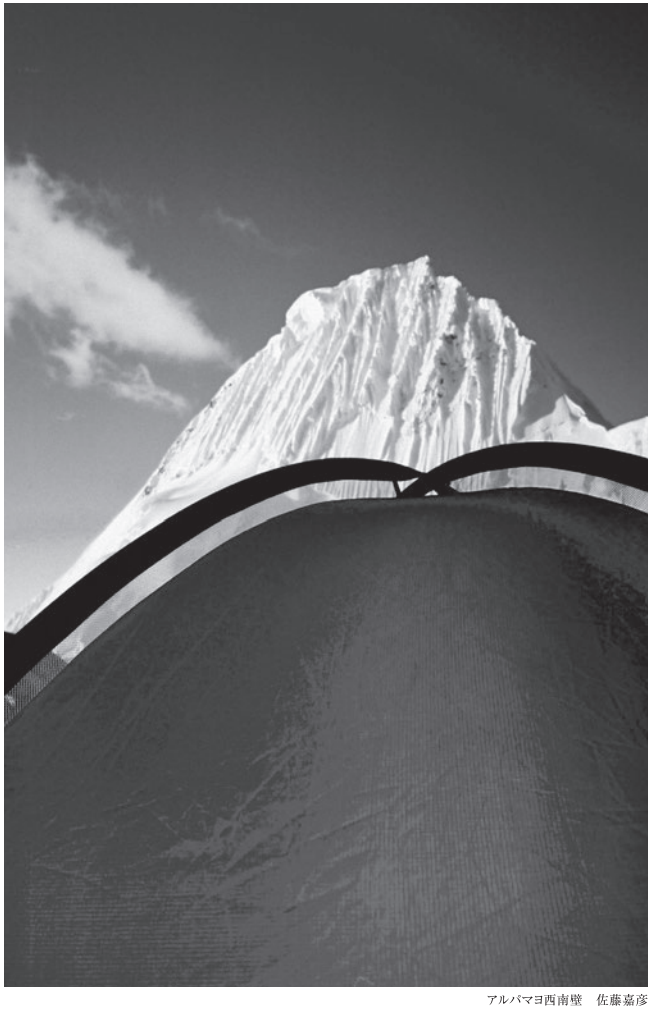
観光庁長官登録旅行業第490号／一般社団法人 日本旅行業協会 正会員 ©ボンド保証会員

アルパインツアーサービス株式会社

本社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階

東　京／☎03(3503)1911　大　阪／☎06(6444)3033
名古屋／☎052(581)3211　福　岡／☎092(715)1557
札　幌／☎011(711)7106　仙　台／☎022(265)4611〈転送〉
（㈱りんゆう観光）　広　島／☎082(542)1660〈転送〉

HP http://www.alpine-tour.com　e-mail info@alpine-tour.com



アルパマヨ西南壁　佐藤嘉彦

ウラヤマでも、ヒマラヤでも

Made in JAPAN

ARAI TENT

www.arai-tent.co.jp | 04-2944-5855



奥大日岳をバックに隣接するヒュッテ（左）とロッジ

雷鳥沢温泉 ◆ 湯量豊富な登山とハイキングの宿 電話番号が新しくなりました

雷鳥沢ヒュッテ
［シーズン中］TEL.076-463-1753

ロッジ立山連峰
［シーズン中］TEL.076-463-6004

事務所 TEL.076-482-1617（FAX兼） http://www.raichozawa.net



◆ 馬場島から一直線 早月尾根は立派な立山杉や多くのお花も楽しめる尾根で、花の百名山にも載っています。

早月小屋
［シーズン中］TEL.090-7740-9233
［メール予約可］hayatsuki@ma.net3-tv.net
http://www.net3-tv.net/~hayatsuki/ 〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峅寺63-2　佐伯謙一



◆ バスターミナルより徒歩10分

立山室堂山荘

TEL 076-463-1228
電話番号が新しくなりました
http://www.murodou.co.jp

槍ヶ岳山荘
☎090-2641-1911

槍沢ロッヂ
☎0263-95-2626

南岳小屋
☎090-4524-9448

大天井ヒュッテ
☎090-1401-7884

岳沢小屋
☎090-2546-2100

[事務所]
〒390-0813
長野県松本市埋橋1-7-2
TEL.(0263)35-7200
FAX.(0263)35-0637



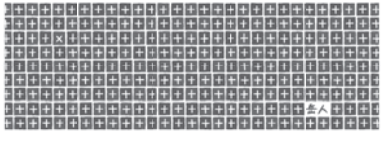
岳人 定期購読のご案内

●割引サービス　●送料無料　●オリジナル手ぬぐいプレゼント

山の専門誌『岳人』（毎月 15 日発売）の年間購読にお申し込みいただきますと、1 年 12 冊 9,600 円のところ、600 円をサービスし、年間 9,000 円でご購読いただけます。
お申し込みいただいた方には、もれなく“オリジナル手ぬぐい”をプレゼント。送料も弊社が負担いたします。お得な岳人の定期購読を是非ご利用ください。

※途中解約はできません。
※海外発送は受け付けておりません。

定期購読をお申し込みいただいた方に
『岳人オリジナル手ぬぐい』
もれなくプレゼント



なお、品物は予告なく変更になる場合があります。

岳人 別冊
定期購読のご案内

岳人 7 月号別冊
夏　山
6 月上旬発売予定

岳人 10 月号別冊
秋　山
9 月上旬発売予定

送料無料でお届け
&
オリジナル手ぬぐい
プレゼント



なお、品物は予告なく変更になる場合があります。

岳人別冊は、毎年『夏山』『秋山』は発売されております。 定期購読料は２冊セットで 2,200 円です。定期購読をお申し込みいただきますと、送料を弊社が負担し、ご自宅にお届けいたします。発売日をお忘れになっても買いそびれることはございません。 また、お申し込みいただいた方には、もれなく“オリジナル手ぬぐい”をプレゼントいたします。
是非お申し込みください。

※途中解約は出来ません
※海外発送は受け付けておりません

お申込み
お問合せ
東京新聞出版部（中日新聞東京本社）
TEL 03-6910-2527　FAX 03-3595-4831　E-mail：syuppan@tokyo-np.co.jp



好日山荘 店舗一覧

関東・甲信越地区：銀座店／新宿東口店／池袋西口店／玉川ガーデンアイランド店／町田店／調布パルコ店／瑞穂店／横浜西口店／ららぽーと横浜店／さいか屋川崎店／さいか屋横須賀店／さいか屋藤沢店／浦和パルコ店／千葉パルコ店／LALAガーデンつくば店／ララスクエア宇都宮店／新潟亀田店　**中部地区**：富山豊田東店／金沢西インター大通り店／福井北四ツ居店／静岡パルコ店／浜松メイワン店／名古屋栄店／春日井店／各務原店／四日市店　**近畿地区**：大阪梅田店／なんば店／川西店／WEBプラス店／神戸本店／明石大久保店／イオンタウン姫路店／京都店／北大路ビブレ店／フォレオ大津一里山店／奈良田原本店／紀三井寺店　**中国地区**：岡山ビブレ店／広島紙屋町店　**九州地区**：アイム小倉店／福岡パルコ店／大宰府インター店／マルヤガーデンズ鹿児島店

クライミングプロショップ好日山荘：ロックランズ店　**WebShop**：本店 www.kojitusanso.com

株式会社 好日山荘

〒651-0083 神戸市中央区浜辺通2丁目1-30 三宮国際ビル6F　URL：www.kojitusanso.jp

CLIMBING GYM
GRAVITY RESEARCH
www.gravity-research.jp

クライミングジム グラビティリサーチ
【GRAVITY RESEARCH NAMBA】TEL:06-6645-0631
大阪市中央区難波千日前12-35 SWINGヨシモトビル 3F
【GRAVITY RESEARCH KOBE】TEL:078-855-8043
兵庫県神戸市中央区磯上通4-3-10 IPSX EAST 1F
【GRAVITY RESEARCH MIE】TEL:059-329-7777
三重県四日市市諏訪栄町6-4 スターアイランド3F

CASIO

PRO TREK
MANASLU

4針のギア。



PRX-7000T-7JF
¥135,000（税込￥141,750）

Triple Sensor + Smart Access

自然現象を的確に感知するトリプルセンサーと、機能性・操作性を両立するスマートアクセスが融合。計測値やワールドタイムのスムーズな4針表示を実現した。さらに、ベゼルにザラツ研磨を施すなど、アウトドアウオッチの域を超える上質さを追求した。

フル“アウトドアスペック”電波ソーラー プロトレック最高峰ライン〈MANASLU〉マナスル PRX-7000T誕生。

［ワールドタイム］

りゅうずを引く・回すというシンプルな操作で世界主要都市の時刻を素早く簡単に表示。

［フルアナログトリプルセンサー］

3つのセンサーで ①方位 ②気圧/高度 ③温度を計測。時針・分針・秒針・モード針の4針が計測値を表示。

方位計測
〈表示例：北〉



高度計測
〈表示例：8610m〉





竹内 洋岳［プロ登山家］

CONGRATULATIONS! 日本人初、8000m峰全14座の登頂達成!

プロ登山家・竹内洋岳氏とプロトレックが挑んでいる「14PROJECT」は5月26日、最後の一峰ダウラギリ（8,167m）登頂成功で遂に完結しました。

Smart Access
TOUGH MVT. TOUGH MOVEMENT
MULTI BAND 6

○ザラツ研磨　○無反射コーティングサファイアガラス
○電子式リューズスイッチ

protrek.jp

おいしさと健康

Glico

グリコパワープロダクション

POWER PRODUCTION

もう一歩、登る力が沸いてくる



高所遠足登山家

河野千鶴子

今回、パワープロダクションとともに2010年年マナスル峰(8163m)、2011年ガッシャブルム1峰(8068m)に登頂。苦しい中にも登山を楽しむことが出来ました。年齢的にもきつくなってきますが、自分に合ったサプリメントで大好きな登山を続けたいとおもいます。

登山など長時間運動する方に



ワンセコンドCCD
(クリアレモン)
¥200



ワンセコンドCCD
(ピーチクール)
¥200



CCDドリンク
1ボール10袋入り
¥1,260

165kcalが瞬間補給できるジェルドリンク

長時間使う筋肉に



ワンセコンドBCAA
(グレープフルーツ)
¥229



おいしいアミノ酸
BCAA スティックパウダー
4.4g×10本 ¥1,890

エネルギー系呼吸サポート



運動に、もっと酸素を。
酸素を取り込みたい
ハードなトレーニング
をされる方のための
サプリメント

エキストラ・オキシアップ
標準120カプセル
¥3,780

グルコサミン・コンドロイチンなどの関節成分を配合

驚異の回復力



エキストラ・アミノ・アシッド
標準200カプセル
¥3,780



ジョイントプラス
¥5,250

■商品カタログのご請求はこちら！！

グリコパワープロダクションの商品カタログをご希望の方は、ご住所、お名前をご記入の上、FAXまたはメールにてご請求下さい。 2012年10月末日までに、商品カタログをご請求の方にはもれなく
ワンセコンドシリーズ2種類を無料進呈させて頂きます。

FAX: 03-5919-2006
メール: glico@3field.co.jp

㈱スリーフィールド
(パワープロダクション販売一次代理店)

■ご購入のお問い合わせはこちら
(読者限定割引あり)
03-5919-2007(月～金11時～19時)
担当:池田まで

社団法人　日本山岳会
The Japanese Alpine　Club
――1905（明治 38）年設立――
住所：〒 102-0081　東京都千代田区四番町 5-4　サンビューハイツ四番町

2011 年度役員・評議員・支部長名簿

会　　長	尾上　　昇		
副 会 長	吉永　英明	西村　政晃	
常務理事	高原　三平	森　　武昭	小林　義亮
理事	野澤　誠司	中山　茂樹	永田弘太郎
	萩原　浩司	節田　重節	志賀　尚子
	古野　　淳	川瀬　恵一	
監事	平井　拓雄	浜崎　一成	

常任評議員	宮崎　紘一	橋本　　清	
評 議 員	堂本　暁子	羽田　栄治	箕岡　三穂
	塩澤　　厚	渡邉　玉枝	成川　隆顕
	神﨑　忠男	小川　　武	贄田　統亜
	中世古直子	今村　千秋	内田　　博
	重廣　恒夫	大谷　　亮	南井　英弘

支部長	北海道＝滝本　幸夫	青　森＝大久保　勉	岩　手＝内山　達雄
	秋　田＝佐々木民秀	山　形＝渡辺　　誠	宮　城＝高橋　二義
	福　島＝大谷　　司	栃　木＝山野井武夫	茨　城＝星埜　由尚
	東京多摩＝竹中　　彰	埼　玉＝石橋　正美	千　葉＝篠崎　　仁
	越　後＝山崎　幸和	信　濃＝飯村　富彦	山　梨＝遠藤　靖彦
	静　岡＝久保田保雄	東　海＝小川　　務	岐　阜＝早田　道治
	京　都＝田中昌二郎	富　山＝山田　信明	石　川＝中川　博人
	福　井＝宮本　数男	関　西＝重廣　恒夫	山　陰＝白根　　一
	広　島＝杉村　　功	福　岡＝副島　勝人	北九州＝伊藤久次郎
	東九州＝加藤　英彦	熊　本＝工藤　文昭	宮　崎＝末永　軍朗

編集後記

百年を超える日本山岳会の歴史のなかで、２０１２年は大きな節目の年でした。１９４１（昭和16）年に許可を受けた「社団法人」から「公益社団法人」に生まれ変わったのです。数多の論議を呼んだこの問題に関して、改めてその趣旨と経緯を尾上会長と吉永副会長（新法人移行ＰＴ担当）にまとめていただきました。

なお、新しい看板は掲げたものの、新生・日本山岳会は今後に向け多くの課題も抱えています。とりわけ会員数の減少と高齢化に対する対策は、まさに喫緊の課題です。その対応策の一つとして注目されている「ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ」設立の経緯と今後について、森、野澤両理事にレポートしてもらいました。

「調査・研究」としては、宮下啓三会員の緑爽会における講演録を再録させていただきました。何人かの会員から『山岳』誌上への掲載を勧められたものですが、ご長男の宮下穂高さんから原稿をお送りいただいたわずか４日後、誠に残念なことにご本人がご逝去されました。図らずもご遺稿となってしまいましたが、宮下教授の「最終講義」をじっくりと味わっていただきたいと思います。

また今春、31番目の支部として新しく四国支部が誕生したことあり、新支部長の尾野益大会員に初代会長・小島烏水と出身地四国との関係を綴ってもらいました。支部活動の活性化も重要な施策の一つですが、支部の特徴を活かしたテーマに対する取り組みを、今後も期待しております。

巻末の英文梗概は、『Japanese Alpine News』の充実に伴い、経費節減の面からも割愛させていただきました。

＊

今号から初めて『山岳』の編集を担当させていただきましたが、経費や時間の関係で十分な梃入れはできませんでした。次年度からは、専門出版社に在籍していた経験を活かし、百余年の伝統を活かしながらも時代に見合った、読み応えのある『山岳』をお届けできるよう、努めてまいる所存です。会員の皆様方のご投稿やご意見・ご提案をお待ちしております。

（節田重節）

『山岳』編集委員会
委員長　岡島成行
委　員　高遠　宏、成川隆顕、永田弘太郎
協力委員　児玉　茂、中村　保、五十嶋一晃、池田常道
担当理事　節田重節、萩原浩司

山岳　第百七年（通巻一六五号）
二〇一二年九月三〇日発行

価三五〇〇円

発行所
公益社
団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九

発行人　尾上　昇
編集人　岡島成行

印刷所　株式会社　東京印刷
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区三崎町三―二―一三
電話　〇三―三二二一―八七〇
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七二三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。